

拓殖大学大学院 言語教育研究科
言語教育学専攻 博士論文

日中語彙交流の視点からみる近代和製医学用語の受容と交替

学生番号：G7D5022017

氏名：権 宇琦

指導教員 主査：阿久津 智 教授

2021 年 9 月

目次

凡例	vi
序章	1
0.1 本研究の対象・目的・方法	1
0.1.1 研究対象	1
0.1.2 研究目的	1
0.1.3 研究方法	1
0.2 本研究の背景	2
0.2.1 新漢語	4
0.2.2 近代和製医学用語	7
0.2.3 近代和製医学用語と日中語彙交流史	7
0.3 本論文の構成	8
第1章 近代日中語彙交流史概観	9
1.1 近代日中語彙交流史	9
1.1.1 第1期（16世紀後半～19世紀初頭）	11
1.1.2 第2期（19世紀初頭～1880年代）	12
1.1.3 第3期（1890年代～1920年）	13
1.1.4 まとめ	15
1.2 近代日中語彙交流史研究	15
1.2.1 「新漢語」研究	15
1.2.2 日中語彙交流史研究	18
第2章 近代和製医学用語概観	27
2.1 日本医学史・医学用語史	27
2.1.1 中国伝統医学とその用語	27
2.1.2 蘭方医学とその用語	32
2.1.3 近代西洋医学とその翻訳語	35
2.1.4 現代の日本医学とその医学用語	40
2.2 近代日中医学用語交流史	43

2.2.1	第1期（16世紀後半～19世紀初頭）	43
2.2.2	第2期（19世紀初頭～1880年代）	44
2.2.3	第3期（1890年代～1920年代）	46
2.2.4	まとめ	47
2.3	近代医学用語の研究	47
2.3.1	近代医学用語の創出の視点からの研究	48
2.3.2	日中語彙交流・日中史的語彙対照の視点	53
2.3.3	学術用語・専門用語の選定の視点からの研究	55
2.4	本論文の位置付け	59
第3章	「結石」	64
3.1	はじめに	64
3.2	「結石」とは	64
3.3	「結石」と関連する言葉	65
3.3.1	「結石」が生まれる以前の言い方—「淋」	65
3.3.2	日中における「淋疾」と「淋病」の違い	67
3.4	「結石」の成立	71
3.4.1	「結石」の初出	71
3.4.2	「結石」をつくった理由	74
3.4.3	「結石」の語構成	78
3.5	日本語における「結石」の普及	82
3.5.1	蘭学翻訳書にみる「結石」	82
3.5.2	対訳辞書にみる「結石」	84
3.5.3	書籍にみる「結石」	86
3.5.4	新聞・雑誌にみる「結石」	86
3.5.5	文学作品にみる「結石」	88
3.5.6	日本の国語辞典にみる「結石」	89
3.6	中国語における「結石」	90
3.6.1	英華辞典にみる「結石」	90
3.6.2	書籍にみる「結石」	93
3.6.3	新聞にみる「結石」	96

3.7 まとめ.....	96
第4章 「痙攣」	99
4.1 はじめに	99
4.2 「痙攣」とは	99
4.3 「痙攣」の成立.....	101
4.3.1 「痙攣」の語源	101
4.3.2 「痙攣」をつくった理由	103
4.3.3 「痙攣」の語構成.....	105
4.4 日本語における「痙攣」の普及.....	105
4.4.1 蘭学書にみる「痙攣」	105
4.4.2 対訳辞書にみる「痙攣」	107
4.4.3 『医語類聚』による記述の問題点.....	109
4.4.4 明治期の医学書にみる「痙攣」	110
4.4.5 文学作品にみる「痙攣」	112
4.4.6 新聞にみる「痙攣」	113
4.4.7 日本の国語辞典にみる「痙攣」	115
4.5 現代日本語における「痙攣」	115
4.6 中国語における「痙攣」	116
4.6.1 清の末期の資料にみる「痙攣」	116
4.6.2 雑誌・新聞にみる「痙攣」	118
4.6.3 書籍にみる「痙攣」	119
4.6.4 辞書にみる「痙攣」.....	121
4.7 まとめ.....	123
第5章 「貧血」	126
5.1 はじめに	126
5.2 「貧血」とは	126
5.3 「貧血」の成立.....	127
5.3.1 『日本国語大辞典』の記述	127
5.3.2 「貧血」の造語に関わった人々	129
5.4 日本語における「貧血」の普及.....	136

5.4.1	医学書にみる「貧血」	136
5.4.2	対訳辞書にみる「貧血」	138
5.4.3	新聞にみる「貧血」	139
5.4.4	文学作品にみる「貧血」	140
5.4.5	国語辞書における「貧血」の収録	143
5.4.6	「NINJAL-LWP for BCCWJ」による「貧血」の文法的性質	143
5.5	中国語における「貧血」	143
5.5.1	「貧血」以前に使われた用語	143
5.5.2	『漢語大詞典』における「貧血」の記述	146
5.5.3	「貧血」の中国への伝来	147
5.5.4	雑誌・新聞にみる「貧血」	149
5.6	まとめ	151
5.7	「虚血」と「貧血」	152
5.7.1	「虚血」の用法（付「乏血」）	152
5.7.2	「虚血」の語構成	156
第6章	「心臓病」	158
6.1	はじめに	158
6.2	「心臓病」とは	158
6.3	「心臓病」の成立	160
6.3.1	「心臓病」の初出	160
6.3.2	なぜ「心臓病」か	160
6.4	日本語における「心臓病」の普及	163
6.4.1	医学書・医学雑誌にみる「心臓病」	163
6.4.2	辞書にみる「心臓病」	166
6.4.3	新聞にみる「心臓病」	167
6.4.4	文学作品にみる「心臓病」	168
6.5	中国語における「心臓病」	170
6.5.1	「心臓病」の中国への伝来	170
6.6	中国語における「心病」	174
6.6.1	中国伝統医学における「心病」の記述	174

6.6.2	『漢語大詞典』における「心病」の記述	175
6.6.3	近代中国語の後期洋書にみる「心病」	177
6.6.4	新聞・雑誌にみる「心病」	179
6.6.5	書籍にみる「心病」	180
6.6.6	CCL にみる「心病」	182
6.7.	日本語における「心病」	184
6.7.1	辞書にみる「心病」	184
6.7.2	書籍・新聞・雑誌にみる「心病」の用例	185
6.8	まとめ	189
終章	191
参考文献	195
論文・書籍	195
辞書類	202
データベース	204
謝辞	207

凡例

1 用例の引用について

- ①用例には、章ごとに、通し番号を付ける。図、表も同様に、章ごとに通し番号を付ける。
- ②二重下線は、すべて筆者が付したものである。
- ③日本語の引用については、「,」は「、」に、「.」は「。」に改める。中国語の文章からの引用については、「,」は「、」に変更せず、原文に従う。
- ④漢字の字体や、句読点・括弧類などは、現代日本語で通用しているものに変えて示す。
現代中国の簡体字もすべて現代日本語の通用字体に改める。
- ⑤いくつかの用例を並べる際には、年代順に並べる。

2 先行研究について

- ①日中を問わず、著書には、『』を、論文には、「」を用いる。
- ②初めて出現する文献は、姓名（出版年）各著作で表す。
荒川清秀（1997）『近代日中学術用語の形成と伝播—地理学用語を中心に—』
陳力衛（2016）「なぜ日本語の「気管支炎」から中国語の“支気管炎”へ変わったのか」
2回目以降は、姓（出版年）で表す。
荒川（1997）、陳（2016）
- ③脚注のものについては、すべて姓（出版年）で表す。
荒川（1997）

3 JapanKnowledge（ジャパナレッジ）の使用について

以下の辞書類は、JapanKnowledge（ジャパナレッジ）を利用した。
（最終閲覧日 2021年9月30日）

『日本国語大辞典 第2版』（小学館）

『日本大百科全書（ニッポニカ）』（小学館）

『デジタル大辞泉』（小学館）

『例文 仏教語大辞典』（小学館）

『ランダムハウス英和大辞典 第2版』（小学館）

『医学英和辞典 第2版』（研究社）

序章

0.1 本研究の対象・目的・方法

本論文は、近代和製医学用語を研究対象に、その日本における成立・普及と、その中国における受容・普及について、日中語彙交流史の観点から論じるものである。

0.1.1 研究対象

本研究は、近代和製医学用語を研究対象とする。

0.1.2 研究目的

本論文の研究目的は、次の点を明らかにすることにある。

- ①和製医学用語創出の理由
- ②和製医学用語の定着・普及のようす
- ③和製医学用語の中国における受容過程

0.1.3 研究方法

研究目的①～③を明らかにするために、次のような方法を採用。

[概論]

先行研究に基づき、近代和製医学用語について概観する。

[各論]

研究目的①～③を探究するのに適当と思われる標本語をいくつか選出し、これを調査対象と定め、国語辞典や百科辞典等で、基礎的な情報（意味・用法）を確認するとともに、次のことを行い、分析・考察を進める。

- ①当該語について、医学書で使用開始（初出）を探る。
- ②当該語について、日本の医学書や言語資料で、各年代における使用状況を把握する。
- ③当該語について、中国の医学書や言語資料で、各年代における使用状況を把握する。

0.2 本研究の背景

筆者の最も大きな関心は、今日の日本語における漢語、とくに近代和製医学用語の根源を明らかにすることにある。つまり、古くから中国伝統医学を学び、中国の医学用語を伝承し続けていた日本は、どんな経緯で自ら医学用語（漢語）を創造しなければならなかったのかを究明したい。

医学用語をめぐることは、たとえば、福井県国際交流協会が平成 24 年 5 月に公表した「福井県における外国人医療支援に関する報告書」では、外国人患者へ対応する際に、どんな悩みがあるかについて医療関係者にアンケート調査を行っている。その報告書の自由意見の部分（2012: 17-18）では、次のようなことが報告されている。

○…中国語は漢字の筆談が多少助けにはなるがやはり困難である。…

○中国やブラジルの方は通訳がいないと診療に苦勞する。中国の方はまだ筆談も可能だが、ブラジルの方は困難を感じる。

○筆談でなんとかなるが、中国人が多く、英語程慣れていないので、資料があれば助かる。

上記の意見を見ると、筆談という方法は、中国人患者とコミュニケーションの際にある程度通じることがわかった。ただし、「やはり困難だ」という状況があるのは、その理由の一つとして感ぜられるのは、たとえ漢字で提示していても、その語彙は中国語で同じ意味を表すとは限らないということである。

たとえば、「整形外科」、「看病」、「皮肉」という語は、日中において、全く違う意味で用いられている。日本整形外科学会の解説¹によると、「整形外科」は、身体の芯になる骨・関節などの骨格系とそれを取り囲む筋肉やそれらを支配する神経系からなる「運動器」の機能的改善を重要視して治療する外科で、背骨と骨盤というからだの土台骨と、四肢を主な治療対象にしている。一方、中国語の「整形外科」は、日本語の「形成外科」に対応している。「看病」も、日本語では、「病人を看護する・介抱する」という意味であるが、中国語では、「病院に行つて受診する」という意味である。また、日本語における「皮肉」は、「皮膚と肉体」という意味より、「意地悪く相手を非難する」のような意味でより多く使われていると思われる。

¹ https://www.joa.or.jp/public/about/plastic_surgery.html

ほかに、日本語では、平成 22 年（2010）に「常用漢字表」を公表しているが、医学用語に使われている漢字には表外字が多い。医学用語には難しい漢字が使われることについて、阿辻哲次（2018）²は、次のように述べている。

私たちはふだんあまり意識しませんが、身体器官やお医者さんが使う病名などの医学用語には、この「骨粗鬆症」のように、非常に難しい漢字がたくさん使われています。ちょっと考えるだけでも、腓臓 腎臓 脾臓 潰瘍 腫瘍 齲齒 蕁麻疹 靱帯 痔瘻 などなど、いくつかは見慣れてはいるけれど、書けといわれてもそう簡単には書けないことばが、それこそ枚挙にいとまありません。

上記の段落に出現している医学用語は、現代中国語ではほぼ使用されている（ただし表記は簡体字）。「鬆」、「腓」、「脾」、「齲」、「蕁」、「靱」、「痔」、「瘻」などは表外字で、普段は「靱帯」ではなく、「じん帯」という混ぜ書きでよく書かれており、中国人患者にとっては読み取れないことになる。さらに、「腓臓」という単語は、中国語では、「胰脏（臓）」という語でその器官を指しているため、こういう点も筆談で解決できない問題となっている。

このように、今日、日中両言語間では、共通する医学用語が見られるとともに、異なる医学用語も使われている。これは、日本語教育・日本語学習において、とくに、生活者としての日本語学習者にとって、必要な項目になるのではないかと思われる。このような興味、近代和製医学用語をテーマとする研究の背景にある。

さて、現代日本語においては、語彙の半分近くを漢語が占めるとされ³、そのなかでも、いわゆる「新漢語」の割合が高いとされる⁴。そこで、以下、まず「新漢語」とは何かについて触れておきたい。

² 「あつじ所長の漢字漫談 29 医学用語にはなぜ難しい漢字が使われるのか? | コラム | 日常に“学び”をプラス 漢字カフェ」[https:// www.kanjicafe.jp/detail/7930.html](https://www.kanjicafe.jp/detail/7930.html)

³ 中山（2015: 116）によると、「国語辞典（小学館『新選国語辞典 第9版』より）における語種比率」、「『BCCWJ（現代日本語書き言葉均衡コーパス）』における語種比率」における漢語の比率はそれぞれ 49.4%と 43.6%である。

⁴ 森岡（1991: 7）は、幕末明治大正の英和辞書における訳語の使用を調査し、時代とともに漢語訳語が急増し、明治以降に使用されるようになった新漢語が増えてきたことを明らかにした。薩摩辞書（1869『英和对訳袖珍辞書』の第三版に当たる）の漢語が 175 語に対して、『井上英和大辞典』（1915）に収録されている漢語は、1173 語に達している。

0.2.1 新漢語

新漢語の定義や範囲は、研究者によって、やや異なる。以下に、主な定義や、認定の方法を挙げる。

森岡健二（1991）（初出 1959）『改訂 近代語の成立 語彙編』は、次のように述べる。

旧漢語か新漢語かを判定することは、実際問題としては困難である。したがって、幕末当時の一般語を多数収録しているヘボン『和英語林集成』（慶応初版）によって、これに採録されているものを旧漢語とみなした。さらに、ヘボンに収録されていない語は、『大日本国語辞典』によって検定し、江戸時代以前の用例があれば旧漢語とみなした。ともに採録されていない語が新漢語である。

（森岡 1991: 270-271）

宮島達夫（1979）「共産党宣言の訳語」は、次のように分類している。

- A. 旧漢語（日）——明治以前の日本の文献に用例のあるもの
- B. 旧漢語（中）——A 以外で中国の古典に用例のあるもの
- C. 新漢語——A・B 以外

（宮島 1979: 453）

鈴木修次（1983）『漢字再発見』は、次のように述べる。

明治の時代になって、…この異質なヨーロッパ文明を受け入れるためのパイプになったのが、また漢語であった。ただし、このときの漢語は、中国在来の古典語に新しい意味内容を添えて換骨奪胎させたものであったり、あるいはまた、明治の知識人のくふうに成る新造語であったりして、もはや現実の中国社会とは関係のないところで、翻訳語としての大量のいわゆる「新漢語」が出現した。

（鈴木 1983: 160）

飛田良文（1986）「西洋文化の移入と新漢語」は、「現代漢語の源流」について、次のように分類している。

- 1 吳音読み・漢音読み・唐音読みによる中国文化を反映する字音語
- 2 蘭書の翻訳語・漢訳洋書の中国語など西洋文化を反映する新漢語
 - (a) 日本人の造語したもの
 - (b) 漢訳洋書から借用したもの

(飛田 1986: 112)

沈国威 (1998) 「新漢語研究に関する思考」は、次のように述べる。

19 世紀は、西学東漸の世紀であった。西洋文明を内包する新しい概念が怒濤のように東洋に流れ込んでくる。東洋諸国が、民族の存亡を賭けて、これらの新概念を必死に受け入れようとした。その際、漢字圏の国々は、宿命的に西洋文明の受容に古き漢字を用いねばならなかった。このように創出された新しい言葉を、本稿では「新漢語」と呼ぶ。「新漢語」は、西洋文明の担い手であり、時には西洋文明そのものでもあった。さらに、「文明語」、「知的語彙」、「翻訳語」或いは「抽象語彙」とも呼ばれる所以であり、それはまた新しい日常語彙も含む「新語」の下位概念となる。

(沈 1998: 37)

沈国威は、また、『日本語大事典』(2014) の「新漢語」の項では、以下のような解説をしている。

新漢語

旧漢語つまり中国の典籍にある語と相対する言い方。新語に近い意味で使用されることもある。蘭学以降、特に明治期に考案された漢字語を指すのが一般的である。和製漢語ともいう。

(沈 2014: 1134)

浅野敏彦 (2004) 「明治の漢語」は、次のように分類している。

この時期〔明治期〕の漢語は、前代までに見える漢語と、新しい文物を受け入れる

ために前代末から用いられるようになった漢語とに二分することができる。前者を旧漢語、後者を新漢語と呼んでいる。新漢語を中国語との関係で分類すると次のようになる。

I 中国語に出自を求めうる漢語

A 古代漢語

- (1) 意味の変容がない 運輸、貿易
- (2) 意味の変容がある 知識、自由、文学

B 近世中国語

脚色、説話

II 中国語に出自を求めえない漢語

運営、汽車、図書館

(浅野 2004: 50)

真田治子 (2020) 「専門語彙集の語彙」は、「旧漢語」、「新漢語」について、次のように注を付している。

[旧漢語] 語形は漢籍から借り、西欧語の訳語として新しい意味を付与したもの。

[新漢語] 新しい語を造語し、西欧語の訳語として新しい意味を付与したもの。

(真田 2020: 160)

以上をまとめると、「新漢語」の主な定義には、翻訳語とするもの、幕末 (あるいは明治) 以後に作られた (使われるようになった) 漢語とするものがある (表 1)。

表 1 「新漢語」の定義

翻訳語	幕末・明治以後の漢語
鈴木修次 (1983)	森岡健二 (1969)
飛田良文 (1986)	宮島達夫 (1979)
沈国威 (1998)	浅野敏彦 (2004) など
真田治子 (2020) など	

本論文では、「新漢語」を、日中両言語における翻訳語のうち、日本語において蘭学伝来以降に成立した漢語、および、中国語において 16 世紀後半以降に成立した漢語としておく。なお、両者を区別して呼ぶ場合、日本語における新漢語を「和製（新）漢語」と呼び、中国における新漢語を「華製新漢語」⁵と呼ぶことにする。

0.2.2 近代和製医学用語

本論文の研究対象となる近代和製医学用語とは、和製漢語のうち、医学用語として用いられる漢語のことをいう。後述する 2.1.2.3 蘭学由来の医学用語、2.1.3.2 近代西洋医学翻訳語に当たる。

0.2.3 近代和製医学用語と日中語彙交流史

本研究で、新漢語のうち、とくに近代和製医学用語を取り上げる背景には、次の 2 点がある。

- ①従来の新漢語の研究は、語彙の造語、構成などの角度から行われる研究が多く、語誌研究も多く行われているが、新漢語の数が膨大なため、触れていない語彙はまだまだたくさんある。
- ②専門用語における語彙研究は、哲学、地理学、植物学などが多く研究されているのに対して、医学用語の研究は、解剖学用語、身体部位詞や器官の語彙が多く、その他の医学用語（病名・病状など）の研究は少ない。また、医学用語に関する従来の研究は、主にその語彙にかかわる医学史の観点から行われており、語彙自体の研究ではなかった。

近代和製医学用語を含む、新漢語の研究には、日中語彙交流史の観点が不可欠であると思われる（近代日中語彙交流史については、第 1 章で概観する）。それは、等しく漢字を表記に用いる日中両言語において、語彙の形成には、互いの影響が見られるからである。新漢語、近代和製医学用語の成立・普及にも、日中間の語彙交流が大きく関わっていると思われる。本研究において、日中語彙交流史の観点を重視する所以である。

⁵ 胡（2018: 1）がこの用語を用いている。

0.3 本論文の構成

本論文では、近代和製医学用語について、その成立過程・理由を究明し、普及・定着した軌跡を確認し、中国への移入ルートや受容・定着の時期を明らかにしていく。具体的な構成は、以下のとおりである。

序章

第1章 近代日中語彙交流史概観

第2章 近代和製医学用語概観

第3章 「結石」

第4章 「痙攣」

第5章 「貧血」

第6章 「心臓病」

終章

【序章の参考文献】

浅野敏彦（2004）「明治の漢語」『日本語学』23-12,48-55 明治書院

胡新祥（2018）「中日近代新漢語についての研究 ―仏教由来漢語を中心に―」博士学位論文
立教大学

中山恵利子（2015）「現代日本語における外来語」沖森卓也・阿久津智編『ことばの借用』116-12 朝倉書店

真田治子（2020）「専門用語集の語彙」陳力衛編『近代の語彙① ―四民平等の時代―』162-171 朝倉書店

鈴木修次（1983）『漢字再発見』PHP 出版社

飛田良文（1986）「西洋文化の移入と新漢語」『月刊国語教育』6-6, 110-115 東京法令出版

沈国威（1998）「新漢語研究に関する思考」『文林』32, 37-61 神戸松蔭女子学院大学

森岡健二（1991）『改訂 近代語の成立 語彙編』明治書院（初出 1959）

宮島達夫（1979）「共産党宣言の訳語」言語学研究会編『言語の研究』425-517 むぎ書房

第 1 章 近代日中語彙交流史概観

1.1 近代日中語彙交流史

近代日中語彙交流史とは、主に 16 世紀末から 20 世紀半ばにかけて、日中両国が西洋の新しい知識を吸収するために、それぞれ創出した新語が書物を通じて、相手方に移入してきた歴史をいう。近代日中語彙交流史の研究は、近代における日中両国の書物の刊行、移入、流布状況を明らかにする研究である。

近代日中語彙の形成および交流の時代区分に関しては、諸説ある。

沈国威（1998）『近代日中語彙交流史』は、中国語における新漢語の誕生の時代区分を、来華宣教師の著書に基づいて、次のように設けている。

- ・ 近代前期（16 世紀末～18 世紀末）
- ・ 近代後期（19 世紀初頭～20 世紀 20 年代）
 - 準備期：1807 年～1840 年頃
 - 発展期：1840 年～1860 年頃
 - 官製翻訳期：1860 年～1880 年頃
 - 停滞期：1880 年～1895 年
 - 日本語導入期：1895 年～1919 年

（沈 1998: 41-43）

また、新漢語の研究における日中の資料群を次のように分類している。

（1）中国側の資料

甲類

- ① イエズス会関係の資料群
- ② 新教宣教師の資料群

乙類

- ③ 中国人による世界事情・地理の書物
- ④ 中国人による外国記録類
- ⑤ 日清戦争後の資料群

(2) 日本側の資料

⑥蘭学関係の資料群

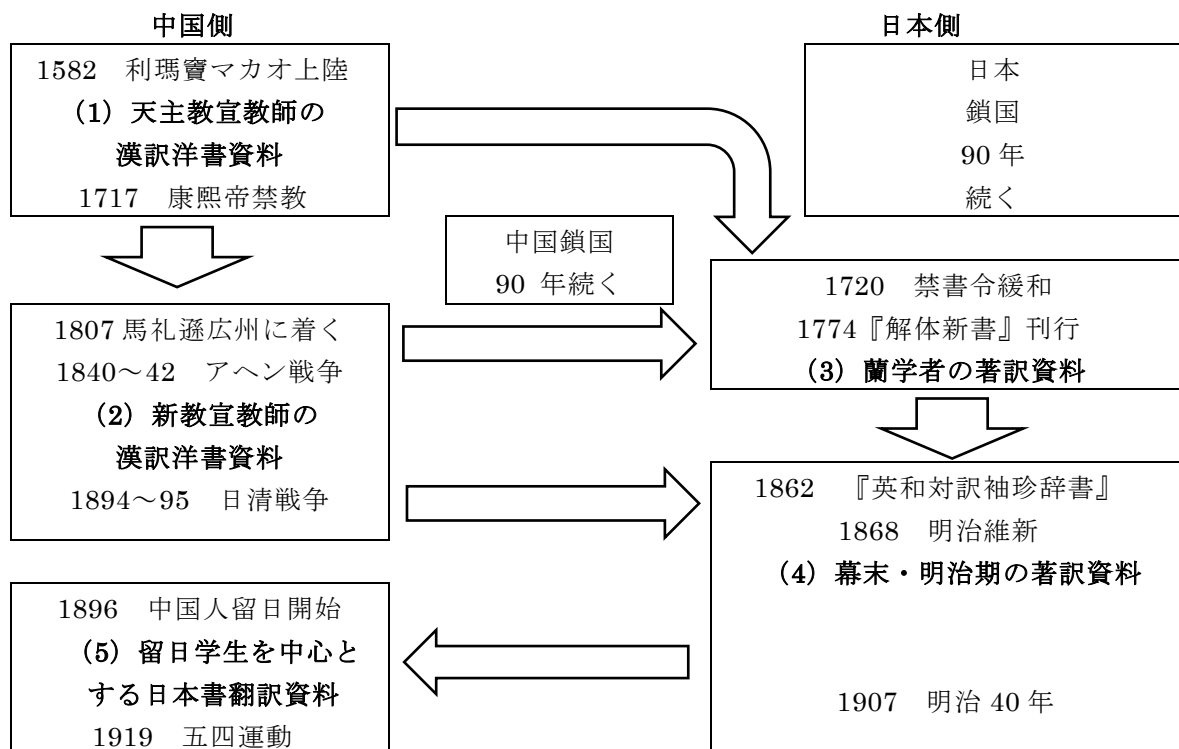
⑦幕末・明治期の資料群

(沈 1998: 50-51)

さらに、各資料群における語彙の伝承関係についても述べている。それを、簡単にまとめると、①は、②③⑥に多大な影響を与え、②はさらに⑦に影響を与え、⑦は⑤に影響を与えているということになる。

朱京偉 (2003)『近代日中新語の創出と交流』は、日中の語彙交流に関する資料群とその影響関係を次の図 1 のようにまとめている。

図 1 日中の語彙交流に関する資料群とその影響関係 (朱 2003: 18)



蘇小楠（2015）「近代日中学術用語の生成の展望」は、日中語彙交流史分野における日中両国の近代訳語の発生及び相互の影響関係という日中語彙交渉の過程を、次の 5 つの時代に区分している。

- ①初期洋学（明末清初カトリック系洋学）
- ②吉利支丹学・蘭学
- ③後期洋学（清中後期プロテスタント系洋学）
- ④明治英学
- ⑤日本書翻訳（日清戦争後）

（蘇 2015: 113-114）

本章では、以下、上記の先行研究の分類を参考にして、近代日中語彙交流史を大まかに 3 期に分けて、日中両国の資料の主な流れを概観しておく。なお、医学用語については、2.2 で取り上げることにする。

1.1.1 第 1 期（16 世紀後半～19 世紀初頭）

第 1 期は、中国の明朝後期～清朝後期、日本の戦国時代～江戸後期に当たる。この時代は、「中国→日本」という語彙移入が行われたが、その規模は後代に比べると大きくはなかった。

中国側では、1582 年、中国に渡ったマテオ・リッチ（利瑪竇 Matteo Ricci）を初めてするカトリック系イエズス会宣教師が、中国の知識人たちの協力の下でおびたしい漢訳洋書を刊行した。これらは「中国前期洋学書」¹と呼ばれている。キリスト教の教義書をはじめ、マテオ・リッチ『坤輿万国全図』（1602）、『乾坤体義』（1605）、マテオ・リッチ口述、徐光啓筆受『幾何原本』（1606-1607）、マヌエル（陽瑪諾 Manuel Dias）『天問略』（1615）、アレニ（艾儒略 Giulio Aleni）『職方外紀』（1623）、『西学凡』（1623）、フェルビースト（南懷仁 Ferdinand Verbiest）『西方要紀』、『坤輿図説』（1672）、『坤輿全図』（1674）など、天文、地理、算数などの書物が刊行された。訳語（漢訳語）の中に、新造語も見られ、華製新漢語はここから始まったといえる。しかし、1723 年、「典礼問題」に

¹ 中国洋学書とは、「西儒」が漢訳（著）した資料群を指すこと、成立時期によって初期と後期に二大別すること、…（佐藤 1983 :24）

より、雍正帝がキリスト教の布教を全面的に禁止したため、漢訳洋書の刊行が中断した。布教禁止は、1844 年まで続いた。

一方、17世紀の日本では、江戸幕府のいわゆる鎖国令により、ヨーロッパとの貿易は、長崎におけるオランダ人との貿易のみ許されていた。やがて、オランダ人から西洋の学術を学ぶ者が現れ始めた。その学問は、蘭学と呼ばれた。蘭学書の翻訳事業は、医学に始まり、物理学、植物学、化学などの多分野に広がり、日本の近代化に多大な影響を与えた。代表的な書籍として、杉田玄白ほか『解体新書』（1774）、大槻玄沢『蘭学階梯』（1788）、志筑忠雄『暦象新書』（1798-1802）、宇田川玄随『和蘭藥鏡』（1820）、小森玄良『泰西方鑑』（1827）、青地林宗『気海観瀾』（1827）、宇田川榕菴『植学啓原』（1834）、『舎密開宗』（1837-47）などが挙げられる。中国前期洋学書は、鎖国下の日本にも伝わったが、禁書に指定されたものが多く、伝播は写本のかたちで行われた。

1.1.2 第 2 期（19 世紀初頭～1880 年代）

第 2 期は、中国の清朝後期～日清戦争（1895）終結期、日本の幕末明治初期～明治中期に当たる。この時代は、「中国→日本」という語彙移入が行われ、来華宣教師たちがつくった大量の訳語（漢訳語）が日本に伝わってきた。

中国では、1842 年のアヘン戦争終結と 1844 年の禁教廃止により、外国の宣教師が再び中国を訪れるようになったが、今度はカトリック系イエズス会宣教師に代わって、プロテスタントの宣教師たちが活躍するようになった。この時期の漢訳洋書は、「中国後期洋学書」と呼ばれている。この時期の洋書の特徴は、専門領域の本だけでなく、英華辞典なども出版されたことである。イギリスの宣教師モリソン（馬礼遜 Robert Morrison）『英華字典』（1822）をはじめ、ウィリアムズ（衛三畏 Samuel Wells Williams）『英華韻府歴階』（1844）、メドハースト（麦都思 Walter Henry Medhurst）『英華字典』（1847-48）、ロプシャイト（羅存徳 Wilhelm Lobscheid）『英華字典』（1866-69）、ドーリットル（盧公明 Justus Doolittle）『英華萃林韻府』（1872）などが次々と出版された。さらに、宣教師たちが設立した上海墨海書館（1843）と、清朝廷が洋務運動期に設立した同文館（1862）、江南製造局翻訳館（1868）が、後期洋学書の翻訳と出版を推進した。第 2 期は、江南製造局翻訳館の設立を境目にして、さらに前期と後期に分けられる。前期の漢訳洋書は、海外事情や法律科学などの紹介が多く、日本に与えた影響が大きい。それに対して後期の書物は、医学書や化学書などが出版されたが、日本ですでに翻訳が行われたため、日本に与え

た影響は限られると考えられる。

一方、日本では、開国によって蘭学から英学に転換し始めた。この時期、漢訳洋書は、日本の知識人たちが便利な道具となった。魏源『海国図志』（1842）、ホブソン（合信 Benjamin Hobson）『博物新編』（上海墨海書館 1855）、ワイリー（偉烈亜力 Alexander Wylie）『六合叢談』（上海墨海書館 1857-1858）、マーティン（丁韪良 William Martin）『万国公法』（1864）、『格物入門』（京都崇実館 1868）、フライヤー（傅蘭雅 John Fryer）『化学鑑原』（江南製造局 1872）、『地学浅釈』（江南製造局 1879）などが日本に伝わった。中でも、『博物新編』、『六合叢談』、『万国公法』、『格物入門』などは、早くも和刻本が作られた。こうして、中国の書物が日本に持ち込まれると同時に華製新漢語も数多く日本語に流れ込み、日本の書物に使用されるようになり、定着に至った。

また、日本では、後期洋学書の翻刻と同時期に、本木庄左衛門『語厄利亜語林大成』（1814）、堀達之助『英和对訳袖珍辞書』（1862）などの英和辞典の出版や、福沢諭吉『西洋事情』（1866）、『学問のすゝめ』（1872）、西周『心理学』（1875-76）、『利学』（1877）、箕作麟祥『仏蘭西法律書 訴訟法』（1873-1874）、井上哲次郎『哲学字彙』（1881）などの出版が行われた。こうして、英学の地位が徐々に固まった。これらの書物に出現した新漢語も、現代日本語の専門用語の基盤となった。

1.1.3 第3期（1890年代～1920年）

第3期は、中国の清朝末期～民国初期、日本の明治中期～大正初期に当たる。この時期は、「日本→中国」という語彙移入で、和製漢語が怒涛のように中国に流れ込んできた。

日清戦争以前に、中国人及び中国在住の日本人はすでに、『時務報』（1896年に創刊）や『農学報』（1897年に創刊）に日本語から翻訳した文章を掲載していた。

日清戦争の敗戦を契機に、中国人は西洋の学問を学ばざるを得ないことに気づき、日本に西洋知識を求めるようになった。1896年、清国は日本に13名の留学生を派遣し、その後中国人留学生は次第に増加し、1906年に1.2万人に達した。中国国内では、同文館に東文館が増設されたのをはじめ、上海、杭州、天津にも日本語を学ぶ学堂・学社が次々と設立された。日本語学習のブームにより、中国内の学習者と留日学生は大量の日本書の翻訳に熱中した。1896年から1911年の間に、中国人が翻訳した日本書籍は、すでに1000種

超えていた²。

中国国内では、上海を中心にいくつかの出版社が成立し、教科書、専門書、辞書などを翻訳・編纂した。嚴復の訳書を出版した商務印書館（1897）と梁啓超が創立した広智書局（1901）などは、この時代に成立した。

一方、留日学生たちは、日本で編訳・印刷し、中国で発行するというかたちで各種の教科書・専門書を翻訳した。日本書籍編訳機構には、訳書彙編社（1900年に創立）、教科書訳集社（1902年に創立）、国学社（1903年に創立）などがある。また、翻訳は書物に限らず、『申報』、『新民叢報』、『浙江潮』、『醒獅』、『東方雑誌』などの新聞、雑誌の中にも、日本の新聞記事や小説を翻訳して掲載したものが見られる。

また、この時期に出版された英華辞典、顔惠慶『英華大辞典』（1908）、商務印書館『英華新字典』（1913）、赫美玲『官話』（*K. Hemeling English-Chinese Dictionary of the Standard Chinese Spoken Language* 1916）、商務印書館『德華大字典』

（1920）などは、第2期の宣教師たちの英華辞書から受けた影響が少なく、訳語の選定は、英和辞書によるものが多い。なお、中国最初の近代国語辞典『辞源』（1915）でも、日本由来の語が収録されている³。

こうして日本書の翻訳、教科書の出版、辞書の編集に伴い、大量の和製漢語、特に専門用語が一気に中国に流れ込んできた。後に、科学名詞統一委員会、国立編訳館などによる訳語集には、多くの和製漢語が採用され、第2期の宣教師たちによる訳語はほとんど淘汰されることとなった。1919年、中国の「五四運動」以降、反日感情が高まり、さらに、ヨーロッパ及びアメリカに留学した中国人の帰国により、翻訳は次第に欧米書から行われるようになり、日本からの影響は徐々に弱まっていった。

一方、日本においては、この時期前後に訳語を統一しようという動きが現れ、専門用語集が次々に出版された。例えば、山川健次郎・村岡範為馳ほか編『物理学術語和英仏独対訳字書』（1888）、藤沢利喜太郎『数学ニ用ナル辞ノ英和対訳字書』（1889）、小藤文次郎ほか編『鉱物字彙』（1890）、野村竜太郎・下山秀久『工学字彙』（1894）などが挙げられる。

² 王（2000: 148）は、譚汝謙『中国訳日本書籍総合目録』（1980）に、1896年から1911年までに、中国人が翻訳した日本書籍が958種挙げられているが、徐維則・顧燮光『増版東西学書録』（1902）と顧燮光『訳書経眼録』（1904）に挙げられている日本翻訳書は、譚（1980）に収録されていないことを指摘している。顧（1904）に収められた533種の訳書のうち、約60%が日本書であり、また、内田（1997: 191）によると、徐・顧（1902）に掲げられた書籍のうち、1899年から1902年までの間に出版された日本書籍の翻訳書は141種あったとされ、中国人が翻訳した日本書籍は1000種を超えたと考えられる。

³ 沈（2006: 56）は、『辞源』（1915）の「日源詞」及び「日本参照詞」292語を挙げている。

専門用語集の発行により、しだいに専門用語の体系が整理され始めた。

1.1.4 まとめ

近代において、先に西洋科学技術に接触し、洋学書などを出版したのは中国であったが、禁教令や鎖国政策などによって、西洋知識の普及と発達が制限され、その結果、日本より近代化が遅れた。一方、日本は、江戸期に中国前期洋学書、後期洋学書の影響を受けながらも、オランダ語を通じた蘭学から、独自に西洋科学が発展した。さらに明治に入って、多くの知識人が欧米の社会制度や技術などの様々な知識を吸収し、翻訳を行い、日本の近代化に寄与した。19世紀後期には、逆に中国が日本を通じて西洋知識を学ぶようになった。こうして、新しい概念を表す和製漢語が怒涛のように中国語へ流入してきた。

1.2 近代日中語彙交流史研究

1.2.1 「新漢語」研究

新漢語は、「近代漢語」、「翻訳語」、「新語」なども呼ばれる。新漢語の定義の研究は、すでに序章に提示したため、ここでは、新漢語に関する研究を取り上げる。

山田孝雄（1940）『国語の中に於ける漢語の研究』は、日本語における漢語の問題を広く扱った最初の専門的な概論書であり、後の新漢語の研究に方向性を示した。この中では、漢語の源流を次のようにと提示している。

（イ）直接又は間接の交通輸入によるもの（山田1940: 356）

（ロ）漢学より伝はりたるもの（山田1940: 359）

（ハ）仏教の書より伝はりたるもの（山田1940: 399）

（ニ）洋学の翻訳より生じたる漢語（山田 1940: 441）

森岡健二（1991 初版1959）『改訂 近代語の成立 語彙編』は、山田（1940）の漢語の源流のうち、「（ニ）洋学の翻訳より生じたる漢語」に関する研究を展開している。森岡（1991: 249-270）は、幕末から明治時代にかけての漢語による訳語法を、6種類（「置き換え」「再生転用」「変形」「借用」「仮借」「造語」）に分けて説明しており、「造語要素」という概念で、新語の結合方式を分析している。また、本書は初めて『英華字典』などの訳語が日本の英和辞典・翻訳書に及ぼした影響について提起しており、日中語彙研

究史研究における意義が大きい。

佐藤亨（1983）『近世語彙の研究』、佐藤亨（1986）『幕末・明治初期語彙の研究』はそれぞれ、中国前期洋学書と中国後期洋学書を紹介し、その中に出現している漢語（華製新漢語に限らない）を分析し、江戸期、明治期に出版された日本の書物に与えた影響について考察している。前著では、中国初期洋学書『職方外紀』、『西方要紀』、『西学凡』、『坤輿図説』と、江戸期の著書『和蘭天説』、『訂正増訳采覧異言』、『輿地誌略』に用いられている漢語について考察を行い、後著では、中国後期洋学書『智環啓蒙塾課初歩』、『大美聯邦志略』、『地球説略』、『六合叢談』、『万国公法』、『德国学校論略』、『西学考略』と、明治初期の著書『玉石志林』、『経済小学』、『泰西国法論』、『西洋事情』、『米欧回覧実記』に用いられている漢語について考察を行っている。両書の考察する方法はほぼ同じであり、例えば、『職方外紀』の漢語は、次のように分類されている。

- （一）『職方外紀』の成立以前の漢籍に典拠を有し、わが国の近世以前の文献に見られる語。
- （二）『職方外紀』の成立以前の漢籍に典拠を有するものの、
 - （イ）近世末期に用いられている語。
 - （ロ）明治初期に用いられている語。
 - （ハ）明治初期までに使用されたか否かが不明である語。
- （三）漢籍に典拠がないけれども、『職方外紀』に用いられていて、
 - （ニ）近世に用いられている語。
 - （ホ）明治以後に用いられている語。

漢籍の典拠の確認は、『大漢和辞典』、『佩文韻府』、『辞海』などによっている。また、両書とも最後に「語彙索引」を付しているため、語誌研究に便利である。

杉本つとむ（1976-1982）『江戸時代蘭語学の成立とその展開 I~V』は、江戸時代のヨーロッパ諸語の翻訳問題について史的考察を行っている。とりわけ、長崎通詞と江戸の蘭学者たちがどのようにオランダ語を学習、翻訳、さらに書物の出版にまでたどり着いたのかについて詳細に記述しており、蘭日対訳辞典、及び蘭日対訳語彙集の成立・翻訳方法などについて述べている。なお、杉本つとむ（1983）『日本翻訳語史の研究』は、分量の多い『江戸時代蘭語学の成立とその展開 I~V』の集大成とした出版されたもののようである。

佐藤亨（1980）『近世語彙の歴史的的研究』は、江戸時代に出版されて書物に現れる漢語（同書では「二字漢語」）の語義の変化（中国古籍の意味と一致するかいなか）、字音の交替、品詞の変化（サ変用法があるかいなか）などについて考察を行っている。また、蘭学医書『解体新書』と『重訂解体新書』に現れる訳語（漢語）の変遷を考察し、『重訂解体新書』、『西説医範提綱釈義』、『遠西医方名物考』の漢語について、次のように分類している。

第一、漢籍もしくは漢訳仏典に典拠を有し、以前に本邦の文献に用例の指摘できるものの

第二、漢籍もしくは漢訳仏典に典拠を有するものの、国語として以前に用例があるか否か明らかでないもの

第三、漢籍または漢訳仏典に典拠を見いだすことができないが、以前に国語の用例が存するもの

第四、漢籍もしくは漢訳仏典に典拠を見出しえず、さらに国語の用例も確かでないものの

さらに、オランダ語「ガストホイス」の訳語として成立した「病院」という語の語誌研究を行っている。ただし、本書における「病院」の語源の結論は、「漢籍に見出されないようであり、また本邦においても近世初期までには存しないと考えられる。（佐藤 1980: 398）」であるが、佐藤（1982）「訳語研究の一視点 ―「病院」の成立をめぐって―」⁴では、中国初期洋書『職方外紀』に、「病院」の用例が見られたため、上記の結論を改めている。つまり、「病院」という語は、和製漢語ではないということになる。

訳語における個別語の語誌研究は、以下の表 1 にまとめて示す。

⁴ この論文は、後に『近世語彙の歴史的的研究』（1980）に収録されている。

表 1 訳語における個別語の語誌研究

著者およびタイトル	語誌研究が行われた訳語
広田栄太郎『近代訳語考』(1969)	彼女、恋愛、蜜月、新婚、旅行、接吻、汽車、汽船、悲劇、喜劇、映画、世紀、常識、倶楽部、冒険、探検など
斎藤毅『明治のことば—文明開化と日本語—』(1977)	東洋、西洋、合衆国、社会、個人、保険、銀行、哲学、主義、演説など
鈴木修次『文明のことば』(1981)	文化、文明、経済、社会、政治、文学、哲学、物理など
鈴木修次『日本漢語と中国—漢字文化圏の近代化—』(1981)	三権分立、権利、義務、科学、真理、論理学、命題、演繹、帰納、宗教、自由、進化論など
柳父章『翻訳語成立事情』(1982)	社会、個人、近代、美、恋愛、存在、自然、権利、自由、彼、彼女など
佐藤喜代治編『講座日本語の語彙 語誌 1-3』(1983)	挨拶、印象、感得、宇宙、運動、体操、映画、影響、感化、衛生、経済、美術、結局、結構、言語、幸福、国家、視覚、自然、写真、心臓、新聞、電気、到着、道德、人情、美学、秘書、文学、平気、返事、無理、面倒、妄想、油断、幼児、余計など

ほかに、樺島忠夫ほか編『明治・大正新語俗語辞典』(1984 東京堂出版)、惣郷正明・飛田良文編『明治のことば辞典』(1986 東京堂出版)などには、明治・大正期の新語の語誌が記述されており、佐藤亨『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』(2007)は、幕末・明治初期にかけて生まれた新語に絞ってつくられた辞典で、各新語についてなるべく早期の用例を挙げている。

最後に、李漢燮『近代漢語研究文献目録』(2010 東京堂出版)は、明治以降日本で使われるようになった漢語語彙についての研究文献をリスト化しており、これまでの個別語の研究が概観できる。

1.2.2 日中語彙交流史研究

日中語彙交流史という研究分野を開拓したのは、沈国威である。この分野はとりわけ日

本語から中国語への漢語の逆流入に着目している。沈の研究以前に、この分野は、日本語からの借用・借用語というテーマで研究されていた。

孫常叙（1956）『漢語詞彙』は、中国語が日本語から借用した時に、次のような特殊現象が起きると解説している。

這種借詞只是直接借取它的漢字形式，用現代漢語語音來代替日語音節。例如：

（この借用は、ただ漢字の表記を借りて、現代中国語音を日本の音の代わりに使っている。例）

手続	日本語説	てつづき
	漢語借來說	[ʃouɕy]
仲裁	日本語説	チュウサイ
	漢語借來說	[tʃunʈs'ai]
倶楽部	日本語説	クラブ（借詞）
	漢語借來說	[tɕyləpu]

（孫 1956: 320）

同書では、また、日本語借用語を認定するには、まず、それが「漢語貸詞」（以前中国語であった漢語）であるかどうかを確認する必要があると述べている。つまり、孫

（1956）は、日本語借用語とは、日本の漢語を、その音を捨て、漢字の表記及び意味を借用しているものであり、中国語の古語は、日本語借用語に含まれないとしている。

高名凱・劉正焱（1958）『現代漢語外来詞研究』は、中国初の外来語⁵に関する書籍で、英、仏、独、日、露、伊、西、及び中国の少数民族の言語からの外来語について論述している。この本では、日本語からの外来語と認められる語 459 語を挙げており、次のように 3 類に分類している。（括弧内は筆者による日本語訳）

- （1）純粹日語（即日語原有的而非漢字翻譯歐米語彙成員的日語的詞）來源的現代漢語外来詞（純粹な日本語（すなわち日本語固有の語であり、漢字を用いて欧米の語彙を翻訳してできた言葉ではない）からきた現代漢語外来語）

⁵ 『現代漢語外来詞研究』では、「外来詞」が「借用語」の意味に用いられており、「借詞」は、翻訳する際の臨時語の意味に使われている。

- (2) 日本人用古代漢語原有的詞去‘意識’歐美語言的詞，再由漢族人民根据這些日語的外來詞而改造成的現代漢語的外來詞（日本人が古代漢語の語を用いて、欧米の語彙を意識し、中国人がまたこれらの日本語外來詞に基づいて改めた現代漢語の外來語）
- (3) 先由日本人以漢字的配合去‘意識’（或部分的‘音訳’）歐美語言的詞，再由漢族人民搬進現代漢語里面來，加以改造而成的現代漢語外來詞（まず日本人が漢字も用いて欧米の語彙を意識（もしくは一部を音訳）し、中国人がまたこれらを現代中国語に導入し、修正を加えてできた現代漢語外來語）

（高・劉 1958: 82-98）

また、『現代漢語外來詞研究』をもとにしてつくられた『漢語外來詞詞典』（1984）は、日本から借用した語彙数を 892 語まで増やしているが、両書ともはっきりとした語源が提示されていないうえに、英華辭典が研究資料に入れなかったため、本来の中国語を日本語借用語とした錯誤が少なくない⁶。

王立達（1958）「現代漢語中從日語借來的詞彙」は、19 世紀末期に日本から中国へ大量伝来し、中国語に借用された「日語詞（彙）」を 8 類に分け、分析を行っている。

- （一）本為日本音義“外來語”的漢字写法，而被借用到漢語中來的。（本来は日本音で訳した「外來語」の漢字表記が、中国語に借用されたもの）
- （二）雖用漢字書写，而只有“訓読”，沒有“音読”的日語詞。（漢字で書かれた日本語で、「訓読」のみあって、「音読」がないもの）
- （三）由日本人用“意義法”訳出來的外國語詞彙，在漢字讀法上只有音読，不用訓読。（日本人が外國語語彙を「意識」し、漢字読みは、音読みだけあって、訓読みを 用いないもの）
- （四）本為日語詞彙，而在借用為漢語詞彙后，意義与原義不同者。（本来は中国語として借用してから、本来の意味と異なったもの）
- （五）本為古漢語詞彙，后来被日本人借用做西方近代術語的意義語，而現在又被我国人从日本借用過來,变成与古義不同的現代漢語詞彙者。（本来は中国語の古語で、

⁶ 宮田（1998: 185）では、19 世紀に発行された英華・華英辭典を用いて『現代漢語外來詞研究』では「純粹日語」と判定された 91 語を調査した結果、49 語が中国語起源であることを確認している。

後に日本人が借用して西洋の近代術語を表す意識語になり、今は日本から再び中国語に借用され、古い意味と異なるようになった意味を持つようになったもの)

(六) 漢字的字形和詞義都是由日本人創造，而為我國所沿用者。(漢字の形と意味はすべて日本人によってつくられ、中国で使われるようになったもの)

(七) 一些漢語詞彙，是在我國人翻譯日文是創造。(中国人が日本語を翻訳する際につくったもの)

(八) 在二十世紀初年曾經一度借用，而現在已經不用的日語詞彙。(20 世紀初頭に一度借用されたものの、現在は使われなくなった日本語)

上記の分類には、高・劉（1958）と一致するものもあれば、分類（七）のように、どうしても日本語借用語とは言にくいものもある。

王力（1958 :528-537）『漢語史稿』では、「訳語的借用（訳語の借用）」において、日本から借用してきた漢語を次のように分類している。

(一) 利用古代漢語原有的詞語，而給予新的涵義。(中国語の古語を使って、新しい意味を与える)

(二) 利用兩個漢字構成按照漢語原訳講得通的新詞。(2つの漢字を用いてつくられた中国語でも通じる新語)

(王力 1958 :528-537)

王力（1958）では、上記の 2 類を借用語と認め、西洋の言葉を日本で訳した漢語については、次のように説明している。

現代漢語中的意識的詞語，大多數不是漢人自己創訳的，而是採用日本人的原訳。(現代中国語の中で、意識した語はほとんどが中国人によるものではなく、日本人の翻訳を採用している)

...

我們不應該認為是漢語向日本語“借”詞。這些詞並不是日本語所固有的，它也不過是向西洋吸收過來的…(中国語が日本語から語を借用していると考えるべきではない。こ

これらの語は、日本固有の語ではなく、ただ西洋から吸収したものに過ぎない)

(王力 1958: 528)

つまり、王力は、西洋の言葉を日本で訳して、漢字で表記した漢語を、「借用語」として認めていないため、この観点は、高・劉 (1958)、王立達 (1958) と異なる。また、「取締」、「引渡」、「見習」、「手続」などの日本語の訓読みの語は、中国語では、その原音が借用されていないため、厳密には「借用語」に含まれないと述べている。

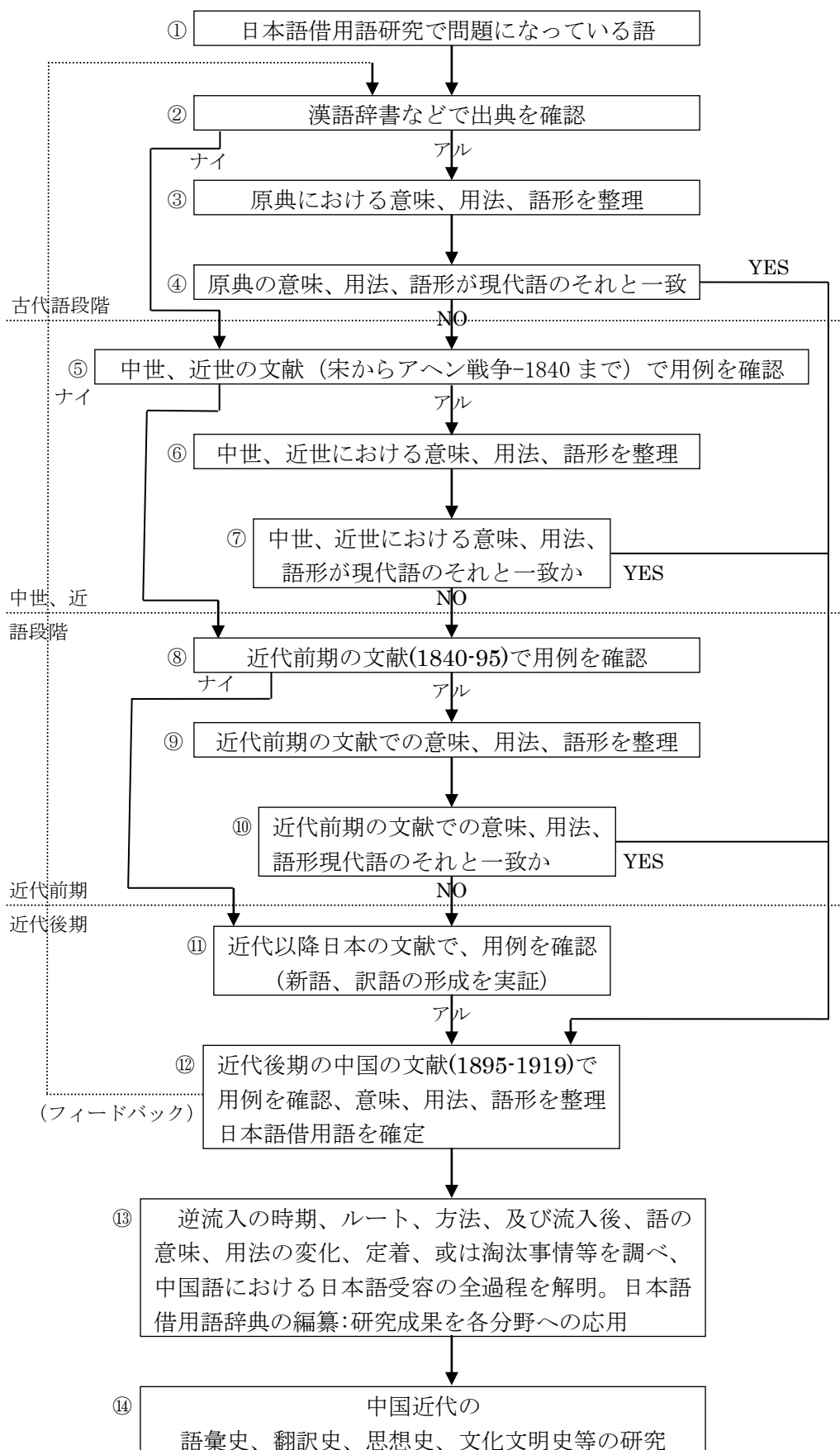
ほかに、北京師範学院中文系漢語教研組編著 (1959)『五四以来漢語書面語言的変遷和發展』では、日本借用語を次のように分類している。

- (一) 古漢語詞訳成的 (古代漢語の語彙訳語に用いたもの。理性、思想、意識など)
- (二) 用漢字構造或書写的 (漢字を用いて構成、あるいは表記しているもの。哲学、主観、客観、物質、抽象など)
- (三) 其他
 - (1) 用漢字漢音訳成的音訳詞。(漢字音を用いて訳した音訳語。瓦斯 淋巴など)
 - (2) 根拠漢字字形創造的新字。(漢字の形態によって、創造した新字。腺、癌、糰など)

(北京師範学院中文系 1959: 78-83)

沈国威 (1994)『近代日中語彙交流史：新漢語の生成と受容』は、上記の研究を含めて、日本語借用語の研究史 (借用語の定義及び弁別方法など) を概観し、それぞれの問題点を指摘したうえで、図 2 のように、日本語借用語の出自確定の流れ図を提示している。筆者の各論における研究対象は、すべてこの流れ図によって借用語かどうかを確認している。

図2 中国語における日本語借用語受容史研究の流れ図 (沈 1994: 45)



また、沈（1994: 275-355）の「語誌篇」には、一般語に絞って、100語を上回る日中同形語の語誌が簡単に紹介されており、「資料編」では、各先行研究の日本語借用語の全語彙がリストアップされている。

専門用語に絞った日中語彙交流の研究としては、荒川清秀（1997）『近代日中学術用語の形成と伝播—地理学用語を中心に—』、朱京偉（2003）『近代日中新語の創出と交流—人文科学と自然科学の専門用語を中心に—』、孫建軍（2015）『近代日本語の起源』などが挙げられる。

荒川（1997）は、日中の地理用語「熱帯、回帰線、海流、貿易風」などの成立、定着、伝播について、中国後期洋書及び日本の対訳辞書等の資料を用いて論考している。朱（2003）は、音楽、植物学など分野における訳語の成立と、日本から借用し、中国語に受容された用語を計量的に整理している。孫（2015）は、中国後期洋書が日本の社会学用語に与えた影響について具体的に論じたうえで、「洋学」、「国際」、「国会」、「民権」、「義務」などの社会科学用語の成立、伝播ルートと定着過程を分析している。

陳力衛（2001）『和製漢語の形成とその展開』は、近代に使用されるようになった新漢語について、日中における訳語の流れは、中国後期洋書や英華字典に現れた新漢語が英和辞典に収録されており、それが再び20世紀初頭の英華字典に逆輸入した「漢訳洋書→英華字典→英和辞典→英華字典」（2001: 270）というサイクルであることを示している。このサイクルは、近代以降の日中同形語をもたらした最大の要因であり、同形語の研究については、「日中間の意味の相違については史的な視点から考察する必要がある」（2001: 363）と述べている。また、陳（2019）『近代知の翻訳と伝播—漢語を媒介に—』⁷は、19世紀後期から大量の「日本新名詞」が中国語へ流入したことについて、近代中国語辞書（『辞源』（1915）、『辞海』（1936）など）における「日本新名詞」の収録状況及び語釈に「源出日本語」という注記が施されているどうかを調査している⁸。

辞書類では、黄河清編（2010）『近現代辞源』、新版の『近現代漢語辞源』（2020）に、明末清初から1949年前後の西洋文化を受けて成立した言葉が収録されており、そこには日本から伝わった和製漢語も含まれ、中国に伝来してきた早期の用例が挙げられている。

ほかに、香港中国語文学会が発刊した『語文建設通信』と関西大学の研究誌『或問』に

⁷ 中国語版は『東往東来—近代中日之間的語詞概念—』（2019）

⁸ 陳（2019: 258）は、『辞源』では、「舞台、代表、団体」などの「日本由来新語」は、なんの注釈も加えられていないことを指摘している。本論文の研究対象である「瘧疾」、「貧血（症）」、「心臓病」は、すべて『辞源』（1915）に収録されているが、いずれも「日本由来」という注釈はなかった。

は、近代中国語の語誌研究の論文が多く掲載されており、その中には日中語彙交流の視点から論じたものが多く見られる。

【第1章の参考文献】

- 荒川清秀（1997）『近代日中学術用語の形成と伝播—地理学用語を中心に—』白帝社
- 李漢燮（2010）『近代漢語研究文献目録』東京堂出版
- 内田慶市（1997）「ヨーロッパ発—日本経由—中国行き「西学東漸」のもう一つのみちすじ」藤善真澄編『浙江と日本』177-195 関西大学東西学術研究所
- 王揚宗（2000）「1850年代至1910年中国与日本之間科学書籍的交流述略」『関西大学東西学術研究所紀要』33, 139-152 関西大学
- 王力（1958）『漢語史稿』科学出版社
- 王立達（1958）「現代漢語中從日語借来的詞彙」『中国語文』2, 90-94 中国社会科学院
- 樺島忠夫ほか編（1984）『明治・大正新語俗語辞典』東京堂出版
- 黄河清編（2010）『近現代辞源』上海辞書出版社
- 黄河清編（2020）『近現代漢語辞源』上海辞書出版社
- 高名凱・劉正琰（1958）『現代漢語外来詞研究』文字改革出版社
- 高名凱・劉正琰ら編（1984）『漢語外来詞詞典』上海辞書出版社
- 斎藤毅（1977）『明治のことば—文明開化と日本語—』講談社
- 佐藤亨（1980）『近世語彙の歴史的研究』桜楓社
- 佐藤亨（1982）「訳語研究の一視点—「病院」の成立をめぐって—」『文芸研究』100, 99-109 日本文芸研究会
- 佐藤亨（1983）『近世語彙の研究』桜楓社
- 佐藤亨（1986）『幕末・明治初期語彙の研究』桜楓社
- 佐藤亨（2007）『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』明治書院
- 佐藤亨（2013）『現代に生きる日本漢語の成立と展開』明治書院
- 佐藤喜代治編（1983）『講座日本語の語彙 語誌 1-3』明治書院
- さねとうけいしゅう（実藤惠秀）（1970）『中国人日本留学史・増補』くろしお出版社
- 実藤惠秀著・譚汝謙・林啓彦訳（1983）『中国人日本留学史』生活・読書・新知三聯書店
- 杉本つとむ（1976-1982）『江戸時代蘭語学の成立とその展開 I~V』早稲田大学出版部
- 杉本つとむ（1983）『日本翻訳語史の研究』八坂書房

- 鈴木修次（1981）『文明のことば』文化評論出版
- 鈴木修次（1981）『日本漢語と中国—漢字文化圏の近代化—』中公新書
- 沈国威（1994）『近代日中語彙交流史』笠間書院
- 沈国威（2006）『『辞源』与現代漢語新詞』『或問』 35, 35-58 関西大学
- 朱京偉（2003）『近代日中新語の創出と交流・人文科学と自然科学の専門語を中心に』白帝社
- 惣郷正明・飛田良文編（1986）『明治のことば辞典』東京堂出版
- 蘇小楠（2015）「近代日中学術用語の生成の展望」『北九州市立大学国際論集』 13, 113-121 北九州市立大学国際教育交流センター
- 孫建軍（2015）『近代日本語の起源 幕末明治初期につくられた新漢語』早稲田大学出版部
- 孫常叙（1956）『漢語詞彙』吉林人民出版社
- 陳力衛（2001）『和製漢語の形成とその展開』汲古書院
- 陳力衛（2019）『近代知の翻訳と伝播 漢語を媒介に』三省堂
- 陳力衛（2019）『東往東来：近代中日之間的語詞概念—学科知識与近代中国研究書系』社会科学文献
- 広田栄太郎(1969)『近代訳語考』東京堂出版
- 北京師範学院中文系漢語教研組編著（1959）『五四以来漢語書面語言的變遷和發展』商務印書館
- 馬西尼（Federico Masini）著・黄河清訳(1997)『現代漢語詞彙的形成—十九世紀漢語外来詞研究—』漢語大詞典出版社
- 宮田和子（1998）『現代漢語外来詞研究』再考（1）『英学史研究』 1999-31, 167-188 日本英学史学会
- 森岡健二（1991）『改訂 近代語の成立 語彙編』明治書院（初出 1959）
- 柳父章(1982)『翻訳語成立事情』岩波新書
- 山田孝雄（1940）『国語の中に於ける漢語の研究』宝文館
- 熊月之（2011）『西学東漸与晚清社会』中国人民大学出版社

第2章 近代和製医学用語概観

第2章では、医学用語について見ていきたい。2.1では、日本医学史、医学用語史を概観し、2.2では、近代における日中医学用語の交流史を見ていく。また、2.3では、近代医学用語の研究について紹介したい。

2.1 日本医学史・医学用語史

日本における医学用語の流れを見るには、医学の発展の歴史、及び医学的概念の発達を見ていかなければならない。そこで、2.1では、日本医学史を著した書籍、日本の医学史著作の嚆矢をなすものと言われる富士川游（1904）『日本医学史綱要』をはじめ、小川鼎三（1964: 96-229）『医学の歴史』、梶田昭（2003: 122-313）『医学の歴史』、小曾戸洋（2014: 7-198）『漢方の歴史』、坂井建雄（2020: 368-456）『医学全史—西洋から東洋・日本まで—』などを参照し、それ以外の先行研究も参考にしながら、日本医学用語の使用や変遷について概観してみる。中国医学については、鄧鉄涛・程芝范（2000）『中国医学通史』を参考にする。

2.1.1 中国伝統医学とその用語

2.1.1.1 中国伝統医学

殷（商）の時代は、医学という概念がまだ成立しておらず、病気は巫師（巫医）の占い（呪術）によっていた。甲骨文にその痕跡が見られる。

周の時代に入ると、病気の治療に医薬が使われるようになり、その知識や経験が重なり、医学が呪術から徐々に分立した。春秋戦国時代には、専門的な医師や医学著書が出現した。戦国時代の医師扁鵲は、「五臓六腑」、「腸胃」、「血脈」、「血気」、「陰陽」などの概念に言及し、後の『黄帝内経』がこの医学理論体系を継続し、後世の医学の基礎を築いた。

漢代には、中国医学は体系的に進んだ。前漢に編纂された『黄帝内経』は、現存する中国最古の医学書と呼ばれる。『黄帝内経』は、医学の総合理論や鍼灸術について述べており、その理論的知識には、陰陽五行説という哲学思想がある。この書は、『素問』と『靈樞』とから構成され、『素問』には、基礎理論、生理学または病理学の総論にあたる内容が書かれており、『靈樞』には、診断、治療、鍼灸など、臨床医学が記述されている。後漢の時代に

は、張仲景が、多くの医学書、薬物書、処方集を参考に、傷寒と雑病を論じる『傷寒雑病論』を編纂した。それが、後人の編集によって、傷寒の部分が『傷寒論』、雑病の部分が『金匱要略（金匱要略方論）』に収められた。『傷寒論』には、腸チフスに似た急性熱性病とその治療が記述されており、『金匱要略』には、様々な病気の症状や治療法から、食べ物の禁忌まで言及されている。張仲景の医学書では、生薬を巧みに組み合わせた複合薬物処方が後世の医師に愛用され、現代の漢方治療にも活かされている。また、『神農本草経』は、漢方で用いられている生薬について、その効果や特性を記した薬物書であり、本草の原典と言われている。『黄帝内経』、『傷寒雑病論』、『神農本草経』は、中国医学の三大古典と評価されている。

西晋には、『脈経』（280）と『甲乙経』が成立した。前者は、『黄帝内経』、『傷寒雑病論』その他の医書から再編成した脈診学の典籍で、後者は、『素問』、『靈枢』、『明堂』の内容を再編集した鍼灸学の典籍である。

隋代の巢元方『諸病源候論』（610）は、古代から隋代までの様々な病気の原因や症状に関する記述を体系的に分類し、67 門、1739 種の症候に分類したものである。唐の孫思邈『千金要方』（『千金方』とも。652）、その続編『千金翼方』、王焘『外台秘要』（752）も有名な医学著書である。

宋の時代になると、印刷技術が発達したことにより、さまざまな書籍が出版されるようになり、後代の医学の発展に大きな貢献をした。『太平聖恵方』（992）は宋の太宗により、宋代以前の医学処方書と当時民間で経験的に行われた処方を収集して集大成した書物である。

金元時代に、金元四大家と呼ばれる劉完素、張子和、李東垣、朱丹溪らが現われた。この四人の医学は、治療法によって、泄法を重要視する「劉張医学」と、補養に焦点を置く「李朱医学」に分かれる。

明の李時珍による『本草綱目』は、1892 種の薬物について、産地、性質、薬法、効能など挿絵をつけながら解説しており、11096 種の処方が掲載されている。この本は、中国だけでなく、日本でも何度も翻刻され、薬学・本草学の分野に大きな影響を与えた。

2.1.1.2 中国伝統医学の日本への流入

中国伝統医学はいつごろ日本に伝わってきたのだろうか。6 世紀に呉（南朝）の智聡が『明堂図』等医薬書を含む 164 巻の経典類、仏像・楽器を日本に持ち込んだとされる（図 1。

「新撰姓氏録」(815年成立)(文化9年刊)の「和薬使主」の部分による)。これが中国医薬書が日本に伝わった正式な記録であり、日本における鍼灸の最古の資料でもある。

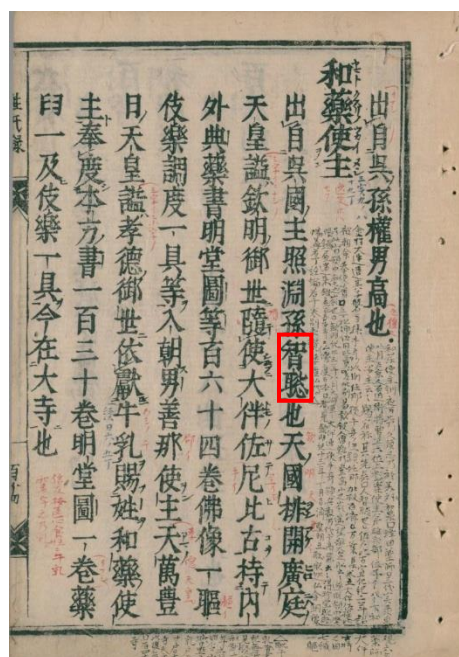


図1 『新撰姓氏録』松根堂版本(1812)('国立国会図書館デジタルコレクション')

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2561136?tocOpened=1>

日本の飛鳥～奈良時代は、中国の隋～唐の時代にあたり、日本は、遣隋使や、遣唐使を派遣し、中国の医学を導入するとともに、医学制度を学ぶようになった。推古天皇の16年(668年)、恵日、福因などが唐に渡り医学を学び、のち15年にして日本に帰り、その医学成果は、日本に大きな衝撃を与えた。大宝元年(701)に、隋・唐の制度に倣って「大宝律令」が制定されたが、後に「大宝律令」に若干の修正を加えた「養老律令」(718)の中に医事制度を定める医疾令があった。医疾令では、医官の詳細な設置が規定されており、大学もしくは地方の国学において医学教育を行うことが明記されている。医学教科書は、中国唐令に準じたものであるため、医生には『脈経』、『本草(本草経集注)』、『小品方』などが、針生には『素問』、『黄帝針経』、『明堂』などが学習すべき書籍として示されている。これらのことから、上記の中国医書はこの時期に、日本にもたらされたと推測される。

平安時代に、丹波康頼によって編纂された『医心方』(984)は、日本に現存する最古の医学書といわれる。その中には、『諸病源候論』、『千金要方』、『神農本草経』、『新修本草』などの中国医書が多く引用されており、病気の分類法は、『諸病源候論』に基づいている。

鎌倉時代から室町時代においては、禅僧の活躍によって中国の宋の最新医学が日本に流入してきた。僧梶原性全が編纂した『頓医抄』（1302-1304）、『万安方』（1313-1327）、禅僧有林が著した『福田方』（約 1363）などでは、宋代の新医書から多数の処方が多く見られるが、書籍の記述のかたちは、従来の漢文をそのまま摘録したものではなく、和文に直してさらに著者独自の意見も挿入されている。

室町時代において、最も著名な医師は曲直瀬道三である。道三は当時日本に渡来した金・元・明の中国医書を整理し、『啓迪集』（1574）8巻を編述した。そのうち、第1巻は中風・傷寒、第2巻～5巻は内科的疾患、第6巻は外科的疾患及び老人病、第7巻は婦人病、第8巻は小児病を記述しており、各疾病において、病因や病状さらに診断方法について紹介している。道三の医学は、後世方派医学の確立に大きな影響を与えた。

江戸期に入って、日本の漢方⁹医学は後世方派と古方派などの流派に分かれ、上記の金・元・明の医書に準拠する曲直瀬流の医学を後世方派（後世派あるいは新方派）と称している。それに対して、中国の明の時代に現れた『傷寒論』の理論を復興しようとする学派の説に啓発された『傷寒論』を基本とし、そこに医学の理想を求めようとする学派を古方派と称している。現在に至るまで、日本の漢方の大勢は古方派が占めている。

古方派の祖とされる後藤艮山は、数多くの中国医書から、万病は人体の気の留滞から生じると述べ、それを「一気留滞説」と主張した。艮山は京都に医業を開き、『傷寒論』を基にして医術を行い、多くの弟子を育てた。

山脇東洋は、後藤艮山の弟子の一人として古医方を学んだ。東洋は、中国古典医書に載せる解剖説について疑問を持ち、人体を実際に目で確かめるために、1754年に官許を得て日本最初の（囚人の死体の）解剖を行い、人体の臓器や器官を観察し、その記録を『蔵志』（1759）として刊行した。この本は、日本近代解剖学の嚆矢といわれ、『解体新書』を書いた蘭医杉田玄白にも多大な影響を及ぼしている。

吉益東洞は、病気はすべて一つの毒に由来し、毒のある場所によって病状が異なるに過ぎず、薬というものはすべて毒であり、病気も毒によるものだから、毒をもって毒を抑制すれば、病気は治るという「万病一毒説」を創設した。著書の『類聚方』（1764）では、『傷寒論』と『金匱要略』の主要な薬方を選び、『薬徴』（1771）では、古代以降の本草家たちの説を批判し、親試実験を通して張仲景が用いている 53 種の薬物について、薬効と用法

⁹ 日本人が中国から伝来した医術を指していった言葉。（小曾戸洋（2003: 1））

を紹介した。

明の李時珍が著した『本草綱目』（1596）は、1604 年以前に日本に到来し、日本で何回も翻刻出版された。その中でとくに、動植物の形態などの博物誌的記述は日本に大きな影響を与えた。

2.1.1.3 中国伝来の医学用語

平安時代から江戸中期にかけて、日本には、大量の中国伝統医書が導入され、それらに基づいて医学を発展したため、日本の医学用語は、中国伝統医学用語の大きな影響を受けている。例えば、服部敏良（1985）『日本史小百科〈20〉医学』には、『倭名類聚鈔』に記されている病気の漢名、及びそれに対応する和名が以下のように示されている（一部のみ挙げる）¹⁰。

失声	比古恵（ヒコエ）
喘息	阿倍岐（アヘギ）
欬嗽	之波不岐（シハブキ）
欧吐	倍止都久（ヘドツク） 太万比（タマヒ）
唾血	知波久（チハク）
脚气	阿之乃介（アシノケ）
転筋	古无良加倍利（コムラカヘリ）
淋病	之波由波利（シバユバリ）
癲狂	毛乃久流比（モノクルイ）
膿	宇無（ウム） 宇美之留（ウミジル）

（服部 1985: 254-256）

また、鈴木修次（1983）『漢字再発見』は、『本草綱目』の最初の部分である「百病主治薬」で示されている病名・病状のうち、「日本語の中にそのまま用いられている」ものを、次のように取り上げている（一部のみ挙げる）。

¹⁰ 国立国会図書館デジタルコレクションに収録されている『倭名類聚鈔』（20 巻本の古活字版 1617 刊）の巻三「形体部第八 病類第四十」で確認できる。

癰瘍 嘔吐 下痢 腸満 黄疸 脚気 吐血 健忘 不眠 遺精 小便 陰痿 大便
脱肛 痔漏 瘀血 心痛 腹痛 腰痛 痛風 頭痛 咽喉 音声 瘰癧 縊死 溺死
圧死 凍死 経水 産後 産門 解毒

(鈴木 1983: 151)

2.1.2 蘭方医学とその用語

2.1.2.1 オランダ医学の伝来

16 世紀中期に、ポルトガル人、その後スペイン人が日本に渡来し、外科医術をもたらした。ポルトガル人の外科医術は南蛮流外科と呼ばれた。寛永 16 年（1639）に、江戸幕府は南蛮（ポルトガル）船の入港を禁止し、外国人の入国は、平戸でオランダ人が通商することのみ許された。寛永 18 年（1641）、オランダ人は平戸から長崎に居留地を移され、出島に商館を定めた。商館には商館員だけでなく彼らの健康を管理する医師も来た。その中に外科医が多かった。医師は一般に日本人を治療することは禁じられていたが、公に許可を得て日本人を治療し、日本人医師と交流することができた。交流の仲介にあたった通詞たちの一部が次第に医学に興味を持つようになり、オランダ医学を伝習し、彼らによってオランダ流外科（紅毛流外科ともいう）という流派が生まれた。カスバル流外科、檜林流外科、西流外科、吉雄流外科などがそれにあたる。これらは日本外科の発展に多大な影響を与えた。

このうち、カスバル流の祖カスバル・スハンベルヘン（Caspar Schamberger）はドイツの外科医で、慶長 2 年（1649）に特使として日本へ渡来し、出島のオランダ商館の医師として 4 人の日本少年に外科治療術を教えたことがあった。慶長 3 年（1650）に特使一行が参府の後、そこに滞留し、江戸の日本人医師に外科治療術を教授した。カスバルが江戸で行った医療の報告書としてまとめられたものが、『阿蘭陀外科医方秘伝』（1650）である。

また、檜林流の祖である檜林鎮山は、当時西洋にあつて外科の宗師とされていたフランスの外科医アンブロアズ・パレ（Ambroise Paré）の書いた外科書のオランダ語訳の版（1649）を基にして、その一部を抄訳し、『紅夷外科宗伝』（1706）を著し、門人に教える教材とした。

オランダ流外科の治療法は、実は鎖国令以前に日本に渡来した南蛮人（ポルトガル人）が施した医術（南蛮流外科と呼ばれる）と差異がなく、主に腫物と金瘡の治療が中心であった。腫物の治法は、いくつかの段階に分かれる。発生期の腫物は「押薬」で押さえ、発生

を止められない場合は、「膿薬」で化膿を早め、すでに化膿したものは針で切開し、膿を出し、その後膏薬を塗る。金瘡の治法は、木綿と焼酎できれいにしてから、針で創面を縫い、木綿を卵の白みと椰子の油に混ぜたのに浸してから創面につける処置をとった。

オランダ医学の興隆の大きな画期は、前野良沢、杉田玄白、中川淳庵らによる『解体新書』¹¹（1774）の翻訳刊行で、これは西洋医学を最初に日本語に訳した書籍である。明和8年（1771）3月4日、前野良沢、杉田玄白と中川淳庵は、千住小塚原の刑場で人体解剖を見学し、人体の構造について、漢方の解説を異なることに気づき、彼らが携えたオランダ解剖書『ターヘル・アナトミア』の正確さに衝撃を受け、すぐに『解体新書』の翻訳を始めた。翻訳時の苦労は、杉田玄白が『蘭学事始』で述べている。『解体新書』の刊行により、蘭方医学¹²への関心が急速に高まった。さらに、宇田川玄随が我爾徳児（Johannes de Gorter）の医学書を訳した、日本最初の西洋内科翻訳書『西説内科撰要』（1793-1810）の刊行は、従来外科、解剖学のみ留まっていた蘭方医学の研究を、内科などの分野にも広げた。『解体新書』刊行のメンバーである桂川甫周は、1802年に幕命により『顕微鏡用法』を書いた。ほかに、森島中良の『紅毛雑話』（1787）では、顕微鏡の紹介をしている。

蘭学の興隆に伴い、古方派の漢方医の一部にも興味をもつ者が出てきて、漢蘭折衷派がこの時代に生まれた。代表的な人物は、華岡青洲である。青洲は、吉益東洞の長男吉益南涯に古方医を学び、大和見立にオランダ流外科を学んだ。青洲は、先人の用いた麻酔薬の処方を改良し、「通仙散」という全身麻酔薬を開発し、それを用いて初めて全身麻酔の手術（乳がん手術）を成功させた（1805）。さらに、乳がん手術をはじめ、鎖肛、鎖陰、尿道結石、脱疽、兔唇の治療、尿道狭窄の拡張など外科、泌尿器科領域の多彩な分野を開拓した。青洲は弟子の育成にも力を注ぎ、医塾「春林軒」を開設、門下生は1000人を超えるといわれ、優秀な外科医を多く輩出し、華岡流外科を発展させた。これも、日本の外科手術の発展につながった。

2.1.2.2 蘭学私塾の開設

杉田家、大槻家、宇田川家などの蘭方医は、医学だけでなく、天文学、化学、物理学な

¹¹ 原本は、ドイツのクルムス（Johann Adam Kulmus）が1722年に著した『解剖図譜』（Anatomische Tabellen）を、ライデンのディクテン（Gerardus Dicten）がオランダ語訳した『Ontleedkundige Tafelen』（1741）で、杉田玄白らが依拠したのはその第2版であった。（『日本大百科全書』の「解体新書」の項目）

¹² オランダ医学を蘭方ともいう。また、これに対して、日本の中国医学を漢方という。

どの西洋の学問を学ぶ蘭学塾を開設し、日本の近代化に大きな役割を果たした。

大槻玄沢は 1786 年に江戸に芝蘭堂を開いてオランダ語教育を行い、玄沢の弟子の稲村三伯が日本で最初の蘭和辞書である『江戸ハルマ』（『波留麻和解』とも。1796）を刊行した。大槻玄沢の著書の『蘭学階梯』（1788）は、蘭学を勉強する手引きであり、師の杉田玄白から命じられ、『解体新書』を改訂した『重訂解体新書』（1826）を刊行した。芝蘭堂のメンバーの宇田川玄真（宇田川玄随の養子）は、いくつかの西洋解剖書を翻訳してまとめた『遠西医範』を刊行しようとしたが、それができず、後に『医範提綱』（1805）として刊行された。1808 年に『医範提綱内象銅版図』も刊行された。

宇田川玄真に医学を学んだ坪井信道は、江戸深川に安懷塾を開業し、蘭学を教えた。信道は、プールハーフェの医学実地書『箴言』を高弟スウィーテンが注釈した本を『万病治準』21 冊（1836）として和訳した。

シーボルトはオランダ商館医として、19 世紀に日本に渡来し、長崎の鳴滝に塾を開いて医学を教えた。種痘の普及に努めたシーボルトの門人伊東玄朴は象先堂を開設し、多くの弟子を教えた。1857 年、10 名の漢方医と江戸に種痘所を設ける相談をして、1858 年に、お玉ヶ池種痘所を設立した。同じくシーボルトの鳴滝塾で学んだ戸塚静海は、江戸に出て、外科医として開業し、伊東玄朴、坪井信道とともに「江戸の三大蘭方医」と高く評価された。

1838 年、宇田川玄真と坪井信道に医学を学んだ緒方洪庵は、大坂において適々斎塾（適塾ともいう）を開いて医学教育を始めた。そこでは明治軍制を制定した大村益次郎や慶応義塾の創立者福沢諭吉が塾生であった。緒方洪庵の著書には、訳書として、『扶氏経験遺訓』（1857）、『虎狼痢治準』（1859）、『病学通論』などあり、『病学通論』は日本最初の病理学書である。

同年、佐藤泰然は江戸に和田塾を開き、天保 13 年（1843）に佐倉に順天堂を創り蘭方医の養成に努めた。順天堂は、第 2 代の堂主佐藤尚中のときに東京に移動し、順天堂医院になり、現在の順天堂大学となった。

2.1.2.3 蘭学由来の医学用語

オランダ医術の学びから始まった蘭学は、医書の翻訳によって、大量の医学用語が造語された。蘭学者たちは訳出の際に、なるべく中国の典拠のある漢語を用いる主義を貫いて

いたが、既存語がない場合も、漢語のかたちで造語した¹³。杉本つとむ（1998）『近代日本語の成立と発展』は、宇田川玄随・宇田川玄真によってつくられた医学用語のうち、現代でも使われているものを次のように提示している。

甲状軟骨、鎖骨、薦骨、視神経、聴神経、胃液、小腸、大腸、臍、膈、尿道、輸精管、
腺、腱、腹膜、繊維、靱帯、脂肪、（心臓）の右室、左室、心耳

杉本（1998 :276）

また、芝哲夫（2008）「緒方洪庵の医学用語」は、緒方洪庵の医学用語について、『病学通論』（1857）、『扶氏経験遺訓』（1857）にはじめて現れる医学用語（要するに、緒方洪庵の造語であると考えられる医学用語）を次のように取り上げている。

咯血、牛痘、胸腺、股関節、甲状腺、交感神経、抵抗力、後天病、斜視、手淫、猩紅熱、先天病、胆石、痴呆、病理、天然痘、破傷風、不随意、不全、婦人病、辨膜、麻醉

芝（2008 :64-65）

2.1.3 近代西洋医学とその翻訳語

2.1.3.1 蘭医学から英医学・ドイツ医学への転換

幕末明治期において、日本医学及び医療は、医学教育の政策の転換によって、大きく変化した。

黒船の来航によって、日本は開国し、嘉永 7 年（1855）に、幕府はオランダ政府の援助により長崎に海軍伝習所を開いて、安政 3 年（1857）に医学教師としてオランダの海軍軍医、ポンペ（Johannes Lijdius Catharinus Pompe van Meerdervoort）を招聘した。ポンペは、すべての学科に簡単な手引書を作って学生に配布し、学生の筆記に合わせて説明を加えた。授業の内容は、物理学、化学、解剖学、生理学、病理学、薬学、内科学、外科学を含む体系的なもので、後の日本の医学教育に大きな影響を残した。さらに彼の建議で、文久元年（1861）に日本最初の西洋医学病院である長崎養生所を完成させた（後の長崎府

¹³ ほかに、原語をそのまま、漢字あるいは片仮名で音訳することもあった。詳細は、本論文の 2.3.1.2 に挙げる杉本（1991）の紹介を参照。

医学校病院と長崎医科大学)。ポンペは帰国(1862)までのおよそ5年間に、133人を指導しており、その中には、司馬凌海、緒方惟準、橋本節斎、戸塚文海、佐々木東洋など近代日本医界を導く有名な人物がいた。また、ポンペの帰国後、外国人医師とポンペの弟子たちは、西洋式病院をどんどん設立し、日本に広めた。

明治元年(1868)、戊辰戦争により、日本の政局は激しく動揺する。この時期、ウィリス(William Wills)は、文久2年(1862)にイギリス公使館の医官に任命されて来日し、戊辰戦争の時、東北戦地に赴き、敵味方の区別なく、負傷者を治療した。治療方法は、傷口を消毒し、麻酔後手術を行うという斬新な西洋医術であった。明治元年(1868)、新政府は横浜に軍陣病院を設置し、傷兵を収容した。その後この病院は江戸に移動し、大病院と改称した。ウィリスは、戊辰戦争後、大病院の院長となり、患者の治療とともに、西洋医療の教育に携わった。

ウィリスが医界に高く評されるにつれ、日本の西洋医学は、蘭医学から英医学に傾き始めた。しかし、新政府の東京医学校(大病院の後身)取調御用掛である相良知安と岩佐純は、ドイツ医学への転換を主張した。それは、蘭方医が翻訳勉強した数多くのオランダ医書は、ドイツ医書から翻訳したものであるため、ドイツ医学が最も優れていると考えたからである。イギリス医学派の強い反対もあったが、明治2年(1869)に、相良知安は太政官にドイツ医学採用を進言するチャンスが訪れ、太政官はドイツ医学採用が決まった。

明治4年(1871)、新政府の招聘により、ドイツの陸軍軍医ミュラー(Leopold Muller)と海軍軍医ホフマン(Theodor Hoffmann)が大学東校(東京医学校の後身)の医学教師となった。2人は東校の医学教育制度を改革し、ドイツの大学の形式に変えた。本科予科を設置し、本科5年予科2年とし、生徒は、入学時の年齢を14~19歳と定めた。ミュラーは外科、解剖学のほかに、婦人科、内科などを担当し、ホフマンは内科学を担当した。これ以降、多くのドイツの医師が招かれ、解剖学、生理学、病理学を教授した。後に日本の医学者も徐々に教授を担当するようになった。

明治2年(1869)に、美幾^{みき}という女性の特志解剖が医学校で行われ、これは、画期的なことであった。それ以前の江戸時代の解剖は、すべて刑場で刑死者について行われたのに対して、これは、本人の生前の希望により病死体が医学校で解剖された。明治3年(1870)に刑死体や引取人のない死体の解剖が許可され、人体の解剖が初めて法制上認可された。

東京医学校は明治10年(1877)に東京大学医学部と改称し、最初の医学部総理は池田謙斎が担当した。本課生と別課生は分かれて授業を受け、本課ではすべてドイツ人教師が

ドイツ語で教え、速成のための別課では日本人教師が日本語で教える形式であった。

また、この時期、日本政府は漢方より西洋医学を重んじ、明治 8 年（1875）に、文部省が医師開業試験を実施することを決め、その試験科目はすべて西洋医学となった。これに対し、漢方医は抵抗し、浅田宗伯を中心に温知社を設立し、漢方の医学校や病院も建てて、政府の洋方偏重に抵抗したが、明治 16 年（1883）に、政府が医術開業試験規則および医師免許規則を制定したことにより、漢方医が設立した医学校まで潰れることになった¹⁴。

漢方を排斥したものの、西洋医学の医師が不足していることから、日本では、全国に次々と公立・私立の医学校が設立され始めた。明治 12 年（1879）の時点で公立 20 校、私立 25 校があり、生徒数はおおよそ 3000 人に達した。ただし、多くの公立医学校は明治 20 年（1887）に廃止となり、千葉・仙台・岡山・金沢・長崎に国立の高等中学校の医学部ができた。

明治 19 年（1886）に、東京大学は帝国大学と改称し、明治 30 年（1897）に京都帝国大学が設立され、帝国大学は東京帝国大学となった。京都帝国大学が明治 32 年（1899）に医学部を設置したことにより、医学教育の地方分権がはじまり、中央集権は徐々に緩んだ。なお、東京大学医学部は、一時はドイツ人教師が全科目を担当していたが、ドイツに留学して帰国した日本人卒業生が戻って教授しはじめるとともに、外国人教師の数は減っていった。

私立医学校では、東京の慶応義塾医学所、済生学舎、成医会講習所などがあった。明治 6 年（1873）に、福沢諭吉が提案し、彼の弟子の松山棟庵が慶応義塾の 1 分科として、慶応義塾医学所を設けた。教科書は主にアメリカの医師ハルツホール（Henry Hartshorne）の翻訳書『華氏内科摘要』（1872-1875）、『華氏病理摘要』を用いた。

明治 9 年（1876）に、長谷川泰は、済生学舎を設立し、明治 36 年（1903）の専門学校令の公布によって廃校になるまで、約 9600 名の医師を育てた¹⁵。その中には、野口英世、吉岡弥、浅川範彦、須藤憲三、小口忠太など、後に活躍する医学者たちがいる。教科書は、長谷川泰が自ら翻訳した『脚気新説』（1871）、『華氏病理摘要』（1875）、『診法要訣』（1884）などを授業に用いた。

明治 14 年（1881）、前に触れたウィリスからイギリス医学を学び、海軍医となり、後に

¹⁴ 漢方を復興しようとする医師たちは、昭和 25 年（1950）に日本東洋医学会を設立し、東洋医学研究の中核的な学術団体として、活発な研究、啓蒙活動を行っている。昭和 51 年（1976）からは数十種類の医療用漢方製剤が、初めて厚生省の定める薬価基準に収載され、現在では約 150 数処方収載されている。また、第 19 回日本医学会総会（1975）から、東洋医学はシンポジウムでとりあげられている。（室賀昭三「現代の漢方」<http://aeam.umin.ac.jp/siryouko/muroga.html>）

¹⁵ 坂井（2020: 420）による。

イギリスに留学した高木兼寛が、成医会講習所を設立した。明治 15 年（1882）から海軍医務学舎で授業を行い、講義は主に海軍軍医が行った。同講習所は、明治 36 年（1903）に私立東京慈恵医院医学専門学校に昇格し、大正 10 年（1921）に東京慈恵会医科大学となった。

明治期には、西洋医学を学んだ医師が徐々に増え、医師の資質の向上や医業権益の確保のために医師会を設立する運動が始まった。その嚆矢となったのは、明治 26 年（1893）に設立された大日本医会である。理事長に高木兼寛、理事に長谷川泰、長与専斉、佐藤進らが、毎年大会を開いて医政問題について決議や建議を行った。第 4 回大会では「医師法案」を決議し、それを明治 30（1897）の第 10 回帝国議会に提出したが、衆議院の解散によって審議未了になった。翌年の第 13 回帝国議会に、「医師法案」を「医師会法案」に変えて改めて提出した。その結果、衆議院を通過したが、貴族院の反対によって否決された。

明治医会は、大学で教育を受けた医師たちが結合した組織であったが、大日本医会のような私立医学校で勉強した医師たち¹⁶の学問水準を批判した。関西連合医会と東京医会は、明治 36 年（1903）に帝国連合医会を結成し、明治医会と帝国連合医会は、明治 39 年（1906）にそれぞれ「医師法案」を議会に提出し、同年の 5 月、両案を折衷、修正し提出し、これが両議院を通過した。「医師法」の内容は主に次のようなものである。

- ①医師の資格を一定の医学校の卒業生のみを与え、不完全な医師を養成する医師開業試験を 8 年後に廃止すること¹⁷
- ②医師会を設立するが、強制加入ではないこと
- ③医師の品位および賞罰の規定を設けること

（坂井 2020: 432）

医師法の発効後、医師は医科大学と医学専門学校で学ばなければならなくなった。

¹⁶ 橋本（1994: 157）では、正統的な学校教育機関を卒業した医師たちを「医師集団」と称し、私立学校や資格試験制度を利用した青年層を「非学歴層」と称している。逢見（2019: 458）では、上記の 2 類をそれぞれ、「学医」あるいは「上流医」、「開業医」あるいは「下流医」と称している。

¹⁷ 「医師法」によれば、医術開業試験は 1914 年に廃止されるべきとあるが、実際は 1916 年に廃止された。（橋本（1994: 159）による）

2.1.3.2 近代西洋医学翻訳語

明治期において、日本は、はじめイギリス医学を導入したが、後にドイツ医学を採用することになった。この時期の医学用語の性格は、英語・ドイツ語から翻訳した翻訳語と、直接ドイツ語を使用したことである¹⁸。

『東京大学医学部百年史』付録に、明治 11 年（1878）12 月の日付で「東京大学医学部文庫目録」がある¹⁹。その中に、明治初期に出版された奥山虎章『医語類聚』（1872）が見られる。高野（1984）は、『医語類聚』に出現している医学用語の基本語基と語構成を分析しながら、明治期の医学用語の造語法にたどり着いている²⁰。その中で、語構成分析を行い、1 字語から 8 字語まで 8 種類、17 様式があるとまとめている。1 字語には、次のように、「和語」、「漢語」、「外来語」があり、2 字語には、「和語・混種語」、「漢語」があり、3 字語以上は、1 字語基と 2 字語基の組み合わせになっている。以下に、高野（1984）が提示している 2 字語までの医学用語を挙げる。（○は 1 字語基、□は 2 字語基を示す）

A) 1 字語 (○)

〔和語〕

顎 Jaw	味 Sapidity	頭 Heead
爪 Nail	耳 Ear	指 Digiti

〔漢語〕

痔 Marisca	随 Marrow	栓 Embole
糖 Saccharum	淋 Blennorrhoea	彎 Curvatures

〔外来語〕²¹

アルコール／Alcohol（亜兒哥爾）
クレオソート／Creasotum（結列屋曹篤）
タール／Tar（爹兒）
マラリア／Malaria（泥沼氣）
モルヒネ／Morphia（謨兒比涅）

¹⁸ ガーゼ、レントゲン、アレルギー、ウイルス、メス、ノイローゼ、ギプス、アルバイト、カルテ（診察録）、クランケ（患者）、オペ（手術）など現代日本語で日常的に使い慣れた言葉は、すべてドイツからきたカタカタ語である。（「相良知安とドイツ医学導入」<http://sagarachian.jp/main/89.html>）

¹⁹ 三浦義彰教授（千葉大学医学部）から提供されたという。（『東京大学医学部百年史』1967: 657）

²⁰ 明治期の医学用語の造語法については、本論文の 2.3.1.2 に挙げる高野（1984）の紹介を参照。

²¹ 高野（1984）では、外来語を 1 語基の語として扱っている。

B) 2 字語 ()

[和語・混種語]

汗疹 Sudamina

嚙語 Somnioloquim

大汗 Hyperidrosis

下薬 Cathartic

蜂蜜 Apis mellifica

虫熱 Helminthopyra

[漢語]

塩基 Basis

仮死 Asphyxia

骨幹 Diaphysis

喘息 Asthma

治癒 Acedia

秘薬 Nostrum

(高野 1984: 15)

2.1.4 現代の日本医学とその医学用語

2.1.4.1 日本医学の発展

大正以降、日本人が、実験室で研究成果を遂げることが多くなった。大正 2 年 (1913)、野口英世が梅毒スピロヘータを発見し、昭和 7 年 (1932)、佐々木隆興と吉田富三がオルトアミド・アゾトルオールをネズミに与えることで肝臓癌を発生させ、肺に転移させることに成功したことは、いずれも日本医学が独自に発達しはじめた証である。

大正 5 年 (1916) に、北里柴三郎らによって大日本医師会が設立され、医師会の強制設立、強制加入、公法人としての法人格の獲得などを、政府や議会に求めた。大正 8 年 (1919) に、これらが医師法にもりこまれ、そのほか、官公立病院の勤務医に、現地の医師会への加入が義務付けられた。大正 12 年 (1923) には、医師会全国組織の公法人化が認められ、同年に、日本医師会が、内務大臣から法人認可を受けて、後に大日本医師会は解散した。しかし、第 2 次世界大戦敗戦後の昭和 22 年 (1947) に日本医師会は一度解散し、同年に社団法人として再び結成された。平成 25 年 (2013) には公益社団法人として認められた。現在は、「医道の高揚、医学教育の向上、医学と関連科学との総合進歩、生涯教育²²」などをスローガンとしている。

²² 「日本医師会の概要」 <https://www.med.or.jp/jma/about/outline/>

大正 11 年（1922）、日本の公的医療保険制度、「健康保険法」が制定された。その背景には、労働者の健康を維持することで社会主義に傾倒しないようにするという、財界と官界に共通の動機があった²³。昭和 33 年（1958）、新しい「国民健康保険法」が制定され、昭和 36 年（1961）に現在の「国民皆保険制度」が完成し、保険の加入が義務化された。

第 2 次世界大戦敗戦後（1945）、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ/SCAP）のもとで、公衆衛生福祉局（PHW）の指令を受けて日本医学教育の改革が行われた。PHW の局長サムス（Crowford F. Sams）は、戦争時に軍医の速成が求められたために設置した臨時医学専門学校を廃止し、大学と医学専門学校の教育課程やカリキュラムの変更を行い、医学教育を統一した。

昭和 21（1946）年に、実地修練制度（インターン制度）が創設され、大学医学部卒業後、医師国家試験受験資格を得るための義務として、「卒業後 1 年以上の診療及び公衆に関する実地修練」を行うこととされた。昭和 43 年（1968）に、インターン制度が廃止され、臨床研修制度が創設され、大学医学部卒業直後に医師国家試験を受験し、医師免許取得後も 2 年以上の臨床研修を行うこととされた。平成 16（2004）年には、「新医師臨床研修制度」が定められ、診療に従事しようとする医師は、2 年以上の臨床研修を受けなければならないとされた²⁴。

2.1.4.2 現代の医学用語

今日、日本の医学用語は、主に 2 類に分けられると思われる。1 つは、専門研究に焦点にあて、医学界に流通し・使用されている医学用語、もう 1 つは、患者もしくは一般人に焦点にあて、理解しやすく納得しやすい用語である。

現代における専門用語としての医学用語の選定原則は、『医学用語辞典』²⁵の凡例に掲げ

²³ ジョン・池上・津川（2014: 33）

²⁴ 「厚生労働省 医師臨床研修制度の変遷」による。

<https://www.mhlw.go.jp/topics/bukyoku/isei/rinsyo/hensen/>

²⁵ 医学用語辞典の歴史をたどってみると、医学用語の問題が医学界でとりあげられたのは、大変古く 1940 年の第 11 回日本医学会総会のときであった。このとき長与又郎会頭の提唱によって医学用語整理委員会が発足し、1943 年 1 月に第一次医学用語集の一部がまとまり印刷公表されたが、第二次世界大戦のためにこの仕事は継続不可能となり中絶された。1952 年に田宮猛雄日本医学会会長の下に、日本医学会医学用語委員会が新しく組織された。この委員会は一時中断する時期もあったが、医学用語の整理を続け、1991 年 4 月、草間悟委員長時代に『医学用語辞典 英和』の初版が完成し出版された。この医学用語辞典は、その後改訂され、2001 年、第 2 版の英和辞典が刊行され、さらに 1994 年に和英辞典も完成し今日に至っている。（日本医学会医学用語管理委員会（2008: 451））

られている²⁶。『医学用語辞典』は、日本医学会²⁷の事業として医学用語管理委員会により編纂された医学用語集で、編集の目的は、「医学界のみならず、一般社会で使われる医学用語に対して、標準な用語」²⁸を示す点にある。

第3版の凡例に、本辞典の「標準的表記法」として、例えば次のような記載方法が挙げられている。

1) 推奨語及び廃語

対応語が複数ある場合には、できる限り優先的に使用すべき語を推奨語として最初に記した。推奨すべき言葉を強調する時は日本語の後に【奨】という記号を付した。また、過去に用いられたが現在は使われない用語は後に【旧】という記号を付した。

例

hyperparathyroidism [M] (C19) 副甲状腺機能亢進【奨】、上皮小体機能亢進
schizophrenia [M] (F03) 統合失調症、精神分裂病【旧】

2) 意見の異なる日本語

学会に推奨語とは異なった強い意見がある場合には、学会の略称を語の後に付して併記した。

例

dementia 認知症【奨】、認知症（痴呆）【精神・神経】、痴呆【旧】

(『医学用語辞典第3版』凡例：4-5)

また、本辞典で推奨している用語の具体例としては、例えば次のような語がある。

上皮小体と副甲状腺→副甲状腺【奨】

²⁶ 伊藤（1975）では、1975年の『医学用語辞典』の凡例が医学用語全般の原則となつてと述べている。『医学用語辞典』は、すでに第3版が出版されている。第3版の凡例は、<https://jams.med.or.jp/dic/terminology/hanrei.pdf> で確認できる。

²⁷ 明治35年（1902）4月2日から5日まで、16の分科会が合同して第1回日本聯合医学会を上野の東京音楽学校において開催した。これを公式に日本医学会の創設日とする。第3回からは日本医学会と改称し、以後4年ごとに開催、今日に至るまで連綿と継続されている。ただ、昭和22年開催の第12回総会のみ、終戦直後のため1年延期された。その12回総会で日本医学会の常設・恒久化が決議され、昭和23年3月8日に改組途上の日本医師会と合体した。日本医学会の活動は、あくまで学問中心で、その会員制度は学会単位の加盟である。現在、138分科会を擁している。「日本医学会・概略」
<https://jams.med.or.jp/about/about.html>

²⁸ 日本医学会医学用語管理委員会（2008: 452）

蜂巢炎と蜂窩織炎→蜂巢炎【奨】

新生物と腫瘍→腫瘍【奨】

（『医学用語辞典第3版』凡例：5）

ほかに、「症」や「性」使い方などについて、はっきり定められている。

一方、国立国語研究所は、医療者と一般人の両方を対象としたアンケート調査を行い、医療者にとって解説しにくい言葉、一般人にとって理解しにくい言葉を言い換える提案をまとめ、『病院の言葉を分かりやすく－工夫の提案－』（2009）として出版した。同書は、検討する言葉を100語に絞り込み、具体的な類型を設け、そのうち、57語をさらに「類型A 日常語で言い換える」、「類型B 明確に説明する」、「類型C 重要で新しい概念の普及を図る」に分類し、言い換えの言葉を提出している。

例えば、「寛解」、「誤嚥」、「重篤」、「せん妄」など、一般の人はふだん見聞きしない言葉で、耳で聞いても漢字が思い浮かばず、漢字を見ても意味が推定できない難しい言葉は、医師は使用を避けた方がいいと提案している。また、「膠原病」、「敗血症」など、見聞きしたことのある人は少なくないが、意味を理解している人はかなり少なく、認知と理解に落差があるため、医師は、説明を付けずにそのまま使うことは避け、患者の理解度を確かめながら、丁寧に説明することがたいせつだと提案している。

2.2 近代日中医学用語交流史

ここでは、1.1の近代日中語彙交流史で分けた3期にあわせて、日中両国の書物の刊行、使用、流布状況を確認しながら、近代日中医学用語交流史を概観していく。

2.2.1 第1期（16世紀後半～19世紀初頭）

この時期において、日中間の医学語彙交流は、ほとんどないといえる。

中国では、カトリック系イエズス会宣教師たちによる訳書が著されたが、それは、天文学、数学など、多くは西洋科学書で、医学書の翻訳は解剖書であるテレンツ（鄧玉函 Johann Schreck）が編纂した『泰西人身説概』（1623）とロー（羅雅谷 Giacomo Rho）が編纂した『泰西人身図説』（出版年不詳）しかなかった。

一方、江戸時代の日本では、蘭医学に接触し、杉田家、大槻家、宇田川家などの蘭方医によって、オランダ語による医学訳書が次々と刊行されていた。杉田玄白ら『解体新

書』(1774)、大槻玄沢『重訂解体新書』(1826)、宇田川玄随『西説内科撰要』(1793-1810)、宇田川玄真『西説医範提綱釈義』(1805)、『遠世医方名物考』(1822)、杉田立卿『眼科新書』(1815)、伊東玄朴『医療正始』(1835-1847)、緒方洪庵『扶氏経験遺訓』(1857)、『病学通論』(1857)、司馬凌海『七新薬』(1862)などに現れた新漢語・訳語は、明治期の医学、さらに現代日本語における医学用語まで継承された。

また、蘭学者・商通詞は和蘭対訳辞書もつくった。それは江戸系と長崎系に分けられるが、江戸系には、『波留麻和解』(「江戸ハルマ」 1796)、『訳鍵』(1810)や『増補改正訳鍵』(1864)などあり、長崎系には、『ドゥーフハルマ』(「長崎ハルマ」 1833年に完成、出版されず写本のかたちで流布)、『和蘭字彙』(1855-58)などがある。

2.2.2 第2期(19世紀初頭～1880年代)

19世紀初頭の漢訳西医書は極めて少ない。邱浩川『引痘略』(1817)は、この時代の代表的な書物で、中国人による最初の牛痘種痘書である。1847年に、江戸時代後期の医師小山肆成は『引痘略』を要約し『引痘新法全書』として大坂、京都、江戸の書店より出版した²⁹。

19世紀中期以降に出版された漢訳西医書は、大きくホブソン(合信 Benjamin Hobson)による訳書(一部は墨海書館から出版)と、広州博済医局の訳書と、江南製造局翻訳館の訳書に分かれる。この時期の洋書の翻訳方法は、主に宣教師が口述し、中国人協力者が筆録・潤色するというかたちであった。

ホブソンの『全体新論』(1851)は、中国にはじめて体系的に西洋医学を導入した著書で、「西洋の自然科学の気風を解剖生理学的論点でまとめた教養書」³⁰とされている。また、ホブソンは管嗣復と共同で、『西医略論』(1857)、『内科新論』(1858)、『婦嬰新説』(1858)を翻訳・出版しており、博物学書の『博物新編』(1855)とあわせて「合信西医五種」と称されている。上の書物に現れた医学訳語は、『医学英華字釈』(*A Medical Vocabulary in English and Chinese* 1858)として整理されている。合信西医五種は、いずれも和刻本として日本で流布している。

広州博済医局の訳書は、主にジョン・グラスゴー・カー(嘉約翰 John Glasgow Kerr)による翻訳で、『内科闡微』(1873)、『皮膚新篇』(1874)、『眼科撮要』(1887)などが挙げ

²⁹ 青木(2013: 10-11)

³⁰ 松本(2010: 74)

られる。『内科闡微』は、1874年に坪井信良が再訳し、日本で出版された。

江南製造局翻訳館の訳書には、フライヤー（傅蘭雅 John Fryer）による漢訳医書が多い。フライヤーは、中国に衛生学を伝播するために、雑誌『格致彙編』³¹に、「化学衛生論」（1880）、「居宅衛生論」（1890）、「孩童衛生編」（1893）、「幼童衛生編」（1894）、「初学衛生編」（1895）³²などの一連の近代衛生学を紹介する著作を翻訳・発表した。ほかに、『儒門医学』（1875）、『西薬大成』（1887）などの医学著書も出版した。このうち、『儒門医学』は、1879年に島村利助により日本で出版された。

ほかに、オスグッド（柯為良 Dauphin William Osgood）『全体闡微』（1881）とダッジョン（徳貞 John Dudgeon）『全体通考』（1886）などの解剖書もこの時期に出版された。

日本の明治初期、開国により、蘭学はしだいに衰え、洋学は蘭学から英学を中心にするものへと切り替わることとなった。医学書の翻訳も英語やドイツ語で書かれたものに移り変わった。この時期に出版された和訳西医書の中の訳語は、上記の漢訳洋書に出現している訳語もあれば、江戸期に生まれた訳語をそのまま踏襲したものもあり、さらに独自に作った訳語もある。日本最初の対訳医語専門辞典『医語類聚』（1872）では、著者奥山虎章による新造語が見られる。ほかに有名な和訳洋学医書としては、桑田衡平『華氏内科摘要』（1872）、森鼻宗次『外科新説』（1874）、司馬盛之・坪井為春『医療大成』（1875）、下平用彩『診断学』（1887）、弘田長『児科必携』（1888）などが挙げられる。

また、医学訳語が見られる書物としては、蘭学書を資料として編訳した堀達之助『英和对訳袖珍辞書』（1862）、ヘボン『和英語林集成』³³、井上哲次郎『哲学字彙』（1884）などの英和辞書がある。19世紀に入って、ドイツ語やラテン語を収録する医学辞典も出版されるようになり、新宮涼園・武昌吉・柴田承桂『独逸医学辞典』（1886）、日高昂『懷中和羅独英医語辞典』（1899）、恩田重信『独和新医学大字典』（1902）、田中鍊太郎『独羅英和医学字彙』（1900）、加藤辰三郎『和羅独英新医学辞典』（1910）などで訳語の選定が確認できる。

³¹ 『格致彙編』は、中国近代最初の科学技術雑誌と言われており、主に西洋科学知識を紹介している。編集長は、フライヤーで、1876年2月に創刊し、1892年に停刊した。（王 1996: 36-37 による）

³² 「化学衛生論」は、1881年に広学会から単行本として出版され、「居宅衛生論」は、1890年に格致書屋から単行本として出版され、「孩童衛生編」、「幼童衛生編」、「初学衛生編」も後に益智書会から出版されている。（夏 2012: 54-59 による）

³³ 『和英語林集成』は、1867年に初版、1872年に再版、1886年に三版が発行されている。

1880年には、日本医史学会により『中外医事新報』が発刊され、1940年までに1286号に及んだ。同誌には、大量の医学学術記事が掲載されており、西洋医学を論ずる文章が多く見られる。

2.2.3 第3期（1890年代～1920年代）

前に述べたように、この時期には、日本書の翻訳により大量の和製漢語が中国に伝来してきた。和製医学用語も留日学生の翻訳により、中国語に流れ込んできた。医学書の翻訳については、丁福保の業績が最も顕著である。彼は、江南製造局翻訳館で主に西洋医学・科学書の翻訳に携わった趙元益に医学を学び、1901年に江南製造局工芸学堂に入ってから化学を学び、同年、上海に設立された南洋公学東文学堂にも入って日本語を学んだ。1902年にはすでに日本書の漢訳の翻訳や編集の仕事に携わり、『東文典問答』（1902）という日本語を速成する本を編集し、当時の留学生の間に売られた。1909年に日本に派遣され、日本の医学の状況を調査し、渡日前後には上海文明書局、もしくは上海医学書局から『丁氏医学叢書』として各種の医学書を次々と刊行した。『外科学一夕談』

（1910）、『普通医学新智識』（1913）、『医学綱要』（1915）などが挙げられる。鄒振環（2011: 41）の統計によると、『丁氏医学叢書』には98種あり、そのうち、丁福保による翻訳は86種あり、和製医学用語の導入に大きな役割を果たしたと考えられる。

この時期に、衛生学知識を普及させるために、衛生学書や衛生学教科書が多く出現している。『丁氏医学叢書』の中にも、『衛生学問答』（1899）、『蒙学衛生教科書』（1903）、『高等小生理衛生教科書』（1905）など衛生を紹介する書物が翻訳出版されている。ほかに、孫佐『生理衛生新教科書』（1907）、王倬『衛生治療新書(家庭必備)』（1917）などもある。

西洋医学雑誌も20世紀末期から発行されるようになった。『海関医報』（1871）は、中国西洋医学雑誌の嚆矢となる。ほかに有名な医学雑誌としては、『広済医報』（1914）、『中華医学雑誌』（1915）、『衛生月刊』（1920）などが挙げられる。

また、医学用語を統一することを目的として宣教師コースラン（高似蘭 Cousland）らが設立した博医会名詞審査会（1890年に創立）は、1908年に『高氏医学詞彙』を出版した。この訳語集は、1908年から1949年にわたって、10版を出版し、中国医学用語の統一に大きな貢献を果たした。また、1918年、中華医学会などの協力の下で、名詞審査会は科学名詞審査会と名前を変え、1931年に『医学名詞彙編』という訳語集を出版した。

そこに日本の訳語を参考にすることが確認できる。

2.2.4 まとめ

近代における日中医学分野の語彙交流は、1.1 で整理した近代日中語彙交流史に比べて多少異なっている。もちろん、中国洋学書は江戸期の日本医学に影響を与えたが³⁴、蘭学から発展した蘭医学による訳語（特に解剖学用語）のほうが、むしろ日本の医学用語を主導したと思われる。また、明治期、英医学・ドイツ医学による翻訳語も独自の造語であったため、中国医学用語が日本に多大な影響を与えたとは言いにくいだろう。

逆に、19 世紀後期から、日本の医学用語が中国へ伝来した。現代中国の医学用語も、ほぼ全面的に日本語に準拠している³⁵。これは、プロテスタント宣教師たちによる訳語は、和製漢語との競争に負けたことを意味し、その理由は、(後述の 2.3.3 で言及するように、) 造語法及び造語自体に問題が存在したためと考えられる。

2.3 近代医学用語の研究

西嶋佑太郎（2020）「医学用語の漢字漢語の研究」は、以下の 2 類に分類して、従来の近代医学用語の研究について簡単に紹介している。

- (1) 蘭学での訳語の創出と日中語彙交流からの視点
- (2) 学術用語・専門用語からの視点

(1) の研究には、成明珍（2015）「日中韓三国の専門用語における語彙・文字に関する研究：医学・化学分野の漢字・漢語を中心に」、笹原宏之（2007）『国字の位相と展開』、沈国威（2010）「西方新概念的容受与造新字為訳詞—以日本蘭学家与来華宣教士為例—」などがあり、(2) の研究には、温昌斌（2011）『民国科技訳名統一工作实践与理論』、澤井直・坂井建雄（2010）「昭和初期解剖学用語の改良と国語運動」、西嶋佑太郎（2014）「日本語医学用語の読みの多様性と標準化—「楔」字を例に—」などがあると述べている。

筆者は、西嶋の分類を基に、西嶋が言及した研究を踏まえながら、さらに研究を加え、以下の分類にして、日中における近代医学用語の研究について概観していきたい。

³⁴ 本論文の 2.3.2 に挙げる杉本（1998）、羅（2004）、舒（2020）の紹介を参照。

³⁵ 沈（1996 :60-61）による。

- ①近代医学用語の創出の視点
- ②日中語彙交流・日中史的語彙対照の視点
- ③学術用語・専門用語の選定の視点

2.3.1 近代医学用語の創出の視点からの研究

近代医学用語の創出は、さらに大きく 2 類に分かれる。

- ①-1 来華宣教師による近代医学用語
- ①-2 洋学での訳語として創出された和製近代医学用

2.3.1.1 来華宣教師による近代医学用語に関する研究

来華宣教師による華製近代医学用語に関する研究には、沈国威（1996）「近代における漢字学術用語の生成と交流—医学用語編（1）」、沈国威（1997）「近代における漢字学術用語の生成と交流—医学用語編（2）」、孫琢（2010）「近代医学述語的創立——以合信及其『医学英華字积』為中心」などがある。

沈（1996）は、19 世紀の漢訳西医書を整理・概観したうえで、用語の造出の流れは次のようであると言っている（以下の「医語」とは、医学用語のことである）。

- ・合信〔ホブソン〕以前の医語
- ・合信の医語
- ・嘉約翰の博濟医院の医語
- ・徳貞の北京同文館の医語
- ・傅蘭雅の製造局翻譯館の医語

（沈 1996: 93）

このうち、沈（1997）は、合信以前の医語について、跛臣³⁶（Alex Pearson）『英吉利³⁷

³⁶ 張（2016: 123）は、「皮爾遜」と訳している。

³⁷ 原本では、口偏に「英」、口偏に「吉」、口偏に「利」。

国新出種痘奇書』、咄凡 (Thomas T.Devan) *BEGINNER'S FIRST BOOK*³⁸ (1847)、羅存德 (Wilhelm Lobscheid) 『英華行篋便覧』 (1864) を取り上げて紹介し、その中に出現している医学用語の説明について論じ、3 書には新造語はほとんどないと述べ、真の近代西洋医学の紹介の嚆矢となるのは合信であり、医学用語の創出も合信から始まったと指摘している。沈 (1997) が紹介した 3 書の内容と医学用語の説明を次の表 1 にまとめて示す。

表 1 合信以前の医学用語 (沈 1997)

書名	著者	書籍の紹介	医学用語の説明
『英咄喇国新出種痘奇書』	跛臣 (Alex Pearson)	牛痘種痘法を紹介。天然痘の種類や種痘に用いる器具なども紹介。	新造語はほとんどない。「種痘」「外科小刀」「伝染」「皮膜」という語の語源やその周辺について説明。
<i>BEGINNER'S FIRST BOOK (THE BEGINNER'S FIRST BOOK IN THE CHINESE LANGUAGE)</i>	咄凡 (Thomas T. Devan)	単語を主として、簡単なフレーズも載せた対訳語彙集のようなもの。布教・医療の普及を目的とする外国人が中国に訪れた時に、いち早く広東語を学習し、日常生活での言葉の支障を克服できるように編集したもの。	医学用語に関する部分は、MEDICINE という項目で、ANATOMY、DISEASES、REMEDIES、MEDICAL PHRASES という四つの内容に分かれる。収録されている医学用語には、口語・方言 (広東語) が多い (医学専門術語とはいえない)。例えば、ANATOMY の「頭殼、口唇、腭、腭根、面皮、眼珠、眼較骨、暈睛」、DISEASES の「嘔疴、攪腸痧、大便閉」など。
『英華行篋便覧』	羅存德 (Wilhelm Lobscheid)	外国人 (旅行者、商人、学生) のためのガイドブックのような書物。多様な言葉を網羅 (『英華字典』(1866-69) の前著)。	医学用語に関する部分は、MEDICINES (158 語)、NOSOLOGY (85 語)、SURGERY (7 語) 等の項目。収録されている語は、 <i>BEGINNERSFIRSTBOOK</i> と変わらない。

一方、孫 (2010) は、合信の医学用語について、『医学英華字釈』 (*A Medical Vocabulary in English and Chinese* 1858) を取り上げ、その用語について分析している。孫 (2010) は、『医学英華字釈』の収録語彙は、西洋医学の部類によって 12 類に分類され、各類の見出し語 (2043 語収録) は、アルファベット順に配列され、そのうち医学用語が 1829 語を占めていると述べている。さらに、『医学英華字釈』に収められている医学用語について、次のように説明している。(括弧内は筆者による日本語訳)

書中所録的 1829 个医学詞彙中，句子和短語的数量達到 841 个，占全書的 46%，詞彙共計 988 个，占全書的 54%，而且其中複合詞的数量明顯多于單純詞，詞彙化程

³⁸ 沈 (1997) では、この本を『入門』と訳しており、張 (1994) では、『中国語啓蒙』と訳している。

度較低，而在西洋医学在華傳播的最初時期，對於這些迥異于中國傳統医学的新知識，要在中文中找到恰如其分的表達是非常困難的。在這種情況下，以短語和複合詞組的形式進行描述無疑是最為簡易，也是最能令讀者理解的途徑。雖然這種方式在嚴密程度、語言的洗練程度上都存在顯而易見的弊端，但仍不失為新術語創立過程中一種必要的過渡形式。（この本に収録されている 1829 語の医学用語のうち、文・句の数は 841 に達し、全体の 46%を占め、語彙は 988 で、全体の 54%を占めており、複合語の数が単純語よりも明らかに多く、語彙化の程度が低い。中国で西洋医学が普及し始めた頃、中国伝統医学と全く異なる新知識について中国語で適切な表現を見いだすことは非常に困難であった。このような状況の下で、句や複合句の形式で記述するのが最も簡単であったことは疑いがなく、最もよく読者に理解させられる方法であった。この方法は、厳密性や言語の洗練度の点において明らかな欠点があるが、新しい術語の創立過程において必要な過渡的段階であるとはいえる。）

（孫 2010: 465）

また、合信が翻訳した医学用語の特徴について、次の 2 点にまとめている。

其一、借用中国既有詞彙為主体，音訳、造新詞并用。合信在中文訳名の選取上，对中国傳統医学中固有的名目，進行了有選択的取用，採其優者而从之，其不妥者而易之；对于中国医学中没有的，則以中国人易于理解和接受的方式進行適當的創造或進行音訳（多用于藥品名），在忠實表達英文術語原意的基礎上，尽可能的符合中国人的語言習慣。（その一、中国語に既存する語彙を主として、音訳、新造語と併用する。合信は、漢訳名の選定において、中国伝統医学にある固有の名称については、選択したうえで採用している。良いもののみ選択し、不適切なものは言い換えるようにしている。中国医学にないものについては、中国人が理解し、受け入れやすいように適切に造語し、あるいは音訳し（薬品名に多い）、英語の術語の本来の意味に忠実に表現することを基本に、できる限り中国人の言語習慣に合わせている。）

（孫 2010: 467）

其二、与中国知識分子合作進行翻譯創制。『医学英華字彙』中の医学詞彙取自于合信此前翻譯出版的五種西医訳著，這也就意味着，雖然『医学英華字彙』并無序跋說明是

否有中国文人之協助 但合信的医学術語創製過程中有中国文人参与并發揮了重要作用, 這是確定無疑的。(その二、中国の知識人と協力し合って翻訳創出を行う。『医学英華字釈』に収録されている医学用語は、合信が過去に翻訳出版した 5 種の西洋医学書から取りっている。つまり、『医学英華字釈』の序文に、中国の文人の協力があつたかの説明はないが、合信の医学術語の創出には、中国の文人が関与し、重要な役割を果たしていたことはまったく疑いがない。)

(孫 2010: 467)

これらの研究から、来華宣教師による近代医学用語は、ホブソン以前においては、口語・方言および語句などが用いられたため、専門用語としては採用されなかったといえる。近代医学用語の本格的な創製は、ホブソンに始まるといえるであろう。

2.3.1.2 和製近代医学用語に関する研究

洋学での訳語として創出された和製近代医学用語の研究は、杉本つとむ(1991)『国語学と蘭語学』、笹原広之(2007)『国字の位相と展開』、高野繁男(1984)『『明治期・医学用語の基本語基と語構成』—『医語類聚』の訳語』などがある。

このうち、杉本(1991: 363-389)は、江戸時代の蘭学者たちがとった翻訳論、翻訳法(訳語の創出の方法)及びその意義についてまとめている。そのうち、杉田玄白らの『解体新書』の翻訳法について、次のように説明している。(例に挙げている医学用語は、『解体新書』の凡例による。)

- | | | |
|----|---|---|
| 翻訳 | ┌ | a 翻訳(狭義)＝対訳＝正訳＝直訳……一対一の対応ある正格な漢語をあてる。それは中国で作成された典拠ある漢語である。現代の<対訳>にほぼ相当するが、厳密には対応するものがない。(例：骨) |
| | | b 義訳＝意識……意味内容に応じて自分で考えて適当な漢語を創作する。現代の<意識>とも同じ。(例：軟骨) |
| | | c 直訳＝対訳＝音訳……原語をそのまま、漢字あるいは片仮名で表記する。現代の<音訳>におなじ。(例：機里爾) |

(杉本 1991: 378-379)

上の解釈を見ると、「a」は既存語から見出す方法で、「b、c」は新語の創出という翻訳法によるものであることが確認される。また、杉本（1991）は、これらの翻訳法は、大槻玄沢が『重訂解体新書』（1826）を編纂したときにも受け継がれており、宇田川一門（宇田川玄随、宇多川玄真、緒方洪庵など）が翻訳する際もこの翻訳法であったと述べている。

蘭学の興隆期においては、翻訳による医学用語の創出のほかに、新造字による医学用語の創出もあった。これについて、笹原（2007: 633-694）は、新しく造られた国字「腺」「腓」の発生と伝播について考察を行っている。

笹原（2007）は、『解体新書』では、Klier を直訳（音訳）して、「大機里爾」「機里爾」と表していたものを、宇多川玄真の『西説医範提綱釈義』（1805）では、「腓」「腺」を造字して表し始めたことを示し、「腓」「腺」という二字の創出は、いずれも会意に形声を兼ねた造字であったと考えられると述べている。笹原（2007）は、この二字が、明治以降、『医語類聚』（1872）などに多用されることより、医学分野において定着したことを示し、明治の各種の辞書や他分野の書籍などにも収録されていることを考察・確認している。また、中国では、これらの語は、一時「甜肉」「核」と訳されたが、20 世紀初期に、「腓」「腺」が中国に伝わり、『辞源』（1915）にも収録されたと指摘している。ただし、現代中国語では「腺」は中国語に定着したものの、「腓」は廃用され、「胰」という漢字を用いて表記されるようになっていると述べている。

高野（1984）は、明治初期の医学用語集『医語類聚』の訳語を例に、明治期の医学用語の造成、翻訳法について分析を行っている。明治期に生まれた、英語（ラテン語、ギリシャ語）を原語とする「医学訳語」には、次のように、直訳を用いてつくられたものが多いと指摘している。

Ablepsia 失明症 〔ラテン語：a（無）＋ギリ語：dolepsis（視力）＋ia（症）〕

Appendicitis 虫垂炎 〔ラテン語：appendic（虫垂）＋itis（炎）〕

（高野 1984: 18）

さらに、高野（1984）は、幕末・明治期は、語を造成するというより、語基を生産・確定した時期ととらえるほうが適切であると主張しており、日本語の医学語彙が漢語を語基として、その組み合わせでできていると述べている。

最後に、近代のものではないが、医療秘書教育全国協議会編『医学用語』（1998）では、今日の多くの医学用語（本書では英語による翻訳語）はいくつかの語句をつなぎ合わせたものであると言っている。これは、高野（1984）の主張に合うものであるが、同書では、「結合形」「接頭語」「接尾語」等の概念を用いている。例えば、「CARDIOLOGY（心臓を研究する学問）」という語は、心臓を意味する *cardi-*と、学問を意味する *-logy* が、*o* という結合母音によって接続されたものであり、*cardi-*は、この用語の本質的な意味を示す部分（「語根」）で、結合母音と結びついた *cardio* を「結合形」と定義している（医療秘書教育全国協議会編 1998: 16）。また、用語の語尾となる「接尾語」と用語の語頭なる「接頭語」については、次のように、胃に関する用語を挙げて説明している。

GASTROSCOPE……胃内視鏡

GASTRO

SCOPE

結合形〈胃の〉 接尾語〈視診する器械〉

GASTROTOMY……胃切開術

GASTRO

TOMY

結合形〈胃の〉 接尾語〈切開術〉

SUBGASTRIC……胃の下

SUB

GASTRIC

接頭語〈下の〉

EPIGASTRIC……胃の上

EPI

GASTRIC

接頭語〈上の〉

（医療秘書教育全国協議会編 1998:17-18）

2.3.2 日中語彙交流・日中史的語彙対照の視点

日中語彙交流・日中史的語彙対照の視点からの研究は、表 2 にまとめて示す。なお、日中語彙交流のうち、「中国→日本」という研究は a で、「日本→中国」という研究は b で、

最後に、対照研究は c で示す（発表年の古い順に並べる）。

表 2 を見ると、主に解剖学の医学用語の継承、変遷、受容に関する研究が多く行われている。これは、日中において、西洋医学との接触は、外科、解剖学からはじまり、身体部位詞や器官に関する新漢語が多く創出されたためだと考えられる。

表 2 日中語彙交流・日中史的語彙対照の視点からの研究

研究分野	著者およびタイトル	内容
a	杉本つとむ『杉本つとむ著作選集 2 近代日本語の成立と発展』「第 3 章 近代日・中学術用語交渉史序説」（1998: 357-382）	方以智の『物理小識』（1664）と日本の『解体新書』（1774）の本文を対比・考察して、一部の文章は完全に同一であることより、前者が後者に影響を与えたことを確認している。さらに、杉田玄白が創訳したといわれる「神経」という語の成立過程を解説しながら、玄白が翻訳の際に、いかに中国の用語（漢方の用語）を使おうとする苦心を見せていると指摘している。
a	羅婉薇「炎（Inflammation）的歴史」（2004）	「炎」という語は、合信と管嗣復が共同で編纂した『西医略論』（1857）に初めて現れており、同書では、英語の「inflammation」を音訳して、「炎法美順」とし、略して、「炎」で表しているが、「炎」は、中国標準語では、「yan」と読むが、江寧方言で読むと「in」になる（管嗣復は江寧人）と述べている。日本の書籍では、『医語類聚』（1873）にはじめて登場し、「inflammation」を「炎症、焮衝（キンショウ）」と訳しており、以前の研究では、「炎」については、日本人がラテン語「inflammatio」を翻訳する際に、「炎」を用いて訳し、これが後に中国へ伝来したとされていたが、「炎」が医学用語とされたのは、中国のほうが先であることがわかったという。
b	王敏東「医学名詞“結核”小考」（2006）	「結核」という語は、中国以前にも存在しているが、皮膚の表面などに突起した小さいできものを指していたが、現在の意味用語を持つ「結核」という語は、中国が日本を通して西洋医学を学ぶようになって、日本遊記や日本書の翻訳によって、中国に伝来したと述べている。
b	高晞「解剖学中文訳名の由来と確定—以德貞『全体通考』为中心」（2008）	日本の幕末明治期における「解剖」と「解体」の関係、中国 20 世紀以降における「解剖」と「全体」の関係を説明し、ダッジョン（徳貞）の『全体通考』（1884）に初めて「解剖」が現れたのは、和訳版の図譜『虞列伊氏解剖訓蒙図』（1872）を参考にしたと解説している。また、「解剖」という語は、中国古典医書『内経』に出現している「解部」を「解剖」に誤読したため、日本で「解剖」という語が生まれたのであると述べている。
c	松本秀士「動脈・静脈の概念の初期的流入に関する日中比較研究」（2008）	『解体新書』が創出した動脈・静脈の訳語に対して、中国洋書では、脈・絡（『泰西人身説概』）、脈絡・血絡（『泰西人身図説』）、血脈管・廻血管（『全体新論』）、脈管・廻管（『全体闡微』）という訳語を用いていることが考察されている。

c	松本秀士「西医東漸をめぐる「筋」の概念と解剖学用語の変遷」(2009a)	「筋」は、日本解剖用語では「 muscle 」の訳語となっているが、中国語では、「 tendon 」の訳語で、「 muscle 」には、「肌」を当てて訳語にした理由について解説している。
c	松本秀士「「神経」と東西身体思想の諸相」(2009b)	『解体新書』の造語である「神経」の概念に対して、来華宣教師たちが「脳経」を用いる理由を中国伝統医学の思想の視点から分析している。
b	松本秀士『新霊枢』が伝えた日本経由の西洋解剖学とその用語」(2010)	上の3つの松本論文の「筋系」(筋が接尾辞となる語)、「神経系」(視神経、聴神経など)、「血管系」(動脈、静脈)、「細胞学に関する用語」などの和製解剖用語が、20世紀初期の丁福保が書いた『新霊枢』に収められた状況を整理している。
b	成明珍「日中韓三国の専門用語における語彙・文字に関する研究ー医学・化学分野の漢字・漢語を中心にー」(2014: 196-212)	医学専門用語の通時的考察では、「死体」「強膜」「咯血」「梗死」「媽媽」の5つの医学用語を取り上げ、語の成立背景から、他の言語への伝播・変遷・定着の過程に関して考察を行っている。日中医学用語は、「媽媽」を除く4語である。 「死体」という語は、6世紀の中国古典にすでに出現しており、17世紀以降、日本の文献に断続的に見られ、戦後の「書きかえ」(当用漢字表に「屍」は表外字)によって、「屍体」の代用表記として日本で普及・定着したと述べている。 「強膜」という語は、『解体新書』(1774)において、オランダ語 hardevlies の訳語として考案されたが、中国語には影響を与えなかったと述べている。 「咯血」については、「咯血」と比較しながら現代の両国における使用を分析している。現代日本語では、「咯血」のみ使用されているのに対して、中国では、「咯」と「咯」はいずれも規範的な漢字であるため、一般社会では、「咯血」、「咯血」が区別なく併用される傾向が強いと説明している。 「梗死」という語は、20世紀半ば以降、日本から中国に伝来した医学用語「梗塞」の表記形に変更が生じてつくられた、中国語だけにある医学用語であることを解明している。
b	陳力衛「なぜ日本語の「気管支炎」から中国語の“支気管炎”へ変わったのか」(2016)	20世紀初頭に中国へ伝わってきた和製医学用語「気管支炎」が後に「支気管炎」に変わった理由について、日中における造語の習慣の相違によったと分析している。
a	舒志田『医学原始』の語彙についてー日本の洋学への影響を中心にー」(2020)	王宏翰の『医学原始』(1692)に用いられる語彙(主に2字語)を整理し、中に出現している訳語は多く西洋宣教師の漢訳書の訳語を踏襲していることを指摘している。さらに『重訂解体新書』の中に使用される訳語と対照を行い、「関節」、「血脈」、「気管」、「血液」、「血行」、「触覚」、「脊髓」、「尾骶骨」などの語は、『医学原始』などの中国前期洋書を通じて日本に移入された可能性が高いと述べている。

2.3.3 学術用語・専門用語の選定の視点からの研究

学術用語・専門用語の選定の視点からの研究は、おもに、医学分野内の用語の統一や標準化、分類などの作業に関する研究、医学用語の意味が一般人にもある程度理解できるように工夫をする研究などである。前者に関しては、張大慶(1994)「早期医学名詞統一工作

博医会の努力と影響」、張大慶（2001）「高似蘭—医学名詞翻訳標準化的推動者」、沈国威（2010）「西方新概念の容受と造新字を以て訳詞—以日本蘭学家と来華宣教師を以て」、温昌斌（2011）『民国科技訳名統一工作实践与理論』、澤井直・坂井建雄（2010）「昭和初期解剖学用語の改良と国語運動」、香川靖雄（1997）「医学の専門用語の問題点」、開原成允（2010）「医学用語の現状と課題」、西嶋佑太郎（2014）「日本語医学用語の読みの多様性と標準化—「楔」字を以て—」などの研究があり、後者に関しては、国立国語研究所（2009）『「病院の言葉」を分かりやすくする提案』などがある。

張（1994）は、中国清末の来華宣教師たちが 1890 年に創設した博医会の、中国早期の医学用語の統一に関する貢献や影響などについて論じている。張（1994）には、博医会の努力の下で、『疾病名詞詞彙』（1894）、『眼科名詞』（1898）、『疾病詞彙』（1898）、『解剖学詞彙』（1898）、『生理学名詞』（1898）などの医学用語集が出版され、さらに、1906 年に『哈氏生理学（*Halliburton's Physiology*）』『格氏解剖学（*Gray's Anatomy*）』などの医学教科書が翻訳され、1908 年に、『英漢医学詞典』、『医学字典』が編纂出版されたことが書かれている。また、これらの書物は、医学用語の統一に顕著な成果をもたらしたが、医学の発展および西洋医学知識の伝播につれ、博医会が独自に事業を進行することが困難になり、中国有識人などの協力が必要であることに気づき、1916 年に、江蘇省教育会、中華医学会、中華民国医藥学会、教育部などと組んで、医学名詞審査会を創設し、1918 年に、これを科学名詞審査会と改名したと述べている。

なお、張（2001）は、博医会の主導者といっても過言ではない来華宣教師高似蘭（Cousland）の生涯および医学用語の統一のための貢献について論じている。特に、高似蘭が 1908 年に出版した『高氏医学辞彙』は、医学用語の統一にとって、最初の一步となったと述べている。『高氏医学辞彙』は、高似蘭一人ではなく、博医会、後に中華医学会などの学者の力を結集し、1908 年から 1949 年にかけて計 10 版が出版され、内容も常に更新されたことから、20 世紀 50 年代までのおよそ半世紀における最も重要な英漢医学辞典として、中国医学用語の統一の土台となったと評価している。

沈（2010）も、博医会における医学用語の制定について触れており、1901 年に出版された用語集³⁹に現れた新造字、および、その用語集ではすでに廃用された漢字に新しい解剖学意味を与えていることについて論じている。沈（2010）は、例えば、博医会は血液循環

³⁹ *First Report of the Committee on Medical Terminology Appointed by the China Medical Missionary Association: Terms in Anatomy, Histology, Physiology, Pharmacology, Pharmacy* (1901)

系統にかかわる器官に対して、部首「血」を添えた、「𦘒」「𦘓」を造字して「心室」「毛細管」を表し、廃用された漢字「𦘔」「𦘕」「𦘖」を採用して「心房」「動脈」「静脈」を表していたが、このような新造語（字）は、『高氏医学辞彙 増訂第8版』（1937）ですべて排除され、代わりに日本語訳の医学用語を採用したと述べている。博医会の造字の失敗について、漢字の発展方向に向いていないと解釈している。

温（2011）は、清末民初にかけて、中国の専門用語（中国語では、「科学名詞」と呼ばれる）の統一事業に関して、その内容や意義について概説している。また、事業に参加した代表的な組織を紹介し、具体的に行われていた作業を整理し、各組織が専門用語の統一事業において収めた成果および問題点などについて述べている。その中で、医学用語の統一に貢献をした代表的な公的組織、医学名詞審査会および科学名詞審査会⁴⁰、国立編訳館⁴¹が医学用語の翻訳における基準、成果、問題点などを説明し、それらが翻訳出版した書物を表にまとめている（2011:306、309-314）。表3は、医学に関する出版物の詳細を抽出し、まとめたものである。

また、温（2011:278）は、専門用語の日本の訳語の扱いに関して、民国の翻訳組織は、日本の訳語をすべて否定せず、一部吸収する態度をとっており、このような方法は、専門用語の翻訳の統一に有利であったと述べている。表3でも確認できるように、1940年代以前の書物は、大抵「日語」「日訳」（日本語・日本語訳）が収録されているため、日本の訳語はある程度参考にしたと思われる。

なお、現代中国における医学用語の統一・標準化作業は、医学名詞審定委員会（1986年成立）が担当しており、1989年から2002年にかけて7冊の『医学名詞』を出版している。

⁴⁰ 医学名詞審査会と科学名詞審査会をあわせて「兩個審査会（二つの審査会）」と呼ばれる（温 2011: 12）。

⁴¹ 1928年に、南京政府が設立した大学院訳名統一委員会が科学名詞審査会の仕事を継いだ。後に、1932年に成立した国立編訳館が、専門用語の統一事業を担い、審査委員を組んだ（温 2011: 7）。

表3 「二つの審査会」と国立編訳館が翻訳出版した医学書物

書名（出版年）	見出し語数	用語選定のための項目	編集者もしくは審査委員
『解剖学名詞彙編』（1927）	4839	ラテン語、ドイツ語、英語、日本語、旧訳名、参考名、決定名	鄒恩潤 高鏡朗
『医学名詞彙編』（1931）	15000余	古文名、英語、ドイツ語、日本語、参考、決定	魯德馨
『薬学名詞』（1933（1932 公開））	1800余	ラテン語、ドイツ語、英語、日本語、旧訳名、決定名	於達望(主任委員)、朱恒璧ほか
『細菌学免疫学名詞』（1937（1934 公開））	2068	ドイツ語、英語、フランス語、日本語、決定名	趙士卿(主任委員)、伍連徳ほか
『精神病理学名詞』（1940（1935 公開））	1173	ドイツ語、英語、フランス語、日本語、決定名	盧于道、谷鏡汧ほか
『比較解剖学名詞』（1948（1937 公開））	6013	英語、古語、日本語、決定名	秉志(主任委員)、伍献文ほか
『普通心理学名詞』（1939（1937 公開））		英語、決定名	汪敬熙、唐鉞ほか
『人体解剖学名詞』（1947（1943 公開））	5760	ラテン古語、ラテン新語、旧訳名、決定名	魯德馨(主任委員)、王子玠ほか
『病理学名詞』（第一冊）（1948（1944 公開））	7349	ラテン語、ドイツ語、英語、決定名	趙士卿(主任委員)、丁文淵ほか

一方、日本に関しては、中国ほど体系的に医学用語の統一事業に関してまとめた研究はないが、澤井（2012）は、明治末期から昭和初期における医学用語の混乱⁴²とそれに関する対策、医学用語辞典の出版、「医学用語を選ぶ方針」（国語愛護同盟）の策定、『医学用語集第一次選定』（1944 医学用語整理委員会）などについて述べている。

また、澤井・坂井（2010）は、昭和初期の解剖学用語の選定に絞って、それにかかわった組織（国語愛護同盟、国語協会、医学用語整理委員会など）を紹介しながら、彼らが国語運動の高まりを背景に、漢字簡略化（当用漢字表に対応する）や用語の統一を推し進めたことを論じている。

現代日本の医学用語の標準化については、香川（1997）が、『医学用語標準化の調査研究』報告書（日本医学会用語管理委員会 1996）が発表されたことをきっかけに、一般社会で用いられる医学用語が正規の学術用語に取り入れられようになったことについて、「医学の専門概念の表現媒体としての医学用語が、情報化、国際化、高齢化に対応して変革期に入ったためである」と評価し、報告書をめぐって、一般社会向けの医学用語を規定する

⁴² 例えば、当時頸部の甲状腺の近傍にある内分泌器官の名称は、「副甲状腺」「上皮小体」「上皮体」などがあった。（澤井 2012:334）

ために注意すべき問題点を論じている。

開原（2010）は、この標準化の問題点として、用語が指示する概念自体の標準化が困難であること、同義語が多数存在していること、表記の揺れ（漢字とかなの使用上のゆれ、漢字の略体字、異体字の使用のゆれなど）があること、医学用語の「読み」のこと、などの問題点を指摘しており、これらの問題を解決していくには、日本医学会専門家のみならず、一般社会とも意見を交換していくことが必須であることを述べている。

日本医学会医学用語管理委員会⁴³は、継続的に現代日本医学用語の標準化作業を行っており、1975年に『医学用語辞典 第1版』を出版してから現在までに3版を改訂出版している。同辞典の凡例およびによって、各時代における選定方針が確認される。ほかに、日本医学会は、文部科学省と共編して、『学術用語集医学編』（2003）を出版している。日本医学会の編集する用語辞典と異なるのは、「医学用語の標準化と普及を図るため、一般社会の方々を対象として基本的な用語を採録した。新聞等で使われる医学用語、他の学会でも使われる医学用語、法令などで使われる医学用語の3つの種類の用語を含む。」という点にある⁴⁴。

西嶋（2014）は、「楔」という漢字の読み、及び「楔」を含む用語の変遷について考察を行っている。「楔」という字を医学分野で最初に用いたのは、日本であり、『重訂解体新書』がその始まりであると指摘し、読みは、「ケツ」が最も多く、「カツ」、「ケイ」の読みもあったが、読みの明らかでないものが多く、教育や臨床の現場でどの読みが優勢であったかは断定できないと述べている。また、「楔」が入っている漢語（楔状、楔状骨、楔状切除、楔入、楔入圧、楔入胎盤など）における「楔」の読みを規定するさまざまな医学用語集の方針の変遷を述べ、「楔」という字の読みの標準化はまだ道半ばであることを示している。

2.4 本論文の位置付け

2.1 では、日本医学用語について、次の4つに分類した。

①中国伝統医学用語

②蘭方医学用語

⁴³ 澤井・坂井（2010）にある医学用語整理委員会の後継。前述に言及した開原は、日本医学会医学用語管理委員会委員長に務めていた。

⁴⁴ 『学術用語集医学編』の紹介 <https://www.jsrm.or.jp/dic/terminology/technicalterm.html>

③近代西洋医学翻訳語

④現代の医学用語

本論文は、以下、②蘭方医学用語と③近代西洋医学翻訳語（つまり近代和製医学用語）に主眼を置いて、各論で考察を行う。②では、「結石」、「痙攣」を例に、③では、「貧血」、「心臓病」を例に取り上げ、その成立過程・理由を究明し、普及・定着した軌跡を確認し、中国への移入ルートや受容・定着の時期を明らかにしていく。

なお、これまでの日中語彙交流視点からなされた医学用語の研究には、解剖学に関する用語が多かったため、本論文では、それ以外のカテゴリーのものを選択した。日本医学会が出版した『医学用語辞典』の付表「MeSH (Medical Subject Headings) のカテゴリー」では、収録された医学用語が 16 種のカテゴリー⁴⁵に収められているが、本論文の研究対象となる「結石」、「痙攣」、「貧血」、「心臓病」は、このカテゴリーによると、すべて「C 疾患」に分類される。具体的な分類は、表 4 の通りである。

表 4 「MeSH のカテゴリー」における「結石」「痙攣」「貧血」「心臓病」の分類

本論文の研究対象となる 医学用語	本論文の分類	MeSH のカテゴリー
結石	蘭方医学用語	C23病理学的状態, 症状, 徴候
痙攣	蘭方医学用語	C10神経系疾患; C23病理学的状態, 症状, 徴候
貧血	近代西洋医学翻訳語	C15血液疾患とリンパ疾患
心臓病	近代西洋医学翻訳語	C14心臓血管疾患

【第 2 章の参考文献】

青木歳幸（2013）「種痘法普及にみる在来知」『研究紀要』7, 1-21 佐賀大学地域学歴史文化
研究センター

阿知波五郎（1982）『近代日本の医学—西欧医学受容の軌跡—』思文閣

⁴⁵ 16 種類のカテゴリーは、「A 解剖学、B 生物、C 疾患、D 化学物質および薬物、E 分析、診断、治療の技術と機器、F 精神医学および心理学、G 現象と過程、H 学問分野と専門分野、I 人類学、教育、社会学、社会現象、J 工業技術、産業、農業、K 人文科学、L 情報科学、M 人間集団、N 保健医療サービス、V 出版特性、Z 地理的位置」である。

- 伊藤隆太（1975）「臨床薬理用語統一に当たって、医学用語全般からみて注意すべき点と問題点」『臨床薬理』6-4, 277-282 日本臨床薬理学会
- 医療秘書教育全国協議会編（1998）『医学用語』建帛社
- 逢見憲一（2019）「臨床医学教育における医師と医学の原像と「執拗低音」「ドイツ医学」と「アメリカ医学」の変容に関する一試論」坂井建雄編『医学教育の歴史—古今と東西—』435-481 法政大学出版局
- 王敏東（2006）「医学名詞“結核”小考」『語文建設通信』83, 49-52 香港中国語文学会
- 王揚宗（1996）「『格致彙編』与西方近代科技知識在清末的伝播」『中国科技史雑誌』17-1, 36-47 中国科学技術史学会
- 温昌斌（2011）『民国科技訳名統一工作实践与理論』商務印書館
- 開原成允（2010）「医学用語の現状と課題」『日本語学』29-15, 14-24 明治書院
- 香川靖雄（1997）「医学の専門用語の問題点」『日本語学』16-2, 50-59 明治書院
- 夏晶（2012）「晚清科技術語的翻訳」博士学位論文 武漢大学
- 高晞（2008）「解剖学中文訳名の由来と確定—以德貞『全体通考』為中心」『歴史研究』2008-6, 80-191 復旦大学
- 国立国語研究所「病院の言葉」委員会（2009）『病院の言葉を分かりやすく—工夫の提案—』勁草書房
- 坂井建雄（2020）『医学全史：西洋から東洋・日本まで』筑摩書房
- 笹原宏之（2007）『国字の位相と展開』三省堂
- 佐藤亨（1980）『近世語彙の歴史的研究』桜楓社
- 澤井直・坂井建雄（2010）「昭和初期解剖学用語の改良と国語運動」『日本医史学雑誌』56-1, 39-52 日本医史学会
- 澤井直（2012）「医学教育における医学用語—用語の浸透と統一を中心に—」坂井建雄編『日本医学教育史』323-334 東北大学出版会
- 芝哲夫（2008）「緒方洪庵の医学用語」『適塾』41, 62-65 大阪大学
- 舒志田（2020）「『医学原始』の語彙について—日本の洋学への影響を中心に—」『或問』38, 39-54 関西大学
- ジョン・C・キャンベル、池上直己、津川友介「日本の医療制度の政治的・歴史的背景」池上直己編『包括的で持続的な発展のためのユニバーサル・ヘルス・カバレッジ：日本からの教訓』31-45 日本国際交流センター

- 沈国威（1996）「近代における漢字學術用語の生成と交流—医学用語編（1）」『文林』30,59-94 神戸松蔭女子学院大学
- 沈国威（1997）「近代における漢字學術用語の生成と交流—医学用語編（2）」『文林』31,1-18 神戸松蔭女子学院大学
- 沈国威（2010）「西方新概念の容受与造新字為訳詞—以日本蘭学家与来華宣教士為例—」『浙江大学学报』40-1,121-134 浙江大学
- 鄒振環（2011）「丁福保与『丁氏医学叢書』」『東方翻譯』2011-6,37-46 復旦大学歴史系
- 杉本つとむ（1991）『国語学と蘭語学』武蔵野書院
- 孫琢（2010）「近代医学述語的創立—以合信及其『医学英華字积』為中心」『自然科学史研究』2010年-4, 456-474 中国科学院自然科学史研究所
- 成明珍（2015）「日中韓三国の専門用語における語彙・文字に関する研究—医学・化学分野の漢字・漢語を中心に—」博士学位論文 早稲田大学
- 高野繁男（1984）「『明治期・医学用語の基本語基と語構成』—『医語類聚』の訳語」『人文学研究所報』18,3-19 神奈川大学人文学研究所
- 張大慶（1994）「早期医学名詞統一工作博医会的努力和影響」『中華医史雜誌』24-1, 15-19
- 張大慶（2006）『中国近代疾病社会史』山東教育出版社
- 張大慶（2001）「高似蘭—医学名詞翻譯標準化的推動者」『中国科学史料』22-4, 324-330 中国科学技术史学会・中国科学院自然科学史研究所
- 陳力衛（2016）「なぜ日本語の「気管支炎」から中国語の“支気管炎”へ変わったのか」『日中語彙研究』6, 1-25 愛知大学中日大辞典編纂所
- 鄧鉄涛・程芝范（2000）『中国医学通史』人民衛生出版社
- 八耳俊文（1996）「幕末明治初期に渡来した自然神学的自然観—ホブソン『博物新編』を中心に—」『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』4, 127-140 青山学院女子短期大学
- 西嶋佑太郎（2020）「医学用語の漢字漢語の研究」『学会通信 漢字之窗』2-2, 42-43 日本漢字学会
- 西嶋佑太郎（2014）「日本語医学用語の読みの多様性と標準化—「楔」字を例に—」『漢字文化研究』5, 57-56 日本漢字能力検定協会
- 日本医学会医学用語管理委員会（2008）「医学用語の標準化をめざして—」『日本医学会医学

用語辞典（英和）』第3版の編集方針一』『医療情報学』27-5, 451-460 日本医療情報学会

橋本鉦市（1994）「第1章 医師集団と非学歴層（第二部 学習者の世界，近代化過程における遠隔教育の初期的形態に関する研究）」『研究報告』67, 157-184 放送大学

松本秀士（2008）「動脈・静脈の概念の初期的流入に関する日中比較研究」『或問』14, 59-80 関西大学

松本秀士（2009a）「西医東漸をめぐる「筋」の概念と解剖学用語の変遷」『或問』17, 49-61 関西大学

松本秀士（2009b）「「神経」と東西身体思想の諸相—近代中国における医療宣教師創出の訳語をめぐって」『語彙研究』7, 56-65 名古屋：語彙研究会

松本秀士（2010）「『新靈枢』が伝えた日本経由の西洋解剖学とその用語」『或問』18, 73-84 関西大学

羅婉薇（2004）「炎(Inflammation) 的歴史」『語文建設通信』79, 42-45 香港中国語文学会

第3章 「結石」

3.1 はじめに

中国伝統医学では、体内の管腔中に石状のものができる病気を「淋」、「石淋」など、「淋」を含む語を用いて表している。そして長い間、日本では上記の中国医学用語を借用していた。それが、日本で「結石」という言葉がつくられてから、代わりにその病気を表すようになっていく。そして、現代日本語では、「淋」を含む用語は何らかの経緯で、「淋疾」、「淋病」のみが残った。

この章では、先行研究を踏まえ、近代医学用語「結石」という語の成立について、それが日本で生まれ、受容された経緯を解明する。また、この語がいつごろ中国へ伝わり、どのように中国語に受容されたのかについても明らかにする。合わせて、日本における「淋疾」と「淋病」の関係をいささかなりとも明らかにしたい。

3.2 「結石」とは

まず、「結石」はどのような病気なのか、百科事典や国語辞書を用いて把握してみよう。『日本大百科全書』(01)と『日本国語大辞典 第2版』(以下『日国』と略す)(02)では、それぞれ以下のように解説している。

(01)【結石】

人体内に生じた異常な石のことで、分泌腺腔(せんくう)、排泄(はいせつ)管、中空の臓器内などにできる。分泌液や消化液中の成分が一定の化学的・物理的原因によって濃縮、凝固したり、尿中成分が析出、結晶化する結果、生ずる。外から入った異物や炎症性産物(細菌や脱落上皮)が結石の核になることもある。

- (1) 結石が生じた部位名をつけてよばれるもの 腎臓(じんぞう) 結石、尿管結石、膀胱(ぼうこう) 結石、前立腺結石、尿道結石、精嚢腺(せいのうせん) 結石、唾石(だせき)、胃石、胆石、総胆管結石、脾(すい)石、腸石、涙(るい)石、歯(し)石。

(2) 成分名をつけてよぶもの シュウ酸カルシウム結石、尿酸結石、シスチン結石、リン酸マグネシウムアンモニウム結石、コレステロール結石、ビリルビン結石、キサンチン結石、糞（ふん）石。

(3) 形状名をつけてよぶもの さんご状結石、鹿角（ろっかく）状結石、桑実（そうじつ）状結石、軟結石など。

結石ができていても、症状がないこと（サイレントストーン）もある。分泌腺の排泄管や尿路に生じた結石は、多くの場合、閉塞（へいそく）をおこすので、仙痛発作といわれる激痛（平滑筋のけいれんに由来する）や発熱をきたす。細菌感染を合併したり、疼痛（とうつう）発作を繰り返すような場合は、外科的治療によって結石を除去しなければならない。

[松下一男]

(02)【結石】 [名]

体内の管腔中にできた石状のもの。多く胆嚢内にできる胆石、腎臓または尿路内にできる腎結石、尿管結石、膀胱結石など。原因としては諸説があるがいまだ一定しない。

これらをまとめると、「結石」は、体内の管腔中にできた石状のもので、泌尿器または胆嚢、胆管に多く結成する。これ以外に、Google で検索すると、「歯髓結石」、「扁桃結石」などの複合語もある。

3.3 「結石」と関連する言葉

3.3.1 「結石」が生まれる以前の言い方―「淋」

ここでは、「結石」が生まれる以前、代表的な言い方とされる「淋」とその周辺について述べる。

『漢語大詞典』（1986-1993）によると、「淋」という字は、中国語では一般的に「lín」と発音し、「水などがしたたる」ことを意味する。しかし、病気として用いる場合は、「lìn」と発音し、「患者の尿道に炎症が起こり、小便に血が混じる」という病気

を表す¹。語釈には、「淋、また「痲」と作る²」ともある。『漢語大詞典』では、「痲」については、以下のように記述している。（括弧内は筆者による日本語訳）

(03) 【痲】

同“淋”。古人対石淋、勞淋、血淋、氣淋、膏淋病的通称。其症状是小便頻数而澁，有痛感。（「淋」に同じ。古人の「石淋」、「勞淋」、「血淋」、「氣淋」、「膏淋」の病気に対する通称。その症状は、小便の回数が多く、小便が通じず、痛みがある。）

「淋」は、『黄帝内経』の『素問・六元正紀大論』で初めて病名とされている。

(04) 小便黄赤、甚則淋。³（小便黄赤にして、甚だしくは則ち淋なり。）

『素問・六元正紀大論』

また、東漢の張仲景が書いた『金匱要略』に「淋」の病状について具体的に述べられている。

(05) 淋之為病、小便如粟状、小腹弦急、痛引臍中。（淋の病たるは、小便泡の如き状、小腹弦急にして、痛みは臍中に引く。）

『金匱要略・消渴小便利淋病脈証并治』

その後、隋の巢元方が編纂した『諸病源候論・淋病諸候』では、「淋」を症状によって「石淋、勞淋、氣淋、血淋、膏淋、寒淋、熱淋」という 7 種に分けている。唐の孫思邈が著した『備急千金要方』では、「石淋、氣淋、膏淋、勞淋、熱淋」を取り上げ、「五淋」という概念がはじめて現れた。そして同じ時代の王燾が書いた『外台秘要・諸淋方三十五首』では、上記の 5 種の淋を総称して「五淋」³と名づけた。

¹ 淋：lin 病名。患者尿道發炎，小便雜有濃血。（『漢語大詞典』による）

² 淋，亦作痲。（『漢語大詞典』による）

³ 中国における現代臨床では、まだ「五淋」という語を使っているが、医書によって、五淋は、「冷淋、熱淋、膏淋、血淋、石淋」（宋の『三因極一病症方論』）、「石淋、氣淋、膏淋、勞淋、血淋」（清の『医部全録』）でもある。

ここで、「石淋」についてももう少し検討してみよう。『外台秘要・石淋方一十六首』では、「石淋」のことを以下のように解説している。

(06) 病源石淋者、淋而出石也。腎主水、水結則化為石、故腎客砂石。(病源石淋たるは、淋にして、石を出すなり。腎は水を主^{つかさど}り、水は結びて則ち化して石を為す、故に腎、砂石を客^{おさ}す。)

『外台秘要・石淋方一十六首』

これを 3.2 の「結石」の解説と対照すると、「石淋」が「結石」に最も近い病気であることがわかる。

日本の『古事類苑』では、「石淋」の最初の用例を『太平記』から取り上げている。つまり、日本においては、「石淋」は 1300 年代ごろにすでに使われていることがわかる。また、室町時代に盛んに利用されていたといわれる国語辞書『下学集』にも収録されている。以下にその二例を挙げる。

(07) 斯りける処に、呉王夫差俄に石淋^{セキリン}と云病を受て、身心鎮^{とこしなへ}に悩乱し

『太平記四・備後三郎高德事』14C 後

(08) 石淋 小便澁也

『下学集』1444

以上の考察をまとめると、「淋」は、最初腎臓や尿道に生じる病気の総称をさしたが、隋唐の医家が、具体的な病状によって、「石淋、気淋、膏淋、勞淋、熱淋」に分けるようになった。そのうちの「石淋」が「結石」に最も関連性が高いといえる。

3.3.2 日中における「淋疾」と「淋病」の違い

3.3.2.1 日本語における「淋疾」と「淋病」の意味変遷

3.3.1 で言及した「淋」を含む用語は、現代中国伝統医学でまだ使われている。それに対して、現代日本語ではほとんどそれらは見られない。たとえば、『日国』を調べたところ、「石淋」以外の語はまったく立項されていないことがわかった。

ところで、『日国』では、「淋病」と「淋疾」が立項されている。表 1 に「淋病」と「淋疾」の解説と用例をまとめて示す。

『日国』における「淋病」と「淋疾」の解説を見る限り、この 2 語は類義語ということがわかり、3.3.1 で検討した「淋」や「五淋」と違う病気をさすと言える。しかし、「淋病」で取り上げている『言継卿記』の例では、「五淋散」に触れているため、この「淋病」は「五淋」のことを指すのではないかと疑える。

表 1 『日国』における「淋病」と「淋疾」の解説と用例

語	【淋病・淋病】	【淋疾・淋疾】
解説	淋菌を持った者との性交による感染で発病する代表的性病。尿道、子宮、眼球などの粘膜がおかされる。しばゆばり。トリッペル。淋疾。	「りんびょう（淋病）」に同じ。
用例	<ul style="list-style-type: none"> * 撮壤集〔1454〕「淋病 リンびやう」 * 言継卿記 - 永祿一二年〔1569〕六月四日「五郎左衛門淋病之薬五淋散十一包可被与之由申遣之」 * 評判記・けしずみ〔1677〕「かはゆきもの〈略〉女のげかんりんびやうをいとはずさせたるとき」 * 洒落本・禁現大福帳〔1755〕一「大切は延紙逆手に持ときゞり悪して淋病（リンビャウ）の種ならん」 * 滑稽本・風来六部集〔1780〕痿陰隠逸伝「山林に痿てしたきを堪る時は必ず淋病（リンビャウ）となりて」 	<ul style="list-style-type: none"> * 武徳編年集成〔1740〕五一・慶長一〇年正月中旬「神君駿府迄御到着有、淋疾故、暫く爰に御逗留と云々」 * 雑俳・幸々評万句合 - 安永二〔1773〕頌「りんしつにこまりますよと切落し」りん - びょう〔…ビャウ〕

中国語では、「淋病」は、『諸病源候論』の章名に「淋病諸候」としてはじめて出現している。そして、「淋疾」は、『本草綱目』で「五種淋疾」、「淋疾者」などと多用されている。いずれも総称のような意味でつくられた二字漢語と考える。ここで、あらためて『日国』の「淋病」と「淋疾」の用例を見ると、性病をさすか、腎臓の病気をさすか、判断しにくい。この問題を考えるにあたって、文献を調べたところ、「淋病」に関する文献は見当たらなかったが、「淋疾」に関する解説が一件見つかった。以下に、富士川游（1974: 187）『日本医学史綱要』の第九章疾病史に収録されている「膿淋（淋疾）」の解説を挙げる。

(09) …西洋の歴史におけるに同じく、淋疾は、黴毒の発見に後れて、江戸時代に至りて始めて現れしものと思わる。香川修庵の『一本堂行餘医言』に、「「膿淋」、世総称「淋疾」、非也。審視^下当時患「膿淋」者^上、皆是下疳瘡也」とあり。これ正に、尿利渋痛を主徴とする淋疾の中より膿淋を別し、これを五淋の外に置いて、伝染性生殖器病に属せしめたるなり。

上記の富士川の解説によると、以前は、伝染性生殖器病と腎臓や尿道の病気を違う病気として認識していなかったようで、総称して「淋疾」といていた。それが『一本堂行餘医言』（1788）の解釈によつてはじめて、2つの病気をはっきりわけようになった。したがって、「淋疾」は江戸時代から「性病」を意味するようになったといえる。そして、「淋病」という語は「淋疾」の影響を受けて意味が変化したのかもしれない。

3.3.2.2 中国語における「淋疾」「淋病」の使用

『現代漢語詞典 第7版』（2016）で「淋疾」、「淋病」の立項状況を調査してみると、「淋疾」は立項されておらず、「淋病」は立項されている。その語釈は以下のとおりである。

(10) 【淋病】

性病的一種、病原体是淋球菌、主要發生在尿道和生殖系統。患者尿道發炎、排尿疼痛、尿道內帶有膿性分泌物。（性病的一種で、病源は淋菌。主に尿道と生殖系統に発生する。患者は尿道に炎症を生じ、排尿に痛みがあり、尿道内に膿性分泌物を伴う。）

『現代漢語詞典 第7版』2016

語釈からわかるように、現代中国語における「淋病」は、現代日本語と同じような意味に用いられている。

次に、中国語の使用例の調査にあたって、北京大学中国語言学研究中心（Center for Chinese Linguistics PKU。以下、CCLと略す）のコーパスを用いることにする。まず「淋疾」を調べた結果、1例しか見つからなかった。その唯一の用例は、現代とかなり距離が離れている北宋の『東軒筆録』からのものである。

(11) 王文康公苦淋，百療不瘥，洎為樞密副使，疾頓除，及罷，而疾復作。或戲之曰：

“欲治淋疾，惟用一味樞密副使，仍須常服，始得不發。”（王文康公、淋に苦み、百療瘥えず、樞密副使に為るに洎んで、疾頓に除かれ、罷むるに及びて、疾復た作る。或るひと、之に戯れて曰く、「淋疾」を治さんと欲せば、惟だ一味の樞密副使を用い、仍お常に服するを須いれば、始めて発らざるを得ん。）

魏泰『東軒筆錄』北宋

また、「淋病」を調べたところ、151 例が見つかった。ここで年代の古い用例を見てみる。

(12) 誰知第二日回来，就害了一場淋病。第三日生殖器上更起了几个黄泡，其痛異常。跑到神田医院去診，他說也是梅毒的一種，在中国叫作什麼便毒。（二日目に帰ってくると、思いがけず、淋病にかかってしまっていた。三日目に生殖器にくっかの黄色いできものができて、その痛みは異常であった。急いで神田病院に行ってみてもらったら、梅毒の一種だと言われた。中国では何とか便毒と言われるものだ。）

不肖生『留東外史』1916

(13) 指着羅福罵道：“短命鬼，短命鬼，老子明日害了淋病，就找你。”（羅福を指して罵って言った。くたばっちまえ。俺様がもし淋病にかかったら、おまえのせいだぞ。）

不肖生『留東外史』1916

(12)、(13) は、中国最初の留学生小説といわれる『留東外史』のものである。これは CCL において最も古い用例になる。上記の 2 例をあわせて、『留東外史』の「淋病」の用例は全部で 7 例ある。(12) では、「淋病」は「梅毒」の一種と述べられていることから、『留東外史』に書かれている「淋病」はすでに性病をさしていることがわかる。この小説は、日本に留学している中国人の生活を内容とした小説なので、日本語の影響を受けた可能性が高いと推測する。

以上のことから、「淋疾」は、現代中国語ではほぼ使用しない言葉であるといえる。
また、「淋病」は現代中国語では、腎臓や尿道の病気という意味を捨て、性病の意味のみを表しているが、使用頻度は高くないようである。

3.4 「結石」の成立

3.4.1 「結石」の初出

初出を確認するために、あらためて『日国』における「結石」の記述をみてみよう。『日国』では下記の3つの例を挙げている。

(14) 内科撰要 (1792) 一五「賢 [ママ] 中の結石、膀胱の結石」

(15) 医語類聚 (1872) 〈奥山虎章〉「Lapis 結石」

(16) イタリアの歌 (1936) 〈川端康成〉「膀胱に結石が出来、それももう六年といふ持病だった」

『日国』の最初の用例は、『内科撰要』から取られている。この『内科撰要』は蘭医宇田川玄随が翻訳刊行した『西説内科撰要』のことをさす。本書は全十八巻で、宇田川玄随が一人の力で訳した日本最初の内科医書である。その原書は、オランダ人ゴルテル（我爾徳児 Johannes de Gorter）による『簡易治療術書』⁴である。『西説内科撰要』の出版年については種々の説があるが、宗田一の説によると、『西説内科撰要』の翻訳は寛政4年（1792）に終了し、巻一～三が寛政5年（1793）、巻四～六が寛政7年（1795）、巻七～九が寛政8年（1796）というふうに三巻ずつ刊行され、全十八巻の完成をみたのは1810年とされている⁵。

「早稲田大学図書館古典籍総合データベース」、「新日本古典籍総合データベース」、「京都大学貴重資料デジタルアーカイブ」などを調査したところでは、『西説内科撰要』の収録は多いものでも巻十五までしか収録されていなかったが、巻一の「総目」（図1）によると、「結石」を扱っているのは、「巻十六 病属尿道」の「結石腎痛篇第四十七」とある。

⁴ 原題は、*Gezuiverde geneeskunst, of kort onderwys der meeste inwendige ziekten: ten nutte van chirurgyns, die ter zee of velde dienende, of in andere mstandigheden, zig genoodzaakt vinden dusdanige ziekten te behandelen* で、1744年に出版された。（梶輝行（2019）「27.ゴルテルの蘭書」<http://ken-i-kai.org/homepage/index2019tenjikaisetu05.html>）

⁵ 大滝（1973:19）、宗田（1988:5）による。

(17) 又問フ何ヲ以テカ其痛腎中ノ結石ニ出ルコトヲ知ルヤ。

『増補重訂内科撰要』第三百三章「腎痛結石ニ因ルヲ論ス」

(18) Ten anderen, hoe men zal weten, dat de pijn in de nieren door een steentje⁷ wordt voortgebracht?

『簡易治療術書』第 268 章

(19) 故ニ天工若シ此液ヲ賦与スルニ非レハ每人必ス結石ノ患ニ罹ルヘシ。

『増補重訂内科撰要』第三百四章「腎痛結石ヲ生スル原由ヲ論ス」

(20) zouden alle menfechen een steenachtige⁸ tezamen groeijing krygen, gelyk men ziet dat byna in alle menfechen.

『簡易治療術書』第 269 章

ここで、「steen」というオランダ語について、同じ時代に出版された蘭和辞書である、寛政 8 年（1796）刊の『江戸ハルマ』（波留麻和解）と文化 7 年（1810）刊の『訳鍵』の記述を表 2 にまとめる。

表 2 に示したように、『江戸ハルマ』では、「steen」という語は一般の「石」を指すと思われる。しかし『江戸ハルマ』の簡略版とされる『訳鍵』では、逆に「steen」の項目の内容が増えていることがわかる。これは、一般向けの『江戸ハルマ』と違って、『訳鍵』の編集には、医学を重要視する思想が含まれているためと思われる。特に『訳鍵』の語釈では、3.3.1 で言及した「石淋」が現れていることで、「結石」との関連性がうかがえる。上記の辞書ではいずれも「結石」が見あたらないため、「結石」という語は宇田川玄随かその仲間たちが自ら新たに訳出した言葉であろうと考えられる。

⁷ 「steentje」は、「steen」に接尾辞「-tje」をつけた形である。川端（1996: 13）によると、「-tje」は「小さな」のような意味である。したがって、「steentje」は「小石」の意味としてとらえてよいだろう。

⁸ 「steenachtige」は、「steen」に接尾辞「-achtige」をつけた形である。川端（1996: 26）によると、「-achtige」は「～みたいな」という意味である。したがって、「steenachtige」は「石のようなもの」ととらえてよいだろう。

表 2 『江戸ハルマ』と『訳鍵』にみる「steen」の語釈

発行年	書名	steen
1796	『江戸ハルマ』	石
1810	『訳鍵』	石 石淋 八百弔

3.4.2 「結石」をつくった理由

表 2 で見たように、『訳鍵』における「steen」の訳語は「石淋」であるが、同じ辞書では「石淋」はまた「graveel」という語の訳語でもある。そして、「graveel」というオランダ語は、『増補重訂内科撰要』に以下のように現れている。

(21) 腎痛篇第五十一 羅甸名「ネピリチス」和蘭名「ガラヘール」

『増補重訂内科撰要』第五十一章

原書『簡易治療術書』で確認したところ、上記に片仮名で書いている「ガラヘール」は「graveel」のことをさす。ここで注目すべきところは、『増補重訂内科撰要』では、「graveel」を「腎痛」と訳していることである。

ここで蘭和辞書における「steen」と「graveel」を調査してみる。調査に使った蘭和辞書は、『長崎ハルマ』（道訳法児馬）とその増補版の『和蘭字彙』、『訳鍵』とその増補版の『増補改正訳鍵』で、語釈を表 3 と表 4 にまとめる。

表 3 と表 4 に示したように、『訳鍵』とその増補版『増補改正訳鍵』（以下、合わせて『訳鍵』系と略す）では、「steen」と「graveel」は類義語と言えるが、『長崎ハルマ』（道訳法児馬）とその増補版『和蘭字彙』（以下、合わせて『長崎ハルマ』系と略す）では、「graveel」は病名で、「steen」は「graveel」という病気を患うときに生ずる石、つまりその病気の症状をさすようである。

表3 『訳鍵』と『増補改正訳鍵』にみる「steen」と「graveel」の語釈

発行年	書名	steen	graveel
1810	『訳鍵』	石 石淋 八百 菱	石淋
1864	『増補改正訳鍵』	石 石淋 宝石 骰子 八百 菱	石淋 腎患

表4 『長崎ハルマ』と『和蘭字彙』にみる「steen」「graveel」の語釈

発行年	書名	steen	graveel
1833	『長崎ハルマ』	石 steen in de blaas ⁹ 石淋ノ石	石淋（を病んでいる）
1858	『和蘭字彙』	石 steen in de blaas 石淋ノ石	石淋又腎患

上に書いたように、宇田川玄随は「graveel」を「腎痛」と訳し、「steen」を「結石」と訳した。これは、『長崎ハルマ』系の編集者たちと同じようなとらえ方ではないと思われる。つまり、「steen」を「石淋」と訳さなかった理由は、「石淋」はそもそも病名で、その症状となる小石のことは新しい言葉―「結石」で表さないといけなかったからではないかと思う。

さらに、「石淋」という語は、もともと小石が自然に体の外に排泄されるようすを見て、その下っていくさまを「淋」と名づけたものである。それが、江戸時代の日本では、蘭医学の導入によって、外科が発達し、手術や解剖によって、具体的にどこにどのように石ができていたかが明らかになった¹⁰。要するに病理的な知識によって、この病気は、もともとの病状を表す名称だけでなく、病因も指すことができる名称に変更されたものと思われる。

では、なぜ「結石」という語をつくったのか、以下に『増補重訂内科撰要』の2つの記事を挙げ、詳しく説明してみる。

(22) 腎中若ハ其傍辺ニ著テ痛ヲ発ス或小石腎中ニ結成シテ痛ヲ発スル症。是ヲ腎痛ト名ク。

⁹ Blaas : 膀胱 (ギラッド・ソファール『1001+基本的なフレーズ 日本語 - オランダ語』(2014) による)

¹⁰ これまでの調査では、宇田川玄随が直接「結石」の手術を行った記事は見当たらなかったが、山田(1971: 88)には、華岡青洲が1800年代の初めごろに、「尿道結石」の手術を行ったことが書かれていることから、宇田川玄随の時代も「結石(石淋)」の手術は行われていたと思われる。

- (23) pyn ontrent of in de nieren voortbrengende, noemt men hetzowel Graveel, als die pyn,

『簡易治療術書』第 269 章

- (24) 日常小水ヲ泄シ貯ル器中ニハ日ヲ経ルニ從ヒ其周囲自ラ鹵石様ノ鹼渣ヲ結フナリ是ヲ小水ノ自性トス。然モ是每人差多少アリ。元来小水ノ通スル諸道ニハ天造自然ニ滑液アリテ周ク其裏面ニ塗布シ是ヲ以テ常ニ夫ノ鹵石様ノ鹼渣ノ結成スルヲ御クナリ。故ニ天工若シ此液ヲ賦与スルニ非レハ每人必ス結石ノ患ニ罹ルヘシ。

『増補重訂内科撰要』第三百四章「腎痛結石ヲ生スル原由ヲ論ス」

- (25) dat als men veelmalen in een zelfde vat watert, en het water, na dat het eenigen tyd gestaan heeft uitgiet, het vat rondom een steenige korst zal krygen, in den eenen mensch meer dan in den anderen. by aldien derhalven de natuur niet had bezorgt een slym in al de piswegen, waar door deeze aanhechting van steen-deelen belet wordt, zouden alle menschen een steenachtige te zamengroeijing krygen, gelyk men ziet dat byna in alle menschen

『簡易治療術書』第 270 章

下線の「結成する」、「結ぶ」は原書『簡易治療術書』の「voortbrengende」、「krygen」、「wordt」にあたるが、これらは、主に「生まれる」、「取得する」、「形成する」などの意味として使われているようである¹¹。では、なぜ『増補重訂内科撰要』では「結成する」、「結ぶ」と訳しているのか。

¹¹ オンラインオランダ辞書で調べたところ、「生まれる」「取得する」「形成する」などの意味が現れた。



図2 『本草綱目』石部 「消（硝）石」の解説

(国立国会図書館デジタルコレクション)

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2557943>

これは、明の李時珍の『本草綱目』を参考にしたと思われる。李時珍の『本草綱目』人部に「淋石」、「癖石」¹²があり、その説明に「結」が使われている。「淋石」には、「滾水結鹼鹵水」とあり、「癖石」には、「凝結成石」とある。「結石」という語は、ここから示唆を受けたのではないかと思われる。なお、ここから考えると、宇田川玄随の『内科撰要』の「結石」は、もともと「石淋」の代わりではなく、「淋石」の代わりであると思われる（「石淋」については、『本草綱目』に「茎内痛尿不能出、内引小腹膨脹急痛、尿下砂石、令人悶絶」とあり、こちらは、病症を表している）。

¹² 寛永刊本では、「淋石」の左ルビに、「イハ（バ）リヤマイノネリイシ」（尿病の練り石）とあり、「癖石」の左ルビに、「ムネノヤマイノカタマリイシ」（胸の病の固まり石）とある。

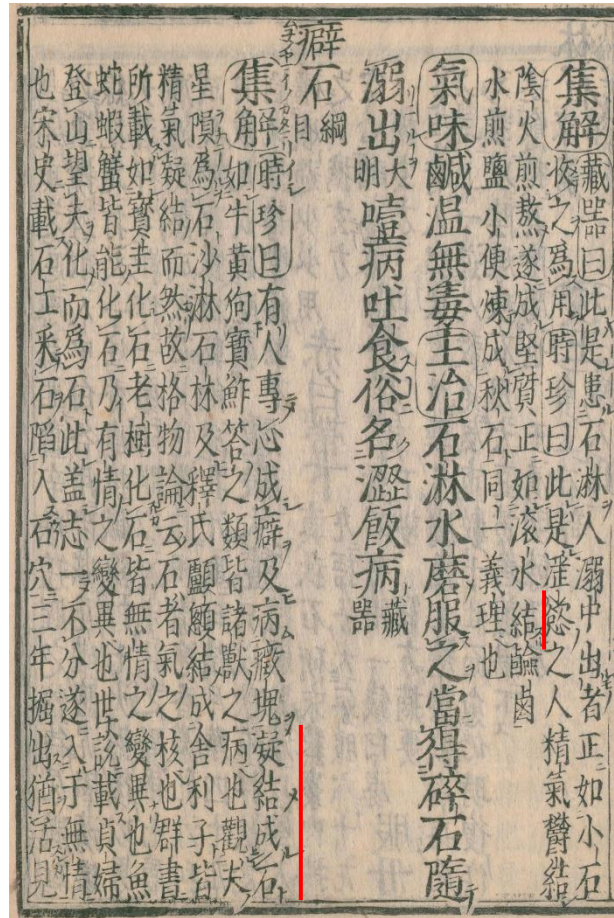


図3 『本草綱目』人部 「淋石」「癖石」の解説

(国立国会図書館デジタルコレクション)

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2557969>

3.4.3 「結石」の語構成

「結石」の語構成については、まず、野村（1988）の分類に従って分析を行いたい。野村（1988）は、漢語構造をなす字音形態素を次の6種に挙げている。

1. 語基

ア. 体言類語基〈N〉—客・駅・気・海・姿・員…

イ. 相言類語基〈A〉—急・新・独・異・強・幼…

ウ. 用言類語基〈V〉—接・帰・集・欠・始・飛…

エ. 副言類語基〈M〉—最・再・予・必・特・全…

2. 接辞

オ. 接頭辞—不便・非礼・未定・所見・可読・以前…

カ．接尾辞—法的・判然・躍如・美化・菓子・消却…

(野村 1988: 50)

続いて、上記の字音形態素の組み合わせによって、9つの漢語構造を分類している（一部省略）。

[1.補足]

①<N>+<A>：胃弱・性善・民主

②<A>+<N>：有害・無人・多才

③<N>+<V>：地震／肉食／前進

④<V>+<N>：降雨・積雪・落雷

⑤<V>+<N>：読書／登山／落馬

[2.修飾 (1)]

①<A>+<V>：博学・静観・細分

②<V>+<V>：競泳・代弁・歓談

③<M>+<V>：必要・皆勤・予感

④<M>+<A>：最高・至近・特大

[3.修飾 (2)]

①<A>+<N>：幼児・難題・悲劇

②<V>+<N>：祝日・支店・食器

③<N>+<N>：山脈・牛乳・雪原

[4.並列]

①<N>・<N>：道路・身体・状況

②<A>・<A>：温暖・堅固・永久

③<V>・<V>：増加・破壊・断絶

[5.対立]

①<N>↔<N>：天地・左右・父母

②<A>↔<A>：高低・遠近・繁簡

③<V>↔<V>：生死・去就・攻守

[6.重複]

①<□>=<□>：段々／黙々／近々

[7. 補助]

①<■>←<□>：不明／非常／未完

②<■>←<□>：所定／可能／奉納

③<□>→<■>：史的・全然・悪化

[8. 省略]

①<□>…<□>：経済・農協・教組

[9. 音借]

①<□>…<□>：葡萄・玻璃・瑪瑙

②<□>…<□>：砂利・時計・面倒

(野村 1988: 50-51)

「結石」という語は、「結ぶ」と「石」を組み合わせた「〈V〉 + 〈N〉」というパターンである。野村の分類では、「結石」は、「祝日」、「支店」、「産地」、「視点」などのように、〈V〉と〈N〉は、連体修飾関係をもつ「修飾構造」に当てはまる。

沈（1990）は、「V（述語）+N（目的語）」という構造を「装定関係」と定義しており、これは、野村の「3. 修飾〈V〉と〈N〉」にあたると考えられる。つまり、「結石」は、沈の観点から見ると、「定律」、「制服」、「結晶」（1990: 10）と同様に、「装定関係」である。

沈は、中国語における「V+N」は、少なくとも近代までは非統語的造語型と見られ、この型の生産性は低いと述べおり、現代中国語に「V+N」というかたちが現れたのは、日本語からの影響を示唆している。

なお、従来の中国語の漢語の構造について、劉月華・潘文娛・故韓（2001）『實用現代漢語語法』は、次の 6 種類に分類している（一部省略）。

1 並列複合詞 並列複合詞由兩個意義相同、相反或相對的語素并列在一起構成的。（「並列複合語」は、同じ意味、反対の意味、または反対の意味を持つ 2 つの形態素が並列されたものである。）

如“道路”、“人民”、“国家”、“声音”、“群众”…

2 偏正複合詞 組成偏正複合詞的兩個語素,前一個語素修飾或限制后一個語素,后者是中心成分。（「偏正複合語」を構成する 2 つの形態素のうち、前者は後

者を修飾・制限し、後者は中心部分である。)

如“手表”、“学校”、“家長”、“工人”、“電車”…

- 3 動補複合詞 動補複合詞是由一個動素或形素后面加上一個補語性語素構成的。(「動補複合詞」は、用言類語基または相言類語基に「補語」類語基が続く構成である。)

如“改善”、“改良”、“打倒”、“推翻”、“展開”…

- 4 動賓複合詞 動賓複合詞一般是由一個動素后跟一個与動詞語素具有動賓關係的名素構成的。(「動賓複合詞」は、一般的に用言類語基の後に、その語基と「ヲ格・ニ格關係」が持たれる体言類語基と構成するものである。)

如“主席”、“命令”、“司儀”、“司令”、“理事”…

- 5 主謂複合詞 主謂複合詞的兩個詞根語素的結構關係類似句法的主語和謂語的關係。(「主謂複合詞」の2つの形態素の關係は、文法上の主語と述語の統語的關係に類似する。)

如“年輕”、“心疼”、“地震”、“月蝕”、“霜降”…

- 6 複雜的複合詞 複合詞多由兩個語素組成,也有一些是由三個或三個以上的語素組成,稱為複雜的複合詞。(複合語は主に2つの形態素で構成されているが、3つ以上の形態素で構成されているものもあり、「複雜的複合語」と呼ばれる。)

如“小綱炮”、“小家庭”、“幼兒園”、“檢察官”、“養老金”、“降圧藥”…

(劉・潘・故 2011: 13-15)

劉・潘・故の分類を見ると、野村の「修飾構造」、沈の「裝定關係」は、「2 偏正複合詞」にあたると思われるが、ここに挙げられている例を見ると、「結石」のような「産出-結果」の關係のものは見られず、やはり、従来の中国語の漢語の構造に、「結石」があてはまる構造はないようである。

3.5 日本語における「結石」の普及

3.5.1 蘭学翻訳書にみる「結石」

「宇田川榛斎門下二傑」の1人である箕作阮甫は著書『外科必読』で、「截石淋法（「ルイトオトミア）」¹³について書いていて¹⁴、ここでは「石淋」を用いている。「宇田川榛斎門下二傑」のもう1人坪井信道は、『万病治準』（1836）の著者である。

玄真と信道から医学を学んだ緒方洪庵の著書『扶氏経験遺訓』（1857）¹⁵には、結石について図3のようにかなり詳しい記載がある。

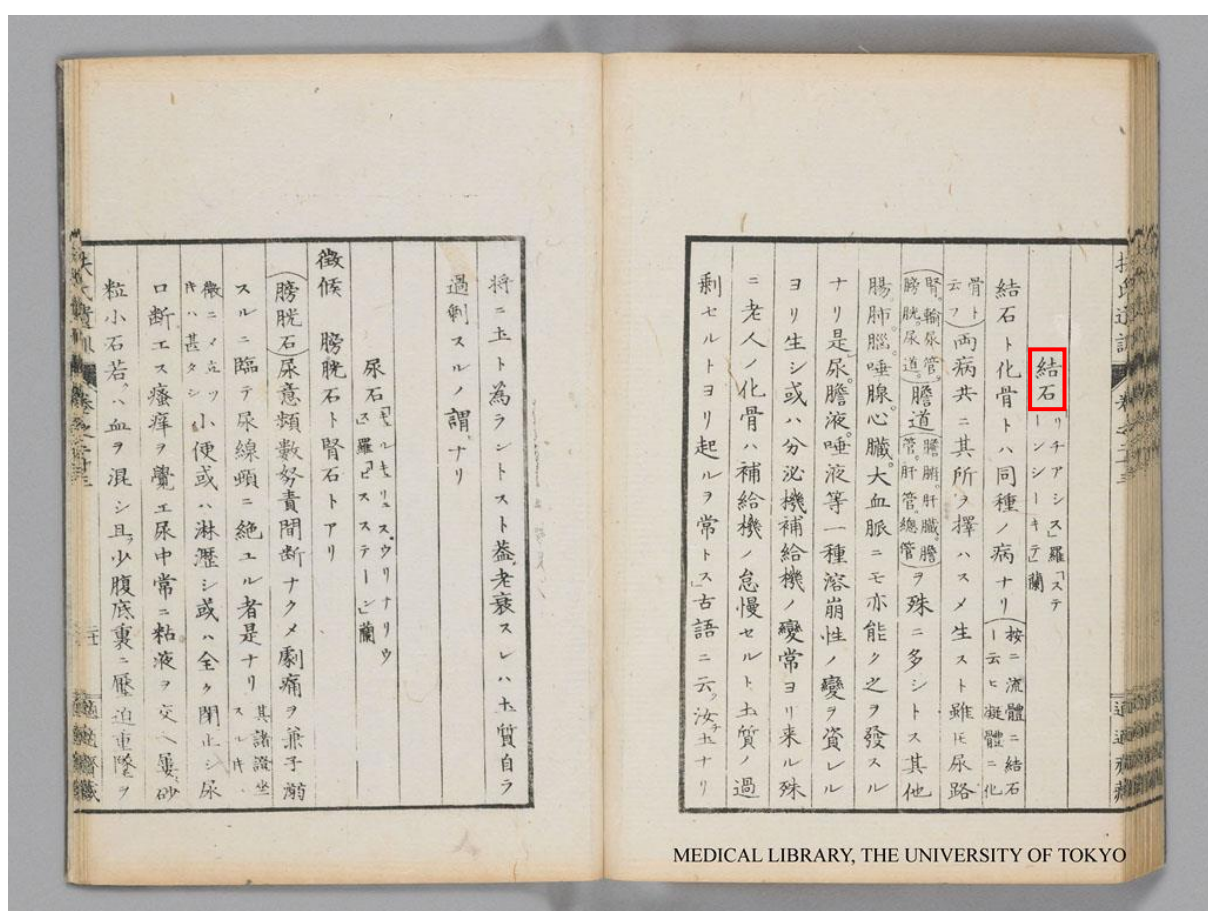


図3 『扶氏経験遺訓』巻之二十三 「結石」

（東京大学医学図書館 「医学図書館デジタル史料室」

http://www.lib.m.u-tokyo.ac.jp/digital/HR105_08/001.html）

¹³ 関場（1933: 421）による。

¹⁴ 同書はネットで公開されていないため、筆者は未見である。機会を待って、調査を行いたい。

¹⁵ 『扶氏経験遺訓』は、緒方洪庵がベルリン大学内科教授フーフランド（Christoph Wilhelm Hufeland）の『医学必携』（*Enchiridion Medicum Oder Anleitung Zur Medizinischen Praxis*, 1837）のオランダ語訳 *Enchiridion medicum: handleiding tot de geneeskundige praktijk*（1841）を重訳したものである。安政4年（1857）に刊行された。（浅井（2012:390）による）

『扶氏経験遺訓』卷之二十三には、「結石総論」という節があり、その中では、「尿石」と「胆石」について書かれており、「尿石」は、また「膀胱石」と「腎石」に分かれている。『扶氏経験遺訓』では、「結石」は以下のように解説されている。

(26) 結石 「リチアシス」羅 「ステーンシーキテ」蘭

結石ト化骨¹⁶トハ同種ノ病ナリ、両病共ニ其所ヲ択ハスシテ生スト雖モ尿路、胆道ヲ殊ニ多シトス。

『扶氏経験遺訓』卷之二十三 結石総論

『扶氏経験遺訓』の翻訳原本となる *Enchiridion medicum : handleiding tot de geneeskundige praktijk* で確認したところ、「リチアシス」と「ステーンシーキテ」は、ラテン語の「lithiasis」とオランダ語の「steenziekte」をさす。オランダ語「steenziekte」の中の「ziekte¹⁷」は、「病気」の意である。また、「結石」の解釈より、ここでの「結石」は病名をさすことがわかる。これは、『増補重訂内科撰要』における「結石」の意味用法と違う。

次に、「膀胱石」と「腎石」については、以下のように述べている。

(27) 「膀胱石」 小便或ハ全ク閉止シ尿口断エス搔痒ヲ覺エ尿中常ニ粘液ヲ交ヘ屡砂粒小石若ハ血ヲ混シ少腹底裏ニ圧迫重墜ヲ覺エ…

(28) 「腎石」 腎部ニ稽留痛若ハ往来痛ヲ発シ或ハ其部ニ圧迫ヲ覺エ時ニ結石疝¹⁸ヲ発シ尿中屡小石砂粒ヲ洩ラシ（其石大抵赤色ナリ）…

『扶氏経験遺訓』卷之二十三 結石総論

ここでは、「膀胱石」と「腎石」の症状について、「小石」、「砂粒」を用いている。翻訳原本を確認すると、それぞれオランダ語「steen」、「graveel」にあたる。つまり、『扶氏経

¹⁶ 化骨：生物の体内に石灰が沈着して、硬骨組織をつくること。（『日国』による）

¹⁷ ziekte は、一般に病気、疾患を表すオランダ語である。

¹⁸ 『扶氏経験遺訓』の解釈では、「結石疝 即チ結石病発作」とある。

『日国』では、「結石」は「steenziekte」の訳語であり、「steen」、「graveel」の訳語ではないことが明らかになった。

3.5.2 対訳辞書にみる「結石」

『日国』の「結石」の用例では、医学英和辞書『医語類聚』の例を取り上げている。調べたところ、この辞書では、(15)の「Lapis 結石」以外に、「calculus」という語を「石或結石病」と訳している。ここから、『医語類聚』を含め、対訳辞書における「結石」の収録状況を検討してみる。まず、参考として、*Cassell's English-Dutch, Dutch-English dictionary* (1960) で、「steen」、「graveel」に対応する英語を調べたところ、「steen」は、「stone」に対応していて、「graveel」は、「calculus」、「gravel」に対応することが確認できた。19世紀から20世紀中期にかけて出版された対訳辞書で、上記の3つの英単語と「結石（病）」を調査し、その結果を表5にまとめる。

筆者の調査の限りでは、『改正増補英和对訳袖珍辞書¹⁹』（1867）の見出し語「stone」に、はじめて「結石」が見える。これは、訳語を選択する際に蘭学書の影響を受けたためと思われる。その後、『和英語林集成 三版』以外に、医学辞書や和英辞書に収録されるようになった。上記の語釈によると、辞書における「結石」は、ただの「小石」や「砂」をさし、病気をさす場合は、後ろに「病」をつけて「lithiasis」の訳となっている。和独対訳辞書には、すべて「結石」が見られ、日本医学会の『医学用語集：第一次選定』にも収録されている。

¹⁹ 『英和对訳袖珍辞書』：英語書名は” *A Pocket Dictionary of the English and Japanese Language*.”。編集主任は堀達之助（1823-1894）、協力者に西周助（周）・千村五郎・竹原勇四郎・箕作貞一郎（麟祥）の名がその序文に見える。文久2年（1862）11月付けの堀達之助の英文による序文を付して幕府洋書調所から刊行された。…この書は、英蘭辞書である H. Picard『*A New Pocket Dictionary of the English-Dutch and Dutch-English Languages*』（第2版 1857年）を基に編集された。…『改正増補英和对訳袖珍辞書』（慶応2年（1866）江戸再版、開成所刊。堀越亀之助編、柳河春三・田中芳男らが協力）は当時の需要を補うため、若干の訂正を加えて1,000部刊行された。その翌年には、これをすべて木版刷りにした『改正増補英和对訳袖珍辞書』（慶応3〔1867〕年江戸再版、開成所刊）が刊行され、明治2年（1869）には、さらに版元を蔵田屋清右衛門に替えただけで出版された。明治2年（1869）には、1866年刊本を翻刻した『改正増補和訳英辞書』（*An English-Japanese Dictionary*）が薩摩の学生によって、上海の美華書院で印刷刊行された。これを俗に『薩摩辞書』と呼ぶ。（沖森卓也「堀達之助『英和对訳袖珍辞書』について」
http://library.rikkyo.ac.jp/digitallibrary/shuchinjisho/explain/explain_01.html）

表 5 対訳辞書にみる「結石」の関連の語

発行年	書名	stone	calculus	gravel
1867	『和英語林集成 初版』	Ishi; Seki. ... stone in the bladder, Sekirin.	Sekirin.	Jari; Kuri-ishi; Koishi; Sazare-ishi.
1862	『英和对訳袖珍辞書』	石、核心、腎臓、石淋		
1867	『改正増補英和对訳袖珍辞書』	石、核心、 <u>結石</u> 、石淋		
1872	『和英語林集成 再版』	Ishi; Seki. ... stone in the bladder, Sekirin.	Sekirin.	Jari; Kuri-ishi; Koishi; Sazare-ishi.
1873	『附音挿図 英和字彙』	石、 <u>結石</u> 、石淋	石淋	細石。石淋
1886	『和英語林集成 三版』	Ishi; Seki. ... stone in the bladder, Sekirin.	sekirin.	Jari; Kuri-ishi; Koishi; Sazare-ishi. (Med.) Sekirin Sharin.
1886	『独逸医学辞典』	stein 石、 <u>結石</u> 罌丸		
1899	『懷中和羅独英医語辞典』		<u>結石</u> lithos <u>結石病</u> lithiasis	
1900	『独羅英和医学字彙』	石、 <u>結石</u> ドイツ語 stein ラテン語 lapis, calculus, concretio 英語 stone, calculus, concretion	<u>結石</u> lapis	砂、礫 ドイツ語 gries ラテン語 sabulo, arena, lithiasis 英語 sand, gravel
1905	『医学新字典：独羅和訳』	stein <u>結石</u>	konkremnet <u>結石</u>	
1906	『羅独和訳医学字典』		(英語なし) lithia, lithiasis <u>結石</u> <u>病</u> lithos <u>結石</u> lapis <u>結石</u>	
1910	『和羅独英新医学辞典』		<u>結石</u> ラテン語 lithos ドイツ語 stein 英語 calculus	
1913	『日漢独羅病名対照辞典』		<u>Kessekihyō</u> 独 steinkrankheit. 羅 lithiasis	
1931	『研究社新和英大辞典』		<u>結石</u> a calculus <u>結石病</u> lithiasis	
1936	『標準医語辞典：独・羅・英・仏・和』	stein <u>結石</u> = calcucus.		
1949	『医学用語集：第一次選定』		石、 <u>結石</u> calculus, konkrement, stein, concretio	

3.5.3 書籍にみる「結石」

「国立国会図書館デジタルコレクション」で明治期における「結石」の使用を調査すると、翻訳書では、例えば、半井成質が訳した『外科拾要』（1873）に「婦人結石」、長谷川泰が訳した『眼科要論』（1880）に「結膜結石」、佐藤方朔が訳した『病理各論』（1880）に「腎結石」、「膀胱結石」などの小見出しが見られる。

また、1880 年以降、翻訳書以外にも、例えば、加藤寧蔭の『新撰方彙』（1880）に「膀胱結石」、菅沼只三郎の『獣医内科学摘要』（1886）に、目次に「尿結石」、「腎結石」、「輸尿管結石」などが見られる。

3.5.4 新聞・雑誌にみる「結石」

新聞での使用を見るため、読売新聞のデータベースである「ヨミダス歴史館」を使って、「明治・大正・昭和（1874～1989）」で「結石」を入力して検索してみたところ、62 件ヒットした。そのうち、明治期の用例は 5 例、大正期の用例は 2 例、昭和期の用例は残りの 55 例であった。（29）と（30）は早い年代の用例で、両方とも外国人医師が結石の手術をした記事である。

（29）一昨日東京府病院にてお雇ひ教師マンニング氏が入院患者の中村直次郎の膀胱より長さ一寸分幅一寸一分厚サ八分目方七勿五分余の^{けツせき}結石を採出されたので、同人は大きによくなったといふ

『読売新聞』1878.6.6 朝刊

（29）は『読売新聞』における「結石」の最初の記事である。また、（30）のように、「石淋」と「結石」が同じ記事で現れるものも見える。

（30）…源太郎は六ヶ年ほど以前より^{せきりん}石淋とかいう^{りんびやう}淋病を煩ひいろいろ療養に手を尽したが何分よくない所から…一昨日外科教師のマンニング氏が同人を診断の上陰囊と肛門の間の小便道を断ち割って^{けツせき}結石を引出されたが其石は長さ一寸三分にて…

『読売新聞』1879.11.22 朝刊

この用例から、明治中期でも「淋病」は、まだ腎臓、尿道の病気を表していることがわかる。また、ここでは、「石淋」は病名で「結石」は症状であることが確認できる。次の(31)、(32)、(33)では、「結石」の複合語を用いている。

(31) ビタミン A の不足が膀胱結石を起す

『読売新聞』1924.9.28 朝刊

(32) 尿管結石の診断、時々痛むが放置してもよいか。

『読売新聞』1953.6.29 朝刊

(33) 水中の衝撃波で、腎臓結石を砕く

『読売新聞』1985.7.2 朝刊

それ以外に、(34)、(35)のように、「結石」の後ろに「病」や「症」をつけて用いる例もある。

(34) 外相の病気経過良好、腎臓結石病再発。

『読売新聞』1930.9.5 朝刊

(35) 遺伝性の尿路結石症とは知らずに悩まされている人は多い。

『読売新聞』1985.5.8 朝刊

(31)、(32)では、「結石」は病気やその症状を表している。(33)は、物質としての結石を表すと考えられる。もちろん、(34)、(35)のように、後ろに「病」や「症」がついていると、病名であるとすぐに判別できるが、このような用例は、『読売新聞』では上記の2例しか見当たらなかった。

なお、『朝日新聞』における「結石」の使用は、『読売新聞』より遅い。『朝日新聞』における「結石」は、用例(36)のように、1886年12月2日の朝刊で初めて見られる。

(36) …近ごろ苦悩の益加は来りしにぞ遂に当鎮台病院に入りて治療を乞ひたるに
病院長堀内利国氏は直ちに診察して是はぼうくわうけつせき膀胱結石即ち俗に小石嚢といへるもの
中に物あり結びて石を成せしに由り…

『朝日新聞』「膀胱結石」1886.12.2 朝刊

次に、『日本語歴史コーパス』を用いて、「結石」を検索すると、雑誌『太陽』の 2 例しか見つからなかった。以下に示す。

(37) …間接に此臓器の位置等を知り得べし。其他腎石、胆石、膀胱結石等の生成せる場合には、理論的に云ふ時は、これをも見…

「リョントゲン光線の医学上に於ける実地的応用一斑」 1901

(38) …た様な方法で、新しい道を造ることも出来る。及胆石とか腎臓結石とか、或は盲腸炎等もこの外科的手術によつて容易に治癒すること…

「最近に於ける外科手術の発達」 1925

最後に、『中外医事新報』では、1883 年 6 月に発行された 79 号に、はじめて「結石病」という語が見られる。その後、「結石」か、「結石」を含む語は、頻繁に現れるようになった。

(39) 結石病 Lithiasis (lithos 石) ノ説

結石病 Lithopathie (lithos 石 pathos 病) トハ分泌液(胆液) 或ヒハ排泄液(尿液) ニ固形物ヲ析出スル疾病ニシテ殊ニ歐洲ニ多ク

『中外医事新報』 79 1883.6

3.5.5 文学作品にみる「結石」

『日国』では、「結石」の 3 番目の用例を文学作品から取り上げている。

(16) イタリアの歌 (1936) 〈川端康成〉「膀胱に結石が出来、それももう六年といふ持病だった。

そのほか、青空文庫で「結石」を検索すると、16 例が見つかった。そのうちのいくつかの例を以下に示す。

(40) 十二日から二十七日まで毎日注射をうけたこと、十四日にレントゲン写真腎臓結石とわかったこと、十八日には入浴を許可されたこと、…

宮本百合子『父の手帳』1937

(41) 私の母を苦しめたのは貧乏と私だけではないので、そのころは母に持病があつて膀胱結石といふもので時々夜となく昼となく呻り通してゐる。

坂口安吾『石の思ひ』1946

(42) 十一月、父が郷里の家で死去した。腎臓結石である。享年、数え年六十であった。私の二十六の時のことである。

外村繁『滯標』1960

文脈から分析すると、用例(40)の「腎臓結石」は症状をさしている。それに対して、用例(41)、(42)では、「膀胱結石」、「腎臓結石」は病気をさしていると考えられる。

「結石」は、新聞記事にせよ、文学作品にせよ、医学用語以外の意味用法では用いられていない。また、単独に使用している場合は、主に病気の症状—石そのものを指す。しかし、「腎臓結石」、「膀胱結石」、「胆嚢結石」などの複合語で用いる場合は、病気か症状か具体的に分析してみなければわからない。

3.5.6 日本の国語辞典にみる「結石」

最後に、日本の国語辞典に収録される状況を調査する。明治期の代表的な辞典(『言海』(1889-1891)、『日本大辞書』(1893)、『辞林』(1907)など)を調べた結果、いずれにも「結石」は見当たらなかった。以下の表6は、「結石」を立項している辞書の語釈をまとめたものである。

筆者の調査の限りでは、昭和の初めに出版された『大辞典』(1934-1936)、『広辞林160版』(1934)、『辞苑』(1935)にはじめて「結石」が見えた。

そして、『広辞苑』の初版にも、「結石」が収録されており、それが第7版まで全部収録されていることを確認した(意味記述はほぼ全く一緒であるため(「生ずる」が、第6版より「生じる」になっている)、省くことにする)。ただ意味記述の中では、第2版の

み「歯石」が加えられているが、第3版からはまた初版のように戻り、それが第7版まで踏襲されている。

表6 国語辞書における「結石」の語釈

発行年	書名	「結石」の語釈
1934	『広辞林 改訂新版』	体内種々の管及腔に発生する石の如き異物、胆石・尿石・歯石などの類。(1948(新訂1145版)、1954(1161版)も同じ)
1934-1936	『大辞典』	人体内の各種排泄液・分泌液が成分の変調を来し一種の固形物を形成して石の如くなれるもの。単に石とも。例、胆石、尿石。
1935	『辞苑』	体内種々の管及び腔に発生する石の如き異物。胆石・尿石の類。
1952	『辞海』	分泌または排泄(はいせつ)物の中にできた固形物。おもなものに胆石と尿石とがある。
1955	『広辞苑 初版』	体内の種々の管状または嚢状臓器内に生ずる石状の固形物。胆石・尿石の類。
1958	『広辞林 新版』	体内の種々の臓器内に生ずる石状の固形物。おもなものは胆石と尿石でその他、歯石・唾石(ダセキ)・糞石(フンセキ)などがある。
1969	『広辞苑 第2版』	体内の種々の管状または嚢状臓器内に生ずる石状の固形物。胆石・尿石・歯石の類。
1983	『広辞苑 第3版』	体内の種々の管状または嚢状臓器内に生ずる石状の固形物。胆石・尿石の類。

3.6 中国語における「結石」

続いて、中国語における「結石」について見ていこう。

3.6.1 英華辞典にみる「結石」

「結石」は、いつごろ中国へ流入したのだろうか。まず、英華辞典から「結石」および関連する用語の考察を通して、「結石」の流入時期を把握したい。調査に用いる資料は、台湾中央研究院近代史研究所から公開された「英華字典資料庫」²⁰である。さらに、有名な伝道医師ホブソン(合信 Benjamin Hobson)が書いた、中国最初の英華医学術語辞典といわれる『医学英華字釈』(*A Medical Vocabulary in English and Chinese* 1858)と宣教師狄考文(C.W.Matter)による専門語彙集 *Technical Terms English and*

²⁰ 1815年から1919年までの間の代表的な英華・華英辞典の全文テキスト(11部・3部)と影像(24部)が収録されているので、快速かつ正確に語彙を検索できる。

Chinese (1904) を加え、下記の表7を作成した（表7に示した英語の見出し語は表5から取り上げた。「語釈なし」は立項されているが、「結石」に関連する語釈が見当たらないことを指す）。

表7を見ると、訳語には、「石淋」のほか、「砂淋」、「沙淋」などが多く見られる（以下、「淋」と「淋」は、「淋」に統一する）。「砂淋」は、東漢（前漢）の『中藏経』ですでに出現していて²¹、「沙淋」は、元代の『世医得効方』の中では「石淋」と同じ病気であると指摘されている²²。「胆石」、「腎石」、「膀胱石」といった「器官＋石」のような訳語は、英語を逐語訳して組み合わせたものである。

²¹ 『中藏経・論諸淋及小便不利第四十四』：砂淋者，腹臍中隱痛，小便難，其痛不可忍，須臾从小便中下如砂石之類。

²² 『世医得効方』卷第八：沙石淋，又称沙淋、石淋。

表7 華英・英華辞典にみる「結石」の関連訳語

発行年	書名	stone	calculus	gravel
1822	『英華字典』 (モリソン)	(語釈なし)		
1844	『英華韻府歴階』 (ウィリアムズ)	the stone 大砂淋	(未収録)	(語釈なし)
1847-48	『英華字典』 (メドハースト)	(語釈なし)	膀胱石	disease of gravel 瘡、砂癰小便病
1858	『医学英華字釈』		biliary calculi. 胆 淋 calculus of bladder 膀胱石淋 Calculous diseases of Kidney 内腎沙 石淋	沙淋
1866-69	『英華字典』 (ロプシャイト)	stone in the bladder 砂淋	(pl. calculi), the stone in the bladder 石癰、砂 癰 calculi in the gall- bladder 胆石 calculi in the kidneys 腎石	in the bladder 沙淋、砂癰
1872	『盧公明英華萃林 韻府』 (ドーリットル)	the (a disease) stone 大砂淋	膀胱石	gravel or a disease of the bladder, 沙淋、 砂淋
1884	『井上哲次郎訂増 英華字典』	in the bladder 砂淋	calculi. the stone in the bladder 石 癰、膀胱石、砂癰 calculi in the gall- bladder 胆石 calculi in the kidneys 腎石	gravel in the bladder 沙淋、砂 癰
1899	『鄭其照華英字典 集成』	(語釈なし)	膀胱石、腎石	(語釈なし)
1904	<i>Technical Terms English and Chinese</i>	stone in bladder 膀胱 癰	calculus (in pathology) 砂石癰 ~ biliary 胆癰 ~ nrinary 溺癰 ~ vesical 涎核癰 膀胱癰	(語釈なし)
1908	『顔惠慶英華大辞 典』	(医) 膀胱癰、 <u>結石</u> 、 沙淋、膀胱或内腎中 之石淋、膀胱病 lithiasis (Med.) The disease of stone, especially in the bladder or kidneys, (医) 石 癰、砂淋症、 <u>結石病</u> 、 沙淋病	(医) 石癰、膀胱積 石、砂癰、膽石、腎 石、尿石、膀胱石	(医) 沙淋、尿 沙、腎及尿胞中生 沙淋之症
1913	『商務書館英華新 字典』	石癰	(医) 石癰、膀胱 石、	沙淋

1916	『赫美玲官話』 (ヘメリング)	stone in the bladder 砂淋、膀胱石、石淋、 膀胱石 (新) lithiasis 生石病 (新)、偏向生石病 (新)	biliary calculus 胆石 urinary calculus 溺淋、尿石	沙淋 (Med.)、尿 沙
------	--------------------	--	---	------------------

「結石」は、『顔惠慶英華大辞典』（1908）で初めて出現している。『顔惠慶英華大辞典』の例言には、次のように述べられている。

(43) 是編採用諸書。暨所参考，不下数十百種。有為中国教育会本者，有為江南製造局本者，有為嚴式所著本者，有為英和字典本者。…（この辞書は、諸書を採用した。参考にしたものは、数十から百種を下らない。中国教育会の本もあり、江南製造局の本もあり、嚴氏の著す本もあり、英和辞書の本もある。）

参考にした英和辞書は、具体的に挙げていない²³。

3.6.2 書籍にみる「結石」

華英・英華辞典において、「結石」は1908年に初めて出現しているが、書籍ではどうだろう。

『近現代辞源』（2010）では、「結石」について、以下のように記述している。

(44) 【結石】

導管腔中或腔性器官的腔中形成的固体塊状物。（導管の腔中或いは腔性器官の腔中に形成された固体塊状物。）

1906年郭鐘秀『東遊日記』：“腎結石，腸結石，膀胱結石皆从牛馬身取得，石体極堅，或大如拳，真咄咄出怪事。”（腎臓結石、腸結石、膀胱結石はすべて牛馬から取る。石体が極めて堅固で、あるものは拳のように大きい。本当に奇異なことである。）

²³ 陳力衛教授（成城大学）のご教示によると、三省堂の『新訳英和辞典』（1902）を参考にしたとのことである。

1908年呂珮芬『東瀛參觀學校記』：“有牛馬病象，如牛腎石、膀胱結石、腎臟結石及馬胃之癌腫、馬足之纖維腫，馬股側之脂肪腫之屬。”（牛馬の病象、例えば牛の腎石、膀胱結石、腎臟結石及び馬の胃の癌腫、馬の蹄の纖維腫、馬の股側の脂肪腫の属。）

1898年から1908年に至るまで、清国政府は官員を日本に派遣し、日本の各方面の考察を行っていた。具体的には、法政、軍事、教育、農業、工業などで、とりわけ教育に目をつけていた。その時期に官員たちが書いた游记、日記などは、日本で実際に体験したことを記録したもので、日本における学校制度や教育内容について忠実に記述している。言葉の壁があるにもかかわらず、考察の作業に努めた成果は、すべて游记、日記に呈しており、清の末期の教育改革に多大な影響を及ぼした²⁴。『東遊日記』、『東瀛參觀學校記』はまさにそのような著作である。原書を確認したところ、例に取り上げられている文章は、いずれも作者が日本の農科大学を參觀した際に、牛や馬の標本を見ながら、どんな病気を患ったのかを分析した内容である。

また、以下の医学書はすべて日本の医書をそのまま翻訳したもので、これらに「結石」、「結石病」、「膀胱結石」などが現れている。

(45) 腎臟部之發起疼痛。於腎石病見之。即生成於腎盂腔内之小結石。（腎臟が痛みを起こすことは、腎石病に見られる。即ち、腎盂の中に生成する小さな結石である。）

丁福保訳述『臨床病理学』1912

(46) 血尿（原因） 為腎臟出血（打撲、創傷…腎臟結石、）膀胱出血（膀胱粘膜損傷、膀胱結石…）（日本語訳は省略）

古城梅溪著 徐華清校『医家宝典』1913

(47) 結石病等、而其施行時為一時間。（結石病など、それを行う時間は一時間である。）

²⁴ 何（2001: 14）による。

王偉編訳『衛生治療新書(家庭必備)』1917

- (48) 膀胱結石 由尿中之尿酸及尿酸塩類沈滓之故。(膀胱結石 尿中の尿酸及び尿酸塩類の滓が沈殿することによる。)

商務印書館編訳所編訳『最新解剖生理衛生学』1925

なお、(49)のように、日本で医学を学んだ経験のある留学生が書いた本の中にも、「歯髓結石」が見られる。

- (49) 歯髓結石之構造。極為簡單。呈硝子様同質。(歯髓結石の構造は極めて簡単である。硝子と同様の性質を呈する)

彭菊洲²⁵編『牙医大全』1928

その後、科学名詞審査会が編集した『医学名詞彙編』（1931）では、日本語訳「結石」を参考にして、「calculus; stone」の訳名を決めたことが確認できる。

- (50) calculus;stone

日訳 結石

参考名 石

決定名 石、結石

科学名詞審査会編『医学名詞彙編』1931

また、国語辞書『辞海』（1936）に「結石」が立項されており、医学専門学校の教材にも収録されるようになった。

- (51) 【結石】(Calculus)

病名，人身内排泄液体中所含成分，沈淀析出，而成固形之物也。此物必以一種有機性基質（蛋白）為核，同時排泄液体中更有異物（如壞死之上皮細胞、凝固血塊或細菌群之類）圍繞之，即排泄液体中沈殿之塩類成分，沈著于此，而結石始成。有腎臟結石、膀胱結石等。（病名。人の体内の排泄液体中に含まれる成分が、沈殿し、析出し、固形物になる。この物質は、必ず一種の有機性基質（蛋

²⁵ 『牙医大全』の扉に、彭菊洲について、「日本大阪歯科医専畢業」と書いてある。

白)を核とし、同時に排泄する液体の中に異物(例えば、壊死した上皮細胞、凝固した血塊、または細胞群の類)があつて、これを囲む。即ち排泄液体の中に沈んだ塩類成分が、ここに沈着し、結石になる。腎臓結石、膀胱結石などがある。)

舒新城ほか編『辞海』1936

(52) 泌尿器疾病及療法

(二) 輸尿管損傷、狭窄、結石等。(日本語訳は省略)

教育部医学教育委員会編訂『医学専科学校教材大綱』1935

3.6.3 新聞にみる「結石」

『申報』では、1910年の記事に、すでに「結石」を用いた用例が見られる。また、『協和報』という医学雑誌でも1913年の記事に「結石」が使用されていることが確認できる。

(53) 拿破倫第三世。死後亦行解剖。斯人当千八百七十三年。因膀胱結石而行手術。其結果不佳良。遂以是致死。(ナポレオン三世は、死後に解剖が行われた。この人は、1873年に、膀胱結石により手術を受けたが、その結果はよくなく、ついに死に至った。)

『申報』「歐洲帝王之病屍解剖仲祐」1910.10.15

(54) 一万塊腎臓結石之奇聞(一万個の腎臓結石の奇聞)

『協和報』4・3 1913

3.7 まとめ

この章では、近代医学用語「結石」の日本での成立・定着の過程、および、中国への伝播、中国での受容について調査・考察を行った。

「結石」は、江戸時代の蘭学者宇田川玄随がオランダ語「steen」の訳語としてつくった医学用語で、『本草綱目』の「淋石」、「癖石」の項目を参照してつくったものと思われる。この語は、その後、宇田川玄随の養子である宇田川玄真の弟子たちに継承され、オランダ語医学書を翻訳する際に使われ、英蘭辞書の系譜にあるといわれる『改正増補英和対

訳袖珍辞書』(1867)に、辞書では、はじめて収録されたことにより、しだいに普及したようである。1870年代後半になると、英和辞書には「結石」が多く出現するようになり、当時の新聞記事にも現れている。特に、1880年以降に、書籍や新聞・雑誌に多く使用されていることから、このころには、すでに日本語に定着していたと思われる。ただし、英和辞書には1869年にすでに収録されているのに対して、国語辞書では1930年代に出版された辞書でようやく立項されている。

「結石」の用法に関しては、医学用語以外の意味用法は見当たらない。「結石」は、主に「腎臓や尿道に生じた石」のことを指しており、「腎臓結石」、「膀胱結石」、「胆嚢結石」などの複合語としてよく使われる。病名の場合は、「結石症」や「結石病」などのように、「症」や「病」を付けて表されている。

中国語においては、「結石」は、1900年代に、英華辞典の編集と清国政府の官員の報告の2つのルートを通して、使われ始めたといえる。その後、日本の医書を翻訳した中国語医書が多く出版され、「結石」は、それらの医書の中に取り入れられた。ほかの資料では、1910年代から新聞に「結石」の使用が見られるようになった。特に1930年代に出版された英華医学辞書と国語辞書『辞海』に収録されたことから、「結石」は完全に中国語に定着したと考えられる。なお、中国語における「結石」の意味用法は、日本語の「結石」と相違がないことが確認できた。

また、日本語における「淋疾」と「淋病」は、江戸時代中期までは、「腎臓にかかわる病気の総称」という意味だったが、江戸時代中期以降は、「性病」を意味するようになった。ただし、明治以降にもまだ「腎臓にかかわる病気の総称」という意味で使われる例が少数見られる。「淋病」という語は、現在、中国語でも、「性病」という意味で使われているが、この用法は、日本から伝わってきたのではないかと筆者は考えている。

【第3章の参考文献】(辞書類は巻末にまとめて挙げる)

浅井允晶(2012)「緒方洪庵全集編集委員会編『緒方洪庵全集』第一巻・第二巻(『扶氏経

験遺訓』上・下):刊行に寄せて」『日本医史学雑誌』58-3, 389-392 日本医史学会

王永炎・魯兆麟編(2011)『中医内科学 第2版』人民衛生出版社

大滝紀雄(1973)「西説内科撰要について(一)」『日本医史学雑誌』19-1, 19-28 日本医史学会

沖森卓也編(2017)『図説近代日本の辞書』おうふう

- 何生根（2001）『清末日本教育考察研究』 修士学位論文 浙江大学
- 川端喜美子（1996）『オランダ語基本単語 2000』 語研
- 佐藤亨（1980）『近世語彙の歴史的研究』 桜楓社
- 沈国威（1990）「[V+N] 構造の二字漢語名詞について—動詞語基による装定の問題を中心に、言語交渉の視点から—」『国語学』 160, 1-11 国語学会
- 関場不二彦（1933）『西医学東漸史話 卷下』 吐鳳堂書店
- 宗田一（1988）「宇田川家三代の実学—『西説内科撰要』と関連薬物書をめぐって—」『実学史研究V』 3-21 実学資料研究会 思文閣出版
- 野村雅昭（1988）「二字漢語の構造」『日本語学』 7-5, 44-55 明治書院
- 富士川游（1974）（1933 初刊）『日本医学史綱要』 平凡社
- 山田肇（1971）「泌尿器科学領域における華岡青洲先生とその周辺（随想）」『泌尿器科紀要』 17-2, 87-88 京都大学
- 劉月華・潘文娛・故韓（2001）『实用現代漢語語法』 商務印書館

第4章 「痙攣」

4.1 はじめに

「痙攣」が和製漢語かどうかについて、見ていきたい。これについて、何華珍（2011）「近代日中間における漢語の交流の歴史」と朱京偉（2011）「日本の近代漢語の来歴」はそれぞれの意見を持っている。

何（2011）は、魯迅の著作の中に現れている漢語について次のように述べている。

『大辞典』の中に収録された魯迅の語彙からみれば、第一の意味或いは最初の例文として魯迅の作品が引用される場合には、日本の構造的な新語だと判断できるだろう。

『漢語外来語辞典』に収録される語もあれば、和製漢語研究の範囲に含めない語もある。

（何 2011: 28）

これにつづき、一連の漢語（魯迅の著作の中に現れている）を挙げ、和製漢語研究の範囲に含めない可能性もあると述べている。その中に、「痙攣」がある。

それに対して、朱（2011: 8）は、語基を用いて、漢語の造語メカニズムを検討する中で、「痙攣」という語を、三字漢語を造語する二字語基として挙げ、蘭学者による造語の可能性が高いと述べている。

この章では、医学用語「痙攣」について、和製漢語かどうかという疑問から、その成立を究明し、受容された経緯を解明する。また、この語が和製漢語であった場合、いつごろ中国へ伝わり、どのように中国語に受容されたのかについて明らかにしたい。

4.2 「痙攣」とは

百科事典や国語辞典における「痙攣」の解説から、日本語における「痙攣」という語が何を表すかを把握したい。まず、『日本大百科全書』では、「痙攣」を以下のように記述している。

（01）けいれん（痙攣）

自分の意志では弛緩（しかん）させることができない筋肉の急激な収縮をい

う。英語では通常のけいれんをスパズム **spasm** というが、激しいけいれんをコンバルション **convulsion** といい、痛みを伴うものや職業性けいれんをクランプ **cramp** と使い分けることが多い。また、持続時間の短い不随意におこる電気ショック様の筋収縮は、ミオクロヌス **myoclonus** とよばれる。

けいれんは、全身におこる全身性けいれんと、体の一部の筋肉に局限しておこる局所性けいれんとに大別されるが、症状からみると、異常な筋肉の収縮が長時間続き、筋肉が突っ張ったり、こわばった状態になる強直性けいれんと、四肢や軀幹（くかん）の拮抗（きっこう）筋（伸展させる筋肉と屈曲させる筋肉）が交互に収縮と弛緩を反復し、四肢をばたつかせたりする間代性けいれんがある。

思春期以降の成人にみられるもので多いのは、真性てんかん、脳血管障害、頭部外傷、脳腫瘍（しゅよう）、多発性硬化症、職業性けいれん（書痙（しょけい）など）、熱けいれん（ひどく汗をかき、塩分喪失によっておこる）、顔面けいれん、眼瞼（がんけん）けいれん、こむら返り（腓腹（ひふく）筋けいれん）などによるものである。また、尿毒症、不均衡症候群（人工透析後にみられる）、妊娠中毒症（子癇（しかん））、糖尿病、低血糖症、肝性脳症、テタニー、過換気症候群、膠原（こうげん）病など、全身疾患に伴うけいれんも多い。そのほか、破傷風など細菌の毒素によるもの、ストリキニーネなど薬物の中毒やヒステリーなど、けいれんの原因は多彩である。その原因によって治療法もそれぞれ異なるので、まず神経内科で診察を受け、原因を明らかにすることが必要である。

[海老原進一郎]

また、『日本国語大辞典 第2版』（以下『日国』と略す）では、次のように解説している。

(02) 【痙攣】 [名]

筋肉が自然にひきつること。また、それにともなうふるえ。からだ全体のものと、部分的のものがある。いろいろな脳の病気、毒物による中毒、貧血や脳の血液循環障害が原因でおこる。ひきつり。ひきつけ。

これらの記述を見ると、「痙攣」という語は、全身または身体の一部の筋肉が不随意でひ

きつることを指し、病名（全身性けいれん、局所性けいれん）のほか、いろいろな病気（てんかん、破傷風など）の症状の一つとして使われていることが分かる。また、和語「ひきつる¹⁾」との関連性が高いことが確認できる。

4.3 「痙攣」の成立

4.3.1 「痙攣」の語源

語源調査に当たって、『日国』における「痙攣」の用例を確認すると、そこには以下の 5 例が挙げられている。

(03) 医語類聚〔1872〕〈奥山虎章〉「Convolution² 痙攣」

(04) 改正増補和英語林集成〔1886〕「Keiren ケイレン 痙攣」

(05) 不如帰〔1898～99〕〈徳富蘆花〉下・九「其間々（あひあひ）には心臓の痙攣起り」

(06) 妄想〔1911〕〈森鷗外〉「窒息するとか痙攣（ケイレン）するとかいふ苦みを覚えるだらうと思ふのである」

(07) 桐の花〔1913〕〈北原白秋〉昼の思「その光った尻尾の尖の細かな緑色の痙攣を凝視（みつ）めてゐる」

『日国』の最初の用例は、『医語類聚』から取り上げられている。『医語類聚』は、明治6年（1872）に、海軍医官として活躍した奥山虎章によって編纂された英和医語辞典である。奥山は「例言」に、辞典の見出し語は『動氏医用字書』³⁾によったとし、訳語については、「…未ダ名称ノ全ク欠ル者ハ権リニ之ヲ音訳シ或ハ原義ニ基テ之ヲ下シ」と述べている。要するに、当時は訳語が十分に整っておらず、奥山によるものがあるということである。

これだけ見れば、「痙攣」は奥山による造語であると思われるが、今回の調査を通して、『医語類聚』より古い用例が見つかった。

考察の手がかりとなった書籍は、佐藤亨（1980）『近世語彙の歴史的研究』である。同書

¹⁾ ひきつる 【引攣】(1) 痙攣（けいれん）を起こす。また、そのような状態になる。（『日国』による）

²⁾ 『医語類聚』における見出し語「Convolution」については、4.4.3 で検討する。

³⁾ 『医語類聚』は、奥山虎章がダングリソン Robley Dunglison（1798-1869）の医語辞典『動氏医用字書』（*A New Dictionary on Medical Science and Literature*）を典拠にして、医学術語を解説した辞典である。（深瀬（1996:66-67）による）

の「Ⅳ 近世訳語論」では、蘭学者が翻訳した医学書『解体新書』、『西説医範提綱釈義』、『遠世医方名物考』などにおける訳語の源流について考察し、それを4つに分類している。

第一、漢籍もしくは漢訳仏典に典拠を有し、以前に本邦の文献に用例の指摘できるものの

第二、漢籍もしくは漢訳仏典に典拠を有するものの、国語として以前に用例があるか否か明らかでないもの

第三、漢籍または漢訳仏典に典拠を見いだすことができないが、以前に国語の用例が存するもの

第四、漢籍もしくは漢訳仏典に典拠を見出しえず、さらに国語の用例も確かでないものの

(佐藤 1980: 346-370)

「瘧」は、佐藤（1980）では、「第十六章 『遠世医方名物考』の訳語」に初めて登場し⁴、第四の所属となっている。要するに、中国語から伝来したものでもなければ、近世以前の日本語にも存在しなかったものである。そこで、『遠世医方名物考』やその周辺を考察すれば、「瘧」の語源に辿り着くと思われる。

『遠世医方名物考』の著者である宇田川玄真は、蘭方医である宇田川玄随と父子の契を結んで、玄随から漢学と漢方医学の『傷寒論』や『本草綱目』などを学び、大槻玄沢や桂川甫周について蘭語を習った。『遠世医方名物考』（1822-1825）は、玄真が訳述し、養子の宇田川榕菴が校補したものである。この本は、約25種類の蘭書を引用し、伊呂波順を以って、動、植、鉱物の薬品を形状、主治を詳細に記述している⁵ため、「瘧」に言及している部分の原書に辿り着くのが難しい。『遠世医方名物考』以外に、1822年に刊行した『増補重訂内科撰要』は、宇田川玄真が、養父宇田川玄随の『内科撰要』に校注を加えたものである。『内科撰要』と『増補重訂内科撰要』を調査したところ、「瘧」は『内科撰要』に現れず、『増補重訂内科撰要』に、増補として加わっていることが判明した。本文は以下のとおりである。

⁴ 佐藤（1980: 370）

⁵ 関場（1933: 115）

(08) 痙攣搐掣篇第二十

痙攣、羅匈名「テタニウス」和蘭名「カラムプテレッキング」搐掣、羅匈名「コンヒウルシヲ」和蘭名「ストイプテレッキング」或ハ此ニ症通シテ羅匈ニ「コンヒウルシヲ」ト称ス。

「痙攣搐掣」は、原書『簡易治療術書』で確認すると、オランダ語「kramp-en⁶ stuip-trekking」に対応している。また原書によると、『増補重訂内科撰要』においては、「痙攣」は「kramp trekking」に対する訳語であり、「搐掣」は「stuip trekking」に対する訳語であることが明らかである。

次に 1822 年以前の蘭和辞書、寛政 8 年（1796）の『江戸ハルマ』（波留麻和解）、文化 7 年（1810）の『訳鍵』で「kramp trekking」を調査してみる。すると、いずれの辞書にも「kramp trekking」は見えないが⁷、代わりに見出し語「kramp」について、表 1 のように書かれている。また、オランダ語「stuip」に関する語釈も表 1 にまとめて示す。

いずれにも「痙攣」は見られない。以上の考察によって、「痙攣」は、宇田川玄真が自ら新たに訳出した可能性が高いと思われるが、同時代の学者たち（漢方および蘭方）が共同で訳出した可能性もあるものである。

表 1 『江戸ハルマ』と『訳鍵』にみる「kramp」と「stuip」の語釈

年代	書名	kramp	stuip
1796	『江戸ハルマ』	神経の掣、引ツル	神経拘急、驚癇、搐搦
1811	『訳鍵』	白脈ノ攣急	白脈ノ拘急

4.3.2 「痙攣」をつくった理由

『増補重訂内科撰要』では、「痙攣搐掣」を、「漢医所謂癇痙、搐搦、瘈瘲、驚風、掣引、踠攣、拘急、角弓反張及積聚衝逆の攣急抽掣等皆斯ニ属ス」と、漢方に相応する病状が多く挙げられている。オランダ語「kramp trekking」を翻訳する際に、候補になりそうな言葉がすでにこれほど多く存在するのに、宇田川玄真がわざわざ新しい言葉を創った理由と

⁶ 「en」は複数を表す。複数形の作り方は、オランダ語の名詞の複数形は、単数形に-en または-s を付加して作られているが、原則は-en の付加である。（『講談社オランダ語辞典』（1994）による）

⁷ 『江戸ハルマ』では、「kramp」と「trekking」が掲げてあり、「trekking」は「引」とある。『訳鍵』では、「kramp」のみ掲げている。

しては、次の2つが考えられる。

①上記の言葉ではいずれも、精確に原文の意味を表現できないからである。

②翻訳するにあたって、新しい言葉を用いて、用語を統一したいと考えたからである。

そこで、まず『増補重訂内科撰要』における「痙攣」の解説を確認してみる（二重線は筆者による。以下同じ）。

(09) 痙攣掣ノ大較ヲ論ス

凡ソ我意ニ随テ運轉挙動ヲ為ス所ノ諸筋、自由ニ運動屈伸スルヲ能ハズ却テ、我意ニ逆テ自ラ攣急掣抽シ、或ハ胃及ビ腸ノ筋纖維ノ如キ、平常我意ニ随ハズシテ自然ニ運動スル者モ亦掣引攣縮ス是ヲ痙攣或ハ掣ト曰フ。

『増補重訂内科撰要』巻九 痙攣掣篇第二十一

また「痙攣」と「掣」の違いについては、以下のように記述している。

(10) 別テ是ヲ言ヘバ其攣急、依然トシテ放解セズ、彊硬ニシテ緩弛セズ少シモ伸縮挙動スベカラザル症ヲ痙攣トス。唯其症発止往来アリテ頻頻ニ牽引掣抽スルヲ掣トス。

『増補重訂内科撰要』巻九 痙攣掣篇第二十一

上記をまとめると、『増補重訂内科撰要』における「痙攣」は、体（筋肉、胃腸など）のひきつりだけでなく、さらにこわばっている症状があることに焦点を当てている。

ここで、「痙」と「攣」の意味を漢字辞典の記述によって確認する。

「痙」は、中国の『説文解字』には、「彊急⁸也。」（こわばる）とあり、『古代漢語詞典』（1998）には、「抽筋。《素問・至真要大論》：“諸痙項強，皆屬於湿”」とある。

「攣」は、『説文解字』には、「係也。」（つなぎとめる）とあり、『古代漢語詞典』には、「③抽搐。《後漢書・楊彪伝》：“彪見漢祚將終，遂称脚～不復行，積十年。”」とある。

「痙」は、(10) の「彊硬」にあたり、「攣」は、「攣急」にあたる。さらに「痙」と「攣」は両方とも「ひきつる」という意味を持つことで、「痙攣」は「kramp trekking」を訳すの

⁸ 彊急：亦作“強急”。僵硬，伸展不能自如。彊，通“僵”。（『漢語大詞典』による）

に最もふさわしい用語としてつくられたのではないと思われる。

さらに、『増補重訂内科撰要』で挙げている漢方の言い方「拘急、反張、攣急」等は、張仲景の『金匱要略』で、「瘧病」⁹という病気を説明するのに使われている。したがって、「瘧病」の「瘧」を用いて、「拘急、反張、攣急」を表すことができると思われる。

以上に述べたことは、筆者が考えた理由①②に当てはまるであろう。

4.3.3 「瘧攣」の語構成

日本の漢和辞典『漢字源 改訂第5版』(2010)には、「瘧」は、「(動・名) ひきつける。ひきつけ。筋肉がひきつる。」とあり、「攣」は、「[二] ①レンす(動) つる。ひきつる。筋肉や関節がひっぱられたようになる。「瘧攣」「拘攣」とある。以上の解説と、4.3.2の考察より、「瘧」と「攣」は、類義関係を持ち、「瘧攣」の語構成は、野村(1988: 50)¹⁰によると、「〈V〉+〈V〉」という「並列構造」であると判断できる。

中国語において、類義的あるいは対義的な要素からなる複合語の構成順序について、陳愛文・于平(1979)「並列式双音式的字序」が論じている。類義的あるいは対義的な要素から構成された複合語において、意味上順序が付けられない場合は、2つの漢字は声調の順番に並ぶ傾向が強いと言っている。この順序に従う複合語は、古代音声調によると80.4%であり、現代音声調によると、84.5%である。「瘧」、「攣」は、古代音声調によると、それぞれ「上声」と「平声」¹¹であり、現代音声調によると、「四声」と「二声」である。上記の規則によると、複合語は、「攣瘧」となるはずである。

したがって、「瘧攣」は、和製漢語である可能性が一層高まった。

4.4 日本語における「瘧攣」の普及

4.4.1 蘭学書にみる「瘧攣」

筆者の調査によると、新造語としての「瘧攣」は、『増補重訂内科撰要』以降に出版された蘭学翻訳書や蘭和辞書にすぐには反映されていない。医学翻訳書では、例えば、『医

⁹ 『金匱要略』「瘧湿喝病脉証第二」には、「太陽病，発熱，脈沈而細者，名曰瘧，為難治。太陽病，発汗太多，因致瘧。夫風病，下之則瘧，復発汗，必拘急。瘡家，雖身疼痛，不可発汗，汗出則瘧。病者，身熱足寒，頸項強急，惡寒，時頭熱，面赤，目赤，独頭動揺，卒口噤，背反張者，瘧病也。…瘧為病，胸滿口噤，臥不着席，脚攣急，必齒介齒，可与大承氣湯。」とある。

¹⁰ 本論文の3.4.3に挙げた野村(1988)の紹介を参照。

¹¹ オンライン辞典「漢典」における『韻書』による。<https://www.zdic.net/zd/yy/ys/瘧>
<https://www.zdic.net/zd/yy/ys/攣>

療正始』¹²には見られない。蘭和辞書である、天保4年（1833）の『長崎ハルマ』（道訳法児馬）とその増補版『和蘭字彙』、『江戸ハルマ』の簡略版である『訳鍵』の増補版『増補改正訳鍵』で「kramp」と「stuip」を調べた結果を、表2に示す。主に「攣急」、「拘攣」などの用語を用いて訳語とし、「痙攣」を使用していないことがわかる。

表2 『長崎ハルマ』『和蘭字彙』『増補改正訳鍵』にみる「kramp」と「stuip」の語釈

発行年	書名	kramp	stuip
1833	『長崎ハルマ』	攣急	拘攣、子供になる
1858	『和蘭字彙』	攣急	
1864	『増補改正訳鍵』	白脈ノ攣急	白脈ノ拘急。拘攣

ただし、緒方洪庵の『扶氏経験遺訓』（1857）では、「痙攣」を多用している。例えば、『扶氏経験遺訓』巻之九では、「刺発尼亜（raphania¹³）」の治法について、

（11）而四肢ノ痙攣劇痛ハ之ヲ逆圧シ或ハ緊シクシテ静止スルヲ得ヘシ。

『扶氏経験遺訓』巻之九

というように記述している。この段落を、ドイツ語原文とオランダ語訳の同じ段落と対照してみると、「痙攣」はドイツ語「krämpfe」¹⁴とオランダ語「krampen」の訳語として用いられていることがわかる。

（12）Die Krämpfe und oft sehr schmerzhaften Zusammenziehungen der Glieder werden am besten durch Gegendruck und Binden erreicht.

Enchiridion Medicum Oder Anleitung Zur Medizinischen Praxis

¹² 『医療正始』（1835-1847）は、Bischoff（独 1784-1850）著の内科書（オランダ語訳版）を伊東玄朴が翻訳したもので、全24巻である。訳者の伊東玄朴は、長崎でシーボルトに学び、お玉ヶ池種痘所設立のために拠金した83名の蘭方医のうちの一人。文久2年より、西洋医学所（種痘所の改称）の取締を務めた。（東京大学医学図書館「医学図書館デジタル史料室」『医療正始』<https://iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/medlib/document/ecbfdca-0e02-4327-9814-6d24636f8386#c=0&m=0&s=0&cv=3&xywh=0%2C-1407%2C5435%2C6893>）

¹³ raphania n ラファヌス中毒（=rhaphania）《セイヨウノダイコン [Raphanus raphanistrum] の種子による中毒》（『医学英和辞典 第2版』による）

¹⁴ 「krämpfe」は「krampf」の複数形。よって、オランダ語の語釈も複数形の「krampen」を用いる。

- (13) De krampen en dikwijls zeer pijnlijke zamentrekkingen der ledematen worden het best door tegendrukking en binden verligt.

Enchiridion medicum: handleiding tot de geneeskundige praktijk

また、司馬凌海の『七新薬』（1862）にも、「痙攣」を用いた箇所が見られる。

- (14) 神経性諸病其間歇の有無に關せず。総て背髓系の刺戟小因て発する者。癲癇舞蹈病百日咳咽喉痙攣癱瘓不遂筋の痙攣牽縮及ひ心臓の形器性諸病小効あり

『七新薬』中

つまり、『増補重訂内科撰要』以降に出版されたオランダ語訳の医書にも、少しずつ収録されるようになっていく。

4.4.2 対訳辞書にみる「痙攣」

日本では、開国後、蘭学はしだいに衰え、日本の医学はイギリス医学、ドイツ医学が学ばれるようになった。本項では、英和・和英・独和・和独対訳辞書における「痙攣」の収録を考察する。まず、*Cassell's English-Dutch, Dutch-English dictionary* (1960) で、「kramp」、「stuip」に対応する英語を調べてみる。すると「cramp」、「spasm」、「convulsion」が出てきた。これは、(01) に現れている英語と一致している。19 世紀から 20 世紀中期にかけて出版された英和・和英辞書及び独和辞書で、上記の単語を調査した結果を、表 3 にまとめて示す。

対訳辞書における「痙攣」は、1867 年の『改正増補英和对訳袖珍辞書』における「spasm」の訳語として初めて登場する。『和英語林集成 初版』（1867）には見られないが、『和英語林集成 再版』（1872）に収録されており、その後のほとんどの辞書に収録されている。

表 3 対訳辞書にみる「痙攣」の関連の語

発行年	書名	cramp	spasm	convulsion
1814	『語厄利亜語林大成』	拘攣		
1862	『英和对訳袖珍辞書』	攣急、錠、定限、無理押	攣急	拘攣
1867	『改正増補英和对訳袖珍辞書』	攣急、錠、定限、無理押	<u>痙攣</u>	拘攣、騒動
1867	『和英語林集成 初版』	Tszri; komuragayeri; szkumu	Tszru; hiki-tzkeru	Kyōfu
1872	『和英語林集成 再版』	Tsuri, hiki-tsuri, komuragayeri	Tsuru, hiki-tsukeru, <u>keiren</u>	Kyōfu, <u>keiren</u> , hikitsuke
1873	『附音挿図英和字彙』		<u>痙攣</u> 、転筋	拘攣、激動、騒動
1886	『和英語林集成 三版』	Tsuri, hiki-tsuri, <u>keiren</u>	Tsuru, hiki-tsukeru, <u>keiren</u>	Kyōfu, <u>keiren</u> , hikitsuke
1886	『独逸医学辞典』	krampf <u>痙攣</u>		
1888	『いろは辞典：漢英対照』	<u>痙攣</u> 、ひきつり、つり かがみ		<u>痙攣</u> 、ひきつり、 つりかがみ
1899	『懷中和羅独英医語辞典』		<u>痙攣</u> spasmus, convulsion, krampf(spasm).	
1900	『独羅英和医学字彙』	krampf <u>痙攣</u> 、搐搦		
1905	『医学新字典：独羅和訳』	krampf <u>痙攣</u>		
1913	『日漢独羅病名対照辞典』	<u>痙攣</u> krampf 独 spasmus 羅		
1936	『標準医語辞典：独・羅・英・仏・和』	krampf <u>痙攣</u>	spasmus <u>痙攣</u>	convulsio(n) 搐搦、 <u>痙攣</u>
1949	『医学用語集：第一次選定』		<u>痙攣</u> spasmus→krampf	

4.4.3 『医語類聚』による記述の問題点

ここで、改めて『日国』の最初の用例を振り返ってみる。

(03) 医語類聚〔1872〕〈奥山虎章〉「Convolution 痙攣」

しかし、4.4.2 で考察したように、「痙攣」に対応する英語は「cramp」、「spasm」、「convulsion」で、「convolution」はない。『医語類聚』の底本 *A New Dictionary on Medical Science and Literature* (1833) を調査したところ、「convolution」は以下のよう
に記述されている。この解説によると、「convolution」は「痙攣」という意味を持って
いないことが確認できる。

(15) Convolution (Anat.) Convolutio [ママ] , from convolvere, to entwine¹⁵.
Gyrus¹⁶.

A New Dictionary on Medical Science and Literature

さらに、『医語類聚』では、「convolution」の次に「convulsibility」という見出し語が
掲げられ、そこでは「搐搦」と訳されている。しかし、原書 *A New Dictionary on
Medical Science and Literature* を引くと、「convulsibility」は見出せず、名詞形の
「convulsion」が見られた。「convulsion」はすでに 4.2 で考察したが、奥山は、なぜ
「convulsion」の代わりに、「convolution」の語釈で「痙攣」を使用したのか、詳しい理
由は不明である。綴りが似ているため、混同したのだろうか。

なお、上記の問題は、明治 19 年 (1886) の『袖珍医学辞彙』にも反映されている。『袖
珍医学辞彙』の記述は、以下のように、『医語類聚』とほぼ一致している。しかし調査を通
して、「痙攣」は「convolution」の訳語になれないことは明らかである。

(16) Convolutio [ママ]. 痙攣また皺襞

(17) Convulsibility. 搐搦

¹⁵ entwine v.t. (物を) (…に) まつわらせる、絡ませる (『ランダムハウス英和大辞典』による)

¹⁶ gyrus n. 回、脳回 (『医学英和辞典 第 2 版』による)

4.4.4 明治期の医学書にみる「痙攣」

「国立国会図書館デジタルコレクション」を用いて、明治期の医学書での「痙攣」の使用を調べてみる。すると、1874年に出版された『独来氏外科新説』に「痙攣」に関連する用語が見られる。『独来氏外科新説』は、明治の医学者森鼻宗次がイギリスの医者独来氏（ロベルト・ドロイ）の『袖珍外科新書』を翻訳したものである。この本の巻三では、「炎性痙攣」が論じられており、ほかに、巻十五（1875）では、「閉肛筋痙攣」、「痙攣性直腸狭窄」などの小見出しが見られる。

(18) 炎性痙攣「インフラマトリー、スパスム」

此痙攣ハ一異ノ病患ニシテ其最モ常ニ觀ル所ノ症ハ硬頸ナリ

『独来氏外科新説』巻三 1874

(19) 閉肛筋痙攣「スパスム、オブ、ゼ、スピנקター、アニ」

痙攣性直腸狭窄「スパスモディック、ストリクチュール、オブ、ゼ、レクチュム」

『独来氏外科新説』巻十五 1875

また、長谷川泰が訳した『小児科（斯泰涅爾）』（1876）では、「声門痙攣」という疾患が見られる。

(20) 声門痙攣

声門痙攣ハ殊ニ小児ノ年齢ニ属スル一患ナリ蓋シ其然ル所以一ハ其声門ノ嬌軟且ツ狹隘ナルニアリ一ハ其中枢神経系統ノ刺衝機過敏ナルニアリ

『小児科（斯泰涅爾）』1876

1900年前後には、「痙攣」は、翻訳書以外に、日本人が編著した書籍に多く見られるようになる。例えば、高橋真吉・岡本武次『実用内科全書』（1899）では、「運動神経痙攣」、金杉英五郎『鼻科学』（1899）では、「痙攣性噴嚏」などが見られる。さらに、河村九淵『養豚捷徑』（1888）をはじめ、動物の病状説明する際にも「痙攣」を使用するようになっている。

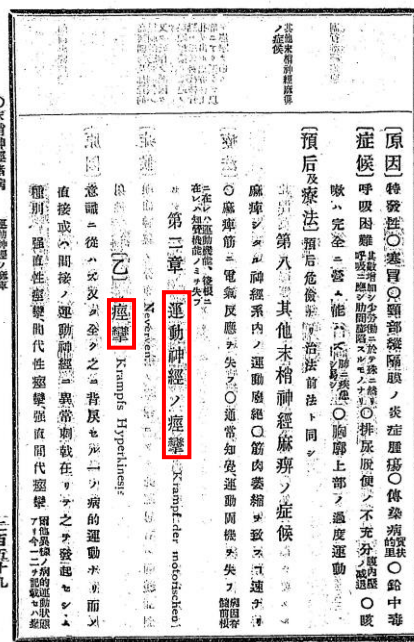


図1 『実用内科全書』(1899)「運動神経痙攣」

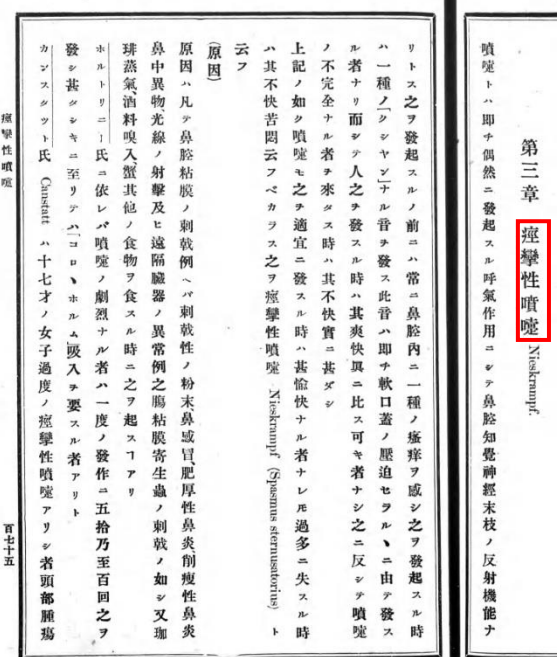
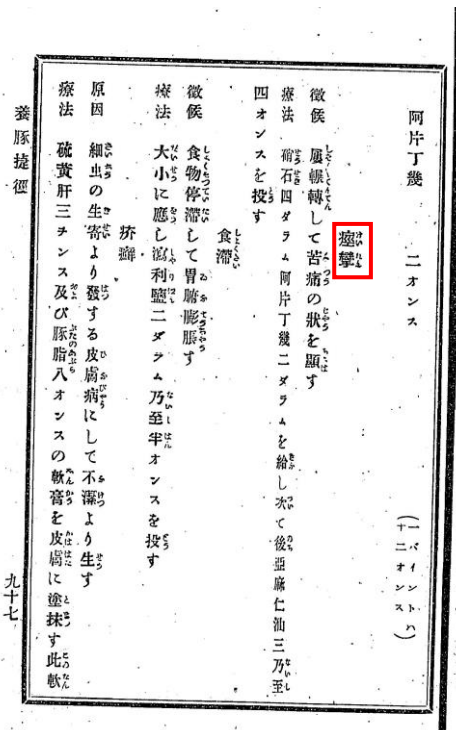


図2 『鼻科学』(1899)「痙攣性嘔吐」

(国立国会図書館デジタルコレクション <https://www.dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/834799/145>

<https://www.dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1081958/95>)



(図3 『養豚捷徑』(1888)「痙攣」

<https://www.dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/842171>)

「痙攣」は以上のように、病名の翻訳およびその具体的な病状の解説により、意味用法が人々に理解され、だんだん医学界に定着するようになったと考えられる。

4.4.5 文学作品にみる「痙攣」

4.2.2 で一度見たように、『日国』における「痙攣」の用例は 5 例あり、そのうち 3 例が文学作品から取り上げられている。青空文庫で確認すると、管見の限りでは、確かに『日国』が取り上げられているこの 3 例はより早期の使用例になる。

(05) 不如帰〔1898～99〕〈徳富蘆花〉下・九「其間々（あひあひ）には心臓の痙攣起り」

(06) 妄想〔1911〕〈森鷗外〉「窒息するとか痙攣（ケイレン）するとかいふ苦みを覚えるだらうと思ふのである」

(07) 桐の花〔1913〕〈北原白秋〉昼の思「その光った尻尾の尖の細かな緑色の痙攣を凝視（みつ）めてゐる¹⁷」

青空文庫で、上記の部分を検索し、前後の文脈を調査したところ、『不如帰』と『妄想』のものは確実に病状を描写する際に用いたものであることが確認できた。ところが、『桐の花』の例は、猫の尻尾がひきつって、痛んでいる病状についての描写ではなく、ただ猫の尻尾が左右に揺れている状態を描写しているもののようである。このような表現は、宮沢賢治が書いた詩『棕櫚の葉やゝに痙攣し』にも見られる。『棕櫚の葉やゝに痙攣し』では、以下のように、「痙攣」を用いて葉っぱが少し揺れている状態を表している。

(21) 棕櫚の葉やゝに痙攣し

陽光横目に過ぐるころ

宮沢賢治『棕櫚の葉やゝに痙攣し』¹⁸

¹⁷ この文の全文は、「乳酪の猫がまだ夢みるやうにその光った尻尾の尖の細かな緑色の痙攣を凝視めてゐる。」とある。

¹⁸ (21) の引用は、『新修宮沢賢治全集』第六卷（筑摩書房、1980）による。『棕櫚の葉やゝに痙攣し』の具体的な成立年代は不明であるが、著者の生没年（1896-1933）から、この作品は明治後期から

文学作品における「痙攣」には、(05)、(07) のような名詞の用法もあれば、(06)、(21) のようなサ変動詞の用法もある。さらに、青空文庫で検索したところ、(22)、(23) のような「的」を付けた形容動詞と考えられる用例も発見できた。

(22) 蜂は間もなく翅が利かなくなった。それから脚には麻痺が起った。最後に長い嘴が痙攣的に二三度空を突いた。

芥川龍之介『女』¹⁹

(23) 目玉を寄せ、眉根を寄せ、頬辺と口許とを歪めて、怒ってるのか笑ってるのか分らない、痙攣的な顰め顔だった。

豊島与志雄『阿亀』1925

4.4.6 新聞にみる「痙攣」

新聞での使用を見るのに、読売新聞のデータベースである「ヨミダス歴史館」を使って、1874 年から 1989 年まで（明治・大正・昭和）の期間を指定して、「痙攣、けいれん、ケイレン」を入力して検索した。

読売新聞においては、「痙攣」の使用は、1876 年 11 月 13 日の記事が最初である。

(24) 又西尾村農吉田彦兵衛ノ牝牛ハ…午後四時ニ至リ全ク歹芻ヲ止メ行歩踉蹌四肢戦慄遂ニけいれんヲ発シテ斃レタリ。

『読売新聞』「島根県及び和歌山県の畜牛の疫病・死亡・予防の詳細」1876.11.13

朝刊

調査の結果、明治・大正・昭和における「痙攣」の用例はそれほど多く見られなかった（「痙攣」を表記として使用した用例は 36 例、「けいれん」は 36 例、「ケイレン」は 24 例）。用法としては、(25)、(26) のように、動詞や形容動詞の用法もそれぞれ 1 例ずつあった

昭和初期の間に完成したと推測される。

¹⁹ (22) の引用は、『芥川龍之介全集 3』（筑摩書房、1986）による。『女』の具体的な成立年代は不明であるが、著者の生没年（1892-1927）から、この作品は明治後期から大正期の間に完成したと推測される。

が、主に名詞として使われ、しかも(27)のように、「痙攣を起こす」というフレーズで多用されている。

(25) 時々、苦痛が、その口もとを引き歪め、全身を^{けいれん}痙攣させた。

『読売新聞』「彼女の貞操」1926.7.31 朝刊

(26) 彼女の肩は、一層^{けいれんてき}痙攣的にをののいた。

『読売新聞』「聖火」1926.11.9 朝刊

(27) 其容態は突然卒倒して覚えば無くなり、顔面も全身も蒼白となりて、^{けいれん}痙攣を起し、眼球を廻はし、齒を喰ひしぼり、口から泡を吹き…

『読売新聞』「神経の衛生 9」1906.6.19 朝刊

なお、朝日新聞における「痙攣」の使用は、読売新聞より遅い。朝日新聞における「痙攣」は、1882年5月11日の広告に初めて見られる。

(28) 私義昨七月来脳膜炎^{ケイレシ}経攣症ヲ愁ヒ日々発症困苦シ四方ノ医薬便ニ効ナク死ヲ決シ候処不計海軍軍医從七位菅原先生ノ方剤ニテ日々快氣ニ向イ難有厚謝依テ該症ノ諸患へ此ノ良方アルヲ告ク。

『朝日新聞』「脳膜炎痙攣症の治療効果 海軍軍医菅原先生の方剤」1882.5.11 朝刊

(28) で注目しておきたいのは表記である。タイトルでは、「脳膜炎痙攣症の治療効果」とあるが、本文では、「経攣」という表記を使用している。文脈によると、ここの「経攣」は間違いなく「痙攣」として使用されている。しかし、「経」は、どの辞書を引いても、「ひきつる」という意味が載っていないため、「痙」と共用できるとはいえない。したがって、ここの「経」は誤植か、作者の書き間違いであると判断してもよいと思われる²⁰。「痙攣」という表記を記事の中に使用したのは、1888年2月19日の記事が最初である。

(29) …最急症所謂電撃性炎は毫も前徴なくして頭痛項背痛^{けいれん}痙攣昏睡等の諸症頓発し

²⁰ 管見の限り、ほかの資料でも、「経攣」という表記は一例も見あたらなかった。

時を移さずして斃るゝ…

『朝日新聞』「脳脊髄膜炎症候及経過概略」1888.2.19 朝刊

4.4.7 日本の国語辞典にみる「痙攣」

最後に、日本の国語辞典に収録された状況を調査する。明治期の代表的な国語辞書における「痙攣」の語釈を表4にまとめて示す。

「痙攣」は1889年の『和漢雅俗いろは辞典』にすでに収録されており、その後の辞書にも立項されている。また、品詞についてはいずれも名詞と掲載されており、動詞や形容動詞とは記述されていないことが確認できる。

表4 明治期の代表的な国語辞書における「痙攣」の語釈

発行年	書名	「痙攣」の語釈
1889	『和漢雅俗いろは辞典』	(名) ひきつり、つりかがみ
1891	『言海』	(名) 医術ノ語、筋ノ引キ釣ル事。
1893	『日本大辞書』	(名) 漢語。病氣ノ名。体の筋肉ガ引キ釣ルコト。「癱ニ由ッテけいれんヲ起コス。」
1897	『日本新辞林』	(名) 疾病の名、筋肉の引き釣るもの
1898	『ことばの泉：日本大辞典』	(名) 病の名。筋のひきつるいたみ
1907	『辞林』	(名) 筋肉の引きつること

4.5 現代日本語における「痙攣」

『大辞林 第4版』(2019)では、「痙攣」の品詞は、はっきりと名詞、サ変動詞と提示されている。なお、例文にも動詞として使われているものが取り上げられている。

(30) 【痙攣】 (名) スル

筋肉が不随意に急激な収縮を起こす現象。収縮と弛緩を繰り返す間代性の場合と持続的に収縮する強直性の場合がある。てんかん・ヒステリー・脳腫瘍・中毒・高熱などを原因とする。「足が一する」

また、「現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）」で「痙攣」を検索すると、
(31)、(32)、(33)のように、動詞として使われる場合が珍しくない。つまり、現代日本語において、「痙攣」は、名詞だけでなく、動詞としての使い方も定着しているのである。

(31) 最後に身をよじって痙攣しながら、唇を乳白色の歯の奥に引っこめて、痙攣笑
いの典型的な症状を示し、舌を吸いこみ、嘔吐して、死ぬ。

ブライアン・ホール著 浅岡政子訳『サスキア』1997

(32) 身体をビクンと痙攣させるふりをして呻いた核の横に、トシが慌てて膝をつく。

榎田尤利『エロティック・パフューム』2003

(33) 背任、横領、恐喝—と単語の一つ一つを聞くたびに老人の乾いた臉が痙攣した。

内田康夫『記憶の中の殺人』2003

4.6 中国語における「痙攣」

続いて、中国語における「痙攣」について見ていこう。

4.6.1 清の末期の資料にみる「痙攣」

「痙攣」という語がまだ中国に伝わっていないとき、中国では、どんな訳語が用いられていたのだろうか。

来華宣教師ホブソンが編著した医学英華辞典である『医学英華字釈』（*A Medical Vocabulary in English and Chinese* 1858）では、婦科名目（TERMS USED IN MIDWIFERY）の分類の下に、「convulsions」という項目があり、その訳語は、「癇症」とある。

また、フライヤー（傅蘭雅 John Fryer）が口述し、趙元益が筆述した『儒門医学』²¹

²¹ 『儒門医学』は、Frederick W.Headland（海得蘭）の *The Medical Hand Book* を底本に、フライヤーが口述し、趙元益が筆述した。江南製造局から出版された。（沈（1996:84）による）

(1876) では、「腹痛抽筋」、「四肢抽筋」などの語が見られる。

続いて、台湾中央研究院近代史研究所の『英華字典資料庫』と専門語彙集 *Technical Terms English and Chinese* (1904) を用いて、英華辞典における訳語の状況を把握する。表 3 で見た英語の原語「cramp」、「spasm」、「convulsion」を検索して、それらの記述を表 7 にまとめて示す。

英華辞典において、「抽筋²²」、または「転筋」が訳語として一番多く用いられている。なお、「痙攣」は、『顔惠慶英華大辞典』に初めて現れているにもかかわらず、「spasm」の訳語の一番目に置かれている。その後出版された辞典では、すべて「痙攣」は収録されているが、順番は多少後ろに来ている。

表 7 華英・英華辞典にみる「痙攣」の関連訳語

発行年	書名	cramp	spasm	convulsion
1822	『英華字典』 (モリソン)	抽筋		
1844	『英華韻府歷階』 (ウィリアムズ)	抽筋症	麻木	
1847-48	『英華字典』 (メドハースト)	抽筋		
1866-69	『英華字典』 (ロブシャイト)	抽筋	抽筋、転筋	
1872	『盧公明英華萃林韻府』 (ドーリットル)		麻木、抽筋	
1884	『井上哲次郎訂増英華字典』	抽筋	抽筋、転筋	
1899	『鄭其照華英字典集成』	抽筋症	抽筋	動、抽筋之疾、 癰症
1904	<i>Technical Terms English and Chinese</i>	抽筋、転筋	抽筋	抽筋、抽筋
1908	『顔惠慶英華大辞典』	転筋、抽搐	<u>痙攣</u> 、抽搐、抽筋、 転筋、中気、一時 絶気、硬抽、陣抽	痙攣、抽筋、抽 筋、抽搐、抽搐、 拘攣、驚症癰、 小兒驚風症

²² 「抽筋」は、『現代漢語大辞典 第7版』(2016)では、「抽筋：筋肉痙攣」と解説されている。つまり、現代中国語では、「抽筋」と「痙攣」は類義語関係にある。しかし、「抽筋」という語はいつからこのような意味を持つようになったのかは不明であるが、これは実に興味深い。なぜならば、「抽筋」は、中国神話の「哪吒」の話の中では、「竜の筋を抜く」という意味で使われたからである（「哪吒」は、明の中国神話小説『封神演義』の登場人物である）。清の王清任『医林改錯』（1830）に、「…有腿無故抽筋者有脚指無故抽筋者…」という記述があり、ここでは、現代中国語の意味として使われていると思われる。

1913	『商務書館英華新字典』	抽筋、痙	抽筋、軋筋、 <u>痙攣</u>	痲、小兒驚風症、 <u>痙攣</u> 、騷動
1916	『赫美玲官話』 (ヘメリング)	抽筋、 <u>痙攣</u> 、 軋筋	抽搐、痙攣、抽、 抽風、 <u>痙攣</u> 、抽著 疼	

4.6.2 雑誌・新聞にみる「痙攣」

筆者の調査によれば、「痙攣」は、雑誌や新聞でも 1900 年代から現れ始める。早期の用例としては、浙江留日同郷会が東京で創刊した『浙江潮』に掲載された「攝魂花」の中に「痙攣」が見られる。「攝魂花」は、喋血生というペンネームをつけた作者が、徳富蘆花の『探偵異聞』にある「毒菓」を底本にして翻訳したものである。([] 内は、日本語原文である。)

(34) 海婁濮兇俗名基督誕降節薔薇乃一種植物其葉根含毒汁如水無異臭味毒人時食之不暴發覺須食他物遇有油質者毒始發過二時乃嘔吐精神昏迷腹痛痙攣極遲過六時終死矣 [抑此ヘレボールと云ふ毒菓は、俗に基督降誕節薔薇と云ふ植物の葉根よりとりたる酸を含みし油質のものにて、一たび之を服用する者は一時間乃至二時間にして劇しき嘔吐を催し、精神昏迷し、劇烈なる腹痛痙攣を起こし、六時間ばかりにして終に死去するものなり。]

喋血生訳『浙江潮』3「攝魂花」1903.4.17

次に、「晩清四大文芸期刊」の 1 つである『繡像小説』に連載していた「売国奴」の中に「痙攣症」が見られる。「売国奴」は、呉禱²³が登張竹風の日本語訳の『売国奴』を中国語で重訳したものである。

(35) 梅克戴得了這意外奇事兀的驚倒身子支靠在窓板上，一手握着自己胸前掛的勳章那指頭好似得了痙攣症一樣只簌簌的抖顫。[目賀田中尉は事の余りに意外なるに

²³ 呉禱 (1880?-1925) は、かつて日本に留学したことがあり日本語に精通していた。彼は、主に清末民初に日本語を通して小説を翻訳した。ロシアなどの外国文学の翻訳も、ほとんど日本語から重訳したものである。(呉 (2010: 15) による)

驚いて倒れかかって窓板で身を支へて、自分の胸に懸れる勲章に手を出したが、指は痙攣たやうに唯顫へて居る。]

呉禱訳『繡像小説』42「売国奴 第九回」1905

新聞においては、1905年の『新民叢報』記事と1906年の『申報』に掲載された広告に「痙攣」、「胃痙攣」の使用が見られる。

(36) 若吾人當睡眠而不用其腦髓之時或脊髓之一部麻痺試以外物刺激直變動而起痙攣者事所屢見（若しわれわれが睡眠して脳を使わないときや脊髓の一部が麻痺しているときに、外部の刺激にすぐに反応し、痙攣を起こすことは、しばしば見られる。）

『新民叢報』70「養心用心論」1905.12.11

(37) 胃活專治効力 隔食・胃弱・多年弱・胃痰・胃痛・胃痙攣（即或時疾筋）食物不進・胸痞（食物不消化故胸積弊）宿醉（即昨日飲酒今日尚醉）惡心嘔吐（見食吐）吐酸嘈雜・膨脹・或小兒吐乱等一切之胃症苦少服之則靈驗如神云（胃を活性化する治療効果：消化不良、胃の衰弱、多年にもわたる衰弱、胃痰、胃痛、胃痙攣（即ちあるときに引き攣る）、食欲不振・胸痞（食物が消化できないためお腹にたまる）、宿醉（即ち二日酔い）吐き気、嘔吐（食吐を参照）、胃中のものを吐く、膨張あるいは小兒嘔吐など、すべての胃の病症に少し飲めば治る。）

『申報』「開胃妙藥世無其匹」1906.3.1

4.6.3 書籍にみる「痙攣」

清の末期に日本へ留学した留学生たちの一部は、東京で「教科書訳集社」を創立し、「編訳東西教科新書、備各省学堂採用（東西の教科新書を翻訳して、各省の学校に採用されることに備える）。」を宗旨としていた²⁴。そこで初めて出版したのが、『物理易解』で、その中に、「痙攣」が見られる。

²⁴ 呉・蘭（2019: 115）による。

- (38) 多量之電氣通過人身即生痙攣之感或驟死。(多量の電気が人の体を通ると、痙攣の感覚を生じさせ、あるいは、急死に至る。)

陳梶『物理易解』1902

同じく「教科書訳集社」により出版された『中学生理教科書』にも、「痙攣」の使用が見られる。

- (39) 疾病 一、舞蹈病隨意筋頻頻痙攣不能任意伸縮此病属神經病患者宜避激撞並注意於衛生。(舞蹈病は、隨意筋がしばしば痙攣を起こし、自由に伸縮することができなくなる。この病気が神経病の患者に見られる場合、患者との激突を避け、衛生に注意すべきである。)

何燭時訳『中学生理教科書』1902

上記の(38)、(39)は、筆者が調べた資料における限りでは、最も早い用例となる。ほかに、物理学の教科書と衛生学の諸書などに、「痙攣」を用いる用例が発見できる。

- (40) 又其一端着蛙之后肢而与地連絡轉發電即蛙之后肢屈伸如活是与指頭近發電機時覺痙攣同一生理作用也。(また、カエルの後肢と地面を繋いで電気を通すと、カエルの後肢は生きているように伸び縮みする。これは指先が発電機に近づいたときに感じる痙攣と同じ生理作用である。)

林国光訳『中等教育物理学』1906

- (41) 直至血液之水尽吸至腸胃。而嘔瀉之。当血質濃厚之時。脚生痙攣。(血液の中の水分が全部胃腸に吸収され、嘔吐下痢が起こる。血液が濃くなると、足に痙攣が起きる。)

俞慶恩『学校衛生講義』1915

- (42) 脈搏不整而微。並致失神痙攣等。然多不如前者之劇烈或加以治療其発作因而緩解。(脈拍が乱れ、弱くなり、さらに失神痙攣などに至る。但し前者の激しさには及ばず、治療すれば発作は緩和できる。)

医書では、丁福保が訳述した『臨床病理学』(1912)に、「強直性痙攣」、「声門痙攣」、「声帯痙攣」など、「痙攣」に関する語が10回以上現れている。

さらに、商務印書館が校訂し出版した『中華民國新法令』(1914)の中に、陸軍部が制定する陸軍の体格検査規則では、「顔面麻痺或痙攣（顔面麻痺または痙攣）」の場合、不合格とするという規則が書かれている。

4.6.4 辞書にみる「痙攣」

「痙攣」は、『辞源』の初版(1915)にすでに収録されており、『辞海』の初版(1936)にも確認できる。

(43) 【痙攣】

体中大部分筋肉牽引。挙止不随之病。有強直性迭代性兩種。局部筋肉収縮。或反戻弯曲挺伸之類。謂之強直性痙攣。収縮弛緩。相為更代。其處頻覺震動。謂之迭代性痙攣。腦及脊髓神經受病時。往往發此病。重者至癲癇。(体の大部分の筋肉が引っ張られ、行動が不随意になる病気である。痙攣には、強直性と間代性の2種類がある。局部の筋肉の収縮、或いは反り返り、伸びなどを、強直性痙攣という。筋肉の収縮と弛緩の繰り返しにより、しばしば震えを感じることを、間代性痙攣という。脳や脊髓の神経が病気になったとき、しばしばこの病気が起きる。重度の場合は、癲癇になる。)

陸爾奎主編『辞源』1915

(44) 【痙攣】(convulsion)

医学名詞。為筋肉緊張亢進之現象、發作時、筋肉常為不自然之抽縮、如子癇、小兒急癇之類、重者宛如癲癇。有二種：肌肉収縮而強直、手足頸項等呈反戻、弯曲、挺伸等状者、曰強直性痙攣；其収縮遲緩、僅不時感覺震動者、曰間歇性痙攣。

(医学用語。筋肉が緊張し、亢進する現象で、発作の時、筋肉は常に不自然に収縮する。子癇、小兒急癇など、重度の場合は癲癇のようになる。痙攣には2種類ある。筋肉が収縮し、こわばって、手足と首などが反り返ったり、曲がったり、

伸びたりする状態を強直性痙攣と呼ぶ。その収縮が遅く、時々震動を感じる状態を間歇性痙攣と呼ぶ。)

舒新城ほか編『辞海』1936

医学英華辞典の『医学名詞彙編』(1931)には、「convulsion」の訳語は、「驚厥、搐搦」とあるが、「cramp」と「spasm」の訳語はすべて「痙攣、抽搐」とある。また、『高氏医学辞彙 第9版』(1939)では、「cramp」と「spasm」の訳語は、それぞれ「痙攣、痛性痙攣」、「痙攣」とある。このような訳語の選定は、『英漢医学詞彙』(1991)でも踏襲されている²⁵。

『漢語大詞典』(1986-1993)における「痙攣」の用例をみると、ほとんどが新中国建国以前の文学作品から取り上げられているため、これまで見た中国語の用例に比べて、多少特殊な使い方になっている。特に②の用法について、筆者の調査の限りでは、ほかに用例が見当たらなかったため、艾青独自の用法であると思われるが、ここでわざわざ1つの用法として記述したことは興味深い。

品詞については、名詞(巴金の例)と動詞(魯迅、郭沫若の例)の用例が見られる。

(42) 痙攣

①肌肉突然緊張，不自主地抽搐的症狀。(筋肉が突然緊張し、不随意に痙攣を起こす症状)

※魯迅《而已集・文学和出汗》：“在中国，從道士聽論道，從批評家聽談文，都令人毛孔痙攣，汗不敢出。”(中国では、道士から道を論じることを聞いたり、批評家から文を語ることを聞いたりすると、いつも毛穴が「痙攣」し、汗が出なくなる。)

※巴金《奴隸的心》：“我看見他的臉上起了一陣可怕的痙攣。”(彼の顔にはひどい痙攣が起きていた。)

²⁵ 『英漢医学詞彙』(1991 人民衛生出版社)には、「convulsion」、「cramp」、「spasm」の訳語がそれぞれ、「驚厥、抽搐」、「痛性痙攣」、「痙攣」とある。

※郭沫若《屈原》第五幕第二場：“俄而嬋娟臉色漸變，全身痙攣。”（俄かに嬋娟の顔色は変わり、全身が痙攣した）

②猶顫動。（震えるようなさま）

※艾青《街》詩：“一天，成隊黑翼遮滿這小城的上空，一陣轟響給這小城以痛苦的痙攣。”（ある日、列をなした黒い翼が町の上空を覆い、しばらくの間その大きな響きが町に苦痛なまでの「痙攣」を与え続けた。）

※艾青《手推車》詩：“在黃河流過的地域，在無數的枯乾了的河底，手推車以唯一的輪子，發出使陰暗的天穹痙攣的尖音。”（黄河が流れる地域で、無数の枯れた川底で、手押し車のただ1つの車輪が暗黒な空を振るわせる高い音を立てている。）

なお、『現代漢語詞典 第7版』（2016）では、「痙攣」は、「動詞」とされている。

（43）【痙攣】 動

筋肉緊張，不由自主地収縮。多由中枢神経系統受刺激引起。（筋肉が緊張し、不随意に収縮すること。多くは、中枢神経の系統が刺激を受けたことによって引き起こされる。）

4.7 まとめ

この章では、「痙攣」の成立や受容について考察を行ってきた。

「痙攣」は、江戸時代の蘭学者宇田川玄真が、「ひきつる」を意味するオランダ語「*kramp trekking*」の訳語として創出した医学用語である可能性が高い。語構成から分析すると、「痙攣」の語順は、中国語造語の可能性が低く、和製漢語であると考えられる。「痙攣」という語の造語については、『金匱要略』などの中国古典医書を参考にして、「痙」と「攣」はともに「ひきつる」という意味を有していることから、この2つの漢字を組み合わせたと考えられる。「痙攣」という語が確実に定着したのは、1870年代である。それは、英和辞書における「*cramp*」、「*spasm*」、「*convulsion*」などに対する訳語として「痙攣」が多く使われており、当時の外国医学書を翻訳する際にも、多用されている

ことから確認できる。その後、1880 年ごろに新聞記事にも現れ、1890 年ごろに国語辞書に収録されるようになった。さらに、1900 年以降、医学以外の分野にも使用されるようになり、「ひきつる」という症状を指すだけでなく、文学作品では「揺れている状態」を表す用法でも使われている。なお、辞書には、多く「名詞」と掲載されているが、実際には動詞や形容動詞としても用いられている。現代日本語では名詞以外に、動詞の用法も定着している。

中国語においては、「痙攣」は、教科書の編訳、雑誌における日本小説の翻訳・重訳、英華辞典の編纂など、いくつかのルートによって中国にもたらされた。こうした多面のルートの伝播により、この語は早くに中国人に理解され、その後に出版された様々な種類の書物に使用されるようになった。特に『辞源』の初版に収録されたことにより、その伝播の速度が一層高まったと思われる。さらに、1930 年代の『辞海』（初版）や英華医学辞書に収録されたことから、「痙攣」は完全に中国語に定着したと考えられる。なお、中国語における「痙攣」の用法は、用例を見るかぎり、日本語の用法や品詞などと相違がないと考えられる。ただし、文学作品においては、日中いずれも作者による特殊な使用方法があることが確認できた。

【第 4 章の参考文献】（辞書類は巻末にまとめて挙げる）

荒川清秀（2000）「「健康」の語源をめぐって」『文学・語学』166, 72-82 全国大学国語国文学会

荒川清秀（2020）『漢語の謎—日本語と中国語のあいだ』ちくま新書

沖森卓也編（2008）『図説日本の辞書』おうふう

沖森卓也編（2017）『図説近代日本の辞書』おうふう

王敏東・許巍鐘（2005）「「扁桃腺」という言葉の成立について 付：関連語彙にも触れながら」『国語語彙史の研究』24, 1-17 大阪大学

何華珍（2011）「近代日中間における漢語の交流の歴史」「特集 近代の漢語」『日本語学』30-8, 16-31 明治書院

呉燕（2010）「『燈臺卒』をめぐって」『清末小説』33, 11-30 清末小説研究会

呉洪成・藺士琦（2019）「清末留日学生編訳教科書活動述論」『瀋陽師範大学学报』2019 年 5, 113-119 瀋陽師範大学

佐藤亨（1980）『近世語彙の歴史的研究』桜楓社

- 沈国威（1996）「近代における漢字学術用語の生成と交流—医学用語編（1）」『文林』30, 59-94 神戸松蔭女子学院大学
- 朱京偉（2011）「日本の近代漢語の来歴」『特集 近代の漢語』『日本語学』30-8, 4-15 明治書院
- 鄒文君（2016）「反転語「素因」・「因素」について：語彙史を中心に」『立教大学大学院日本文学論叢』16, 201-213 立教大学
- 杉本つとむ（1961）「近代日本語の成立 一洋学との関連において一」『国語学』46, 52-68 国語学会
- 関場不二彦（1933）『西医学東漸史話 卷下』吐鳳堂書店
- 陳愛文・于平（1979）「並列式双音式的字序」『中国語文』2, 101-105 商務印書館
- 陳力衛（2016）「なぜ日本語の「気管支炎」から中国語の“支気管炎”へ変わったのか」『日中語彙研究』6, 1-25 愛知大学中日大辞典編纂所
- 永嶋大典（1970）『新版 蘭和・英和辞書発達史』講談社
- 野村雅昭（1988）「二字漢語の構造」『日本語学』7-5, 44-55 明治書院
- 深瀬泰旦（1996）「『医語類聚』（奥山虎章）と Medical Lexicon (Robley Dunglison)」『日本医史学雑誌』42-2, 66-67 日本医史学会
- 真柳誠・友部和弘（1992）「中国医籍渡来年代総目録（江戸期）」『日本研究』7-46, 151-183 国際日本文化研究センター
- 梁艶・王玉（2020）「喋血生：曇花一現的清末小説翻訳家」『清末小説から』136, 32-40 清末小説研究会

第5章 「貧血」

5.1 はじめに

明治初期に、日本ではオランダ医学が退潮し、英米系医学、ドイツ医学が学ばれるようになった。新しい医学理念の受容とともに、新しい医学用語の翻訳も始まった。

「血液」、「血液の全身循環」に関する概念については、依然漢方のものも使われたが、病理を究明した西洋医学が伝わったことによって、「血液」に関する知識があらためられた。明治期に活躍した医者たちは、西洋医学書を翻訳するにあたって、既存する言葉が見つからなかったため、新しい言葉をつくらざるを得なかった。「貧血」は、そのときに生まれた医学用語だと考えられる。

この章では、「貧血」という語の成立について、それが日本で生まれ、受容された経緯を解明する。また、この語がいつごろ中国へ伝わり、どのように中国語に受容されたのかについても明らかにすることを目的にする。

5.2 「貧血」とは

「貧血」はどんな病気だろうか。『日本大百科全書』には、次のようにある。

(01) 貧血

血液の一定容積中の赤血球つまりはヘモグロビン（血色素ともいい、赤血球全重量の3分の1を占める）が減少している状態をさす。正常範囲は、赤血球は1立方ミリメートルに400万～500万個、ヘモグロビンは1デシリットル中に12～16グラムである。赤血球が1立方ミリメートル中350万個以下、ヘモグロビンが1デシリットル中11グラム以下であれば確実に貧血といえる。ヘモグロビンの減少により酸素と二酸化炭素のガス交換が低下するため、組織では酸素が減少して貧血性の低酸素状態となる。紛らわしいものに脳貧血という状態があるが、これは、脳を流れている血液量が減少して脳の低酸素症をおこし、一過性の意識障害を伴う。脳だけについていえば血液が少なくなっているのが貧血であるが、体全体からみれば赤血球、ヘモグロビンは正常である。したがって、貧血は全身的なもので、局所的な循環の低下による虚血は貧血とはいわない。

[伊藤健次郎]

また、国立国語研究所「病院の言葉」委員会が2009年に発行した『「病院の言葉」を分かりやすくする提案』の中では、「貧血」の定義とその症状について以下のように解説している¹。

(02) 血液中の赤血球や、赤血球に含まれる色素であるヘモグロビンが減り、異常な色素になって、全身の細胞に酸素を運ぶ働きに異常が起きることを「貧血」といいます。酸素を運ぶ力が足りなくなると、疲れやすくなり、動悸（どうき）・息切れ、めまい、頭痛などの症状が起こります。貧血の原因には、赤血球を作ることができない、赤血球が壊されている、知らないうちにどこからか出血している、などのことが考えられます。

さらに、一般の人がいう「貧血」と、医師の診断の「貧血」とは別の病気であることを説明している。日常語で「貧血」という場合は、主に気持ちが悪くなって立ちくらみを起こして倒れる「脳貧血」のことを指していて、これは「貧血」とは違うので、混同を避けるため、病院で使う「貧血」を「血液が薄くなっています」、「赤血球が少なくなっています」などと説明し、「脳貧血」を持ち出して、それとの違いを説明する必要があると指摘している²。

要するに、「貧血」とは、赤血球や、ヘモグロビンが減っている状態をいうが、普段われわれが簡単に口に出す「貧血」は、気持ちが悪くなったり、めまいを感じたりするときにも用いる。日常生活では差し支えないが、病院で使っている「貧血」は、医者はきちんと患者に説明しなければならないということである。

5.3 「貧血」の成立

5.3.1 『日本国語大辞典』の記述

「貧血」という語の成立に関する考察の手がかりとするため、『日本国語大辞典 第2版』（以下『日国』）を調べたところ、「貧血」だけでなく、「貧血症」も収録されて

¹ 「48.貧血（ひんけつ）」 <https://www2.ninjal.ac.jp/byoin/teian/ruikeibetu/teiangou/teiangou-ruikeib/hinketu.html>

² 『「病院の言葉」を分かりやすくする提案』では、一般の人々の「貧血」の認知率は極めて高いが（99.7%）、その意味を「赤血球が減る病気」と正しく理解している人は「必ずしも多くない」（理解率77.0%）と説明している。

いた。それらの記述を表1にまとめる。

表1 『日国』における「貧血」と「貧血症」の解説と用例

語	【貧血】 [名]	【貧血症】 [名]
解説	血液中の赤血球ならびにヘモグロビンが減って、健康人の九〇パーセント以下になった状態。からだがだるい、顔色が青白い、また動悸・息切れなどの症状を呈する。出血、栄養不足、骨髓疾患、腎疾患などの原因で起こる。	貧血を主訴とする病気。
用例	<p>＊医語類聚〔1872〕〈奥山虎章〉「Hypohaemia 貧血」</p> <p>＊それから〔1909〕〈夏目漱石〉一六「卒倒は貧血（ヒンケツ）の為だと云った」</p>	<p>＊茶話〔1915～30〕〈薄田泣菫〉頤の外れたのを治す法「渋柿の実が貧血症（ヒンケツセウ）のやうに青い顔をしてゐるのを」</p> <p>＊平戸廉吉詩集〔1931〕〈平戸廉吉〉素朴な記号「汝、貧血症患者のデパートメントに我は原始的熱の一塊を見舞はん」</p>

「貧血」と「貧血症」の語釈を見ると、「貧血」は病状で、「貧血症」は病気の名称であることがわかる。『日国』の用例のうち、最も早いものは、奥山虎章が編著した『医語類聚』（1872）である。これを手がかりとして、『医語類聚』と同時代（明治初期）に出版されたほかの英米系医学訳書を調べたところ、桑田衡平が訳述した『内科摘要』に、「貧血症」を見つけた。

『医語類聚』増補版の「引」には「第一版ハ明治壬申³初秋」とあり（図1）、『内科摘要』巻一の表紙には「明治壬申初冬新鐫」とある（図2）ので、両書は同時期の成立である。これで、「貧血」の初出については、以下の可能性があると考えられる。

①『内科摘要』と『医語類聚』より以前に「貧血」がつくられ、明治5年にはすでに使われていた。

②2人のうち、いずれかが「貧血」を造語した。あるいは両者で検討を行った。

このうちの①については、筆者の調査の限りでは、『内科摘要』と『医語類聚』より以前に出版された医学書に「貧血」は見つからなかった。周知のように、明治以前の洋学は、蘭医学が主流だったので、「貧血」が現れそうな医学書や蘭和辞書を調べたが、「貧

³ 明治壬申は、明治5年1月1日（1872年2月9日）～明治6年1月12日（1873年1月12日）である。この間に、太陽暦が採用され、明治5年12月2日の翌日が明治6年1月1日になった。

血」だけでなく、それに近い言葉も現れなかった。ここから、①の可能性は低く、②の可能性が高いと考えられる。

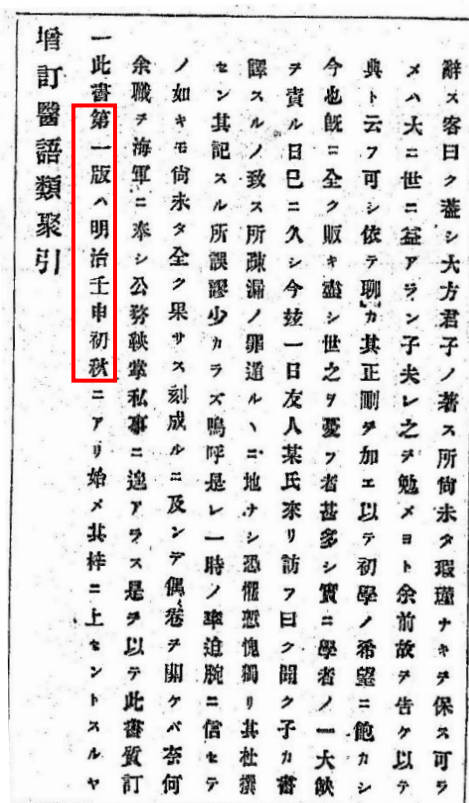


図1 『医語類聚』増補版の「引」

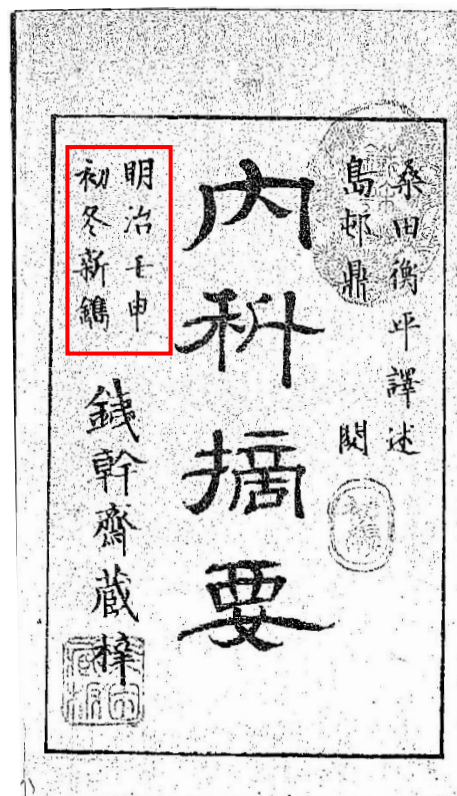


図2 『内科摘要』巻一の表紙

(国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/833035>
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/834932>)

5.3.2 「貧血」の造語に関わった人々

では、「貧血」は誰が作ったのだろうか。『医語類聚』と『内科摘要』、またこの2冊を書いた著者について調査を行った。結論を先にいえば、「貧血」は、『内科摘要』の著者である桑田衡平の造語だと思われるが、『医語類聚』の著者である奥山虎章も、それに関わっていた可能性がある。

5.3.2.1 『医語類聚』とその著者奥山虎章（および奥山虎炳）

『医語類聚』は、その序文によると、奥山虎章が当時の著名な医語辞典、『動氏医用字書』

⁴を翻訳した英和医学辞典である。当時は、学生用の医語辞典はまだ出版されていなかった

⁵。初版は、明治5年（1872）に名山閣から出版され、1878年に増訂版が出版された。

著者の奥山虎章は、慶応4年（1868）の8月に横浜軍陣病院で勤務していて、同年の10月にそこをやめ、東京の大病院に転勤した。そして、明治3年（1870）に鹿児島医学校で教師や医員として勤め、明治4年（1871）に海軍病院に勤務し、明治6年（1873）に海軍大軍医に昇進した。しかしその1年後に海軍医官を退官した。

奥山虎章は、海軍病院に出仕していたときに、半井成質とともに海軍病院におけるエドウィン・ホイラーの解剖学講義を翻訳し、明治4年（1871）に『講筵筆記』として出版した。当時翻訳にあたって適切な訳語が見つからなかったことと、学生のための医語辞典がなかったことが、『医語類聚』編纂の契機になった。

奥山虎章の書いた『講筵筆記』の例言と『医語類聚』の「引」は、兄の奥山虎炳⁶が書いている。奥山虎章がどのように英語を学んだか、その経緯に関する資料は見つからなかったが、兄の奥山虎炳が、堀達之助から英語を学んでいることから、奥山虎章も同様に堀達之助から英語を学んだことが推測される。少なくとも、堀達之助の影響を受けたと思われる。

5.3.2.2 『内科摘要』とその著者桑田衡平

『内科摘要』は、病気を病理から分析し、その原因と療法とを詳細に記した内科書で、明治期には医学の教科書としても使用された。巻一の「凡例」によると、『内科摘要』の原書⁷は、ハルツホールン⁸氏が1869年に出版した「内科総論兼治療法」の第2版であり、原

⁴『動氏医用字書』の著者のロブリー・ダングリソン Robley Dunglison（1798-1869）は、イングランドのケスウィックに生まれ、エディンバラ大学を卒業した。1825年に招請をうけてアメリカにわたって教授に就任した。1833年にメリーランドの大学教授となり、1836年からはジェファーソン医科大学教授に就任して33年間その地位にあった。ダングリソンは、解剖学、薬物学、外科学、生理学のほかに、医史学の講義もおこなっている。レスリー・モートンによると「ダングリソンはイギリス生まれのアメリカでの最初のフルタイムの教授。生理学教科書、医学辞典、医史学の最初の著者」であるという。『動氏医用字書』（*A New Dictionary on Medical Science and Literature*）の初版は、1833年に出版され、『医語類聚』が出版された1873年までに17版を重ねている。第2版から、書名を *Medical Lexicon* にあらためている。（深瀬（1996b: 66-67）による）

⁵ 深瀬（1996a: 39）

⁶ 奥山虎炳は、明治2年（1869）3月に大病院三等医師係に就任し、同年12月に大学校中助教に昇進した。明治4年（1871）9月に大学から兵部省に転属になり、翌年2月に兵部省が陸海軍の二省に分離したさいに海軍省に出仕した。明治6年（1873）には、大医監（大佐相当官）になった。（深瀬（1995: 25）による）

⁷ 原書は、*Essentials of Principles and Practice of Medicine*（1869）である。（阿知波（1982:345））

⁸ ハルツホール（Henry Hartshorne 1836-1905）は米ペンシルヴェニア大学の内科学、保健学助教。

（東邦大学額田文庫デジタルコレクション『華氏内科摘要』の資料解説

https://www.toho-u.ac.jp/archives/nukada_bunko/kaidai/kaidai-13.html

著の構成は、第一編が「原病学徴候学一般療法及ヒ諸病ノ分類」であり、第二編が「各病ノ病理及ヒ療法」である。ただし、桑田衡平が訳した『内科摘要』の構成は、原書のままではなく、各項目は病気ごとに分けられ、各病の総合的解説と病理及び療法が合わされて述べられている。

著者の桑田衡平については、半自伝の『思出草』⁹に詳しい。この本によると、桑田衡平は、武蔵国高麗郡（埼玉県）出身で、安政 3 年（1856）に江戸の坪井信道の門に入ってオランダ語や医学を学び始め、坪井信道の媒介によって桑田立斎の婿養子となった。後に坪井信道の門人籍から除名され、杉田玄端の塾に入って勉学を続けた。その後、美濃国加納藩に、藩医として身を置いたが、イギリスの医術研究のために脱藩し江戸へ帰った。明治元年（1868）に、一時期「大病院」で医者をしていたことがあったが、すぐそこを辞退し、明治 2 年（1869）に又大病院医局で勤めるようになった（以下を参照）。

(03) 慶応四年…十一月…下谷大病院雇医ヲ命ゼラレ…雇医ヲ辞退ス。

『思出草』

(04) …明治二年…四月…十七日開成学校雇医命セラレ月俸拾五円賜ハル十月二十五日大学大得業生大病院医局勤務命セラル医術研究ノ為メニ最モ便益ヲ得テ精勤セリ。

『思出草』

その後、明治 4 年（1871）に陸軍兵部省に転じて、明治 8 年（1875）に内務省に勤め、明治 15 年（1882）に病に罹ったことにより、内務省をやめた。

桑田衡平の英語については、『思出草』に、一部の英書と「ゼーゲル」の英蘭対訳辞書を読んで、独学で習得したと書かれている。

⁹ 『思出草』は、桑田衡平の自伝をその子供たちが編纂し、冊子としてその家族親戚に配布したものである。桑田衡平は『思出草』の巻頭で、「只子孫ニ示スノミ他見ヲ許サズ」と述べているが、歴史的価値を鑑み、子孫の一部の許しを得て公開されたようである。編纂時期は不明だが、1900 年前後のようなものである。（Amazon『思出草』の説明 <https://www.amazon.co.jp/思い出草-幕末・明治時代の医師-桑田衡平の一生-桑田-衡平-ebook/dp/B00UJRGB1G>）

5.3.2.3 「貧血」の造語者

奥山虎章と桑田衡平の経歴をみると、2人は、明治元年～2年に、ともに大病院に勤めている。医書の翻訳に熱心な兩人であるから、そのときに交渉があっただろうと思われる。ここから、「貧血」という語は、2人の共同訳である可能性も考えられるが、筆者は、桑田衡平が「貧血」をつくったと考える。

『内科摘要』の「凡例」(図3)によると、桑田衡平は、次のように述べている。

(05) 書中病名薬名等ハ務メテ先哲ノ訳例ヲ襲用スト雖モ亦其新タニシテ訳例ナキ者ハ仮リニ拙訳ノ字ヲ掲ゲテ必ズ其下ニ原語ヲ附ス

ここから推せば、「貧血症」には「原名 アネミア」(図4)がついているので、「貧血」は、桑田衡平による「拙訳」の可能性がある。

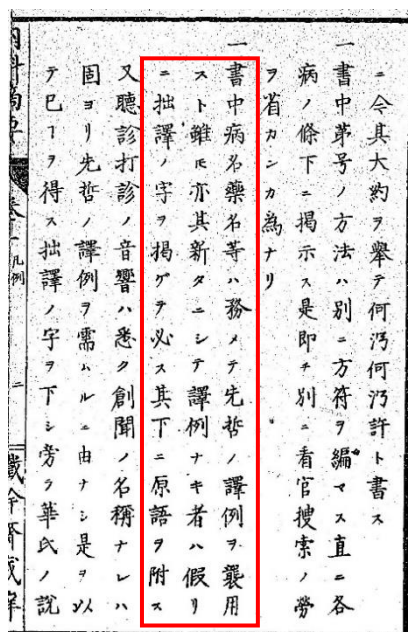


図3 『内科摘要』の凡例

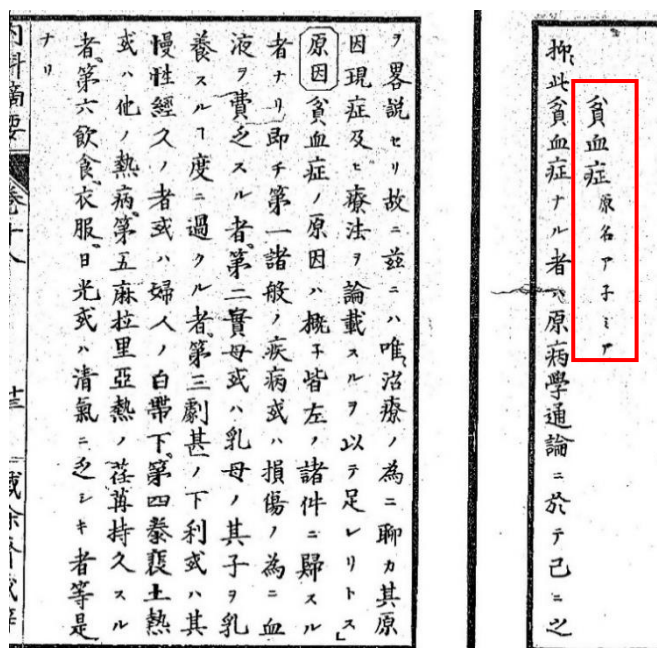


図4 『内科摘要』の「貧血症」

(国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/834932>)

原書 *Essentials of Principles and Practice of Medicine* で確認したところ、「アネミヤ」

は「anaemia¹⁰」であり、「anaemia」には、次のような解説がある（二重線は筆者による。以下同じ）。

(06) Anæmia is the common term indicating poverty of the blood.

Essentials of Principles and Practice of Medicine

原文によると、桑田衡平は、下線の部分「poverty of the blood」を「貧血症」と訳したと思われる。

一方、『医語類聚』では、「貧血」は「hypohæmia」の訳語となっている。「anæmia」の訳語には、「乏血」を用いている。また、『医語類聚』では、さらに「leiphæmia」、「hæmataporia」、「hæmaporia」といった英語についても、「乏血」または「血液乏少」と訳されている。『医語類聚』の訳語と、原書*A New Dictionary on Medical Science and Literature*¹¹の語釈を、表2にまとめて示す。

表2 『医語類聚』における「anaemia」及びその関連語の訳語

見出し語	『医語類聚』の訳語	原書の語釈
anæmia	乏血	privation of blood
leiphæmia	乏血	poverty or paucity of blood
hæmaporia	血液乏少	paucity of blood
hæmataporia	乏血病	paucity of blood
hypohæmia	貧血	deficiency of blood ¹²

さらに、堀達之助の『英和対訳袖珍辞書』とヘボンの『和英語林集成』を用いて、語釈に出ている「deficiency」、「paucity」、「poverty」、「privation」を調査した。それらの記述を表3でまとめて示す。

表2と表3の記述を対照すると、「leiphæmia」は「貧血」と、「hypohaemia」は、「乏血」か「欠血」と訳されるべきかと思われる。表2を見ると、奥山虎章は、「貧」より「乏」という漢字を好んでいるようである。

¹⁰ *Oxford English Dictionary* の「anaemia」の項目によると、「anaemia」は「British English」の綴りで、「anemia」は、「North American English」の綴りである。資料中には、「anæmia」という綴りもあるが、本論文では、引用部分は原文のままとし、それ以外は、すべて「anaemia」に統一する。

¹¹ 調査には、初版（1833）のものを用いた（*Medical Lexicon* も調べたが、記述は全く同じである）。

¹² 原書には、「hypohæmia」に「hypæmia」とあり、「hypæmia」に「deficiency of blood」とある。

表3 『英和対訳袖珍辞書 初版』と『和英語林集成 初版』における

「deficiency」「paucity」「poverty」「privation」の記述

見出し語	『英和対訳袖珍辞書 初版』 (1862) の記述	『和英語林集成 初版』(1867) の記述
deficiency	欠乏．不足	meri (減り)、heri (減り)、kan (欠)、kakeberi (欠け減り)
paucity	僅少ナルヲ	なし
poverty	貧．難渋	bimbo (貧乏) konkiu (困窮) hin (貧) madzshiki (貧しき) hinkiu (貧窮)
privation	奪ヒ取ルヲ．欠ケ．乏シサ	naki koto (無きこと) arazarukoto (非こと)

ここで、もう一度『内科摘要』の検討に戻るが、『内科摘要』の原書では、「anaemia」を「poverty of the blood」としており、「poverty」は、表3によると、「貧」にあたることから、『内科摘要』では、これを「貧血」と訳したと思われる。後ろに「症」をつけた¹³のは、桑田衡平が、「anaemia」を1つの病症ととらえたためと思われる。

以上によって、「貧血症」は、桑田衡平の造語である可能性が高い。ただし、「貧血」という語形は、奥山虎章の『医語類聚』の初版¹⁴に初めて現れている。

5.3.2.4 「貧血」の語構成

「貧¹⁵」は形容詞であり、「血」は名詞で、このような「〈A (形容詞)〉 + 〈N (名詞)〉」の結合は、野村 (1988:50) ¹⁶の二字漢語の結合パターンの「修飾構造」、あるいは「補足構造」に当てはまる。「修飾構造」とは、「難題 (難しい問題)」、「幼児 (幼い児童)」、「悲劇 (悲しい劇)」などのように、前の形容詞が後ろの名詞を修飾する関係である。しかし、「貧血」は、「貧しい血」ではなく、「血が貧しい」という意味であるため、これに当てはまらない。

一方、「補足構造」における「〈A〉 + 〈N〉」の構造は、「無害 (害がない)」、「多才 (才能が多い)」、「少数 (数が少ない)」などのように、形容詞と名詞が格関係をなすため、

¹³ 『内科摘要』の原書には、「症」にあたる言葉がないため、桑田衡平がつけたと思われる。

¹⁴ 『医語類聚』の増補版には、「hypohæmia 貧血症」とある。

¹⁵ 『全訳 漢辞海 第4版』(2017) には、「貧」は、「[1]《形》①まずしい・マツシ。…(ア) 財産や衣食に欠乏するさま。困窮したさま。…(イ) 学問や能力がとぼしい。物事が欠けているさま。…[名詞化] (ア) 困窮した人。(イ) 困窮の状態。まずしさ。②僧や道士がが自称するときに冠することば。…」とある。

¹⁶ 本論文の3.4.3に詳しく挙げている。

「貧血」は、これに当たると思われる。

しかし、ここで新たな問題が派生する。それは、「補足構造」には、「〈A〉 + 〈N〉」だけでなく、「〈N〉 + 〈A〉」というパターンもある。こちらも、同じく二つの要素が格関係をなす。具体的には、例えば、「胃弱（胃が弱い）」、「性善（性格が善良）」などのような語である。では、なぜ「貧血」であって、「血貧」ではないのか。

まず、両者の形容詞を詳しくみると、「〈N〉 + 〈A〉」では、一般的な形容詞がつかわれるのに対して、「〈A〉 + 〈N〉」では、「無」（ない）、「多」（おおい）、「少」（すくない）などが使われる。「貧」は「少」という意味であるため、これに準じて、「貧血」という語順にしたと考えられる。

さらに、明治期に生まれた、英語（ラテン語、ギリシャ語）を原語による医学訳語には、例えば、次のような、直訳という訳語法を用いてつくられたものが多い。

(07) Ablepsia 失明症 [ラテン語：a（無）+ギリ語：dlepsis（視力）+ia（症）]

(08) Appendicitis 虫垂炎 [ラテン語：appendic（虫垂）+itis（炎）]

（高野1984: 18）

Oxford English Dictionary（Oxford英英辞典）¹⁷と、オンラインの *Oxford learners dictionaries*では、「anaemia」の語源について、次のように記述している。

(09) Anaemia n. Etymology: < modern Latin, < Greek ἀναμία want of blood, < Greek ἀν priv. + αἷμα blood.

Oxford English Dictionary

(10) Anaemia n. Word Originearly 19th cent.:via modern Latin from Greek anaimia, from an- 'without' + haima 'blood'.

Oxford Learner's Dictionaries

上記のものに従うと、「anaemia」の語形成は次のようになる。

¹⁷ 本論文では、オンライン版の *Oxford English Dictionary*（Oxford 英英辞典）を利用する。

Anaemia [an (貧) + haima (血)]

つまり、「貧血」という語順は、直訳による順番ということになる（「poverty of the blood」は語順に関係していないと思われる）。

5.4 日本語における「貧血」の普及

5.4.1 医学書にみる「貧血」

「貧血」は、『医語類聚』と『内科摘要』に続いて、長谷川泰が訳した『病理摘要』（1875）に収録されている。その序文によると、『病理摘要』は、長谷川泰が『内科摘要』と同じ原書、ハルツホールンの *Essentials of Principles and Practice of medicine* から訳したもので、『内科摘要』の外編に当たる。「両書ヲ合シテ医家必携ノ書」と述べられている（「両書」とは、『内科摘要』、『病理摘要』）。実は、『病理摘要』では、先述した（06）の英文が、（11）のように訳されている。ただし、ここでは「貧血症」ではなく、「貧血」と訳している。

(06) Anæmia is the common term indicating poverty of the blood.

Essentials of Principles and Practice of Medicine

(11) 貧血ハ血液乏貧ノ常称ニシテ血質稀薄トナリ…。

『病理摘要』「全身之病態 貧血」

ほかには、例えば、『霸氏病理学』（1876）では、「局处貧血症」という語が出現している。また、翻訳書以外の医書では、『類病鑒法』（1878）に「貧血」が、『民間諸病療治法』（1880）と『新撰方彙』¹⁸（1880）に、「貧血病」という語が見られる。

(12) 〔其一局处貧血症〕ハ血液ノ循行障害サルルカ或ハ廃止スルニ由ッテ其部及ヒ其器ノ貧血症ヲ発起ス

¹⁸ 小見出しに「貧血病」とある。

(13) 貧血ト黄胖ノ區別

鎌田秀夫著『類病鑒法』1878

- (14) 貧血病といふは精血の不足して色青白く唇も紅色ならず動すれば少しく水気あるものにて体の疲労多く…

松本順述『民間諸病療治法』1880

医学雑誌『中外医事新報』の第71号に、「悪性進行性貧血」という記事が見られる。

(15) 悪性進行性貧血

蘭医ノーレン氏ハ二個ノ悪性進行性貧血患者ヲ解屍シテ胃粘膜ノ組織内ト胃腺ノ局処或ハ全体悉縮ヲ見タリ氏由テ説ヲナシテ曰ク該貧血ハ胃患ノ為メニ誘起セラル、ヲ甚ク多カルヘシト

『中外医事新報』71 1883

また、「脳貧血」という用語も、この時期の『斯泰涅爾小児科』（1876）や『病理各論』（1880）にすでに見られる（図5、図6）。『斯泰涅爾小児科』には、その症状について、「頭痛、眩暈、五神謬錯、無力…」とあり、『病理各論』には、「患者ノ急に起立スルニ由テ頭部ノ血液チ下降シ以テ昏暈ヲ発スル」とある。これは、『「病院の言葉」を分かりやすくする提案』に述べられている「脳貧血」の症状と一致する。

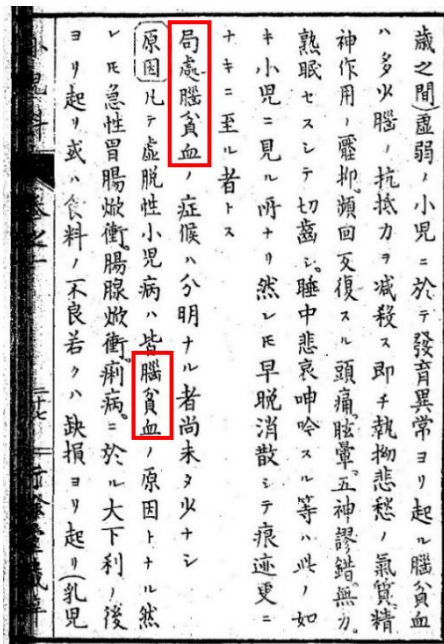


図5 『斯泰涅爾小兒科』の「脳貧血」

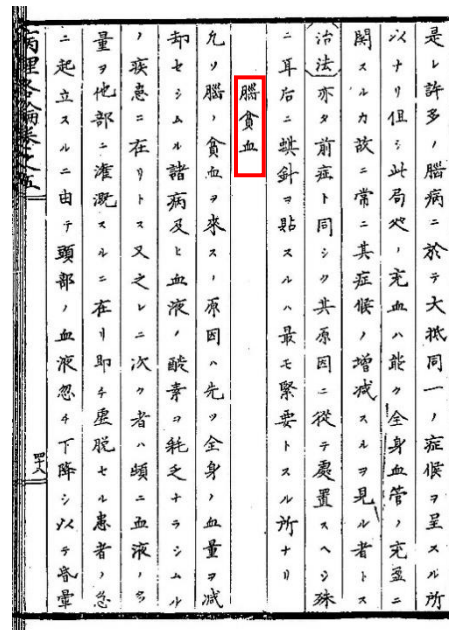


図6 『病理各論』の「脳貧血」

(国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/835458>
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/834101>)

5.4.2 対訳辞書にみる「貧血」

『和英語林集成』を見ると、初版（1867）と再版（1872）には「貧血」は未収録であるが、三版（1886）に収録されていることから、「貧血」は、1870～80年代に、一般に普及したことがわかる。その後の対訳辞書には、「貧血」、「貧血症」、「貧血病」などが収録されている。

表4 対訳辞書における「貧血」の収録

発行年	書名	ANEMIA
1867	『和英語林集成 初版』	未収録
1872	『和英語林集成 再版』	未収録
1886	『和英語林集成 三版』	和英の部 Hinketsu <u>貧血</u> (med.) anemia 英和の部 anæmia <u>Hinketsu</u> (貧血)
1899	『懷中和羅独英医語辞典』	Hinketsu 貧血 anaemia,oligaemia.
1900	『独羅英和医学字彙』	anemie <u>貧血病</u>
1905	『医学新字典 :独羅和訳』	anaemie <u>貧血</u>
1910	『和羅独英新医学辞典』	anaemia <u>貧血</u>
1931	『研究社新和英大辞典』	<u>貧血</u> [症] n. (医) anaemia (米) anemia ~no (の) a. anaemic. ~suru (する) v. Become anaemic;be impoverished of blood.貧血して (貧血症に患って) be (suffer from) anaemia.
1936	『標準医語辞典 : 独・羅・英・仏・和』	anaemia <u>貧血</u>
1949	『医学用語集第一次選定』	<u>貧血</u> anaemia

5.4.3 新聞にみる「貧血」

続いて、「貧血」の新聞における使用を見るため、読売新聞のデータベースである「ヨミダス歴史館」を使って、「明治・大正・昭和（1874－1989）」で「貧血」を「見出し検索」してみたところ、401件ヒットした。そのうち、明治期のものは72件、大正期のものは10件、昭和期のものは319件であった。『読売新聞』の最初の用例は、1882年2月24日の広告である。

(16) 幾那鉄舍利別 効能○貧血性諸病○労症○肺病○諸病後○産後

1882.2.24 朝刊

『読売新聞』における「貧血」の複合語には、(16) の「貧血性」のほかに、(17) の「慢性貧血」、(18)、(19) の「貧血症」などが見られる。

(17) …種々精査せられたるに本病は十二指腸虫に因する慢性貧血即ち十二指腸虫
病たる事を証明し…

1890.5.4 朝刊

(18) 独逸国バイエル会社の製剤「ソマトーゼ」ハ^{ひんけつしやう}貧血症のものに最も有効の食料品にて…

1902.5.15 朝刊

(19) 元来日本人は^{ひんけつしやう}貧血症の多き国民にて故樫村博士は之が治療に関して多年研究し終に成功する。

1907.11.25 朝刊

用例(20)の「貧血」は、「脳貧血」という意味で使われていると思われる。

(20) 十五日午前十一時ごろ神田錦町一の一湯屋原崎文三方に入浴に来たれる年齢五十前後地方の商人体の男板間にて^{ひんけつ}貧血を起こし死亡したり

1909.3.16 朝刊

なお、『朝日新聞』の最初の用例(21)は、『読売新聞』より10日早い。ここから、新聞における「貧血」の使用は、1882年ごろからであるといえる。

(21) 独逸皇帝陛下には先程より不予にあらせられしが右は最早春秋高くいらせらるゝが為に氣力も前年の如くましまさず又斯く脆弱になり給ひしは^{ひんけつ}貧血の来す所なりと云ふ

1882.2.14 朝刊

5.4.4 文学作品にみる「貧血」

文学作品における「貧血」の使用を見るため、「青空文庫」と『日本語歴史コーパス』(CHJ)を利用した。

今日、「貧血」という語は、名詞としてしか使われない。しかし、明治・大正期の文学作品では、(22)、(23)のように、「貧血な」という形容動詞の用法でも使われている。

(22)、(23)は、同じ作者、森鷗外(森林太郎)によるもので、両者とも、人の「血色

の無く、顔が蒼白でありあまり元気でない」状態を描写するのに用いられている。

- (22) 急いで逢ひに出て見ると、長谷川辰之助君は青み掛かった洋服を着てすわつてをられた。私の目に移った人は骨格の逞しい偉丈夫である。浮雲に心理状態が匂がかれてゐるやうな、貧血な、神経質な男ではない。

森林太郎『長谷川辰之助』1909

- (23) 障子が二三寸開いて、貧血な顔の切目の長い目が覗く。微笑んでゐる口の薄い唇の奥から、真つ白い細く揃った歯がかがやく。

森林太郎『身上話』1910

(24) は、メタファー表現で、「多彩ではない」景色のことを、「貧血な景色」と表現したと思われる。

- (24) 故郷を二十年も離れて日本南方の海の明るさに感心し続けて来た感銘では、今故郷の津軽の海を見たとして貧血な景色だと映る位の事で、特別な興味も無からうと思ひながら、G一公園の海水浴場へこれから行くといふ友達一家の人達と、A一市に滞在中の或る日、自動車で押出したことがあつたが、公園入口の松原で皆々下車するあたりから、わたしの見込みは崩れはじめた。

福士幸次郎『地方主義篇（散文詩）』1929

(25)、(26) のように、動詞として用いる「貧血」もある。ただし、(25) の場合、連体修飾語として使われているので、形容詞的な性質の用法といえるだろう（これもメタファーであろう）。

- (25) この矛盾を解決してくれるものはないか？ 詩にみちた、かぐわしい、帆船時代をとり戻すために？ そして貧血した帆船業者を、昔の利潤にありつかせるために？

服部之総『黒船前後』1932

(26) 急いで和尚様のお居間へ入っていくと、もう誰かが運んできたのだろう、つつましくふた品ほどのお菜をのせた渋いろの塗膳を前に、角張った顔を貧血させて和尚様は、キッチンと手を膝の上に、控えておられた。

正岡容『圓朝』1943

また、『日本語歴史コーパス』にも、(27) のような、「貧血症」の比喩的な使い方の用例があった。

(27) 何処の陰にかくれけん。信仰は、何処の谷にひそみけん。社界は、貧血症となりつるか、何んぞ、其血の少なきや。

『女学雑誌』「無意識論」1895.6

ちなみに、「青空文庫」に収録されている作品には、(28)、(29)、(30) のように、「脳貧血」の使用がよく見られる。多くの文学者たちは、「貧血」と「脳貧血」とを使い分けられているようである。

(28) まったく地獄の苦しみを続けて来たのですから、軽い脳貧血をおこしたらしく、頭が痛む、嘔気を催してくる。

岡本綺堂『指輪一つ』1925

(29) ただその間も彼はたえず自分の眼底に、さまざまの色の微粒子がちらちらしているのをば感じていたが、そのうち不意にエレヴェタアの下降に伴うような感じで彼の全身がすうとしだすのと同時にそれらの幻覚も一時に消えてしまった。それは明らかに眠りではなかった。それはどこかしら脳貧血に似ていた。

堀辰雄『恢復期』1931

(30) 英介が休暇で戻つてみると、みそのは歌留多で夜を明し、朝になると決つて脳貧血を起した。

牧野信一『淡雪』1936

5.4.5 国語辞書における「貧血」の収録

国語辞書では、「貧血」は、『言海』（1889年～1891年）にすでに収録されており、その後、明治期の主な辞書に収録されている。それらの記述を表5にまとめる。当時の辞書の記述は、「体の血液が足りない」といった程度の簡単なものであり、病理的な説明は省かれている。

表5 国語辞書における「貧血」の語釈

発行年	書名	「貧血」の語釈
1889-1891	『言海』	病ニ因テ血ノ不足ニナル事。
1893	『日本大辞書』	身ニ血ノ量ガ乏シイコト。貧血症
1897	『日本新辞林』	身に血の量の乏しき。
1898	『ことばの泉：日本大辞典』	病の名。血液不足にして、身体を栄養するに適せざるもの。大病の後、産後、胃の慢性病などより起る。
1907	『辞林』	身体の血液が適度の量より少なきと、貧血。 「貧血性」 貧血なる体質

5.4.6 「NINJAL-LWP for BCCWJ」による「貧血」の文法的性質

現代日本語における「貧血」の文法的性質について、「NINJAL-LWP for BCCWJ」（以下、NLB）¹⁹を用いて簡単に見てみる。

NLBは、現代日本語の語彙について、実際の用法、たとえば、品詞、コロケーションなどを調べるのに最も適切なツールであると思われる。

NLBで、「貧血」を調べると、すべて名詞として使われていた。また、コロケーションについては、「貧血を起こす」が最も多く、その次は、「貧血になる」であった。

5.5 中国語における「貧血」

続いて、中国語における「貧血」を見ていこう。

5.5.1 「貧血」以前に使われた用語

まず、清の時代の来華宣教師が「anaemia」をどのように翻訳しているかを見てみよう。

¹⁹ NLBは、国立国語研究所が構築した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese: BCCWJ）を検索するために、国語研とLago言語研究所が共同開発したオンライン検索システムである。

ホブソンの『医学英華字釈』（*A Medical Vocabulary in English and Chinese* 1858）では、「anaemia」を次のように訳している。

(31) Anaemia—bloodlessness. 血虚薄皮色白

フライヤー（John Fryer 傅蘭雅）が口述し、趙元益が筆述した『儒門医学』²⁰（1876）でも、「血虚」を用いている（括弧内の日本語訳は筆者による）。

(32) 血虚 血内之血輪甚多用顕微鏡易見之血之紅色藉有血輪身体堅壯者則肌膚有紅色凡紅血每重百分应有血輪十二分不及此数則為血虚或因食物不足以養身或因身本体軟弱或因失血等故其血每重百分只得血輪八分至十分肌膚白舌色亦白眼白帶青綠色其人困倦无精神…（血液中の赤血球は、顕微鏡を用いると見やすい。血の赤色は赤血球による。体が丈夫であれば、肌は赤い色である。血の重さ百分〔50g〕につき、赤血球十二分〔6g〕がふつうであるが、この数に及ばない場合は血虚になる。食物が足りない場合や、体が弱い場合、または、失血などによって、血百分につき、赤血球が八分〔4g〕から十分〔5g〕になると、肌が白くなり、舌の色も白くなり、眼は白く緑色を帯び、疲れやすくなり、元気がなくなる。）

『儒門医学』「血虚」

表 6 英華辞典における「anaemia」の翻訳

発行年	書名	Anaemia
1872	『盧公明英華萃林韻府』 (ドーリットル)	anæmia. (or bloodlessness) 血虚 薄皮色白
1884	『井上哲次郎訂増英華字典』	anæmia. bloodlessness 血虚薄皮色 白
1908	『顔恵慶英華大辞典』	anæmia. (医) 血虚、血虧、血枯
1913	『商務書館英華新字典』	anæmia, 乏血病
1916	『赫美玲官話』(ヘメリング)	anaemia 血虧、血薄、血貧(新)、 血虚

²⁰ 『儒門医学』は、Frederick W.Headland（海得蘭）の *The Medical Hand Book* を底本に、フライヤーが口述し、趙元益が筆述した。江南製造局から出版された。（沈（1996: 84）による）

また、英華辞典では、「anaemia」は、『盧公明英華萃林韻府』（1872）に初めて収録され、その後に出版された辞典にほぼ収録されている。主な辞典の記述を表 6 にまとめ示す。

以上の記述から、「anaemia」の訳語には、主に「血虚」が使われたことがわかる。『赫美玲官話』には、「血貧」という語が現れており、新語の印がついている。これには、日本語の「貧血」の影響があるかもしれない。

5.5.1.1 「血虚」について

ここで、英華辞典などに出てきた「血虚」について少し触れてみる。

中国伝統医学には、気と血という概念がある。気とは目に見えない生命エネルギーを指し、血とは血液とその働きを指し、気と血は相互に影響しあうとされる。気の量が少なくなる、つまり栄養が不足すると、血の循環が悪くなり、これによってさらに気が足りなくなる。こういう状態を、中国伝統医学で「血虚」と「気虚」という。

この「血虚」という言葉は、前漢（東漢）の張仲景の『傷寒論』と『金匱要略方論』にすでに現れている。

（33）陽脈浮陰脈弱者則血虚血虚則筋急也（陽脈が浮き、陰脈が弱ければ、血虚である。血虚は脈が緊張する。）

『傷寒論』弁脈法第一

（34）寸口脈浮而緊緊則為寒浮則為虚寒虚相搏邪在皮膚浮者血虚絡脉空虚賊邪不瀉或左或右（寸口の脈が浮にして緊のとき、緊脈は寒証をなし、浮脈は虚証をなす。寒証と虚証がともにあると、邪が皮膚にあり、浮脈で血虚であれば、絡脈は空虚で、賊邪が外に出ず、左や右の絡脈にある。）

『金匱要略方論』中風歴節病脈証并治第五

『傷寒論』と『金匱要略方論』は、古くに日本に伝わったため、「血虚」も日本語で使われたと考えられる。『日国』では、17 世紀の作品に現れている。

(35) 仮名草子・東海道名所記〔1659~61 頃〕―「血虚（ケツキョ）すれば脾腎の
わづらひとなるといふことを思ひ出して」

(36) 浮世草子・三島暦〔1691〕―「血虚する程血判すべしとは、そも何枚の起請
ぞや」

「血虚」は、日本語において、なぜ訳語に使われなかったのであろうか。これについては、3.2.5 で検討したように、明治期の訳語は、直訳を主としたということのほかに、「血虚」では、「体の赤血球数とヘモグロビン量が少ない状態」という、厳密な検査を経ての病状を表すことができないため、新しい概念を表す「貧血」という用語をつくったということがあると思われる。

5.5.2 『漢語大辞典』における「貧血」の記述

あらためて「貧血」の検討に戻るが、まず、中国の大型辞典である『漢語大辞典』（1986-1993）における「貧血」の記述と用例を確認して、中国語における「貧血」の意味用法を簡単に把握しておく。

(37) 貧血

人体血液中紅血球的数量或血紅蛋白的含量低於正常的数值時叫做“貧血”。貧血的人面色蒼白。通常局部血量減少也叫貧血，如腦貧血。（人体の血液中の赤血球の数やヘモグロビンの含有量が正常な値より低い場合を「貧血」という。貧血の人は顔面が蒼白である。通常局部の血量が減少することも貧血という。例：脳貧血。）

※老舍《四世同堂》十八：“他的薄嘴唇緊緊的閉上，貧血的腦中空了一塊，像個擱久了的雞蛋似的。”（彼の薄い唇はしっかりと閉じられ、血の通わない脳の中はからっぽになり、長い間放置された鶏の卵のようであった。）

※王西彦《一個小人物的憤怒》：“迎面走来的，就是那有着一張瘦削的貧血臉和一個細小的紅鼻子的女人。”（向こうからやってきたのは、やせて貧血気味の顔と小さく赤い鼻をもつ女性だった。）

上の「貧血」は、語釈によると、日本語における「貧血」と相違がない。特に「脳貧血」を「通常貧血という」ということも指摘している。ただし、『漢語大詞典』があげている例における「貧血」は、いずれも形容詞的に用いられている。

5.5.3 「貧血」の中国への伝来

5.5.3.1 書籍にみる「貧血」

「貧血」が中国へ伝来した年代については、『近現代辞源』（2010）における「貧血」の記述が参考になる。

(38) 【貧血】

- ①人体血液中紅細胞的数量或血紅蛋白的含量低于正常値時称作貧血。（人体の血液中の赤血球の量やヘモグロビンの含有量が正常値を下回るときのことを貧血と称する。）

1907年孫〔佐〕訳述『生理衛生新教科書』第五篇：“白血輪過多，則成白血病，与失血及由他病而患貧血病者同，不但顔無血色，即全体之皮膚亦呈蒼白色，是為危險之病症。”（白血球が多すぎると白血病になる。失血や他の病気により貧血を患う人と同じで、顔に血色がないだけでなく、体全体の皮膚も蒼白になる。これを危険な病症となす。）

- ②局部血量減少。（局部の血量の減少。）

1924年程瀚章『運動生理』各論：“此時肺臟強度充血，大循環貧血，其結果同時引起心臟疲労，顔面蒼白。”（この時肺臓は強度に充血し、大循環系は貧血になり、その結果、同時に心臓の疲労を引き起こし、顔面は蒼白になる。）

『近現代辞源』の最初の用例の出典『生理衛生新教科書』（1907）は、孫佐が日本の三島通良が書いた『中等生理衛生教科書』（1905）を翻訳したものである。この時代の日本の医書を翻訳した医学書、例えば、『医学指南』（1908）、『漢訳実用法医学大全』（1909）、『診断学』（1918）などにも「貧血」、「貧血症」が見られる。

(39) 貧血，即血虚。（貧血、即ち血虚。）

丁福保訳編『医学指南』1908

(40) 腹腔内出血亦甚多至其出血量過大時即全身發極重之貧血症。（腹腔内出血もその出血量が多くなりすぎると全身に極度の貧血症が起こる。）

王佑・楊鴻通編訳『漢訳実用法医学大全』1909

(41) 但慢性鼻炎，往往亦見此色，反乎此而現蒼白色者，為一般貧血症。（しかし、慢性鼻炎に、しばしばこの色を見る。逆に蒼白な色が現れるなら、一般の貧血症である。）

湯爾和訳『診断学』1918

なお、中国人が書いた医学書『房中医（実験良法）』（1915）にも、「貧血」が現れている。

(42) 其失血甚者，必陷于貧血。面色蒼白。頭暈、眩暈。心悸亢進。至可危也。（出血がひどいと、必ず貧血に陥る。顔面が蒼白になる。めまいがする。心悸亢進になる。危険に至る。）

顧鳴盛編『房中医（実験良法）』1915

また、「中国現代第一部百科全書」といわれる『普通百科新大詞典』（1911）にも、「貧血」は収録されている。

(43) 貧血 由強度之出血—惡液疾—腸寄生虫。慢性化膿症而起。有皮膚及粘膜之蒼

白色—動悸—耳鳴—頭痛—眩暈—嘔気—嘔吐—脈搏及呼吸頻促等症。[強度の出血、悪液質、腸寄生虫、慢性化膿症に由来。皮膚及粘膜の蒼白色、動悸、耳鳴、眩暈、げっぷ、嘔吐、脈拍及呼吸頻発等あり。²¹⁾

黄摩西編『普通百科新大詞典』1911

さらに、『辞源』の初版（1915）に、「貧血症」という語が、収録されている。

(44) 貧血症

Anæmia 紅血球欠少之病。由飲食居処不良。休息不足而起。患者多面色蒼白。肢体倦怠。婦人患此症尤多。亦名血虚。（赤血球が不足する病氣。飲食や居住環境の悪さ、休息不足により起こる。患者は多く顔色が蒼白になり、体のだるくなる。特に婦人がかかりやすい。血虚ともいう。）

陸爾奎主編『辞源』1915

5.5.4 雑誌・新聞にみる「貧血」

雑誌や新聞における「貧血」の最も早い登場は、『申報』の1902年12月31日の記事で、「脳貧血症」という語で現れている。

(45) 日本某日報云美利堅国新簡駐日使臣拔之苦氏於東歷十二月二十五日在千葉県新浜為射鴨之戲上午十一下鐘時突患脳貧血症倒仆於地。（日本の某日報によると、アメリカの新駐日公使のバック氏は、（12月25日に）千葉県新浜で鴨猟の最中に、午前十一時に脳貧血症で倒れた。）

『申報』「美使示疾」1902.12.31

ただし、(45)の例は、「脳貧血症」である。「貧血（病）」としての最も早い用例は、1903年の「新民叢報」のもので、これは、『近現代辞源』が挙げている用例より年代が早い。

²¹ 『普通百科新大詞典』の原本である『国民百科辞典』（富山房 1908）の「貧血」の本文による（陳力衛教授のご教示による）。

(46) 巴黎之医学博士某曾乘气球航行空中二時間之後忽見血輪驟増後十余日再為試驗効亦如前故報告其医会謂苟患貧血病之人使其於数週間為二回之空中航行比之転地療養三月其効尤著云（パリのある医学博士は熱気球で空中を二時間飛行した後に、急に赤血球が急増した。それから十数日後に再び実験を行ったところ、結果は前と同じであった。そこで、医学会に、貧血症を患っている人が、数週間に2回空中飛行を行えば、転地療養を三か月行うより効果が甚だしいと報告した。）

『新民叢報』27「新智識之雜貨店：輕气球之療病」1903

『申報』の検索システムによって、「貧血」を検索すると、「広告」を含めて、8623件ヒットした。ここから、「広告」を除いて再検索しても、1753件という厩大な用例数であった。「貧血症」という語は、1908年3月16日の「人造自来血」という広告に初めて現れる。この広告は、3月16日から、4月29日まで毎日『申報』に載せられていた。

(47) 此自来血乃集合衆補血品製煉而成色紅味甜較之鉄汁功力尤大且最適口世之患貧血症者（この「自来血」は多くの補血品を集めて製造したもので、赤い色と甘い味であり、鉄汁より効果が大きく、貧血症を患う者に最適である。）

『申報』「人造自来血」1908.3.16

『東方雜誌』や『新青年』にも、同じ用法の「貧血」と「貧血病」が見られる。

(48) 栄養療法。通俗称食物養生法。乃對於神經衰弱者及陷於貧血之狀態者之特種療法也。（栄養療法は、俗に食物養生法という。神経が衰弱した者や貧血の状態に陥った者に対する特殊な療法である。）

『東方雜誌』「食物養生法」1911-2

(49) 一種食物既然不易消化，就有兩種毛病其一，食了未曾溶解，即排泄而出，雖有滋養料，亦不能提出補益身体，其結果，必成為貧血病，精神日漸萎頓，不堪作事漸致不能支持身体。（ある食物が消化しにくいと、二つの問題が起きる。一つは、食べ終わって消化されずに、すぐに排泄されることで、栄養があつて

も、体に吸収することができない。その結果、必ず貧血症になり、精神が日ごとに衰えていき、何もできなくなり、次第に体を支えることができなくなる。）

『新青年』「白話文的価値」1919.4.15

また、(50)、(51)、(52)の「貧血病」、「貧血症」は、比喩的な使い方で、それぞれ「経済」、「革命文学」、「北平」などの状態を表しており、それらの現状が栄養不足のような状態を表している。

(50) 我們可以很明白地看出，在帝国主义經濟侵略的下面，中国的經濟情形，是完全停滯在貧血病式的狀態之下。

(帝国主义の経済の侵略の下で、中国の経済状況は、完全に停滯して貧血病のような状態にあることがはっきりわかる。)

『申報』「反对階級門争擁護勞資合作」1933.7.9

(51) 救治革命文学的貧血症 (革命文学の貧血症を救う。)

『文芸先鋒』1-1 1942

(52) 北平在患著貧血症 (北平は貧血症を患っている。)

『民主与統一』33 1947.4

5.6 まとめ

ここまでの日中における「貧血」を調査・考察した結果をまとめてみる。まず、明治期に活躍した医師の桑田衡平が、1872年に、「anaemia」を訳す際に「貧血症」という語を使った。「貧血」という形が初めて現れたのは、同じ年に出版された英和医学辞書の『医語類聚』である。

「貧血」あるいはこの概念は、その後、すぐにほかの医書にも収録された。『内科摘要』は当時の医学生教科書のようなものであり、また、『医語類聚』も英語を学ぶ医学生が非常に愛用した辞書であったため、両書によって、「貧血」の普及が促進されたと考えられる。その後、「貧血」は、新聞や雑誌でも使用されるようになり、日本の国語辞書

にも早くに収録されている。「貧血」は、1890年代ごろには、ほぼ定着したと考えられる。

中国語においては、「貧血」が伝来する以前には、このような概念を表すのに、中国伝統医学用語である「血虚」などの語が用いられていたが、1900年代に入ってから、「貧血」が日本の医学書を翻訳した書籍に現れ、その後徐々に中国人が書いた医書や新聞雑誌にも現れるようになった。資料を調査すると、1949年の新中国建国以前に、「貧血」には、すでに大量の例があり、その中には、形容詞的な使い方、比喩的な使い方で用いられているものもある。つまり、「貧血」は、中国へ伝来して以来、抵抗なく中国語に受容され、使用されるようになったといえる。

5.7 「虚血」と「貧血」

「貧血」と似た用語に「虚血」がある。中国語には、「血虚」という語はあるが、「虚血」は使われない。中国語の検索サイトや資料などを調べたが、「虚血」の用例は見つからなかった。ここでは、日本語における「虚血」と「貧血」にはどのような違いがあるのかについて、見ていく²²。

5.7.1 「虚血」の用法（付「乏血」）

日本の中型国語辞書、『広辞苑』、『大辞泉』、『大辞林』には、すべて「虚血」が収録されている。それらの記述を、表7にまとめて示す。

表7 『広辞苑』『大辞泉』『大辞林』における「虚血」の記述

発行年	書名	「虚血」の語釈
2008	『広辞苑 第6版』	急性の局所性貧血のうち、特にその程度が重く、流入血液量が極度に減少した状態。血管の結紮狭窄血栓などの場合に見られる。
2012	『大辞泉 第2版』	組織や臓器への動脈血の流入が減少あるいは途絶すること。乏血（ぼうけつ）。
2019	『大辞林 第4版』	臓器や組織に流入する血液の量が必要量に比し著しく減少した状態。その部位に変性・萎縮（いしゅく）・壊死（えし）などをきたす。乏血。

²² これについて、丸山浩明教授（拓殖大学）のご示唆を受けた。

また、『医学英和辞典 第2版』には、「虚血」について、次のような記述が見られた。

(53) Ischemia -chae-

虚血、乏血、阻血 血流障害による局所的血液不足

これらの辞書の記述を見ると、「虚血」は、体の局部が急に貧血になった状態をいい、「貧血」の下位分類の一つであることがわかる。また「虚血」の同義語は、「貧血」ではなく、「乏血」であることも確認できる。

次に、「虚血」の使用について、資料に当たってみる。

まず『日本語歴史コーパス』には、「虚血」の用例は一例もなかった。「国立国会図書館デジタルコレクション」の検索結果では、1912年10月発行の『中外医事新報』の記事の題名が最初の用例であった。

(54) 「モムブルヒ氏虚血法ト副腎被囊」

『中外医事新報』 763 1912.10

しかし、その後「虚血」の用例は見られず、再び用例が現れるのは、1950年代になってからである。『日本産科婦人科学会雑誌』に「虚血」が使われている。

(55) 腎の虚血であるという意見を否定している。即ち彼等はRBFは正常か又はそれより高値を示したと述べている。

「産婦人科領域に於ける腎機能に関する研究：特に腎血流量、腎血漿流量並びに濾過率に就いて」『日本産科婦人科学会雑誌』 6・11 1954.10.1

(56) …ひいては内膜の虚血を来たすと述べているが、両説共に月経の発来に対してはAchの存在並びに作働が必要である点で一致し、又同様の機序が機能性出血その他の月経異常にもあてはまるだろうことも想像される。

「子宮におけるAcetylcholin様物質の消長に就いて」

『日本産科婦人科学会雑誌』 11・12 1959.11.1

「虚血」は、単独で使われるより、(57)、(58)のように、「脳虚血」、「虚血性心疾患」といった複合した形で現れることが多い。

(57) Hossmanらは脳への流入動脈をすべて結紮して、完全な脳虚血 (complete global ischemia : CGI) を作製し、それによる脳のanoxic-ischemic lesionを検索した。

「急性頭蓋内圧亢進の脳微小循環に及ぼす影響について」『神経外科』16-5 1976

(58) ノイキノンの成分ユビデカレノンは、代謝性強心剤として慢性高血圧症、虚血性心疾患、弁膜疾患など心機能低下によって起こる。

「ノイキノン顆粒の配合変化に関する研究」『病院薬学』4-1 1978.5.20

また、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)で「虚血」を検索すると、266件ヒットした。そのうちの74件が「虚血性心疾患」であった。

(59) …わが国の3-4倍にも達している。しかし、我が国においても、近年心筋梗塞などの虚血性心疾患による死亡が増加しつつある。我が国の循環器疾患対策は最も大きな危険因子…

厚生省『厚生白書 昭和56年版』1981

また、「虚血再灌流障害」が16件あった。これは、すべて同じ作者による同一の書籍の用例である。

(60) 多くの臓器における虚血再灌流障害の治療に役立つものと思われる。

佐藤泰史『臓器の虚血再灌流障害』2002

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に現れる「虚血」の「メディア／ジャンル」は、ほぼ「書籍／自然科学」に限られ、現代日本語の「虚血」は、専門分野でしか使われない語であることが確認できる。

次に、「虚血」の同義語である「乏血」についても少し調べてみた。表2に示したように、「乏血」は、実は、『医語類聚』において、「anaemia」および、その類義語の訳語として現れている。『医語類聚』と同時期に出版された医書では、例えば、『病理略論』²³や『医療大成』に「乏血」が見える。

(61) 例之動脈系ニ劇シキ損傷ヲ被リ過多ノ失血ニ由テ心臓ノ権縮其常ヲ失ヒ以テ
遂ニ此機能ヲ全ノ廢スルカ如シ乃チ此等ノ乏血症ニ死スル者ヲ剖観スルニ…

『病理略論』 卷下 1871

(62) 其三 乏血病 アネミア

乏血ハ血液ノ減耗スル者ナリ

『医療大成』 1875

しかし、その後にほとんど用例がなく、1950年代に入って、『日本産科婦人科学会雑誌』に再び「乏血」が使われている。

(63) 後者の場合は、手術す可きで無い。この両説はシ[ショック]を考慮せずに
乏血に重きを置いて樹てられたものであるが、私は茲に外妊の死因は、乏血で
無く、是れに依て惹起せられた失血シ[ショック]の為であると考察する。

「子宮外妊娠の手術施行の時期並びに其療法」

『日本産科婦人科学会雑誌』 4-1 1952.1.1

「乏血」は、今日、日本の主な国語辞典には収録されていない。ただし、『医学英和辞典 第2版』には、前述した「ischemia」と、下記にあげる「oligemia | oligoemia」に「乏血」が見られる。

(64) oligemia | oligoemia

²³ 『病理略論』は、長崎精得館の教師・蘭医のマンスフェルトの講義を筆記して翻訳したもの（山田某所持）を、明治辛未（1871）春2月に、「某教官」の題言を添えて、東京医学校官版として英蘭堂島村利助より発行したものである。上下2巻に分かれる。（「研医会通信「眼科要論」129号」
<http://www.ken-i-kai.org/homepage/index1604.html>）

血液過少〔減少〕（症）、乏血（症） 血液量の不足

以上の考察を通して、「虚血」と「貧血」の違いをまとめる。まず「貧血」は日中両言語において使われるが、「虚血」は、日本語でしか使われない語である。日本語においては、「虚血」は、「局部の貧血」という意味で、「貧血」の下位分類に属する。「虚血」は、医学に関する文章でしか使われない用語であり、「虚血性心疾患」という複合形での使用頻度が最も高い。また、現代日本語では、「虚血」と「乏血」とは、ほぼ同じ病状を表す。この2語は、『日本産科婦人科学会雑誌』という雑誌で使用され始めたことから、最初に妊婦や婦人病に関する説明に使用され、その後だんだんほかの病気に関しても使われるようになったようである。

5.7.2 「虚血」の語構成

「虚血」は、中国伝統医学で使用された「血虚」の語順の逆転による造語で、これは、「貧血」、「乏血」などの語構成に合わせたものと推測される。よって、「虚血」の語構成も、「〈A〉 + 〈N〉」という「補足構造」である。

参考までに、『医学英和辞典』で「虚血」の原語としている「ischaemia」について、*Oxford English Dictionary*と*Oxford learners dictionaries*で調べてみると、その語源については、次のようにある。

- (65) Etymology: modern Latin, < Greek ἰσχαίμος stanching or stopping blood, < ἵσχειν to hold + αἷμα blood.

Oxford English Dictionary

- (66) Word Origin: late 19th cent. (denoting the staunching of bleeding): modern Latin, from Greek iskhaimos ‘stopping blood’, from iskhein ‘keep back’ + haima ‘blood’.

Oxford Learner's Dictionaries

いずれも「血を止める」というような意味で、「虚」には結び付けにくい。したがって、「虚血」は、「血虚」の語順を逆転させることによって、新しい意味を付与し、つくら

れた語であると思われる。

【第6章の参考文献】(辞書類は巻末にまとめて挙げる)

阿知波五郎(1982)『近代日本の医学：西欧医学受容の軌跡』思文閣

大滝紀雄(1995)「幕末から明治中期にかけての英米系医学の受容」『日本医史学雑誌』41-2, 88-89 日本医史学会

高野繁男(1984)「明治期・医学用語の基本語基と語構成：「医語類聚」の訳語」『人文学研究所報』12, 3-19 神奈川大学人文学研究所

沈国威(1996)「近代における漢字学術用語の生成と交流—医学用語編(1)」『文林』30, 59-94 神戸松蔭女子学院大学

野村雅昭(1988)「二字漢語の構造」『日本語学』7-5, 44-55 明治書院

深瀬泰旦(1995)「海軍大医監 奥山虎炳(1840～1926)」『日本医史学雑誌』41-3, 3-30 日本医史学会

深瀬泰旦(1996a)「『医語類聚』の著者 海軍大軍医 奥山虎章」『日本医史学雑誌』42-1, 29-48 日本医史学会

深瀬泰旦(1996b)「『医語類聚』(奥山虎章)と Medical Lexicon (Robley Dunglison)」『日本医史学雑誌』42-2, 66-67 日本医史学会

文化新聞(2017)「桑田衡平の生涯と業績 医学書翻訳で近代医学の礎築く」『文化新聞』2017.7.12

三浦於菟(2014)『「気・血・水」の流れが健康をつくる：「漢方の原則」で病気知らずに!』プレジデント社

李迪・郭世荣(2002)「中国現代第一部百科全書：『普通百科新大詞典』」『辞書研究』2002-3, 122-126 内蒙古師範大学科学史研究所

第 6 章 「心臓病」

6.1 はじめに

中国伝統医学では、「心病」は、心の病気を指していた。それが、『医心方』によって、日本に伝わった。しかし、現代日本語では、「心病」を使用せず、「心臓病」を用いてその概念を表している。

この章では、先行研究を踏まえて、近代医学用語「心臓病」という語の創出について、それが創出された理由、及び受容された経緯を解明する。また、この語がいつごろ中国へ伝わり、どのように中国語に受容されたのかについても明らかにする。合わせて、日中における「心病」の使用上の相違もともに明らかにしていく。

6.2 「心臓病」とは

「心臓病」について、『日本国語大辞典 第 2 版』（以下『日国』と略す）では、次のように説明している。

(01) 【心臓病】 〔名〕

心臓の病気の総称。種類が多く、いずれも心臓の機能障害を伴う。

また、『日本大百科全書』では、『日国』と同様、「心臓の病気の総称」としており、心臓病への認識の段階及び種類について具体的に説明している。

(02) 心疾患ともいい、心臓の病気の総称で、冠血管や心膜（心嚢（しんのう））の病気も含まれる。心臓の機能障害が生命にとって重要な意味をもつことは古代ギリシア時代より知られていたが、心臓病の存在が正確に認識されたのは屍体解剖が行われるようになった 1500 年ころ以降のことである。その後、1628 年にはハーバーが血液循環における心臓の役割を明確にし、また 17 世紀から 18 世紀にかけては心臓構造物（壁や弁、血管など）の欠損や形態学的な異常が次々と発見された。しかし、これらの心臓病の生前診断が可能となったのは 1819 年にラエネクが聴診器を発明してからのものであり、その後 1895 年のレントゲンによる X 線の発見、1903 年のアイントホーフェン W. Einthoven による心電計の開

発により心臓病の診断はいつそう正確となった。現在では RI（ラジオ・アイソトープ）検査法、超音波心エコー法、心臓カテーテル検査などにより、ほとんどの心疾患は正確に診断できるようになった。

心臓病の分類に関しては、20 世紀初めにマッケンジー James Mackenzie（1853-1925）が、心不全や不整脈など機能障害と考えられる疾患の概念を導入することにより体系化された。現在では病因により次のように分類されている。

- ①先天性心疾患（心臓奇形） 生下時より心臓に異常を有するもので、心房中隔欠損症、心室中隔欠損症、動脈管開存症、ファロー四徴症、大動脈縮窄（しゅくさく）症、大血管転位症などがある。
- ②リウマチ性心疾患 リウマチ熱に合併して生じる心疾患で、その多くは左心系の僧帽弁や大動脈弁を障害し、弁狭窄や弁逆流などの心臓弁膜症の誘因となる。
- ③梅毒性心疾患 おもに大動脈を侵し、大動脈瘤（りゅう）や大動脈弁閉鎖不全症の原因となることがある。
- ④高血圧性心疾患 長期にわたる高血圧症により、心肥大が引き起こされる。
- ⑤そのほか、狭心症や心筋梗塞（こうそく）などの冠動脈疾患をはじめ、感染性心内膜炎、心筋炎や心筋症、甲状腺（せん）性心疾患、期外収縮や心房細動などの不整脈、うっ血性心不全、心膜炎、心臓腫瘍（しゅよう）、心臓神経症などがある。

〔井上通敏〕

上記の記述を見ると、「心臓病」という語は、心臓の病気の総称であり、人類の心臓病への認識は、時代的に次の 3 段階に分けられる。なお、このあとすぐ言及するが、日本語の「心臓病」は、②の時期に生まれたものである。

- ①1500 年ごろの死体解剖以降
- ②1819 年のラエネクの聴診器の発明による心臓病の生前診断以降
- ③1895 年のレントゲンによる X 線の発見、1903 年のアイントホーフェンによる心電計の開発による心臓病の更なる正確な診断以降

6.3 「心臓病」の成立

6.3.1 「心臓病」の初出

「心臓病」の初出を確認するために、『日国』における「心臓病」の用例を参考にする。
『日国』では下記の3つの例を挙げている。

(03) 医語類聚〔1872〕〈奥山虎章〉「Cardiopathia, 心臓病」

(04) それから〔1909〕〈夏目漱石〉四「ことに依ると何とかいふ六づかしい名の心臓病かも知れないと云つた」

(05) 腕くらべ〔1916~17〕〈永井荷風〉一四「其の年の暮に博士の家では奥様が心臓病になって」

『日国』の最初の用例は、『医語類聚』から取り上げている。『医語類聚』の序に「諸書ヲ参考シ中ニ就テ方今日用ノ要語ヲ撰ミ簡ニシテ約ヲ主トシ専ラ先哲ノ訳例ニ倣フモ未ダ名称ノ全ク欠ル者ハ権リニ之ヲ音訳シ或ハ原義ニ基テ之ヲ下シ」とあるため、本書の訳語の一部は編集者奥山虎章の手によるものといえる。筆者の調査の限りでは、漢籍および『医語類聚』以前の日本語資料には、いずれも「心臓病」が見当たらなかったため、筆者は『医語類聚』が「心臓病」の初出であり、この語は奥山虎章による造語であると考える。

6.3.2 なぜ「心臓病」か

『医語類聚』と著者奥山虎章については、第4章ですでに触れたため、ここでは述べない。(03)にあるように、「心臓病」という語は、「cardiopathia」の訳語である。『医語類聚』の原書 *Medical Lexicon*¹を確認したところ、「cardiopathia」の語釈は、「cardionosus」とあり、「cardionosus」の語釈は次のようになっている。

(06) Cardionosus (Cardiopathia) Disease of the heart. Heart disease.

Medical Lexicon 1866

¹ 深瀬（1996: 67）は、奥山虎章が *Medical Lexicon* のどの版を参考にしたのか不明であると言っているが、「cardiopathia」は、*Medical Lexicon* の1866年に出版された版に初めて収録されていることが確認できたため、奥山虎章が参考した原書の範囲は、1866年版以降のものに縮小できる。

この語釈には、「heart」と「disease」が出現している。「heart」と「disease」とを、『医語類聚』以前に出版された英和辞典『諸厄利亜語林大成』（1818）、『英和对訳袖珍辞書』（1862）、『和英語林集成』（1867）で調査した結果を表1にまとめて示す。

表1 3つの英和辞典における「heart」「disease」の記述

発行年	書名	heart	disease
1814	『諸厄利亜語林大成』	<u>心臓</u> 又 心意	疾病
1862	『英和对訳袖珍辞書』初版	心勢. 中. <u>心臓</u>	<u>病</u>
1867	『和英語林集成』初版 (英和の部)	kokoro (心) shin no zō (心の臓) ; shin (心) ; ki (気) ; hara (腹)	yamai (<u>病</u>) ; biyōki (病気)

表1を見ると、「disease」は、「病」と訳せるとして、「heart」には、「心臓」のほか、「心」、「心の臓」という候補があった。では、なぜ「heart」の訳語を「心」、「心の臓」にしなかったのだろうか。

これについては、宮地敦子（1979）の「第四章 漢語の定着—「こころ」「心の臓」「心臓」ほか—「こころ」から「心臓」へ—身体語彙の変化」と佐藤亨（1983）「しんぞう（心臓）、（心の臓）」が参考になる。一言でいうと、これは、「心」、「心の臓」、「心臓」の使い分けにある。

「心」、「心臓（蔵）」は、中国伝統医学用語として『素問』、『傷寒論』にあり、古くから日本に伝わっており、日本語ではそのまま受け入れている。早期の用例は、例えば『喫茶養成記』²に見られる。

(07) 五臓中心蔵為王、建立心蔵ノ方、喫茶妙術也

『喫茶養成記』序

(08) 心、南也、夏也、火也、赤也、神也、舌也

² 鎌倉前期の茶道書。2巻。栄西（えいさい）著。建保2年（1214）成立。茶種を日本にもたらした栄西が、茶の栽培、喫茶の方法、喫茶による養生などについて記したもの。（『デジタル大辞泉』の「喫茶養成記」の項目）

『解体新書』(1774)より前の時代では、「心」、「心臓」は神^{たましい}の宿るところと考えられていた。それが、西洋の解剖学との接触により、内臓の一つとして、血液循環の一環として理解され始めた。オランダ医学書を翻訳する際に、「心」、「心臓」はいずれも使用された。『解体新書』(1774)では、「心」が使われているが、『重訂解体新書』(1826)では、それが「心臓」に変更されている。

(09) 夫肺者。居^ニ胸之内^ニ。連^ニ心之左右^ニ。其状如^ニ私奔牛私^ニ。

『解体新書』肺篇十四

(10) 夫肺者。居^ニ胸之内^ニ。連^ニ心臓之左右^ニ。其状如^ニ私奔牛私^ニ。

『重訂解体新書』肺篇十四

その後、『医範提綱釈義』(1805)、『医療正始』(1835-1847)などの、翻訳書において次第に「心臓」が訳語として用いられるようになった。

(11) 脳髓ノ靈液ヲ造ル^{グハヒ}機ハ。心臓常ニ血ヲ動脈ヨリ淡黒髓ニ上輪シ

『医範提綱釈義』一

(12) 大動脈及ビ心臓ニ連及シテ過激ノ運動ヲ発セシムルニ至ル

『医療正始』十三

なお、「心」、「心臓」は、漢文訓読体によく現れるのに対して、「心の臓」(あるいは「心の臓」で表記)は、『和蘭医話』(1805)などに現れ、くだけた場面で多用されている。

(13) 心の臓と申すは人一身の主宰にして、もろもろの意識動作みな此臓より出でざるものなく、儒仏其の外諸道とも心法、心学、善心悪心など、ことごとく心にあづからぬはなき様に承罷有候。

『和蘭医話』上(心臓)

表 1 に示したように、「心臓」は、オランダ語だけでなく、英語の訳語としても用いられ、「心臓病」という造語は、この背景の下でもっとも適切な語であったと考えられる。

また、『医語類聚』では、「heart」の訳語が「心臓」とされ、「cardiopathia」の訳語が「心臓病」とされていることから、「心臓」は訳語として定着して、現代にまで至ったと思われる。それは、『和英語林集成』では、初版と再版の和英の部に「心臓」が収録されていないのに対して、三版では立項されていることから確認できる。なお、三版のもう 1 点の修正は、「しんのぞう」を除いたことである。それも「心臓病」が訳語としての地位が固まりつつあった証になるであろう。

表 2 『和英語林集成』の 3 つの版における「心^{シン}」、「心^{シン}臓^{ゾウ}」「心^{シン}臓^{ゾウ}」の収録

発行年	書名	SHIN (心 ^{シン})	SHIN-NO-ZŌ (心 ^{シン} 臓 ^{ゾウ})	SHINZŌ (心 ^{シン} 臓 ^{ゾウ})
1867	『和英語林集成』初版	The heart; …	The viscus called the heart.	
1872	『和英語林集成』再版	The heart; …	The viscus called the heart.	
1886	『和英語林集成』三版	The heart; …		The heart (med.)

6.4 日本語における「心臓病」の普及

6.4.1 医学書・医学雑誌にみる「心臓病」

「心臓病」という語は、早くも和訳英語医書『病理摘要』（1875）に現れている。

『病理摘要』は、長谷川泰がハルツホルンの *Essentials of Principles and Practice of medicine* (1869) を訳したものである。原書と対照すると、この「心臓病」は、「diseases of the heart」にあたる。

(14) 心臓病ノ診法

心臓病ノ理学診断法ハ畢竟肺病胸膜病ニ於ルモノト同一ノ理ニ基クモノナリ

『病理摘要』3 巻之中下

(15) The physical diagnosis of diseases of the heart is conducted upon exactly the same principles as that of affections of the lungs and pleura.

Essentials of Principles and Practice of medicine

「心臓病」は、ドイツ語を原著にする長谷川泰の訳書の中にも出現している。『内科提綱』³ (1880) には、「神経性心臓病類」(図 1) という語が見られ、『内科要略』⁴ (1884) には、「心臓病」(図 2) が見られる。

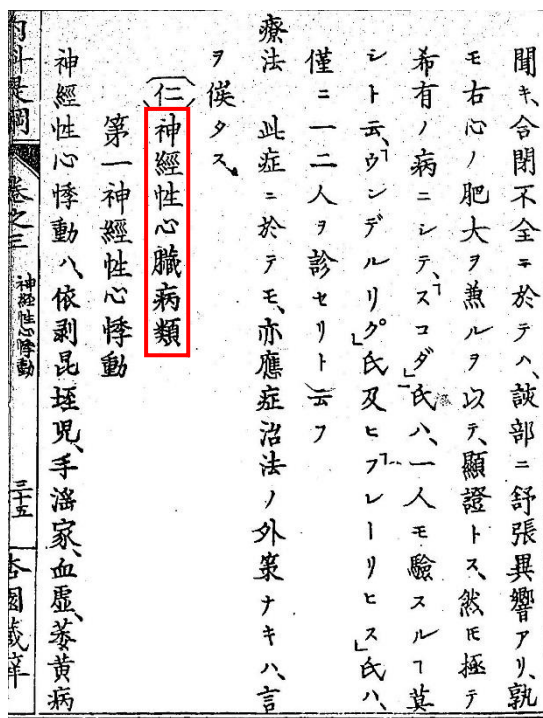


図 1 『内科提綱』

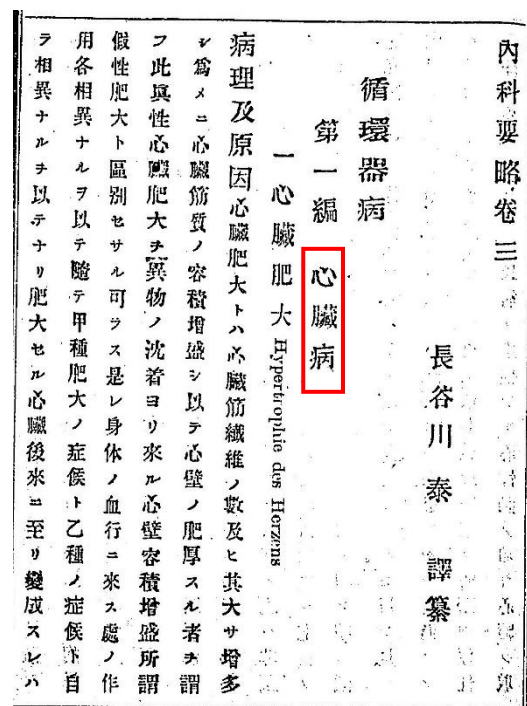


図 2 『内科要略』

(国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/834928>

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/834961>)

また、東京医学校（今の東大医学部）編輯の『医院雑誌』巻の一（1875）には、「心臓病体解剖」という記事が掲載されている（図 3）。

³ 佐々木東洋が、ドイツの医学士シュミット（悉密篤）の「コンペンデウム・デル・インネルンクリニク」(1872) を原著にして編訳したものである。（下総（2005: 65）による）

⁴ 長谷川泰がドイツのニーマイエル・ザイツの内科書『病理各論』に基づいて訳したもので、明治期の私立医学校「済生学舎」の長谷川泰の教科書として一時使用されていた。（志村（2012: 121）による）

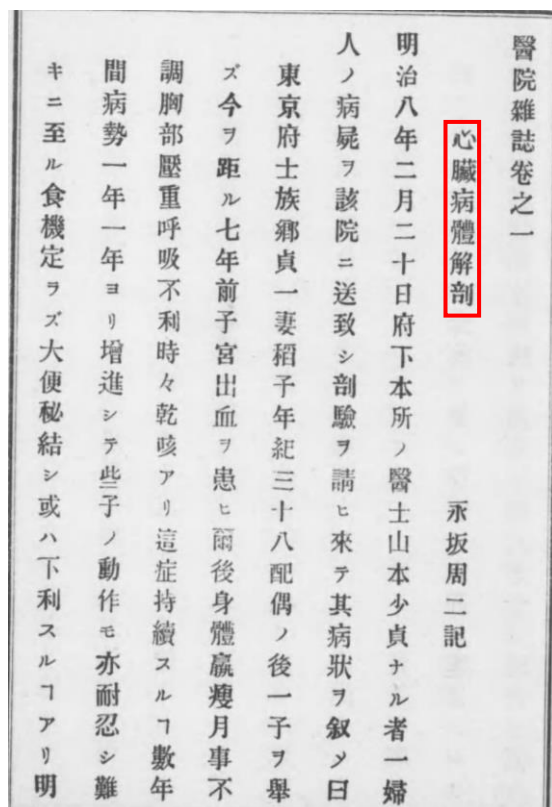


図3 『医院雑誌』巻の一

(国立国会図書館デジタルコレクション)

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1085114/4>

続いて、1888年3月10日に発行された『中外医事新報』191号に、初めて「心臓病」という語が見られ、かつ同号に「心臓病」の記事が(16)、(17)の2件ある。

『中外医事新報』には、「心臓病」の記事が、1934年までに37件あった。ここで注目すべきは、(16)のタイトルに「心臓病」が出現しており、本文中では「心病」も使用されていることである。

(16) 労働過度ニ繼発スルノ心臓病

ライデン Leyden 氏ニ抛レバ労働過度ハ頻数ニシテ且ツ緊要ナル心病ノ原因ニ属スル者ニシテ之ニ属スルモノハ第一大動脈硬結及其瘤、第二大動脈瓣ノ不全閉鎖及破裂、第三心臓動機ノ過労ナリトス

『中外医事新報』191 1888.3.10

(17) 心臓病ト癲癇トノ関係

心臓病者ニ時々癲癇ヲ発スルコトアルハ已ニ従来ノ成書ニ説ク所ニシテ…

『中外医事新報』191 1888.3.10

6.4.2 辞書にみる「心臓病」

明治大正期に出版された対訳辞書では、以下のものに「心臓病」が収録されている（表3）⁵。「心臓病」が収録されている辞書は、いずれも医学辞書である。この時期は、ドイツ医学の興隆の時期であったため、英和辞典より、独和辞典の訳語として多く現れている。

表3 対訳辞書における「心臓病」の収録

発行年	書名	記述
1886	『独逸医学辞典』	herzfehler 心臓病 herzkrankheit 心臓病 herzleiden 心臓病
1900	『独羅英和医学字彙』	herzfehler Defect or disease of the heart 心臓病 herzkrankheit 心臓病 herzleiden (cardiopathia) Cardiac disease 心臓病
1902	『独和新医学大字典』	cardiopathia (-ie) 心臓病
1905	『医語新字典』	herzkrankheit 心臓病 herzleiden 心臓病
1910	『和羅独英新医学辞典』	herzkrankheit 心臓病

なお、この時期の日本の国語辞書では、「心臓病」は、『ことばの泉：日本大辞典』（1898）にしか見つからなかった。

(18) 【心臓病】

病の名。心臓の働き、鈍くなりて、動悸ははげしく、脈搏の不斉になるものの。

『ことばの泉：日本大辞典』1898

⁵ ほかに、『附音挿図 英和字彙』（1873）では、「heart-disease」が「心臓の病」と訳されている。

6.4.3 新聞にみる「心臓病」

新聞での使用状況を見るため、読売新聞のデータベースである「ヨミダス歴史館」を使って、「明治・大正・昭和（1874～1989）」に「心臓病」を入力して検索したところ、429 件ヒットした。そのうち、明治期の用例は 73 例、大正期の用例は 10 例、昭和期の用例は 346 例であった。『読売新聞』における「心臓病」の最初の出現は、1882 年 4 月 19 日の記事である。

(19) 本夫長藏儀心臓病に罹り三月十五日死亡せしが以て同月十三日迄の現員諸君を共済金御贈与相成辱く領収し右社員諸君に鳴謝す尚跡株ハ引受加入仕候

『読売新聞』 「共済一銭社員に鳴謝す」 1882.4.19 朝刊

『読売新聞』では、「心臓病」は、(20)、(22)のように「罹る」という動詞と共に起する場合が一番多い。ほかに、動詞「発する」と共に起することもあり、「心臓病の為」、「心臓病で（にて）」等の表現も見られる。

(20) 深川西町の青山半四郎は心臓病^{しんざうびやう}に罹りて病死せしが本人存生中よりの志願に依り今日湯島四丁目の済生学舎にて解剖されるといふ

『読売新聞』 1883.12.7 朝刊

(21) 十六日香港を出発して帰朝の途に就きし由なるが同氏ハ気候激変の地を過ぎたりし為め心臓病^{しんざうびやう}を発し大いに困難し居る趣にて帰朝の途次長崎又は神戸に上陸し保養する筈なれば…

『読売新聞』 「園田氏香港を発す」 1897.1.19 朝刊

(22) 参謀総長川上大將は一昨日俄然心臓病^{しんざうびやう}に罹り非常の大患にして目下人事不省なれば橋本ベルツの両博士常に病室に詰め切り診察看護に油断なし…

『読売新聞』 「川上総長の危篤」 1899.4.23 朝刊

(23) 此ハ心臓病^{しんざうびやう}にて然かも却々の重症なれば精々療養せずば、今年中に一命の程も如何あらんかと…

『読売新聞』 「弗箱と命」 1901.6.1 朝刊

- (24) ウキツテ氏が辞職の表面の理由は、心臓病^{しんざうびやう}の為に劇務に当る能はずと云ふ
にありとか…

『読売新聞』 「ウキツテ氏退くか」 1906.4.11 朝刊

なお、『朝日新聞』における「心臓病」の使用は、(25) の 1883 年 7 月 28 日の朝刊で初めて見られる。

- (25) 心臓病^{しんざうびやう}にて久々中之島の府立病院に入療中の堀富蔵といふ男は病苦を厭ひし
余にや一昨日午後二時三十分頃同室雪隠にて縊れ死したり…

『朝日新聞』 1883.7.28 朝刊

6.4.4 文学作品にみる「心臓病」

「青空文庫」を用いて、文学作品における「心臓病」の使用を確認してみる⁶。文学作品での早期の用例は、(26)、(27)、(28) である。著者の新渡戸稲造と森鷗外は、2 人ともドイツ語に精通しており、とりわけ森鷗外は医師であったため、「心臓病」の意味が十分に理解できたと推測される。

- (26) ちょっと車夫が客の顔を見て、「アアお客さん、あなたは脳充血でもありそうな方です」とか、あるいはちょっと脈を取って見て、このお嬢さんは心臓病があるとか分る、それで挽き加減をするようになる。

新渡戸稲造「教育の目的」 1907

- (27) Strindberg に死人の踊といふ脚本がある。主人公の Edgar といふ男は、幕が開くといきなり心臓病の発作で死んだやうになる。

森鷗外「追儼」 1909

⁶ 『日本語歴史コーパス』でも検索したが、「心臓病」の用例は見当たらなかった。

(28) ^{スウイス}瑞西にいるうちに、^{ベルン}Bernで心臓病になって死んだ。

森鷗外「食堂」1910

その後、(29)、(30)、(31)、(32)のように、文学作品に「心臓病」の使用が徐々に見られるようになった。

(29) お繁は三十三四の痩せた女の人である。もう、二三ヶ月前から心臓病で臥ているのであるが、この二三日はめっきり衰えて、近所の人々は寄れば、その人の噂をしている。殊に、昨日今日は、医者も一日に二三度ずつ来て、親類の人々も繁く出入りしている様子である。

小川未明「夜の喜び」1911

(30) 然るに昨年より心臓病に罹り、貧血となり、次第に一身に疲労を起し、且つ痩せて時々心動亢盛の発作あるも、然れども性として仕事好きにて、少しも休息せず。

関寛「関牧場創業記事」1912

(31) 痛みはすっかりよくなりまして『奇妙です、私今十分よきです』と申しまして『ママさん、病、私から行きました。ウイスキー少し如何ですか』と申しますから、私は心臓病にウイスキー、よくなかろうと心配致しましたが、大丈夫と申しますから『少し心配です。しかし大層欲しいならば水を割って上げましょう』と申しまして、与えました。

小泉節子「思い出の記」1927

(32) 「ひどい不整脈だ！」と、軍医はつぶやきました。「こりゃいかん。強度の心臓病だ」

小酒井不木「体格検査」1927

6.5 中国語における「心臓病」

続いて、中国語における「心臓病」を見ていこう。

6.5.1 「心臓病」の中国への伝来

6.5.1.1 新聞・雑誌にみる「心臓病」

新聞雑誌における使用を調査したところ、『申報』には、19世紀にすでに用例があり、1891年9月7日の記事(33)に初めて「心臓病」が見られる⁷。この記事は、日本の医師岡玄卿がドイツで医学を学んだことについて書かれている。以上から、「心臓病」は日本で作られ、それが中国に伝わったことがわかる。また、(34)も早期の用例で、日本の後藤伯爵が逝去した記事である。

(33) 侍医岡玄卿前赴德国学医得治肺病心臓病之秘訣。(侍医岡玄卿は、ドイツで医学を学び、肺病心臓病を治す秘訣を手に入れた。)

『申報』「蛤洲寄語」1891.9.7

(34) 日本後藤伯爵患心臓病纏糸床第間医生百計調治迄未奏効遂於東歷八月四日逝世(日本の後藤伯爵は、心臓病を患いずっと床についていたが、医師たちの治療は効果が現れず、8月4日に逝去した。)

『申報』「日相謝世」1897.8.27

20世紀に入って、「心臓病」は、『東方雑誌』、『婦女時報』、『同徳医学』などさまざまな雑誌などに現れるようになった。

(35) 凡患萎黄病及気加答児慢性肺病慢性心臓病等症。苟唱歌合節。必可漸愈。(萎黄病や気加答児慢性肺病、慢性心臓病などを患った場合、歌を歌うときに節が合えば、きっと徐々に治るであろう。)

『東方雑誌』3「唱歌去病」1905.4.29

⁷ 『近現代漢語辞源』(2020)における「心臓病」の最初の用例も(33)を取り上げている。

(36) 經医者断定為心臟病後不可不注意於養生法以安靜身體勿為過激之運動（医師が心臓病と診断した後は、養生の方法に注意しなければならない。その方法は、体を安静にして、過度な運動をしないことである。）

『婦女時報』15「活屋・第十活屋之唧筒」（家庭医学）1914.11.1

(37) 凡患先天性心臟病的小兒。剛剛出了産門。皮膚即呈紫藍色。（先天性心臓病を持つ子どもは、生まれたばかりのとき、肌が紫紺色を呈する。）

『同徳医学』5・2「先天性的心臓病」1923

6.5.1.2 書籍にみる「心臓病」

『普通百科新大詞典』（1911）には、「心臓病」は立項されていないが、「夜啼」、「胃潰瘍」、「気管支加答爾」等の病気の解説に現れている⁸。その後、「心臓病」は、日本の書籍を漢訳した医学書、衛生学書などに現れ始める。

(38) 栓塞 Embolie 患心臟病而起心動衰弱之時，心房心室内之血行徐緩。其結果致血液凝固而形成血栓。（心臓病を患い拍動が弱ると、心房心室内の血流が悪くなる。その結果、血液が固まり、血栓を形成する。）

丁福保訳述『臨床病理学』1912

(39) 對於患者。尚宜使之二三日間安於臥褥。而注意其或起後發之病。後發病之重者如腎臟炎、心臟病、肺炎、神經系病等。（患者に対して、2～3日安静に寝かせるようにし、合併症を起こさないように注意すべきである。合併症の重いものは、腎臓炎、心臓病、肺炎、神経疾患などである。）

王倬編訳『衛生治療新書（家庭必備）』1917

(40) 此種円柱為慢性腎臟炎之主要症状。而心臟病病人及初生兒亦或有之。（このような円柱は、慢性腎炎の主な症状である。また、心臓病の患者及び新生児にも発症

⁸ 「夜啼：患者仅乳兒，有先天性心臟病之兒，多患此病。…」 「胃潰瘍：胃粘膜一部糜爛之症。發於心臟病、黴毒、結核、胃以外傷病等。…」 （『普通百科新大詞典』（1911））

することがある。)

洪伯容訳述・余云岫校『病理解剖学各論』1922

(41) 第六節 心臓病之気候療法

慢性心臓病之患者，冬季務須避去北方之気候。(慢性心臓病の患者は、冬季には北方の気候を避けるべきである。)

顧寿白『気候与健康』1924

(42) 一、心臓病 在四十歳至六十歳間至死亡原因，以患心臓病者為最多，但均由於幼年時代所釀成。(40歳から60歳までの死因では心臓病が最も多いが、それは幼年期に釀成される。)

胡鴻基『公共衛概論』1929

文学作品においては、「心臓病」は、1920年代から徐々に見られるようになる。

(43) 我昨夜夢見了你呀，夢見你的面容有些浮腫，你該不是得了病麼？你該不是得了心臓病麼？啊，海上的白鴿何處去了？(昨夜、夢で君を見たよ。夢の中では、君の顔が腫れていた。病気になったの。心臓病に罹ったの。海上の白い鳩はどこにいったの。)

郭沫若『沫若詩集』1929

(44) 母親患輕微的心臓病，所以走路走得很慢，只有今天看見美玲，跑路跑得快点兒了。
(母は軽い心臓病を患っているので、歩くのがとても遅いが、今日美玲にあったときだけは早く走ったのだった。)

張資平著『群星乱飛』1931

(45) 我報告你一件很好的消息，我的心臓病，已漸漸好了！(いいことを教えてやるよ。私の心臓病は徐々に治っているよ。)

廬隱『海浜故人』1933

辞書においては、「心臓病」は早くも『辞源』(1915)の初版に収録されており、改訂版の『辞源』(1936)に収録される際に、病気の起りや療法の記述も加えられている。

(46) 心臓病

即心臓發生之病。有心臓内膜炎。心嚢炎等。患之者。皆心悸亢進。呼吸促迫。脈搏異常。耳鼻及手足尖。作青藍色。為心臓病之徵驗。(即ち心臓に發生する病気である。心臓内膜炎、心嚢炎などがある。これを患った者は、皆心悸が亢進し、呼吸が促迫になり、脈搏が異常になる。耳、鼻及び手足の先が青くなることは、心臓病の徴候である。)

陸爾奎主編『辞源』1915

(47) 心臓病

心臓諸病之総。種類甚多，有心臓内膜炎 (endocarditis)、心嚢炎 (pericarditis)、心臓痙攣 (stenocardia) 等，大都由瘰癧質斯、猩血熱、麻疹等伝染病，以及飲酒、吸煙、梅毒、貧血症、脚氣、中風等而起。其一般症状最初為胸部苦悶、心悸亢進、氣喘、頭重、時起眩暈，病勢漸進，則脈搏疾速，顔色蒼白，惡寒高熱，手足發生水腫。其療法固視病之情形而異然，一般則以注意摂生為第一要義，宜安静，避劇動，多摂取滋養物，禁止煙酒、過勞，戒除悲憂憤怒等。(心臓の諸病の総称。種類は甚だ多い。心臓内膜炎 (endocarditis)、心嚢炎 (pericarditis)、心臓痙攣 (stenocardia) 等がある。主にリウマチ、猩紅熱、麻疹などの伝染病、及び飲酒、喫煙、梅毒、貧血症、脚氣、中風等により起こる。その一般的症状は、最初に胸部の苦悶、心悸の亢進、氣喘、頭の重さ、時に眩暈が起り、病勢が進むと、脈搏は速く、顔色は蒼白になり、寒気を感じ、熱を出し、手足に水腫ができる。治療法は病気の状態によって異なるが、一般的には、摂生に注意することが第一で、安静にして、激動を避け、栄養価の高い食事を取り、煙草や酒、過勞を禁止し、悲しみや怒りを除くことである。)

舒新城ほか編『辞海』1936

6.6 中国語における「心病」

6.6.1 中国伝統医学における「心病」の記述

「心病」という語は、現存する中国最古の医学書とされる『黄帝内経』に見られる。「心病」は、『黄帝内経』のうちの『素問』、『靈枢』の両書にともに出現している。それらにある「心病」の意味を確認してみる。

(48) 心病先心痛，一日而欬，三日脅支痛，五日閉塞不通，身痛体重，三日不已，死。

(「心病」は先ず心が痛み、一日経つと咳が出、三日経つと脇が痛み、五日経つと閉塞不通となり、身体が痛く重くなり、この状態が三日治まらなければ、死ぬ。)

『素問』標本病伝論

(49) 心病者，舌卷短，顴赤。(「心病」は、舌が短く巻かれ、頬が赤くなる。)

『靈枢』五閱五使

両書では、「心病」が起きたときに伴う病状や病気になる判断基準について書かれている。これらの説明を見ると、「心病」は、「心臓に病を持つ」という意味を表していると思われる。

その後、「心病」は、後漢の張仲景が著した『傷寒論』と『金匱要略方論』に出現している。

(50) 心者，火也，名少陰。其脈洪大而長，是心脈也。心病自得洪大者，愈也。(心は、火であり、少陰と名づける。その脈が洪大で長いと、心脈である。「心病」の者が洪大になると、治る。)

『傷寒論』弁脈法第一

(51) 肝病禁辛，心病禁咸，脾病禁酸，肺病禁苦，腎病禁甘。(肝病は辛を禁じ、「心病」は咸を禁じ、脾病は酸を禁じ、肺病は苦を禁じ、腎病は甘を禁じる。)

『金匱要略方論』禽獸魚虫禁忌并治第二十四

隋の『諸病源候論』には、「心病候」があるが、記述を見ると、これまでの例と意味が異なる。

(52) 心病候

心気盛、為神有余、則病胸内痛、脅支滿、脅下痛、膺、背、髀腋間痛、兩臂内痛、喜笑不休、是心氣之實也、則宜泄之。心氣不足、則胸腹大、脅下与腰背相引痛、驚悸恍惚、少顔色、舌本強、善憂悲、是為心氣之虚也、則宜補之。(心気が盛んになると、神が余り、病となり、胸が痛み、脇が膨らみ、脇下が痛み、胸と背中と肩甲の間が痛み、両腕の内側が痛み、笑いが止まらなくなる。これは心気の実であり、もらすべきである。心気が不足すると、胸と腹が膨らみ、脇下および腰背中に痛みが引き起こり、胸がドキドキしてぼんやりし、顔色が薄くなり、舌の根がこわばり、憂鬱になりやすくなる。これは心気の虚であり、補うべきである。)

『諸病源候論』心病候

上の解説では、「喜笑不休」、「驚悸恍惚」、「憂悲」などの言葉が使われていることから、『諸病源候論』に使用されている「心病」は、心臓の病気ではなく、精神の病気のように思われる。

6.6.2 『漢語大詞典』における「心病」の記述

「心病」の意味を全体的に把握するため、『漢語大詞典』(1986-1993)を用いて意味用法を確認してみる。『漢語大詞典』では「心病」の意味を5類に分類している。

(53) 心病

①心有病；心臟病。(心に病を持つ。心臓病。)

※《素問・標本病伝論》：“心病先心痛，一日而欬，三日脅支痛，五日閉塞不通，身痛体重，三日不已，死。”(「心病」は先ず心が痛み、一日経つと咳が出、三日経つと脇が痛み、五日経つと閉塞不通となり、身体が痛く重くなり、この状態が三日治まらなければ、死ぬ。)

※曹禺《日出》(1935)第二幕：“我有心病，你不信，再摸摸，你聽聽，撲騰撲

騰的。”（私は「心病」があるよ。信じないなら触ってみて、聴いてみて。ドキドキしているんだ。）

②心中憂慮而引起疾病。亦指心中憂慮引起的疾病。（心中の憂慮によって疾病を引き起こす。また心中の憂慮が引き起こす病を指す。）

※《易・説卦》：“坎為水，為溝瀆，為隱伏…其於人也，為加憂，為心病。”（坎は水であり、溝瀆であり、隱伏である…人に於いては、憂いを加えることで、「心病」となる。）

※孔穎達疏（唐）：為心病，憂其險難，故心病也。”（「心病」とは、險難に悩むことで、故に「心病」である。）

※唐・孔穎達疏：“既久而不來，每有所言，思此伯也，使我心病。”（久しく来ず、常に言うことはあるが、夫を思うと、私は「心病」になる。）

※陳登科《赤龍与丹鳳》（1979）区長受的刺激太多太深，遂成心病。”（区長が受けた刺激は大変多く深く、遂に「心病」になってしまった。）

③特指相思病。（特に恋わずらいを指す）

※元・呉昌齡《張天師》第二摺：“這的是心病，還從心上医。”（これは「心病」なのだ。心から治すべきだ。）

※《初刻拍案驚奇》（明）卷二五：“司戸不遂其願，成了相思之病。自古說得好：‘心病還須心上医。’眼見得不是盼奴来，医藥怎得見効？”（「司戸はその願いがかなわず、恋わずらいとなった。昔から「心病」は心の薬が必要だ。」と言う。期待している人が来ないなら、薬で治るものか。）」

※清・李漁《蜃中楼・寄恨》：“我害的是心病，豈是飲食藥餌調劑得好的。”（私は「心病」だよ。薬を飲んで養生してもよくなるものか。）

④指隱私。（人に言えない事情を指す。）

※《二刻拍案驚奇》（明）卷三六：“只一句話，正中法輪的心病，如何應承得？”（ただ一言で、法輪の「心病」を言い当てた。如何に受け入れるべきか。）

⑤精神病。（精神病）

※宋・司馬光《涑水記聞》卷九：“獄成、知諫院張抃行録問、駁繁用非心病、詔更驗、定繁用配広南牢城。”（裁判が行われ、諫院の張抃行の録問を知り、繁用が「心病」ではないと反論され、もう一度調べるように詔され、繁用を広南牢城に配流することが定まった。）

意味記述と用例を見ると、『漢語大詞典』の意味①に挙げている用例は、(48)と一致しているため、『黄帝内経』にある「心病」は、「心臓病」という意味であることが確認できる。意味②では、中国儒教の経典『易経』の用例が挙げられており、筆者の調査の限りでは、これが「心病」の最も古い用例となる。なお、意味②の語釈では、「憂慮」という語が使用されており、『諸病源候論』の(52)は、意味②に当てはまると思われる。

6.6.3 近代中国語の後期洋書にみる「心病」

「心病」と「心臓病」の関係を明らかにするため、以下、近代中国語における「心病」について調査してみる。

来華宣教師ホブソン（合信 Benjamin Hobson）の『全体新論』（1851）と『内科新説』（1858）では、「心病」という語が用いられており⁹、『医学英華字釈』（*A Medical Vocabulary in English and Chinese* 1858）では、「Heart diseases」の訳語を「心之病」としている。

宣教師フライヤー（John Fryer 傅蘭雅）が口述し、趙元益が筆述した『儒門医学』¹⁰（1867）では、「心病」と訳している。

(54) 心病

分別心之各病事為医学中極難之惟良医方知心之形状与心之功用（心臓のさまざまな病気を見分けるのは医学上極めて難しいことであり、名医だけが心臓の形及び機能を知っている。）

『儒門医学』心病

⁹ 心病。1851年合信《全体新論》卷八：“心若受病，即有変声矣（名医聴声，以弁心病）。” 1858年合信《内科新説》卷上：“大概心病左多過右，因左房功用尤勞之故耳。（『近現代漢語辞源』（2020）の「心病」の項目）

¹⁰ 『儒門医学』は、Frederick W. Headland（海得蘭）の *The Medical Hand Book* を底本に、フライヤーが口述し、趙元益が筆述し、江南製造局が出版した。（沈（1996: 84）による）

続いて、台湾中央研究院近代史研究所の『英華字典資料庫』と宣教師テキ・コウブン（狄考文 C.W.Matter）による専門語彙集 *Technical Terms English and Chinese*（1904）を用いて、英華辞典における訳語の状況を把握する。以下に「心病」と関連する記述を表 4 にまとめて示す。

表 4 英華辞典における「心病」に関連する記述

発行年	書名	disease of heart	heart
1822	『英華字典』 （モリソン）		心
1844	『英華韻府歴階』 （ウィリアムズ）		心、方寸
1847－48	『英華字典』 （メドハースト）	a disease of the heart 癰	心、心肝、心地、天君、 方寸、寸心、寸衷、中池、 衷懷、衷心、靈台
1866－69	『英華字典』 （ロプシャイト）	disease of the heart <u>心病</u> 、癰	心、靈台、方寸、寸衷、 衷懷、中池
1872	『盧公明英華萃林韻府』 （ドーリットル）	disease of the Heart 心之病	心、心口、心頭、靈台、 衷、衷懷
1884	『井上哲次郎訂増英華字典』	disease of the heart <u>心病</u> 、癰	心、靈台、方寸、寸衷、 衷懷、中池
1904	<i>Technical Terms English and Chinese</i>	disease of the heart <u>心病</u>	
1916	『赫美玲官話』 （ヘメリング）		心（Anat.）、心臟

表 4 を見ると、「disease of heart」の訳語には、「心病」、「心之病」、「癰¹¹」がある。英華字典における「heart」の訳語は、すべて「心」を用いており、『官話』で、ようやく「心臟」が併用されている。

ほかに、科学雑誌『格致彙編』¹²に、「心病」の用例が 2 件見られる。

（55）論脈之多少至数極易查明此与心之收束数相合雖能比心之收束数更少但不能比其更多在数種心病内其下房接受之血少故不能与運行之血相関（脈拍数がどれほどあ

¹¹ 『康熙字典』によると、「癰 心中病」。

¹² 『格致彙編』（1876-1892）は、中国清の末期の最初の専門的科学雑誌である。編集者は、宣教師フライヤーである。（熊（2011: 418）による）

るかはきわめて簡単に判明できる。これは、心臓の収縮の数と合う。心臓の収縮数より少ない場合はあるが、多い場合はない。いくつかの「心病」においては、心室が受け入れる血液が少なく、ゆえに循環している血液と相関しない。)

舒高第口訳『格致彙編』「論脈」〔此脈指全身而言〕1876 春季

- (56) 如因動四肢用多血或心因有感動之情或因他種病則其事最危險而其人可猝然而死其故大略因腦氣筋總處無血之故此種為心病之最危險者（四肢を動かすために多くの血液を用いたり、あるいは感動したり、あるいは他種の病気など、これは最も危険で、その人は突然死する可能性がある。これは、およそ脳神経の先端部に血液がいかないためで、この種の「心病」は最も危険である。)

『格致彙編』「脈表診病論・第三章論心与血管」1890 秋季

以上の調査により、近代中国の後期洋書では、「心病」が訳語として使用されており、それは、すべて「心臓の病気」という意味で使われていることがわかる。

6.6.4 新聞・雑誌にみる「心病」

『東方雑誌』や『申報』には、「心病」が「心臓の病気」という用法で用いられる例が見られる。

- (57) 死人到了他這裡，他略略看過之後，便給与死於肺炎心病之類的死亡証明書，如此便把人們的懷疑遮掩了過去。（死人が彼のところに着くと、彼はちょっと見た後で、肺炎や「心病」などで死んだという死亡証明書を与えて、これで人々の疑いをごまかしてしまう。）

哲生『東方雑誌』27・9「匈牙利歷時二十余年的大謀害案」1930

- (58) 此類物係与胆汁酸，繁醇，及医治心病的藥材相關連。（この類の物は胆汁酸、繁醇、及び「心病」を治療する薬材と関連する。）

曾昭掄『東方雑誌』40・18「中外化学発展概述」1944

(59) 根治気喘肺病心病腎病胃病貧血傷寒梅毒血圧増高等内科病（喘息、肺病、「心病」、腎病、胃病、貧血、傷寒、梅毒、血圧上昇などの内科病を根本から治す。）

『申報』「広告」1935.5.9

(60) 心病咯血

陳晋康問：余去冬曾患咯血，至本年二月初始愈，經醫師診斷知係心臟病所致

（余去冬は以前咯血を患い、今年の2月初めに到って治った。医師の診断によつて、心臟病によるものとわかった。）

『申報』「社会服務 読者諮詢医藥衛生」1946.11.17

上の用例の発表時期を見ると、すでに「心臟病」という語が伝来している時期とかさなっている。つまり、この時期は、「心臟の病気」を表すのに「心病」、「心臟病」がともに使われていたようである。

6.6.5 書籍にみる「心病」

「心病」は『辞源 初版』に収録されており、意味用法は2類に分類されている。

(61) 【心病】

①謂心中憂悶成疾也。（心中憂鬱で病むことをいう。）

〔易〕「坎…為心病。」（坎は…心病である。）

今謂不可語人之愁恨曰心病（今思うに、人に語れない憂いや恨みを心病という）

〔伝灯録〕

「莫教心病是最難医。」（心病は最も治し難い。）

元人伝奇。有心病還從心上医之語。今俗語謂「心病還須心藥治。」本此。（「元人伝奇」に「心の病気はやはり心から治すべきだ」の語がある。今俗にいう「心病は、やはり心の薬で治さなければならない。」はこれによる。）

又彼此不睦亦曰有心病。（また互いに仲が悪いことも心病という。）

②指嗜欲習慣而言。謂心有所癖也。（嗜欲や習慣を指していう。心のもつ癖をいう。）

清甘京有心病説。見〔昭代叢書〕。（清甘京に「心病」説がある。「昭代叢書」を見よ。）

後に出版された『漢語大詞典』に比べると、『辞源』の用法はかなり少ない。特に「心臓の病気」という用法が載っていないことに注目すべきである。『辞源』に「心臓の病気」という用法が収録されなかったことは、現代中国語の「心病」の意味用法に大きな影響を与えたと思われる。これが、後に、「心臓の病気」という用法を失うことに関連すると思われる。

『辞海』においては、1936年の初版、1965年の新編本のいずれにも「心病」は収録されていない。『現代漢語詞典』の初版（1978）では、「心病」は意味記述のみが載せられており、用例は挙げられていない。

(62) 【心病】

①指憂慮或煩悶的心情（憂慮或いは煩悶の心情を指す）

②指隱情或隱痛（隠れた気持ちや痛みを指す）

『現代漢語詞典 初版』1978

『現代漢語詞典』の意味①は、『辞源』の意味①と一致している。ただし、両書の意味②は異なっており、『辞源』の意味②は継承されていない。なお、『現代漢語詞典』初版の意味記述は、第7版（2016）まで踏襲されている。

(63) 【心病】

①指憂慮或煩悶的心情（憂慮或いは煩悶の心情を指す）

*心病難医（「心病」は治し難い）

②指隱情或隱痛（隠れた気持ちや痛みを指す）

*一句話正說在她的心病上。（この一言は、彼女の「心病」に当たった（彼女の痛いところを突いた。）

『現代漢語詞典 第7版』2016

なお、医学用語辞典においては、『医学名詞彙編』（1931）では、「Cardiopathy」の訳を「心病」としており、『高似蘭医学辞彙 第9版』（1939）では、「心病、心臓病」の両方が

用いられている。なお、現代の『英漢医学詞彙』（1991）では、「心[臓]病」としている。

6.6.6 CCL にみる「心病」

北京大学中国語言学研究中心 (center for Chinese linguistics PKU、以下、CCL と略す) の「現代漢語数拠庫 (データベース)」を利用して現代中国語における「心病」の使用を調査した結果、712 件ヒットした。CCL には、用例の具体的な年代が見られないが、「当代」の用例ならば、2020 年からさかのぼって 30 年以内の用例であろうと思われる。先に調査結果を述べると、CCL では、「心臓の病気」という用法の例は、1 件も見つからず、『漢語大詞典』の意味②と③の用例が最も多く見られた。

- (64) 相思病是属于非常難治療的一種。也有…“心病難医”等類似說法。(「恋わずらい」は非常に治しにくいものの一種に属す…「心病」は治し難い」などの言い方もある。)

当代応用文「健康養生」

- (65) 唯有什麼都不想才能使我安靜下來，工作是医治心病的良藥。(ただ何も考えないことこそ、私を落ち着かせる。仕事は「心病」を治療する良薬である。)

当代文学「梧桐梧桐」

上記の 2 例は、「恋わずらい」という意味で用いられており、(64) の「心病難医」は、今でもよく聞かれる慣用句である。

- (66) 心病，就是人心理上的疾病。心病，在行為上表現出各種失常現象，使人變得恐懼…進而導致神經官能症…(「心病」とは、すなわち人の心理上の疾病である。「心病」は、行動上では各種の異常現象を引き起こし、人をおびえさせる。…さらに進むと神経官能症を招く…)

当代応用文「健康養生」

- (67) 遇事前怕狼后怕虎、憂心忡忡、沈默寡言的人，罹患的更年期精神病等，都属于心病的范畴。(ことに遭う前に色々怯え、心配ばかりして、無口で言葉数が少な

い人がかかる更年期精神病などは、全て「心病」の範疇に属す。)

当代応用文「健康養生」

(66)、(67) は、『漢語大詞典』の意味⑤「精神病」という意味で使われており、文中に「心理的疾病、神経官能症、精神病」などの説明が加えられている。

(68) 聽到父親親切話語，父子兩的心病早已冰積。(父親の心のこもった話を聞いて、父子兩人の「心病」はとうに氷解した。)

当代報刊「人民日報」

(69) 學習成績問題一直是压在許多学生心頭的一塊心病。(學習成績問題はずっと多くの学生の心のうちにプレッシャーを与えている1つの「心病」である。)

当代報刊「1994 年報刊精選」

上記の2例は、『漢語大詞典』の意味②「煩悶する気持ち、悩み事」、「気がかり」という用法で用いられている。

(70) 想不到這句話引發了她的心病，眼淚突然地從她的眼圈里涌出來。(この言葉が彼女の「心病」を引き起こすとは思ってしなかった。涙が突然彼女の目からあふれ出てきた。)

当代文学

(71) 剛開始，他還充滿信心。現在，找工作，成了他的心病。(はじめたばかりのころは、彼はまだ自信に溢れていた。今は、仕事を探すことが、彼の「心病」になっている。)

当代文学「那方方的博士帽」

(70)、(71) のように、『漢語大詞典』の意味③「人に言えない事情や苦痛」という意味で使われた「心病」は、文学作品によく現れ、ややかたい表現のように思われる。

6.7. 日本語における「心病」

6.7.1 辞書にみる「心病」

日本の国語辞書をいろいろ調べた結果、「心病」が見出し語として出現したのは『日国』のみであった。以下にその記述を挙げる。

(72) 【心病】

①心中の憂いが引き起こす病。

＊易経 - 説卦「坎^レ為水、為^ニ溝洫^一、為^ニ隱伏^一〈略〉其於^レ人也、為^レ加^レ憂、為^ニ心病^一」

②妄想、憎悪などを生ずる心中の病。精神の病。

＊集義和書〔1676 頃〕――「一の心病ある故に、百善変じて凶徳となれり」

＊集義和書〔1676 頃〕――「むかし、釈迦、輪廻を見たるは、心眼病なり。

後世の仏者、此心病を伝て輪廻ありと思へり」

＊司馬光 - 涑水記聞・九「獄成、知^ニ諫院張抃行録問^一、駁^ニ繁用非^ニ心病^一、詔^ニ更驗^一、定^ニ繁用配^ニ広南牢城^一」

『日国』が最初にあげている用例は、中国儒教の経典『易経』であり、『漢語大詞典』の意味②にあたる用法である。なお、意味②の用例を分析すると、『集義和書』の用例は「妄想、憎悪などを生ずる心中の病」という意味にあたり、『涑水記聞』は「精神の病」という意味にあたると考えられる。すなわち、意味②を「妄想、憎悪などを生ずる心中の病」と「精神の病」という 2 類に分けることができる。

国語辞書のほかに、「心病」に関する記述は『例文 仏教語大辞典』にも現れ、次のように説明している。

(73) 【心病】

心の病。愛憎・対立など、世の人が抱く執着や苦悩をいう。

＊秘蔵宝鑰 中・四「如来治^ニ衆生心病^一亦復如^レ是」

仏教語としての「心病」は、古く中国西晋時代（154 年）の仏教書『大蔵経』第三巻に

使用されている。

(74) 常以法藥。療諸心病。(常に法を藥に以って、諸「心病」を治す)

『大藏經』第三卷

『例文 仏教語大辞典』の用例の出典である『秘藏宝鑰』を著述した空海は、平安時代の宗教界を代表する人物であり、唐に渡り、仏教の学問を求めた人物である。したがって、日本語における仏教語としての用法も、中国語由来のものだと考えられる。

『例文 仏教語大辞典』の意味記述は、『日国』の意味②「妄想、憎悪などを生ずる心中の病」と似た記述であるが、『日国』の意味②に取り上げられた『集義和書』の用例を見る限り、それらの用法は必ずしも仏教語とはいえず、一般語ととらえていいように思われる。そこで、『日国』では、仏教語としての「心病」は取り上げていないものと見ておく。

以上をまとめると、日本語の辞書類による「心病」の意味は、全部で4類に分けることができる。

①心中の憂いが引き起こす病。

②妄想、憎悪などを生ずる心中の病。

③精神の病。

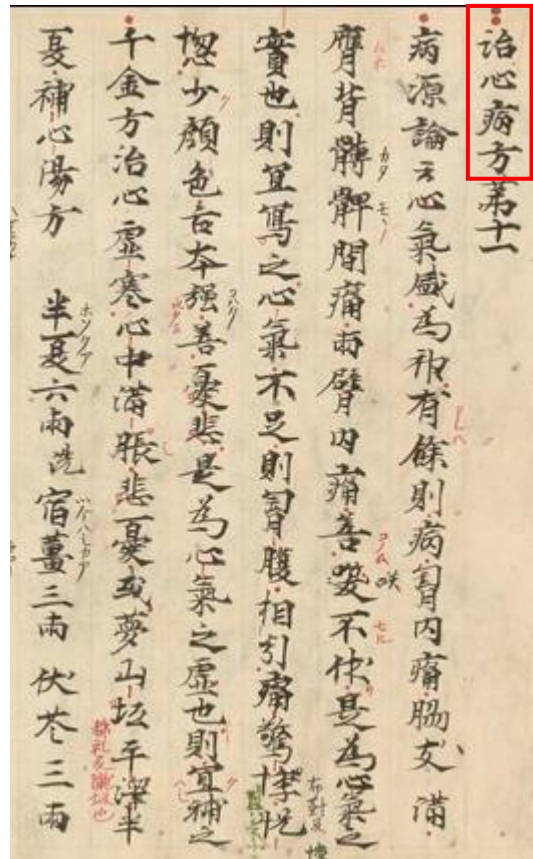
④仏教語。心の病。愛憎・対立など、世の人が抱く執着や苦悩をいう。

6.7.2 書籍・新聞・雑誌にみる「心病」の用例

「心病」は、日本の古医書では、まず、丹波康頼によって編纂された『医心方』

(984)に、「治心病方第十一」という小見出しに現れる(図4)。¹³『医心方』の病気の分類法は、『諸病源候論』に基づいているため¹³、「心病」は「精神の病」として使われたと考えられる。図4は、『諸病源候論』((52)に挙げた部分)からの引用であるが、ここの「心病」は、「心臓病」の意味を持たない。

¹³ 坂井(2020: 383)による。



『医心方』 卷六 胸腹痛部

(e 国宝)

https://emuseum.nich.go.jp/detail?langId=ja&webView=null&content_base_id=100173&content_part_id=006&content_pict_id=0

つまり、日本における早期の用例は、『易経』、『医心方』などと同様に、「心中の憂いが引き起こす病」という意味で伝われ、「心臓の病気の総称」という意味は、日本に伝来しなかったと思われる。

近現代における「心病」の用例を、「国立国会図書館近代デジタルコレクション」、新聞資料（『朝日新聞』、『読売新聞』）、『日本語歴史コーパス』、『青空文庫』および「東洋文庫」で求めたところ、「国立国会図書館デジタルコレクション」に 2 件、『朝日新聞』に 1 件、『読売新聞』に 1 件、『日本語歴史コーパス』に 1 件、「青空文庫」に 3 件、「東洋文庫」に 1 件、合わせて 9 件の用例が見つかった。

(75) それが心病というものです。ただ心理です。ごらんなさい天体を。日々曇り日々晴れ、朝夕不測の風雲をくりかえしているではありませんか。

吉川英治『三国志 赤壁の巻』1939-1943

(76) 薬膳書には「小麦粉は、心と脾（ひ）の臓を助け、心病（ノイローゼ、情緒不安定、更年期障害など）を安定させ、不眠を治す」とあり、虚弱な人、神経質で食が細い人、寝汗が出る人などに適した主食です。

『朝日新聞』「五目あんかけめん（家庭でつくる簡単薬膳：23）」1995.11.22 夕刊

(75) では、心病を「曇り」や「晴れ」の天気や「朝夕不測の風雲」などにたとえ、(76) では「ノイローゼ、情緒不安定、更年期障害など」で説明していることから、この2例は、「精神の病」、「心中の憂いが引き起こす病」の意味に当たると考えられる。

(77) 医者信じ、薬の効能を信じてこそ、はじめてききめがあるのです。心病の治療を志すものもそれと同様です。まず信ずること、すなわち信仰が第一であるわけです。

『般若心経講義』1968

(78) こころの疾いもあります。身病と心病です。ところで、身体の病に、外科と内科があるように、心の病にもまた外科もあり、内科もありましょう。

『般若心経講義』1968

(79) 衆人の才、老いて心を迷わさず、小人の財、老いて心病となる。子孫財を貪れば、則ち家を傷うにいたる。

『子育ての書 2』1976

(77)、(78) の出典である『般若心経』は仏教經典であるが、例文を見る限りでは、ここでの「心病」は、一般語として用いられていると思われる。(79) や、図5に示した『日本宗教改造論』（1888）の副題に現れている「心病」は、苦悩や執着などの意味で使用されているが、これも仏教語ではなく、一般語として使われていると考えられ

る。



図 5 田島大機『日本宗教改良論：一名・心病良薬』(1888)

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/815003>

(80) 事件報道による精神障害者の二次被害を考えるイベント「心病流言（とばっち
り）真剣考」が 27 日午後 1 時から、大阪市立北区民センター（JR 天満駅そば）
で開かれる。

『読売新聞』2004.3.20 朝刊

(81) また、地域社会へ普及・啓発活動を通じて、人々の心病や発達障がいに対する
理解を深め、誰もが生きやすい社会の実現に寄与することを目的とする。

『岡山県公報』2014

(80)、(81) の文中では、「心病」は、「精神障害者」、「発達障がい」などの言葉と対応
して用いられており、「精神の病」という意味を表していると思われる。

(82) 十字頃退朝いたし候、此の事件、心病の事に候ところ、殊の外無事相済、実に安心の至りに候。

『太陽』「明治初年外交物語（その十）初見参のダンス」1925

(82) は心配していたことが無事に終わって、「実に安心」したということを述べているが、ここの「心病」は、『日国』の意味記述のいずれも当てはまらず、ほかに同様の例も見つからなかった。これは、比喻の1例とみなしてよいだろう。

6.8 まとめ

この章では、近代医学用語「心臓病」という語の成立理由、及び受容された経緯を解明し、この語がいつごろ中国へ伝わり、どのように中国語に受容されたのかについても明らかにした。合わせて、日中における「心病」の使用上の相違について調査・考察を行った。

「心臓病」は、奥山虎章が『医語類聚』（1872）の「cardiopathia」を翻訳する際に造語した和製漢語だと思われる。幕末明治初期においては、心臓を表すのに、「心」、「心の臓」、「心臓」が共に使用されていたが、訳語として使用されたものには、「心臓」が多かったため、虎章は、「cardiopathia」を訳す際に、その語釈である「heart disease」を直訳して、「心臓」を用いたと推測される。「心臓病」は、専門度のかなり高い用語と思われ、用例調査を通して、「心臓の病気の総称」以外の用法がないことが確認された。心臓病は、その後、長谷川泰の著訳した『病理摘要』（1875）、同年に出版された東京医学校『医院雑誌』巻の一（1875）に現れている。1880年代になると、医学書はもとより、医学雑誌『中外医事新報』、新聞などにも多く見られるようになった。さらに、独和辞典において、「herzfehler」、「herzkrankheit」の訳語になり、1900年代からは、文学作品にも使われるようになった。こうして、「心臓病」は、日本語に定着したと思われる。

中国語においては、「心臓病」は、19世紀以前の新聞記事にすでに使用されている。ただし、用例が多く見られるのは、1910年代ごろの病理学書、衛生学書からである。早くに『辞源』初版（1915）に収録されているため、徐々に知られるようになったと思われる。その後、1920年代からは、文学作品への使用も確認でき、このころに中国語に受容されたと考えられる。

「心病」は、中国儒教の経典『易経』が初出と見られ、伝統医書『黄帝内経』では「心臓の病気」を表していた。後に、来華宣教師たちが「disease of heart」を訳す際には、新

造語ではなく、「心病」を多用している。その後、一時期「心臓病」と併用され、1940年代までは、「心臓の病氣」として使用された用例が見られるが、現代の医学においては、その用法は見られなくなった。

日本において、「心病」は、『易経』の伝来や、『医心方』の刊行により、使われるようになったが、その使用頻度はかなり低いといえる。なお、日本語の「心病」は、「心臓病」の意味を持たず、主に、心中の憂いや精神の病として使用されている。

日中両語において、「cardiopathy」、「heart of disease」の訳語に相違が見られたのは、「heart」を、日本では「心臓」と訳し、中国では、来華宣教師が「心」と訳したことによるようである。

【第6章の参考文献】(辞書類は巻末にまとめて挙げる)

沖森卓也編 (2017)『図説近代日本の辞書』おうふう

坂井建雄 (2020)『医学全史：西洋から東洋・日本まで』筑摩書房

志村俊郎 (2011)「「明治期における私立医学校の医学教育」シンポジウム「我が国の医学教育の歴史をめぐって」」『日本医史学雑誌』57・2, 121 日本医史学会

下総高次 (2005)「明治初年に瑞穂屋卯三郎と島村利助により出版されたドイツ・シュミット著書の翻訳“内科提綱”について」『日本歯科医史学会会誌』26・1, 65-67 日本歯科医史学会

沈国威 (1996)「近代における漢字学術用語の生成と交流—医学用語編(1)」『文林』30, 59-94 神戸松蔭女子学院大学

宮地敦子 (1979)「第四章 漢語の定着—「こころ」「心の臓」「心臓」ほか—「こころ」から「心臓」へ—身体語彙の変化」『身心語彙の史的研究』80-100 明治書院

佐藤亨 (1983)「しんぞう (心臓)、(心の臓)」『講座日本語の語彙⑩』240-244 明治書院

南京中医学院 (1980)『諸病源候論校釈』人民衛生出版社

松本秀士 (2009)「西医東漸をめぐる『筋』の概念と解剖学用語の変遷」『或問』17, 49-61 関西大学

深瀬泰旦 (1996)「『医語類聚』の著者 海軍大軍医 奥山虎章」『日本医史学雑誌』42・1, 29-48 日本医史学会

熊月之 (2011)『西学東漸与晚清社会』中国人民大学出版社

終章

本論文は、日中語彙交流史の視点に立って、近代和製医学用語について、その成立過程・成立の要因を究明し、その普及・定着した軌跡を確認し、さらに、その中国への移入ルートや受容・定着の時期を明らかにしていくことを目的としたものである。これまで、「結石」、「瘧疾」、「貧血」、「心臓病」の各語について、それらを明らかにしてきた。終章では、これら4語が、なぜ中国伝統医学（以下「中医学」）の用語に代わって使われるようになったのか（これらは、いずれも中医学にその病気あるいは病状を表す用語があり、その一部は日本に伝わり、使用されていた）、これらがなぜ普及・定着できたのか、考えてみたい。それについて、筆者の考えを述べることで、本稿のまとめとしたい。

筆者は、4つの用語が作られた根本的な要因は、中医学の用語では、西洋医学が明らかにした病気・病状を、正確的に解釈・表現できなかったことにあると考えている。つまり、それは、中医学と西洋医学の違いにあると考える¹。

これら4語は、日本独自の作り方によって作られた新語である。これらの造語には、西洋医学の考えが含まれている。その造語法は、次のようなものであった。

- ① オランダ語より翻訳された医学用語である「結石」、「瘧疾」は、原語をそのまま訳したものではなく、病理的に病気を理解したうえで、病因や病状などが提示できる漢字（「結」、「石」、「瘧」、「疾」）を語基にして組み合わせたものである。ただし、漢字の選定においては、やはり中医学書（『本草綱目』、『金匱要略』など）の影響を受けている。この2語の造語は、意識に当たる。
- ② 英語より翻訳された医学用語である「貧血」、「心臓病」は、英語の語釈を日本語に訳し、それを漢字の語基（「貧」、「血」、「心臓」、「病」）に変換して組み合わせたものである。この2語の造語は、直訳に当たる。

これに対して、中国では、プロテスタントの来華宣教師が、医学用語を翻訳しているが、疾患（病気・病状）を表す用語については、既存語を多く用いている。プロテスタン

¹ 石橋（2002: 3）では、西洋医学は、「科学的（近代理論）、理論的、分析的（専門分化）、機械的（局所的）、対症的、普遍的、客観的、合成的、複合成分」であり、漢方医学は、「哲学的（漢方理論）、経験的、総合的（全人的）、人間的（全身的）、対証的、個人的、主観的、天然的、単一製品」であるとまとめている。漢方医学は、中医学のうち、金元医学が日本に伝わってから、日本独自に発展した医学のことを指し、厳密に言えば、両方は同じものではないが、石橋が挙げている漢方医学の特徴は、中医学に一致する考えられる。

トの来華宣教師が翻訳した解剖学用語²と和製医学用語（本論文の研究対象である用語を含む）を対照させて、表 1 に示す。

表 1 来華宣教師が翻訳した解剖学用語と疾患用語

	来華宣教師の訳語	和製医学用語
解剖学用語	脳気筋、脳筋、気筋	神経
	甜肉	脾臓
	経脈	動脈
	絡脈	静脈
	孫脈	毛細脈管
本論文の研究対象 (疾患用語)	石淋、砂淋	結石
	抽筋、転筋	痙攣
	血虚	貧血
	心病、心之病	心臓病

来華宣教師の訳語は、解剖学用語については、ほぼ新造語であるのに対して、疾患（病気・病状）を表す用語については、少なくとも本論文の研究対象に限っては、すべて既存語を用いている。これは、中医学には、この時代において、解剖学の知識が欠けていたため、それらの訳語を新しく作らなければならなかったからである。一方、疾患を表す用語についても、中医学に合わない部分が多いため、来華宣教師は、日本と同じように新造語を作るべきだと考えていたが、結局、そうしなかった。これは、中国人にとっては、新語より既存語を用いたほうが理解しやすいと考えたからかもしれない。

宣教師の訳語はほとんど継承されず、和製医学用語に入れ替わったのであるが、その理由について、筆者は、以下のように考えている。

- ① 来華宣教師の訳語より、和製医学用語のほうが、西洋医学の概念をより正確的に、かつわかりやすく示すことができた³。
- ② 大量の日本語翻訳が中国語に流れ込んできたため、それを使う人が増えた。

² 松本（2010）による。

³ ほかに、沈（1997）が述べているように、来華宣教師の訳語は、既成の中国語の規範にとらわれず、比較的に自由な語法と文体（例えば、2 字熟語や白話的な要素など）で書かれていたことも、後に採用されなかった理由の 1 つであると思われる。本論文の 4 語には、そういう特徴が見当たらなかった。

①については、上に述べたが、②については、この4語が中国に伝来した1890～1910年は、英華辞典の編集（特に『顔惠慶英華大辞典』（1908））、清国政府の官員の報告、教科書の編訳、雑誌における日本小説の翻訳・重訳など、いくつかのルートによって、たくさんの中国に伝来・普及した時期に当たっていた。

ところで、劉凡夫（1993: 9）「中国語辞書『辞源』初版に収録された日本語語彙の性格」は、『辞源』に収録された日本語語彙が今日の中国語に定着したのは、わずか3分の1弱に過ぎず、3分の2以上が淘汰された」と述べている。しかし、劉（1993）が考察した180語は、人文科学分野の語彙が多く、人文科学分野においては、上記の結論は成立するにしても、和製医学用語（生理学名詞⁴）については、当てはまらないと思われる。たとえば、「神経系」、「神経中枢」、「動脈」、「静脈」、「痙攣」、「貧血症」、「心臓病」などの語は、『辞源』（1915）に収録されているが、いずれも「日本由来」という注釈は見られない。このように、医学用語については、多くの用語が今日の中国語に定着したのではないと思われるが、これについては、今後さらなる考察を通して、見ていく必要があると思う。

さらに、この4語の普及・定着に当たっては、公共衛生の普及が関与したことも考えられる。この4語は、20世紀初期において、丁福保が翻訳編纂した衛生学書を皮切りに、衛生学書・衛生学教科書の中にも現れている。衛生という概念は、フライヤーなどの来華宣教師たちが中国に普及し始めた。「衛生」という語が初めて現れたのは、1905年に、清国政府が巡警部警保司内に設置した衛生科である。これは、中国最初の公共衛生機構である。続く民国時代において、中国の公共衛生の発展は進んだ。衛生行政の機構は、中央だけでなく、地方にも設置されるようになり、それと同時に、政府は、様々な衛生の政策を行い、学校でも衛生学教育を始めた⁵。こういった、公共衛生の普及を背景として、衛生学書・衛生学教科書は、多くの人々に読まれ、本論文の研究対象である4語を含め、多くの和製医学用語が普及するようになったと考えられる。

本論文の研究対象である4語は、現代の日中両言語において、いずれも日常的に使用されている。使用の上で、些細な違いはあるが、互いの国に生活したり、病院に行ったりするときに、この4語を両言語で同じように使うことに支障はないと思う。しかし、近代和製医学用語は、このようなものだけではない。序章で触れた「整形外科」、「看病」、「皮

⁴ 『辞源』において、「動脈」、「静脈」は、生理学名詞とされている。

⁵ 張（2013: 8-14）による。

肉」など、日中間意味用法が違う用語も多い。今後は、そういった用語を集めて、その違いについて考察し、その結果を言語教育に活かしていければと思っている。

【終章の参考文献】

- 石橋晃（2002）「現代医療の中の漢方医学」日本東洋医学会学術教育委員会編『入門漢方医学』2-6 南江堂
- 松本秀士（2010）「『新靈枢』が伝えた日本経由の西洋解剖学とその用語」『或問』18, 73-84 関西大学
- 張敏琪（2013）「民国時期公共衛生事業建設研究（1912-1937）」修士学位論文 遼寧大学
- 沈国威（1997）「近代における漢字学術用語の生成と交流—医学用語編（2）」『文林』31, 1-18 神戸松蔭女子学院大学
- 劉凡夫（1993）「中国語辞書『辞源』初版に収録された日本語語彙の性格」『国語学研究』32, 1-10 東北大学

参考文献

論文・書籍

- 青木歳幸（2013）「種痘法普及にみる在来知」『研究紀要』7, 1-21 佐賀大学地域学歴史文化研究センター
- 浅井允晶（2012）「緒方洪庵全集編集委員会編『緒方洪庵全集』第一巻・第二巻（『扶氏経験遺訓』上・下）：刊行に寄せて」『日本医史学雑誌』58-3, 389-392 日本医史学会
- 浅野敏彦（2004）「明治の漢語」『日本語学』2004.9 臨時増刊号, 48-55 明治書院
- 阿知波五郎（1982）『近代日本の医学—西欧医学受容の軌跡—』思文閣
- 逢見憲一（2019）「臨床医学教育における医師と医学の原像と「執拗低音」「ドイツ医学」と「アメリカ医学」の変容に関する一試論」坂井建雄編『医学教育の歴史—古今と東西—』435-481 法政大学出版局
- 荒川清秀（1997）『近代日中学術用語の形成と伝播-地理学用語を中心に』白帝社
- 荒川清秀（2000）「「健康」の語源をめぐって」『文学・語学』166, 72-82 全国大学国語国文学会
- 荒川清秀（2020）『漢語の謎—日本語と中国語のあいだ』ちくま新書
- 石橋晃（2002）「現代医療の中の漢方医学」日本東洋医学会学術教育委員会編『入門漢方医学』2-6 南江堂
- 伊藤隆太（1975）「臨床薬理用語統一に当たって、医学用語全般からみて注意すべき点と問題点」『臨床薬理』6-4, 277-282 日本臨床薬理学会
- 李漢燮（2010）『近代漢語研究文献目録』東京堂出版
- 医療秘書教育全国協議会編（1998）『医学用語』建帛社
- 内田慶市（1997）「ヨーロッパ発—日本経由—中国行き「西学東漸」のもう一つのみちすじ」藤善真澄編『浙江と日本』177-195 関西大学東西学術研究所
- 王力（1958）『漢語史稿』科学出版社
- 王立達（1958）「現代漢語中從日語借来的詞彙」『中国語文』2, 90-94 中国社会科学院
- 王敏東・許蕤鐘（2005）「「扁桃腺」という言葉の成立について 付：関連語彙にも触れながら」『国語語彙史の研究』24, 1-17 大阪大学
- 王敏東（2006）「医学名詞“結核”小考」『語文建設通信』83, 49-52 香港中国語文学会
- 王永炎・魯兆麟編（2011）『中医内科学 第2版』人民衛生出版社

- 王揚宗（1996）『『格致彙編』与西方近代科技知識在清末的傳播』『中国科技史雜誌』17-1,36-47 中国科学技術史学会
- 王揚宗（2000）「1850年代至1910年中国与日本之間科学書籍的交流述略」『関西大学東西学術研究所紀要』33, 139-152 関西大学
- 大滝紀雄（1973）「西説内科撰要について（一）」『日本医史学雑誌』19-1, 19-28 日本医史学会
- 大滝紀雄（1995）「幕末から明治中期にかけての英米系医学の受容」『日本医史学雑誌』41-2, 88-89 日本医史学会
- 沖森卓也編（2008）『図説日本の辞書』おうふう
- 沖森卓也編（2017）『図説近代日本の辞書』おうふう
- 温昌斌（2011）『民国科技訳名統一工作实践与理論』商務印書館
- 開原成允（2010）「医学用語の現状と課題」『日本語学』29-15, 14-24 明治書院
- 香川靖雄（1997）「医学の専門用語の問題点」『日本語学』16-2, 50-59 明治書院
- 夏晶（2012）「晚清科技術語的翻訳」博士学位論文 武漢大学
- 何華珍（2011）「近代日中間における漢語の交流の歴史」「特集 近代の漢語」『日本語学』30-8, 16-31 明治書院
- 何生根（2001）『清末日本教育考察研究』修士学位論文 浙江大学
- 川端喜美子（1996）『オランダ語基本単語 2000』語研
- 高晞（2008）「解剖学中文訳名の由来与確定—以德貞『全体通考』為中心」『歴史研究』2008-6, 80-104 歴史教学社
- 国立国語研究所「病院の言葉」委員会（2009）『病院の言葉を分かりやすく—工夫の提案—』勁草書房
- 吳燕（2010）「『燈臺卒』をめぐって」『清末小説』33, 11-30 清末小説研究会
- 吳洪成・藺士琦（2019）「清末留日学生編訳教科書活動述論」『瀋陽師範大学学报』2019年5, 113-119 瀋陽師範大学
- 胡新祥（2018）「中日近代新漢語についての研究 —仏教由来漢語を中心に—」博士学位論文 立教大学
- 坂井建雄（2020）『医学全史：西洋から東洋・日本まで』筑摩書房
- 笹原宏之（2007）『国字の位相と展開』三省堂
- 斎藤毅（1977）『明治のことば—文明開化と日本語—』講談社

- 佐藤亨（1980）『近世語彙の歴史的研究』桜楓社
- 佐藤亨（1982）「訳語研究の一視点―「病院」の成立をめぐる―」『文芸研究』100, 99-109 日本文芸研究会
- 佐藤亨（1983a）『近世語彙の研究』桜楓社
- 佐藤亨（1983b）「しんぞう（心臓）、（心の臓）」『講座日本語の語彙⑩』240-244 明治書院
- 佐藤亨（1986）『幕末・明治初期語彙の研究』桜楓社
- 佐藤亨（2007）『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』明治書院
- 佐藤亨（2013）『現代に生きる日本漢語の成立と展開』明治書院
- 佐藤喜代治編（1983）『講座日本語の語彙 語誌 1-3』明治書院
- 真田治子（2020）「専門用語集の語彙」陳力衛編『近代の語彙① ―四民平等の時代―』162-171 朝倉書店
- さねとうけいしゅう（実藤恵秀）（1970）『中国人日本留学史・増補』くろしお出版社
- 実藤恵秀著・譚汝謙・林啓彦訳（1983）『中国人日本留学史』生活・読書・新知三聯書店
- 澤井直・坂井建雄（2010）「昭和初期解剖学用語の改良と国語運動」『日本医史学雑誌』56-1, 39-52 日本医史学会
- 澤井直（2012）「医学教育における医学用語―用語の浸透と統一を中心に―」坂井建雄編『日本医学教育史』323-334 東北大学出版会
- 芝哲夫（2008）「緒方洪庵の医学用語」『適塾』41, 62-65 大阪大学
- 志村俊郎（2011）「「明治期における私立医学校の医学教育」シンポジウム「我が国の医学教育の歴史をめぐる」」『日本医史学雑誌』57-2, 121 日本医史学会
- 下総高次（2005）「明治初年に瑞穂屋卯三郎と島村利助により出版されたドイツ・シュミット著書の翻訳“内科提綱”について」『日本歯科医史学会会誌』26-1, 65-67 日本歯科医史学会
- 舒志田（2020）「『医学原始』の語彙について―日本の洋学への影響を中心に―」『或問』38, 39-54 関西大学
- ジョン・C・キャンベル、池上直己、津川友介「日本の医療制度の政治的・歴史的背景」池上直己編『包括的で持続的な発展のためのユニバーサル・ヘルス・カバレッジ：日本からの教訓』31-45 日本国際交流センター
- 沈国威（1990）「[V+N] 構造の二字漢語名詞について―動詞語基による装定の問題を中

- 心に、言語交渉の視点から—」『国語学』160, 1-11 国語学会
- 沈国威（1994）『近代日中語彙交流史』笠間書院
- 沈国威（1996）「近代における漢字学術用語の生成と交流—医学用語編（1）」『文林』30, 59-94 神戸松蔭女子学院大学
- 沈国威（1997）「近代における漢字学術用語の生成と交流—医学用語編（2）」『文林』31, 1-18 神戸松蔭女子学院大学
- 沈国威（1998）「新漢語研究に関する思考」『文林』32, 37-61 神戸松蔭女子学院大学
- 沈国威（2006）「『辞源』与現代漢語新詞」『或問』35, 35-58 関西大学
- 沈国威（2010）「西方新概念の容受与造新字為訳詞—以日本蘭学家与来華宣教士為例—」『浙江大学学報』40-1, 121-134 浙江大学
- 鄒振環（2011）『丁福保与“丁氏医学叢書”』『東方翻譯』2011-6, 37-46 復旦大学
- 鄒文君（2016）「反転語「素因」・「因素」について：語彙史を中心に」『立教大学大学院日本文学論叢』16, 201-213 立教大学
- 杉本つとむ（1961）「近代日本語の成立 —洋学との関連において—」『国語学』46, 52-68 国語学会
- 杉本つとむ（1977）『江戸時代蘭語学の成立とその展開 I~V』早稲田大学出版部
- 杉本つとむ（1976-1982）『江戸時代蘭語学の成立とその展開 I~V』早稲田大学出版部
- 杉本つとむ（1983）『日本翻訳語史の研究』八坂書房
- 杉本つとむ（1991）『国語学と蘭語学』武蔵野書院
- 杉本つとむ（1998）『杉本つとむ著作選集 2 近代日本語の成立と発展』八坂書房
- 鈴木修次（1981a）『文明のことば』文化評論出版
- 鈴木修次（1981b）『日本漢語と中国—漢字文化圏の近代化—』中公新書
- 鈴木修次（1983）『漢字再発見』PHP 出版社
- 関場不二彦（1933）『西医学東漸史話』吐鳳堂書店
- 朱京偉（2003）『近代日中新語の創出と交流・人文科学と自然科学の専門語を中心に』白帝社
- 朱京偉（2011）「日本の近代漢語の来歴」「特集 近代の漢語」『日本語学』30-8, 4-15 明治書院
- 宗田一（1988）「宇田川家三代の実学 —『西説内科撰要』と関連薬物書をめぐって—」『実学史研究 V』3-21 実学資料研究会 思文閣出版

- 蘇小楠（2015）「近代日中学術用語の生成の展望」『北九州市立大学国際論集』13, 113-121 北九州市立大学国際教育交流センター
- 孫建軍（2015）『近代日本語の起源 幕末明治初期につくられた新漢語』早稲田大学出版部
- 孫常叙（1956）『漢語詞彙』吉林人民出版社
- 孫琢（2010）「近代医学述語的創立—以合信及其『医学英華字積』為中心」『自然科学史研究』2010-4, 456-474 中国科学院自然科学史研究所
- 成明珍（2015）「日中韓三国の専門用語における語彙・文字に関する研究—医学・化学分野の漢字・漢語を中心に—」博士学位論文 早稲田大学
- 高野繁男（1984）「『明治期・医学用語の基本語基と語構成』—『医語類聚』の訳語」『人文学研究所報』18, 3-19 神奈川大学人文学研究所
- 張大慶（1994）「早期医学名詞統一工作博医会的努力和影響」『中華医史雜誌』24-1, 15-19 中華医学会
- 張大慶（2001）「高似蘭—医学名詞翻譯標準化的推動者」『中国科学史料』22-4, 324-330 中国科技出版社
- 張大慶（2006）『中国近代疾病社会史』山東教育出版社
- 張敏琪（2013）「民国時期公共衛生事業建設研究（1912-1937）」修士學位論文 遼寧大学
- 陳愛文・于平（1979）「並列式双音式的字序」『中国語文』2, 101-105 商務印書館
- 陳力衛（2001）『和製漢語の形成とその展開』汲古書院
- 陳力衛（2016）「なぜ日本語の「気管支炎」から中国語の“支気管炎”へ変わったのか」『日中語彙研究』6, 1-25 愛知大学中日大辞典編纂所
- 陳力衛（2019）『近代知の翻訳と伝播—漢語を媒介に—』三省堂
- 陳力衛（2019）『東往東来：近代中日之間的語詞概念—学科知識与近代中国研究書系』社会科学文献
- 鄧鉄涛・程芝范（2000）『中国医学通史』人民衛生出版社
- 永嶋大典（1970）『新版 蘭和・英和辞書発達史』講談社
- 中山恵利子（2015）「現代日本語における外来語」沖森卓也・阿久津智編『ことばの借用』116-121 朝倉書店
- 南京中医学院（1980）『諸病源候論校釈』人民衛生出版社
- 西嶋佑太郎（2014）「日本語医学用語の読みの多様性と標準化—「楔」字を例に—」『漢字

- 文化研究』5, 57-56 日本漢字能力検定協会
- 西嶋佑太郎 (2020) 「医学用語の漢字漢語の研究」『学会通信 漢字之窗』2-2, 42-43 日本漢字学会
- 日本医学会医学用語管理委員会 (2008) 「医学用語の標準化をめざして—『日本医学会医学用語辞典 (英和)』第3版の編集方針—」『医療情報学』27-5, 451-460 日本医療情報学会
- 野村雅昭 (1988) 「二字漢語の構造」『日本語学』7-5, 44-55 明治書院
- 橋本鉦市 (1994) 「第1章 医師集団と非学歴層 (第二部 学習者の世界, 近代化過程における遠隔教育の初期的形態に関する研究)」『研究報告』67, 157-184 放送大学
- 飛田良文 (1986) の「西洋文化の移入と新漢語」『月刊国語教育』6-6, 110-115 東京法令出版
- 広田栄太郎 (1969) 『近代訳語考』東京堂出版
- 深瀬泰旦 (1995) 「海軍大医監 奥山虎炳 (1840～1926)」『日本医史学雑誌』41-3, 3-30 日本医史学会
- 深瀬泰旦 (1996a) 「『医語類聚』の著者 海軍大軍医 奥山虎章」『日本医史学雑誌』42-1, 29-48 日本医史学会
- 深瀬泰旦 (1996b) 「『医語類聚』(奥山虎章) と Medical Lexicon (Robley Dunglison)」『日本医史学雑誌』42-2, 66-67 日本医史学会
- 富士川游 (1974) (1933 初刊) 『日本医学史綱要』平凡社
- 北京師範学院中文系漢語教研組編著 (1959) 『五四以来漢語書面語言的變遷和發展』商務印書館
- 馬西尼 (Federico Masini) 著・黄河清訳 (1997) 『現代漢語詞彙的形成・十九世紀漢語外来詞研究』漢語大詞典出版社
- 松本秀士 (2008) 「動脈・静脈の概念の初期的流入に関する日中比較研究」『或問』14, 59-80 関西大学
- 松本秀士 (2009a) 「西医東漸をめぐる「筋」の概念と解剖学用語の変遷」『或問』17, 49-61 関西大学
- 松本秀士 (2009b) 「「神経」と東西身体思想の諸相—近代中国における医療宣教師創出の訳語をめぐって」『語彙研究』7, 56-65 名古屋：語彙研究会
- 松本秀士 (2010) 「『新靈枢』が伝えた日本経由の西洋解剖学とその用語」『或問』18, 73-

84 関西大学

真柳誠・友部和弘（1992）「中国医籍渡来年代総目録（江戸期）」『日本研究』7-46, 151-183

国際日本文化研究センター

三浦於菟（2014）『「気・血・水」の流れが健康をつくる：「漢方の原則」で病気知らずに!』

プレジデント社

宮島達夫（1979）「共産党宣言の訳語」言語学研究会編『言語の研究』425-517 むぎ書房

宮田和子（1998）『現代漢語外来詞研究』再考（1）『英学史研究』1999-31, 167-188 日

本英学史学会

宮地敦子（1979）『身心語彙の史的研究』明治書院

森岡健二（1991）『改訂 近代語の成立 語彙編』明治書院（初出 1959）

八耳俊文（1996）「幕末明治初期に渡来した自然神学的自然観—ホブソン『博物新編』を中

心に—」『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』4, 127-140 青山学院女子短期

大学

山田肇（1971）「泌尿器科学領域における華岡青洲先生とその周辺（随想）」『泌尿器科紀

要』17-2, 87-88 京都大学

柳父章（1982）『翻訳語成立事情』岩波新書

山田孝雄（1940）『国語の中に於ける漢語の研究』宝文館

熊月之（2011）『西学東漸与晚清社会』中国人民大学出版社

羅婉薇（2004）「炎(Inflammation) 的歴史」『語文建設通信』79, 42-45 香港中国語文学

会

李迪・郭世荣（2002）「中国現代第一部百科全書：『普通百科新大詞典』」『辞書研究』2002-

3, 122-126 内蒙古師範大学科学史研究所

梁艷・王玉（2020）「喋血生：曇花一現的清末小説翻訳家」『清末小説から』136, 32-40

清末小説研究会

劉月華・潘文娛・故韓（2001）『実用現代漢語語法』商務印書館

劉凡夫（1993）「中国語辞書『辞源』初版に収録された日本語語彙の性格」『国語学研

究』32, 1-10 東北大学

辞書類

日本語辞書

- 『諸厄利亜語林大成』(1814) 本木庄左編 雄松堂書店 (1976 復刻版)
- 『医学英和辞典 第2版』(2008) 石田名香雄ほか編 研究社
- 『医学新字典：独羅和訳』(1905) 興津磐・大島櫟編 吐鳳堂
- 『医学用語集：第一次選定』(1944) 第十一回日本医学会医学用語整理委員会編 南山堂書店
- 『いろは辞典：漢英対照』(1888) 高橋五郎著 長尾景弼
- 『和蘭字彙』(1855-58) 桂川甫周ほか校 山城屋佐兵衛
- 『英和対訳袖珍辞書』(1862) 堀達之助著 幕府洋書調所
- 『改正増補英和対訳袖珍辞書』(1867) 堀達之助著 開成所
- 『懷中和羅独英医語辞典』(1899) 日高昂著 南江堂
- 『漢字源 改訂第5版』(2010) 藤堂明保ほか編 学研プラス
- 『言海』(1889-1891) 大槻文彦著 大槻文彦
- 『研究社新和英大辞典』(1931) 武信由太郎編 研究社
- 『広辞苑 初版』(1955) 新村出編 岩波書店
- 『広辞苑 第2版』(1969) 新村出編 岩波書店
- 『広辞苑 第3版』(1983) 新村出編 岩波書店
- 『広辞苑 第6版』(2008) 新村出編 岩波書店
- 『広辞林 改定新版』(1934) 金沢庄三郎編 三省堂
- 『広辞林 新版』(1958) 金沢庄三郎編 三省堂
- 『講談社オランダ語辞典』(1994) P・G・J・フアン・ステルケンブルグ監修 講談社
- 『ことばの泉：日本大辞典』(1898) 落合直文著 大倉書店
- 『辞苑』(1935) 新村出編 博文館
- 『辞海』(1952) 金田一京助編 三省堂
- 『辞林』(1907) 金沢庄三郎編 三省堂
- 『袖珍医学辞彙』(1886) 伊地知英太郎著 新宮涼園編 伊藤誠之堂
- 『全訳 漢辞海 第4版』(2017) 戸川芳郎監修 佐藤進・濱口富士雄編 三省堂
- 『増補改正訳鍵』(1864) 広田憲寛補正 秋田屋太右衛門
- 『大辞典』(1934-1936) 平凡社編 平凡社

『大辞林 第4版』(2019) 松村明編 三省堂

『デジタル大辞泉』小学館大辞泉編集部 小学館

『哲学字彙』(1884) 井上哲次郎 東洋館

『独逸医学辞典』(1886) 新宮涼園ほか編 英蘭社

『独羅英和医学字彙』(1900) 田中鍊太郎編 南江堂

『独和新医学大字典』(1902) 恩田重信編 金原医籍

『ドゥーフハルマ』(「長崎ハルマ」 1833年に完成) ヘンドリック・ドゥーフ (Hendrik Doeff)

『日漢独羅病名対照辞典』(1913) 三輪徳寛校 吐鳳堂書店

『日本医学会医学用語辞典英和第3版』(2007) 日本医学会医学用語管理委員会 南山堂

『日本国語大辞典 第2版』(2000-2002) 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編 小学館

『日本大百科全書 (ニッポニカ)』(1994-1997) 小学館編 小学館

『日本大辞書』(1893) 山田美妙編 日本大辞書発行所

『日本語大事典』(2014) 佐藤武義・前田富祺ほか編 朝倉書店

『日本新辞林』(1897) 林甕臣・棚橋一郎編 三省堂

『波留麻和解』(「江戸ハルマ」 1796) 稲村三伯ほか

『標準医語辞典：独・羅・英・仏・和』(1936) 賀川哲夫編 南山堂

『附音挿図 英和字彙』(1873) 柴田昌吉・子安峻編 日就社

『訳鍵』(1810) 藤林普山著

『羅独和訳医学字典』(1906) 川村正治・宮地良治編 南江堂

『ランダムハウス英和大辞典 第2版』(1993) 小学館ランダムハウス英和大辞典第二版編集 小学館

『例文 仏教語大辞典』(1997) 石田瑞麿著 小学館

『和英語林集成 初版』(1867) ヘボン (James Curtis Hepburn)

『和英語林集成 再版』(1872) ヘボン (James Curtis Hepburn)

『和英語林集成 三版』(1886) ヘボン (James Curtis Hepburn)

『和漢雅俗いろは辞典』(1889) 高橋五郎著 長尾景弼

『和羅独英新医学辞典』(1910) 加藤辰三郎ほか編 南江堂

中国語辞書

- 『医学英華字釈』（1858）合信（ホブソン Benjamin Hobson）著
- 『英漢医学詞彙』（1991）英漢医学詞彙編纂組編 人民衛生出版社
- 『漢語大詞典』（1986-1993）羅竹風主編 上海辞書出版社
- 『近現代辞源』（2010）黄河清編 上海辞書出版社
- 『近現代漢語辞源』（2020）黄河清編 上海辞書出版社
- 『現代漢語詞典 初版』（1978）中国科学院語言研究所詞典編集室編 商務印書館
- 『現代漢語詞典 第7版』（2016）中国社会科学院語言研究所詞典編集室編 商務印書館
- 『古代漢語詞典』（1998）古代漢語詞典編纂組編 商務印書館
- 『辞源 初版』（1915）陸爾奎主編 商務印書館
- 『辞海 初版』（1936）舒新城ほか編 中華書局
- 『Technical Terms English and Chinese』（1904）狄考文（C.W.Mateer）

英語辞書

- Cassell's English – Dutch, Dutch – English dictionary 4th ed* (1960) F. P. H. Prick van Wely London : Cassell

データベース

日本語のデータベース

- 「青空文庫」
<http://www.aozora.gr.jp>
- 「朝日新聞記事データベース」（聞蔵Ⅱビジュアル）朝日新聞社
<https://database.asahi.com/index.shtml>
- 「医学図書館デジタル史料室」東京大学
<https://iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/medlib/page/home>
- 「京都大学貴重資料デジタルアーカイブ」京都大学
<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/>
- 「少納言 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)」国立国語研究所
<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>

「国立国会図書館デジタルコレクション」 国立国会図書館

<http://dl.ndl.go.jp>

「国文学研究資料館 電子資料館」 国文学研究資料館

<https://www.nijl.ac.jp/pages/database/>

「ジャパンナレッジ」 ①古事類苑 ②東洋文庫 ③日本古典文学全集

<http://japanknowledge.com>

「中納言・コーパス検索アプリケーション」 国立国語研究所

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>

「読売新聞記事データベース」(ヨミダス歴史館) 読売新聞

<http://www.yomiuri.co.jp/database/rekishikan/>

「早稲田大学図書館 古典籍総合データベース」 早稲田大学

<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>

中国語のデータベース

「英華辞典」 中央研究院近代史研究所

<http://mhdb.mh.sinica.edu.tw/dictionary/index.php>

「漢典」

<http://www.zdic.net/>

「瀚堂典藏数据库系統」

www.hytung.cn/

「古籍網」

<https://www.bookinlife.net/>

「申報数据库」

「全国図書館参考咨訊連盟」

<http://www.ucdrs.superlib.net/>

「全国報刊索引」

<https://www.cnbksy.com/>

「大成故紙堆」

<http://www.dachengdata.com>

「中医世家」

<http://www.zysj.com.cn/>

「中国歴史文献総庫—民国図書データベース」

<http://mg.nlcpress.com/>

「鼎秀古籍全文検索平台」

「北京大学中国語言研究中心 CCL 語料庫検索系統」 北京大学

<http://ccl.pku.edu.cn/>

英語のデータベース

Oxford English Dictionary, Oxford University Press

<http://www.oed.com/>

Oxford Learner's Dictionaries, Oxford University Press

<https://www.oxfordlearnersdictionaries.com/>

謝辞

本論文の完成に当たって、何よりもまず指導教授の阿久津智先生に心よりお礼を申し上げます。拓殖大学での7年間、阿久津先生はいつも親切かつ丁寧に私の一つ一つの質問に回答してくださいました。先生の言葉は、いつも私が論文を書く時の道しるべとなっております。特に2020年に一時帰国し、コロナの影響で日本に戻れなかった1年半の間、先生はオンラインで指導してくださり、たくさんの論文や資料を送ってくださったことで、無事に今年度、論文を書き上げることができました。先生の熱心な手助けがなければ、論文執筆は決して順調に進むことができません。改めて感謝を申し上げます。

また、拓殖大学中国語学科学科長の丸山浩明教授、成城大学経済学部陳力衛教授に感謝の意を表します。

丸山先生は、私が中国にいる間に、阿久津先生を通じて、多くの蘭学に関する資料を送ってくださいました。また、温かい言葉で励ましてくださり、心細い私に力をくださいました。

陳先生は、日中語彙交流及び和製漢語の研究分野においての大家で、私が博士後期に入ったばかりの頃から、お世話になりました。初めて医学用語を研究したいと陳先生にお伝えしたときに、陳先生は研究資料に関するアドバイスをくださいました。陳先生のご教示のおかげで、順調に書き進められるようになったと思います。

そのほか、学会で発表した時に、コメントやアドバイスをくださった先生方、様々な場で助けてくれた友人たちに感謝の気持ちを伝えたいと思います。

最後に、日本に留学すること、博士課程で研究することをずっと支え続けてくれた両親に、「謝謝你們一直以來的支持」を伝えたいです。